

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第334集

新田西沢遺跡 新田平林遺跡

主要地方道渋川新治線地方特定道路整備
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

主要地方道渋川新治線地方特定道路整備
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

新田西沢遺跡 新田平林遺跡

2003

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



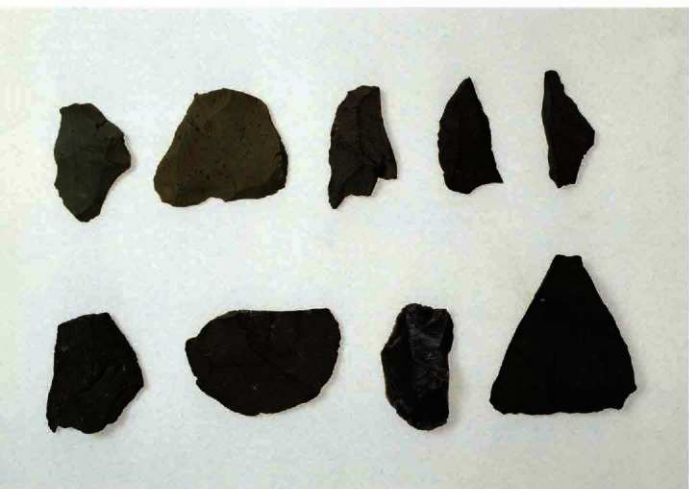
遺跡の遠景と周辺の地形（南方より）



新田西沢遺跡。旧石器時代石器群の検出状況



新田西沢遺跡、旧石器時代の石器（ナイフ形石器）



新田西沢遺跡、旧石器時代の石器（削器等）



新田西沢遺跡. 平安時代の焼失竪穴住居と炭化した建築部材の検出状況



同上の竪穴住居から出土した須恵器と土師器



新田平林遺跡、縄文時代後期の配石遺構群の検出状況



新田平林遺跡、平安時代の祭祀遺構の検出状況（1号）

序

高山村中山の地を通る三国街道は、江戸と越後国を結ぶ要路として、各地の特産品の運搬路、参勤交代の通り道となったため、小野子山山麓の地域に発展をもたらしてきました。江戸時代には高山村中山は宿場として栄えました。

かつての三国街道、現在の主要地方道渋川新治線は、関越自動車道等に伴う沿線の開発により、交通量が増加してきました。そのため、県土木部では、道路改良工事を進めてきました。当中山地区も対象となり、平成15年度道路改良工事が実施されることとなりました。

当地区では県教育委員会文化課の試掘調査の結果、埋蔵文化財の所在が確認されました。群馬県埋蔵文化財調査事業団は発掘調査の委託を受け、平成14年度及び平成15年度の2度にわたる埋蔵文化財発掘調査を実施し、平成15年度に、それら発掘調査の成果を公表するため、調査報告書を上梓することとなりました。

発掘調査では縄文時代の配石遺構が検出され、旧石器時代、縄文時代、平安時代の遺物が出土しました。発掘調査から調査報告書刊行に至るまで、群馬県土木部、同中之条土木事務所、群馬県教育委員会、高山村教育委員会、地域関係者には、多大なご尽力をたまわりました。関係者の皆様に、深く感謝を申し上げるとともに、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されますことを願い序とします。

平成16年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は主要地方道渋川新治線地方特定道路整備事業に伴う新田西沢遺跡・新田平林遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 各遺跡の所在地は下記の通りである。

新田西沢遺跡 群馬県吾妻郡高山村大字中山字月夜野 15-1 番地・他

新田平林遺跡 群馬県吾妻郡高山村大字中山字平林 61-1 番地・字三ツ石 4945-1 番地・他

3. 事業主体 群馬県

4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査・整理の体制及び期間は下記の通りである。

<平成 14 年度>

・発掘調査

期 間 平成 14 年 7 月 1 日～平成 14 年 9 月 30 日

調査担当 石坂 茂、小保方香里、平方篤行、森田真一

事務局 水田 稔、津金沢吉茂、野口富太郎、矢島知恵子

・整理作業

期 間 平成 14 年 10 月 1 日～平成 15 年 3 月 31 日

整理担当 石坂 茂

事務局 小野宇三郎、吉田 豊、神保脩史、萩原利通、市 隆之、植原恒夫、西田健彦、小山健夫、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、森下弘美、田中賢一、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂、藤原正義

<平成 15 年度>

・発掘調査

期 間 平成 15 年 4 月 1 日～平成 15 年 5 月 31 日

調査担当 平方篤行、森田真一

事務局 小野宇三郎、住谷永市、神保脩史、萩原利通、右島和夫、植原恒夫、相京健史、高橋房雄、竹内 宏、須田朋子、吉田有光、阿久沢玄洋、田中賢一、今井もと子、内山佳子、若田誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂

・整理作業

期 間 平成 15 年 10 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日

整理担当 平方篤行

事務局 同上

6. 本書の作成に関わる作業分担は下記の通りである。

編 集 石坂 茂、平方篤行

本文執筆 平方篤行：I-1、麻生敏隆：II-3、縮貫邦男：VI-2、石坂 茂：左記以外の全項目

レイアウト 石坂 茂、平方篤行、新井悦子

図版作成 新井悦子、大塚とし子、萩原鈴代、阿部幸恵、武永いち、土田三代子、光安文子、田中富子、

吉澤照恵、渡辺八千代

遺構写真 石坂 茂、平方篤行

遺物写真 佐藤元彦

遺物の科 関 邦一、土橋まり子、横倉知子、小村浩一、湯浅美枝子

学的処理

7. 石器石材、土器胎土、炭化材、火山灰などの分析・同定については、以下の個人や会社に依頼した。

石器の石材同定 飯島静男（群馬地質研究会）

火山灰同定 株式会社 古環境研究所

土器の胎土分析 株式会社 第四紀研究所

黒曜石の山地同定 同上

炭化材樹種同定 株式会社 バレオ・ラボ

8. 当遺跡の記録保存資料および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財センターに保管されている。

9. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言・ご協力を戴いた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称は省略させて戴いた。五十音順。）

飯塚ヨウ子、奥山和久、大工原 豊、福田義治

凡 例

1. 挿図および付図の方位記号は国家座標上（旧座標第9系）の北を基準としている。尚、当遺跡における磁北および真北との偏差は以下の通りである。

磁北との偏差 7度21分

真北との偏差 0度31分17秒

2. 本文中における各遺構の方位については、竪付き住居は竪付設壁に、他の遺構は長軸線にそれぞれ直交する軸線の方位を採用した。

3. 遺構および遺物実測図中の縮尺は、各図中に表示してある。遺物の場合、表示された縮尺と異なるものについては、遺物番号の末尾に () でその縮尺を表示した。また、遺構断面図の基準線標高値については、各図内に L=〇〇.〇〇m と表示した。土器断面実測図中の▲は、接合痕をあらわしている。

4. 各遺構の平・断面図中のスクリーンは、以下の内容を表示している。



叩き床状の硬化面



樹木根・小動物の擾乱

5. 遺物図中に使用したスクリーンは、以下の内容を表示している。



磨り面・摩耗面



石材の節理面



方向性ある使用痕

6. 竪穴住居内から出土した遺物のうち、その住居には伴出し得ない明確に時期の異なるものについては、遺物包含層や遺構外からの出土遺物として一括した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
I 発掘調査と遺跡の概要	
1. 調査の経緯と経過	1
2. 遺跡の位置と地形	2
3. 周辺の遺跡	4
4. 調査の方法	6
II 新田西沢遺跡の調査	
1. 遺跡の概要	8
2. 遺跡の基本土層	8
3. 旧石器時代の調査	9
4. 縄文時代の調査	37
(1) 土 坑	38
(2) 屋外埋設土器	39
(3) 遺構外の出土遺物	40
5. 平安時代の調査	45
(1) 竪穴住居	46
(2) 遺構外の出土遺物	51
6. 近世以降の調査	63
(1) 溝状遺構	63
III 新田平林遺跡の調査	
1. 遺跡の概要	64
2. 遺跡の基本土層	64
3. 縄文時代の調査	66
(1) 配石遺構	66
(2) 配石遺構と包含層の出土遺物	71
4. 平安時代の調査	113
(1) 祭祀遺構	113
(2) 遺構外の出土遺物	120
5. 近世以降の調査	121
(1) 炭焼窯	122
IV 新田西沢・平林遺跡の出土遺物観察	
一 覧	
新田西沢遺跡の遺物観察一覧	126
新田平林遺跡の遺物観察一覧	130
V 科学的分析	
1. 新田西沢遺跡の火山灰分析	137
2. 新田西沢遺跡1号住居跡出土炭化材の樹種同定	141
3. 新田西沢遺跡1号住居出土植物遺体の植物珪酸体	155
4. 新田西沢遺跡・新田平林遺跡出土遺物胎土化学分析	157
5. 黒曜石の原産地分析	165
VI 成果と問題点	
1. 新田西沢・平林遺跡の調査成果	168
2. 新田西沢遺跡1号住居出土の須恵器について	169
写真図版	
付 図	

挿図目次

第1図	発掘調査の範囲	1	第50図	1～3号配石遺構の配置	67
第2図	遺跡の位置	3	第51図	配石遺構の垂直断面	68
第3図	周辺の遺跡分布	5	第52図	1区1・2号配石遺構図	69
第4図	調査区範囲とグリッドの配置	7	第53図	1区3号配石遺構	70
第5図	各地点の柱状土層	9	第54図	包含層出土土器のグリッド別分布 (1)	73
第6図	旧石器時代の試掘調査箇所および拡張調査範囲	10	第55図	包含層出土土器のグリッド別分布 (2)	74
第7図	旧石器時代の石器群種別分布	11	第56図	包含層出土土器のグリッド別分布 (3)	75
第8図	旧石器時代の石器群 (1)	13	第57図	配石遺構および包含層出土土器 (1)	79
第9図	旧石器時代の石器群 (2)	14	第58図	配石遺構および包含層出土土器 (2)	80
第10図	旧石器時代の石器群 (3)	15	第59図	配石遺構および包含層出土土器 (3)	81
第11図	旧石器時代の石器群 (4)	16	第60図	配石遺構および包含層出土土器 (4)	82
第12図	旧石器時代の石器群 (5)	17	第61図	配石遺構および包含層出土土器 (5)	83
第13図	旧石器時代の石器群 (6)	18	第62図	配石遺構および包含層出土土器 (6)	84
第14図	旧石器時代の石器群 (7)	19	第63図	配石遺構および包含層出土土器 (7)	85
第15図	接合資料 1～4	25	第64図	配石遺構および包含層出土土器 (8)	86
第16図	接合資料 5・6	26	第65図	配石遺構および包含層出土土器 (9)	87
第17図	接合資料 7・8・10	27	第66図	配石遺構および包含層出土土器 (10)	88
第18図	接合資料 9・11	28	第67図	配石遺構および包含層出土土器 (11)	89
第19図	接合資料 12・13	29	第68図	配石遺構および包含層出土土器 (12)	90
第20図	接合資料 14～16・18	30	第69図	配石遺構および包含層出土土器 (13)	91
第21図	接合資料 17～19	31	第70図	配石遺構および包含層出土土器 (14)	92
第22図	接合資料 19・20	32	第71図	配石遺構および包含層出土土器 (15)	93
第23図	接合資料 21～25	33	第72図	配石遺構および包含層出土土器 (16)	94
第24図	接合資料 26～31	34	第73図	配石遺構および包含層出土土器 (17)	95
第25図	縄文時代の遺構配置	37	第74図	包含層出土土器のグリッド別分布 (1)	99
第26図	1・2号土坑と1号屋外埋設土器	38	第75図	包含層出土土器のグリッド別分布 (2)	100
第27図	遺構および包含層の出土遺物	39	第76図	配石遺構および包含層出土土器 (1)	104
第28図	包含層出土土器 (1)	42	第77図	配石遺構および包含層出土土器 (2)	105
第29図	包含層出土土器 (2)	43	第78図	配石遺構および包含層出土土器 (3)	106
第30図	包含層出土土器 (3)	44	第79図	配石遺構および包含層出土土器 (4)	107
第31図	平安時代の遺構配置	45	第80図	配石遺構および包含層出土土器 (5)	108
第32図	1号住居 (1)	47	第81図	配石遺構および包含層出土土器 (6)	109
第33図	1号住居 (2)	48	第82図	配石遺構および包含層出土土器 (7)	110
第34図	1号住居の遺物出土状況	49	第83図	配石遺構および包含層出土土器 (8)	111
第35図	1号住居の炭化材出土状況 (1)	52	第84図	配石遺構および包含層出土土器 (9)	112
第36図	1号住居の炭化材出土状況 (2)	53	第85図	1区平安時代の遺構配置	113
第37図	1号住居の扉方	53	第86図	1・2号祭祀	115
第38図	1号住居出土遺物 (1)	54	第87図	1号祭祀出土遺物	116
第39図	1号住居出土遺物 (2)	55	第88図	1・2号祭祀の遺物出土状況	117
第40図	1号住居出土遺物 (3)	56	第89図	2号祭祀出土遺物	119
第41図	1号住居出土遺物 (4)	57	第90図	包含層出土土器のグリッド別分布	120
第42図	1号住居出土遺物 (5)	58	第91図	包含層出土土器の遺物	121
第43図	1号住居出土遺物 (6)	59	第92図	2区近鉄以降の遺構配置	122
第44図	1号住居出土遺物 (7)	60	第93図	1号炭地窯	123
第45図	1号住居出土遺物 (8)	61	第94図	新田西沢遺跡と奈良古墳群出土の分析対象須磨器	22
第46図	1号住居出土遺物 (9)	62			
第47図	1～3号溝	63			
第48図	1・2区の堆積土層	65			
第49図	1区縄文時代の遺構配置	66			

写真目次

口 絵

- 遺跡の遺景と周辺の地形（南方より）
新田西沢遺跡、旧石器時代石器群の検出状況
新田西沢遺跡、旧石器時代の石器（ナイフ形石器）
新田西沢遺跡、旧石器時代の石器（削器等）
新田西沢遺跡、平安時代の焼穴竪穴住居と炭化した建築部材の検出状況
同上の竪穴住居から出土した須恵器と土師器
新田平林遺跡、縄文時代後期の配石遺構群の検出状況
新田平林遺跡、平安時代の祭壇遺構の検出状況（1号）

P L 1

- 新田西沢遺跡の全景（北方より）
- 新田平林遺跡の全景（南方より）

P L 2（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代石器群の検出状況（南方より）
- 同上（北方より）

P L 3（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代石器群の検出状況（北方より）
- 同上（北方より）
- 同上（南方より）
- 2ブロックの検出状況（西方より）
- 3・4ブロックの検出状況（西方より）
- 5ブロックの検出状況（東方より）
- 5・6ブロックの検出状況（南方より）

P L 4（新田西沢遺跡）

- 5・6ブロックの検出状況（北方より）
- 4ブロックの検出状況（東方より）
- 8ブロックの検出状況（西方より）
- 7・8ブロックの検出状況（北方より）
- 台石（No36）の検出状況
- 台石（No35）の検出状況
- 9ブロックの検出状況（西方より）
- 巖き石（No33）の検出状況

P L 5（新田西沢遺跡）

- 石核（No23）の検出状況
- ナイフ形石器（No 1）の検出状況
- 石核（No18）の検出状況
- 5～9ブロックの検出状況（南方より）
- 遺跡内の堆積土層（柱状土層 No 2）
- 同上（柱状土層 No 3）

P L 6（新田西沢遺跡）

- 遺跡内の堆積土層（柱状土層 No 4）
- 同上（柱状土層 No 5）
- 同上（柱状土層 No 6）
- 同上（柱状土層 No 7）

P L 7（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代の石器群（1）

P L 8（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代の石器群（2）

P L 9（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代の石器群（3）

P L 10（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代石器群の接合資料（1）

P L 11（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代石器群の接合資料（2）

P L 12（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代石器群の接合資料（3）

P L 13（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代石器群の接合資料（4）

P L 14（新田西沢遺跡）

- 旧石器時代石器群の接合資料（5）

P L 15（新田西沢遺跡）

- 縄文時代の遺構の出土遺物
- 1号土坑全景（南方より）
- 同上・埋没土層
- 2号土坑（南方より）
- 同上・埋没土層
- 1号埋没土層全景（南方より）
- 同上・埋没土層

P L 16（新田西沢遺跡）

- 包含層出土の石器

P L 17（新田西沢遺跡）

- 1号住居全景（南方より）
- 同上・埋没土層（A-）
- 同上・埋没土層（-A'）
- 同上・埋没土層（B-）
- 同上・埋没土層（-B'）

P L 18（新田西沢遺跡）

- 1号住居の遺物出土状況（南方より）
- 同上（北方より）
- 同上・中央部の炭化材の出土状況
- 同上・東半部の炭化材の出土状況

P L 19（新田西沢遺跡）

- 1号住居の炭化材出土状況
- 同上・北東隅の状況
- 同上・南西隅の状況
- 同上
- 同上・南東隅の状況
- 同上・床面の敷物（カヤ材）
- 同上・炭化した量根材（カヤ材）
- 同上

P L 20（新田西沢遺跡）

- 1号住居西側壁面を覆覆する炭化板材（北方より）
- 同上
- 同上・板材と壁面の間に挟在する編み物

- d. 同上・壁面際に打設された板材を固定する杭
 - e. 同左・杭材の根本を埋設する小穴
 - f. 床面上に敷かれた編み物
 - g. 同 左
- P L 21 (新田西沢遺跡)
- a. 1号住居の燃え残った主柱 (P1号)
 - b. 同左・炭化主柱を抜去した後の空隙
 - c. 同上・燃え落ちた主柱の痕跡 (P4号)
 - d. 柱穴 (P3号) に接する根太材を埋填した溝状の痕跡
 - e. 遺物の出土状況 (西方より)
 - f. 同左・西壁際の土器出土状況
 - g. 竈の前面と近縁部の遺物出土状況 (北方より)
 - h. 竈と近縁の遺物出土状況 (西方より)
- P L 22 (新田西沢遺跡)
- a. 1号住居の南東隅の遺物出土状況 (No11・30・35・55)
 - b. 遺物出土状況 (No 9・12・13)
 - c. 遺物出土状況
 - d. 遺物出土状況 (No 2)
 - e. 竈の状況 (西方より)
 - f. 同 左 (南方より)
 - g. 同上・煙道部の礎石 (東方より)
 - h. 竈の埋設土層 (K-K')
- P L 23 (新田西沢遺跡)
- a. 1号住居の竈の埋設土層
 - b. 同 左 (J-J')
 - c. 竈の断ち割り調査の状況
 - d. 竈の堀方 (西方より)
 - e. 1号住居の出土遺物 (1)
- P L 24 (新田西沢遺跡)
- 1号住居の出土遺物 (2)
- P L 25 (新田西沢遺跡)
- 1号住居の出土遺物 (3)
- P L 26 (新田西沢遺跡)
- 1号住居の出土遺物 (4)
- P L 27 (新田西沢遺跡)
- 1号住居の出土遺物 (5)
- P L 28 (新田西沢遺跡)
- a. 近世以降の湧状遺構 (北方より)
 - b. 同上・1号溝の埋設土層 (A-A')
 - c. 同上・2号溝の埋設土層
 - d. 同上・3号溝 (西方より)
- P L 29 (新田平林遺跡1区)
- a. 1区縄文時代後期の配石遺構群 (西方より)
 - b. 同上・1号配石遺構 (手前) と2号配石遺構 (中央)
 - c. 同上・3号配石遺構 (手前) と2・1号配石遺構 (後方)
- P L 30 (新田平林遺跡1区)
- a. 1号配石遺構 (手前) と2号配石遺構 (後方)
 - b. 1号配石遺構 (南方より)
 - c. 1号配石遺構の用石上位の堆積土層 (A-)
 - d. 同 左 (A-A')
 - e. 2号配石遺構 (南方より)
 - f. 3号配石遺構 (南方より)
 - g. 3号配石遺構 (北方より)
 - h. 同左・部分拡大
- P L 31 (新田平林遺跡1区)
- a. 1号配石遺構の断ち割り調査状況
 - b. 同左・部分拡大
 - c. 2号配石遺構の断ち割り調査状況
 - d. 3号配石遺構の断ち割り調査状況
 - e. 3号配石遺構の断ち割り調査状況・部分拡大
 - f. 1区北半部の調査状況
 - g. 1区北半部の遺物出土状況
 - h. 同左・石棒 (No81) の出土状況
- P L 32 ~ 41 (新田平林遺跡1区)
- 配石遺構および包含層出土の縄文土器 (1) ~ (10)
- P L 42 ~ 45 (新田平林遺跡1区)
- 配石遺構および包含層出土の縄文石器 (1) ~ (4)
- P L 46 (新田平林遺跡1区)
- a. 平安時代の1号祭祀遺構・堀方
 - b. 同左・埋設土層 (B-B')
 - c. 同上・遺物出土状況 (No 1)
 - d. 同上・遺物出土状況 (No 3・5~8)
 - e. 同上・埋設土層 (C-C')
 - f. 同上・埋設土層 (A-A')
 - g. 2号祭祀遺構・堀方
 - h. 同左・埋設土層 (A-A')
- P L 47 (新田平林遺跡1区)
- 1号・2号祭祀遺構の出土遺物
- P L 48 (新田平林遺跡1・2区)
- a. 1区包含層出土の平安時代の土器
 - b. 2区1号炭焼き竈全景 (東方より)
- P L 49 (新田平林遺跡2区)
- a. 1号炭焼き竈全景 (北方より)
 - b. 同 左 (西方より)
 - c. 同 上 (南方より)
 - d. 同上・堀方 (北方より)
 - e. 同上・埋設土層 (A-A')
 - f. 同上・埋設土層 (b-b')
 - g. 同上・煙道部の構造状況 (東方より)
 - h. 同 左 (北方より)

報告書抄録

フリガナ	シンデンニシザワイセキ・シンデンタイラバヤシイセキ
書名	新田西沢遺跡・新田平林遺跡
副書名	主要地方道渋川新治線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第334集
編著者名	石坂 茂、平方篤行
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田 784-2 TEL 0279(52)2511
発行年	西暦 2004年3月15日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
新田西沢遺跡	吾妻郡高山村大字中山	10428	877	36° 37' 42"	138° 57' 33"	20020701 ~ 20020930	717 m ²	道路建設
新田平林遺跡	吾妻郡高山村大字中山	10428	887	36° 37' 50"	138° 57' 36"	20020701 ~ 20020930 20030401 ~ 20030531	1,968 m ²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田西沢遺跡	住居	平安	竪穴住居	土師器・須恵器・釘・炭化材	
	土坑	縄文	貯蔵穴・墓	土器・磨り石	
	製作	旧石器	石器製作址	ナイフ形石器・削器・台石	
新田平林遺跡	配石	縄文	配石遺構・列石	土器・石織・磨り石	
	祭祀	平安	祭祀施設	土師器・須恵器	
	生産	近世～	炭焼窯		

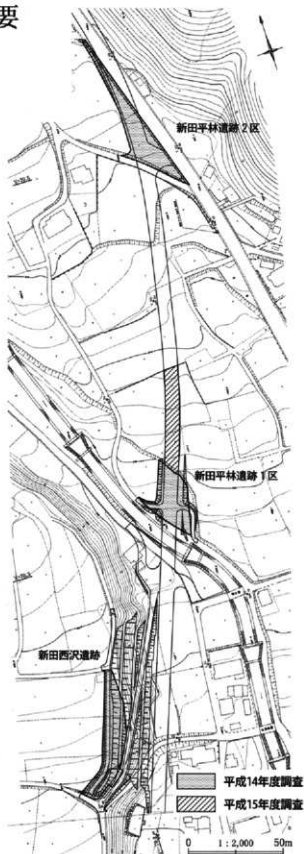
I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査の経緯と経過

県道渋川新治線の整備工事は、渋川市から利根郡新治村までの間の延長14kmについて、昭和63年度から平成15年度までの16年計画で実施されている。これに伴う埋蔵文化財の調査は、当該工事区域内に周知の遺跡が存在しなかったこともあり、平成4年から群馬県教育委員会が試掘調査を実施し、これまでに中山与惣平塚遺跡の1箇所を確認するとともに、当事業団がその発掘調査を受託・実施してきている。

今回報告する新田西沢遺跡と新田平林遺跡についても周知の遺跡ではなく、平成14年2月に県教育委員会により試掘調査が行われ、縄文時代の土坑や遺物包含層、それに平安時代の竪穴住居等が検出されたため、遺跡と認定されたものである。県教育委員会・県道路建設課・当事業団の3者協議により、当事業団が平成14年度には3ヶ月の期間で、平成15年度には2ヶ月の期間でそれぞれ発掘調査を受託・実施することとなった。当該整備工事に伴う発掘調査は、この両遺跡をもって最終となるものである。

平成14年度発掘調査は、7月～9月末の予定で7月初旬より着手したが、梅雨期の悪天候もあり本格的な稼働は同月中旬以降となった。新田西沢遺跡の調査範囲は長さ63m、幅12m、面積717㎡とかなり狭小であるため、掘削排土を調査区外の崖下へ搬出する必要と防災上の観点から、排土シューターを崖の斜面に設置して同作業を行うことにした。表土層から関東ローム層上面までの間で確認した、縄文時代や平安時代の遺構調査を8月下旬にて終了し、あわせて旧石器時代遺物の存在確認をトレンチ調査により実施したところ、3カ所のトレンチ内でいずれもローム層上面より150～170cm下位の地層から石器類の出土を見た。旧石器時代の調査については当初計画に入っていないことから、急遽中之条土木事務所と協議を持ち、道路工事の計画法面勾配などにも配慮して調査方法や



第1図 発掘調査の範囲

範囲を決定した。旧石器時代の石器群は、255 m²の範囲から300点の検出を見たが、9月下旬にて全ての調査を終了した。

新田平林遺跡は、平成14年度段階では646 m²の未買収地を挟んでその南北に遺跡が分断されていたため、南側を1区、北側を2区と呼称して調査を行った。1区は長さ30 m、巾20 m、面積663 m²の平行四辺形状を呈し、2区は長さ約70 m、巾35 m、面積659 m²の三角形を呈すると共に狭小な範囲の調査であったが、先の新田西沢遺跡の発掘調査と併行しながら、1区は8月初旬から9月下旬にかけて、2区は8月下旬から9月中旬にかけてそれぞれ発掘調査を実施した。2区については平成14年度で全調査を終了したが、1区については縄文時代後期の配石遺構が検出され、その遺構分布範囲が北側に隣接する未買収地へと延びていることが事実なため、全体的な遺構配置状況を把握して個別的な詳細調査を実施する必要があることから、当該年度での各配石遺構下位の断り割り調査をせずに、平成15年度にて未買収地調査と併せてその詳細調査を実施することになった。

この未買収地646 m²については、平成15年3月に買収契約が成立したことをうけて、平成15年度において4月～5月の2ヶ月間にわたり発掘調査を実施することが決定した。調査期間の短いことやかなりのボリュームに及ぶ包含層出土遺物調査の困難さが予想されたが、新たな配石遺構の検出はなく、前年度に検出した配石遺構の詳細調査を含めて、予定期間内での全調査を終了した。

2. 遺跡の位置と地形

新田西沢遺跡と新田平林遺跡は、群馬県北西部域の高山村に所在し、国道145号線と県道渋川新治線とが交差する地点（新田交差点）から北方へ550 mほど県道渋川新治線を上った西側に位置している。

高山村の地形は、南・北・東の三方を1,000 m級の山々に囲繞された盆地地形を呈しているが、西側ののみ久田川沿いに形成された沖積低地が中之条盆地へと開けている。当村の南方に位置し、かつ相互に隣接し

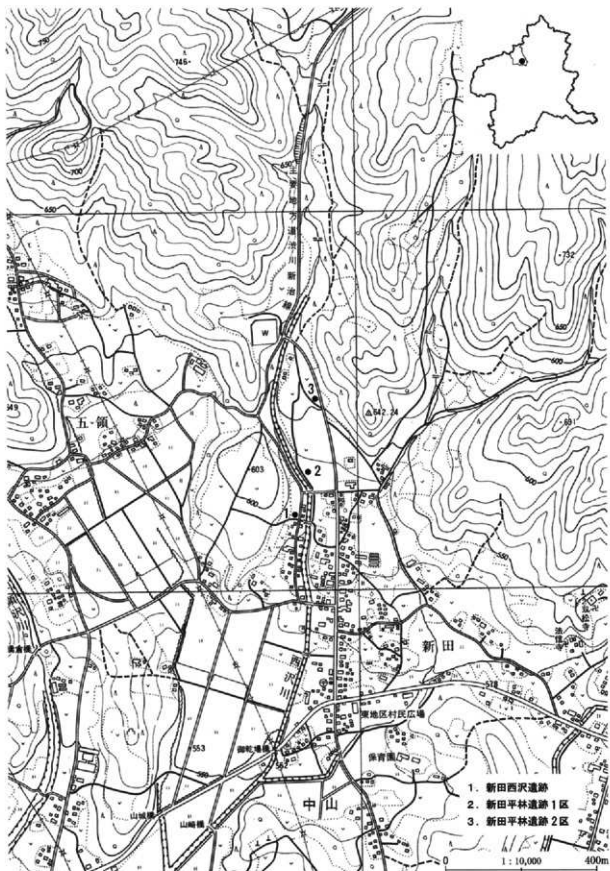
ている子持山（1,296 m）と小野子山（1,208 m）は、ともに中新世の成層火山であり、当村域にあたる北麓側には火山山麓性の緩やかな裾野が発達している。この北麓を梅沢川・半形沢川・火之口川などの小河川が北流し、深い放射状の開析谷を形成している。

一方、北方から西方にかけては、第三紀層を有する二階山（1,158 m）と破風山（1,070 m）などの山塊や、切ヶ久保（830 m）・金比羅峠（830 m）などの一連の高地を総称した北山の脊梁が存在し、子持・小野子山の北麓に比べて裾野の短い急峻な地形を呈しているが、それらの山麓を流域延長の短い西沢川・五領沢川・役原川・赤狩川などが南流してやや入り組んだ開析谷を形成している。

これら三方の山塊が接する谷底部には、名久田川が存在して当村内のほぼ中央部を東方から西方へと貫流し、各山麓を開析する小河川を合一しつつ中・条方面へと流下している。また、各小河川が急激に流速を弱める山麓端部から名久田川との合流地点にかけては、小規模な扇状地が形成されているが、特にその上流部に当たる古寺川・西沢川・梅沢川の合流地点周辺には、かなり広大な沖積低地が形成され、「中山盆地」とも総称されている。

新田西沢遺跡や新田平林遺跡は、ともに北山の南麓末端部に所在するが、新田西沢遺跡の場合は標高595 mの舌状台地上に立地し、東側は南流する西沢川により浸食されて比高差10 mの崖線が形成され、西側は五領沢川に接続する沖積低地により隔絶されている。この舌状台地は東西幅250 m、南北幅500 mの規模を持ち、平均勾配6%で南側へ緩傾斜している。

また新田平林遺跡は、新田西沢遺跡東側の西沢川が形成した扇状地形上に立地するが、現在の西沢川は新田西沢遺跡を載せる舌状台地と扇状地西端との間を流れ、その両側には小規模な数段の河岸段丘状の地形が形成されている。当遺跡が立地する地点は、西沢川に近接した左岸段丘中～上位面の標高588～593 mの1区と同上位面の標高601 m付近の2区とに分かれ、両区間は約150 mの距離を、1区と新田西沢遺跡とは約100 mの距離を置いている。



第2図 遺跡の位置

縄文時代後期の配石遺構が検出された1区南端部は、幅10～15mほどの平坦かつ幅狭なテラス状地形を呈し、その南側は下位面となつて約1mほどの落差を生じている。2区へと接続する同区北側は段丘上位面に当たり、約7%の勾配で南方へ傾斜するが、北西から南東方向への窪地状を呈する旧河道が少なくとも2条確認でき、当該箇所を中心にして縄文中期末葉～後期前半の遺物包含層が形成されている。

3. 周辺の遺跡

新田西沢遺跡(1)と新田平林遺跡(2)で確認された遺構は、旧石器時代・縄文時代・平安時代を主体としており、ここではこの三時代に関連する周辺遺跡のあり方を概観しておきたい。

旧石器時代 尻高地区の小屋大門や熊野中島でローム層中からの石片の出土事例が紹介されているが、出土地点や層位をはじめとしたその詳細は不明でもあり、確実とは言えない。いずれにしても、従前では発掘調査によって確認された遺跡は皆無であり、永らく旧石器時代遺跡の所在不明な空白地帯であった。しかし、新田西沢遺跡で確認されたように、中之条ラビリや榛名八崎軽石層をはじめとする火山噴出物や中部～上部ローム層の堆積状況から見ても、地層的に極めて安定した地域であり、おそらくかなり多くの遺跡が潜在していると推定される。当村内の種々の開発に対応した発掘調査が網羅的に実施し得るならば、その実態も明瞭なものとなるであろう。

縄文時代 高山村内では、子持山北麓に立地する中山遺跡(8)や中山与惣平塚遺跡(9)の2遺跡が発掘調査されている他は、全て包蔵地として確認されているのみであるが、当遺跡の周辺を含めて10数カ所(3・4・7・10・11・14・17)が存在している。

中山遺跡では、中期末葉の加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居1棟が調査され、昭和48年に県指定史跡となっている。主体部・張出部ともに全面敷石を施した住居であるが、出土遺物の中には後期の称名寺I式～堀之内I1式期のものが混在していることから、おそらく当住居の周辺に中期末葉から後期前葉にかけての集

落が存在していると見て良いだろう。距離的には新田平林遺跡から2kmほど南に隔たっているものの時期的に併行しており、相互の関連性が注意される場所である。また、同時期の遺跡としては、新田平林遺跡の東方250mに位置する包蔵地(3)において、堀之内式の土器片が採集されており、当遺跡の形成に関わる集落の可能性が高い。さらに、十二平・清水・小屋大門・梅沢などでも、中期後半から後期前半の土器片が採集されていることや、当遺跡から7km西方に離れて名久田川左岸の河岸段丘上に立地する中之条町野谷で堀之内2式期の筒形土偶1点が検出されていることなどを含めると、当該期の遺跡や集落は他時期に比べてかなり濃厚に存在することも想定される。

一方、当村の西側に隣接する名久田川流域右岸の中之条町大塚地区では、河岸段丘上の五十嵐遺跡(16)、宿割遺跡(15)などが調査され、集落跡を検出している。五十嵐遺跡では、前期の花積下層式期の聖六住居3棟と土坑数基が検出されているが、この内の2棟は同一住居の拡張あるいは建て替えによる新旧関係にある。当該期には、小規模ながら既に明瞭な集落形成が行われていることと共に、同一地点を反復的に利用するような居住・移動形態が存在したことを窺わせる。新田西沢遺跡でも当該期の埋設土器が1基検出されており、当遺跡から西方へ約7kmの位置関係にある五十嵐遺跡とも有機的な関係を持っていたと考えられる。この他に、草創期後半の井草Ⅱ式・夏鳥式、中期末葉の加曾利E3式、後期初頭の堀之内I1式などの土器片を検出しており、当該期の遺構の存在が想定される。

集落以外の遺跡としては、陥穴23基を検出した中山与惣平塚遺跡がある。この遺跡は、新田西沢・平林遺跡と同様に渋川新治線の工事に伴って発掘調査されたが、埋没土の観察から縄文時代に帰属する陥穴であることは確実なものの、その時期を決定できるような遺物は皆無であった。いずれにしても、子持山や小野子山の北麓の緩斜面では、集落立地だけではなく、それを支えるための農圃をはじめとした狩猟活動が、広範に行い得るような生態系の存在を窺い知ることができる。

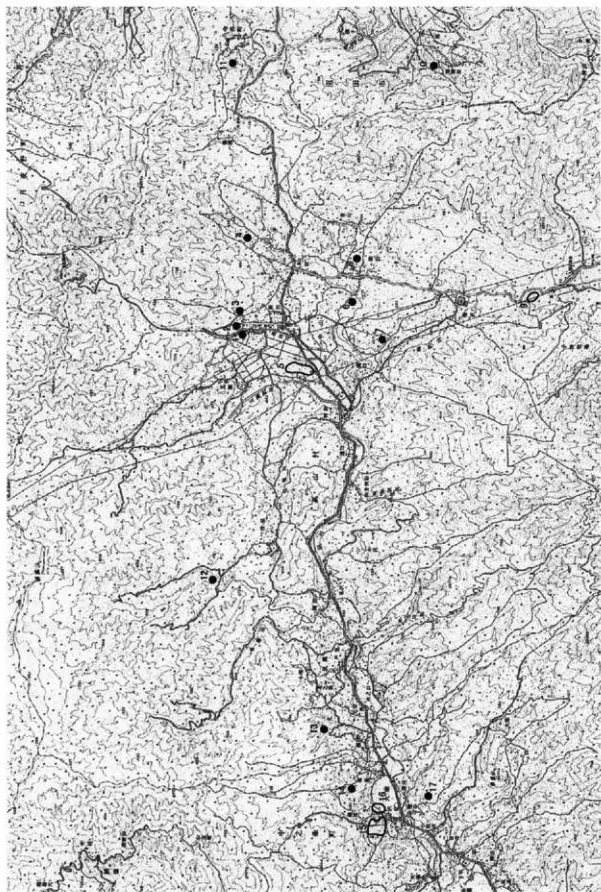


図3 周辺の瀑布分布

総合的に見れば、他時期の遺跡の所在は判然としませんが、中期末葉から後期前半段階の遺跡は、子持山・小野子山の丘陵端部の緩斜面や名久田川流域の河岸段丘・台地部に立地する傾向が看取され、分布的にも決して乏しい状況にはないと言える。現段階での確認遺跡数は僅少であるが、これも旧石器時代と同様に網羅的な発掘・分布調査が実施されるならば、その数を倍加させることは必然と思われる。

平安時代 これまで当村内では、当該期の遺跡は全く知られていなかった。近隣では、先の中之条町五十嵐遺跡(16)で、9世紀後半～10世紀前半の集落が発掘調査されている。この調査は約2,000m²の小範囲に留まる部分的なものであるが、墨書土器や灰釉陶器を伴出する竪穴住居8棟を検出しており、当域においてその中核となる集落の一つである可能性が高い。ただし、立地的には小規模な沖積地に近接した河岸段丘上にあるが、生産基盤としての水田可耕地の面積は狭小であり、従って集落規模もそう大きなものにはならないことが想定される。

今後当村内において、名久田川をはじめとした河川流域沿いに当該期の集落が検出される可能性は高いが、前段階の弥生～古墳時代の遺跡分布の少なさや古墳時代の大型墳墓である前方後円墳の未形成という歴史的環境に象徴されるように、生産基盤の水田可耕地が狭小なことによる生産性の低さが、集落の立地数や規模の低調さの大きな要因を成していると言えよう。

参考文献

- 丸山公夫・大塚昌彦 1985『大塚遺跡群 五十嵐遺跡』中之条町教育委員会
田村安司・丸山公夫・他 1988『大塚遺跡群 五十嵐遺跡第2次』中之条町教育委員会
1972『高山村誌』高山村誌編纂委員会

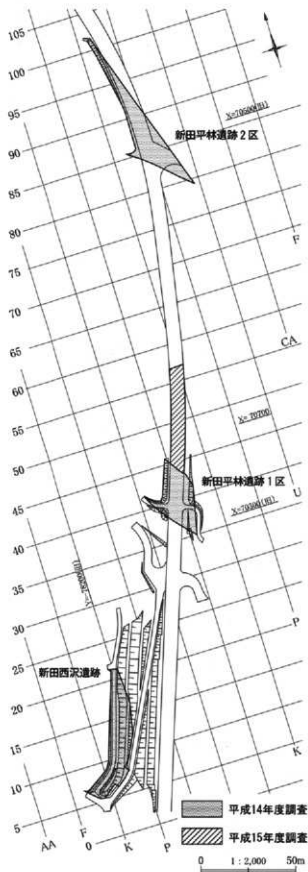
4. 調査の方法

当該地域では、通常の場合表土(耕作土)の下位には数10cmの黒ボク土が堆積し、平安時代から縄文時代にかけての遺物包含層はこの黒ボク土中に存在している。しかし、新田西沢遺跡の場合には、現代の畑耕作に伴う大規模な天地返しで遺跡地内のほぼ全面にわたって行われており、これによる攪乱が黒ボク土にまで達してその残存状況も極めて悪いことから、遺構検出に伴う表土掘削は基本的に掘削重機(バックフォ)を使用して行うことにした。ただし、平成13年度の試掘調査段階で、1128年に噴出した浅間山(As-Kk)の堆積層をもつ竪穴住居1棟の存在が確認されていた地点は、他よりも堆積土層の攪乱が少ないため、地表下約30cmの深さで掘削を止めて人力により遺構確認作業を行った。また、関東ローム層上面から10～20cm上位までは、耕作による攪乱を免れている箇所も認められるため、遺物包含層の残存も考慮して重機による掘削はこの深度に止めて、以下は人力による鋤簾を使用しての掘削・排土作業をした後に、ローム層上面にて縄文時代を中心とした遺構の検出を行った。旧石器時代の確認調査については、調査範囲が狭小なことや法面崩落の危険も考慮して、6カ所に4m×2mのトレンチを設定し、ローム層上面から1.5m下位に堆積する「暗色帯」までの間層について、人力により鋤簾を使用しての試掘を行った。

新田平林遺跡では、平成14年度段階で未買収地を挟んでその南北に遺跡地が分断されるため、南側を1区、北側を2区とそれぞれ呼称した。1区では、試掘調査段階で表土層下30cmに縄文時代の遺物包含層の存在することが確認されており、表土の排土については掘削重機を用いたが、この包含層については鋤簾・移植コテを使用して人力により掘り下げることにした。その結果、遺物包含層下に縄文時代後期の配石遺構群を検出し、以降移植コテや竹ベラによる発掘作業に切り替えた。2区については、同様に試掘調査段階で表土直下に炭焼き窯の存在が確認されていたことから、表土のみを重機により掘削・排土し、それ以下は主に

勘儀により人力で扇状地礫層上面（上部ローム層相当面）までを掘削することにした。また、平成15年度では、未買収地646mについて調査対象とし、配石遺構や遺物包含層の存在という昨年度の調査結果を踏まえて、約30cm厚の表土のみを重機により掘削・排土し、以下は人力により掘り下げて遺構・遺物の検出を行った。この結果、前年度段階で確認した配石遺構は、当該区域まで延びることなく収束すること、これに関連した遺物包含層は粗密を持ちながら北側にまで広範に分布していることが判明した。

尚、新田西沢・平林の両遺跡を含めて、4m×4mのグリッド網を設定し、それらの調査区や位置関係を国家座標上にプロットした。また、それら遺跡の測量に当たっては、遺構原図や版下作成を省力・効率化するという観点から、電子平板によりデータのデジタル化を行った。



第4図 調査区範囲とグリッドの配置

II 新田西沢遺跡の調査

1. 遺跡の概要

調査対象域の中で現農道を除く調査可能な全面積は、僅かに717㎡という狭小なものであったが、上位の文化面から順に見ると近世以降の溝状遺構3条、平安時代9世紀第3四半期の竪穴住居1棟、縄文時代前期の土坑3基と埋設土器1基、旧石器時代AT火山灰層前後の石器群302点など、時代・遺構・遺物ともに極めて多岐にわたる内容が確認されている。

各遺構の確認にあたっては、V層のローム土にまで到達するような現代の畑耕作に伴う土壌の天地返しが、調査地内の約2/3の範囲に及んでいるために、この範囲内に存在する近世・縄文時代の遺構については、ともにV層上面にて行っている。また、平安時代の竪穴住居については、そうした現代の土壌攪乱を免れた地点に存在していたためにIV層上面での確認が可能であり、住居埋没土の最上層では浅間粕川軽石(As-Kk)の堆積を確認し得た。この地点では、IV層内に縄文時代前期を主体とする遺物が少量ながら包含されており、本来的には調査区全域にこうした遺物包含層が存在したことが想定される。

2. 遺跡の基本土層

前述したように、現地表面からローム層上面にかけては土壌攪乱により各土層の堆積状況は悪いが、本来は1号住居の埋没土中で確認されるように、1128年に噴出した浅間粕川軽石(As-Kk)が10数cmの厚さで挟在したと考えられる。以下、地表面から旧石器時代の石器群検出面までの堆積土層についてその概略を記述するが、ローム(V)層以下については、後段のIV-1項にて古環境研究所による火山灰分析結果を載せており、併読を請う次第である。

I層：黒褐色土(10YR2/2)。層厚30～40cm。現在の畑耕作土で、1783年(天明3)の浅間A軽石(As-A)や1128年(大治3)の浅間粕川軽石(As-Kk)を多量に含む。

II層：黒色土(10YR2/1)。層厚5～10cm。4世紀初頭の浅間C軽石(As-C)や6世紀中葉の榛名山ニッ岳軽石(Fr-FP)を少量含む黒ボク的な土。締まりは弱い、粘性を持つ。

III層：II層に類似した黒色土を主体に、ロームのブロック・粒子が3%前後混入。4500年前の浅間D軽石(As-D)に類似した軽石粒を少量含む。締まり弱く、粘性を持つ。

IV層：II層に類似した黒色土を主体に、ロームのブロック・粒子が40%前後混入。III・V層の漸移層。かなりの締まりと粘性を持つ。

V層：鈍い黄褐色(10YR6/3)ローム土。層厚20～40cm。1.3～1.4万年前の浅間板鼻黄色軽石(As-YP)と浅間草津黄色軽石(As-K)の薄層が挟在する。強く締まった土。

VI層：黄褐色(10YR5/6)ローム土。層厚20～40cm。1.7万年前の浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1)と1.8万年前の浅間白糸軽石(As-Sr)が、散在する。強く締まった土。

VII層：黄褐色(10YR5/6)ローム土。層厚20～30cm。浅間大窪沢第1軽石と浅間白糸軽石が、密集する。強く締まった土。

VIII層：黄褐色(10YR5/6)ローム土。層厚10cm前後。浅間大窪沢第1軽石と浅間白糸軽石の他に、浅間萩生軽石(As-Hg)をはじめとした1.9～2.4万年前の浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)が少量混在する。強く締まった土。

IX a層：浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)の中・上位部分で、風化により粒状を留めていない。層厚10～40cm。

IX b層：浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)の中・上位部分で、直径0.5～3cm大の粒径を留める。層厚20～50cm。

X層：浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)の下・中位部分で、風化により粒状を留めていない。層厚10～20cm。2.4～2.5万年前の給良Tn火山灰(AT)の含有最大値が本層内にある。僅かに旧石器時代石器群の出土が認められる。

XI層：褐色（10YR4/6）ローム土。軽石粒をほとんど含まず、かなりの締まり・粘性を持つ。XII層に繼いで旧石器時代石器群の出土点数が多い。

XII層：褐色（10YR4/4）ローム土。層厚20～30cm。2.5～3万年前の八崎火山灰（Hr-HA）に近似した軽石粒を僅少含む。かなりの締まり・粘性を持つ。旧石器時代の石器群の出土点数が最多。

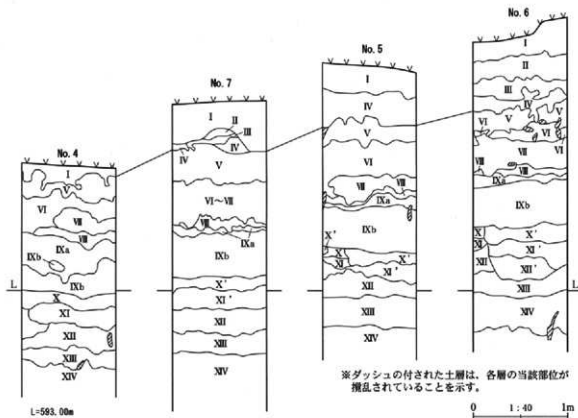
XIII層：褐色（10YR4/4）ローム土。層厚20～30cm。八崎火山灰（Hr-HA）に近似した軽石粒を少量含む。かなりの締まり・粘性を持つ。僅かに旧石器時代石器群の出土が認められる。

XIV層：褐色（10YR4/4）ローム土。層厚40cm。八崎火山灰（Hr-HA）に近似した軽石粒を多量に含む。かなりの締まり・粘性を持つ。

3. 旧石器時代の調査

東道渋川新治線の工事エリアが、台地の東端部を僅かにかすめるに過ぎないために、調査範囲は約717㎡と狭小であったが、この範囲内に4m×2mのトレンチを6カ所設定して試掘を行った。その結果、調査区の南半部に当たる約255㎡の範囲に石器群の分布が確認され、その検出総点数は300点に及ぶものであった。石器群の出土状況から見て、その分布は台地の東・西・南の3方向に広がっている想定されるが、東側については西沢川によって台地が侵食されており、従って石器群の分布も寸断されていると考えられる。

これらの石器群は、およそ10箇所のブロックに分かれ、石材の中で最も多く使用されているのは、黒色安山岩であり、全体の9割を占めている。また、石器群中におけるツール等の器種には、ナイフ形石器、削器、使用痕ある剥片、石核、砕片・剥片、敲き石、台石等が認められる。これら石器群の出土層位は、X



第5図 各地点の柱状土層

II層が最多を占め、XI層、X層、XIII層という順に推移している。

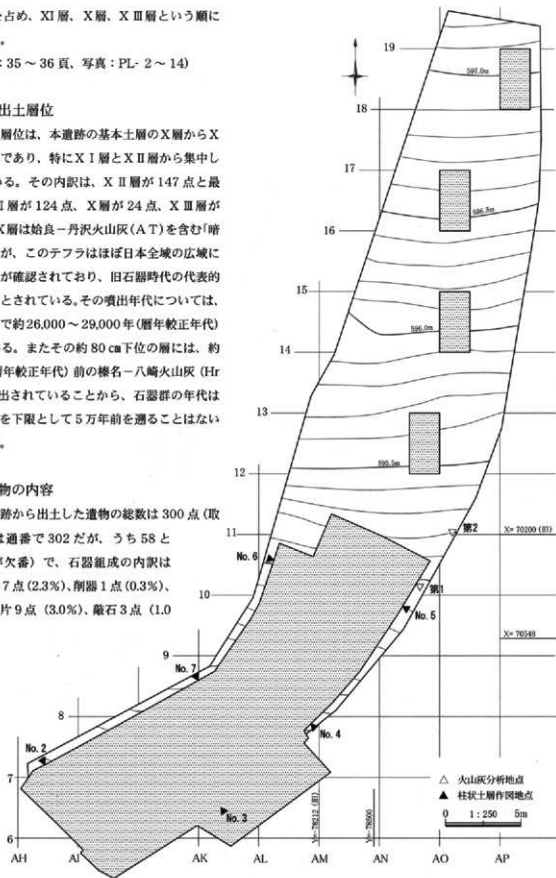
(遺物観察表：35～36頁、写真：PL・2～14)

A. 遺物の出土層位

遺物の出土層位は、本遺跡の基本土層のX層からXIII層にかけてであり、特にXI層とXII層から集中して出土している。その内訳は、XII層が147点と最多を占め、XI層が124点、X層が24点、XIII層が5点である。X層は始良-丹沢火山灰(AT)を含む「暗色帯」であるが、このテフラはほぼ日本全域の広域に降灰したことが確認されており、旧石器時代の代表的な示準テフラとされている。その噴出年代については、最新のデータで約26,000～29,000年(暦年較正年代)前とされている。またその約80cm下位の層には、約50,000年(暦年較正年代)前の標名-八崎火山灰(Hr-HP)が検出されていることから、石器群の年代は約2.6万年前を下限として5万年前を遡ることはないと考えられる。

B. 出土遺物の内容

新田西沢遺跡から出土した遺物の総数は300点(取り上げ番号は通番で302だが、うち58と148の2つが欠番)で、石器組成の内訳はナイフ形石器7点(2.3%)、削器1点(0.3%)、使用痕ある剥片9点(3.0%)、蔽石3点(1.0)



第6図 旧石器時代の試掘調査箇所および拡張調査範囲

%)、台石 2 点 (0.7%)、石核 15 点 (5.0%)、剥片 148 点 (49.3%)、碎片 104 点 (34.7%)、自然礫 11 点 (3.7%) である。その内の主要な石器 6 種類 (ナイフ形石器・削器・蔽石・台石・石核) を個別にみていくこととする。各石器の出土位置や全体的な分布状況は、別添の付図 1～3 に示してあるのでそちらを参照していただきたい。尚、付図内の遺物番号は調査時点での取上番号であり、第 8～14 図の個別石器番号後尾の 0 内は取上番号を示す。

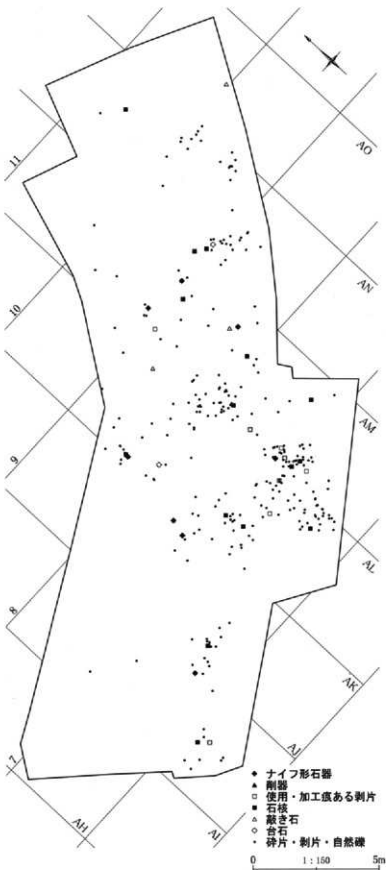
ナイフ形石器 (第 8・9 図 1～7)

7 点が存在する。1 は縦長剥片を素材とし、基部や先端部に調整、基部の裏面に平坦剥離を施す資料である。2 は剥片の形状を利用してほとんど調整を施さない。3 と 4 は縦長剥片の一縁のみに急角度調整を施した資料である。5・6・7 は不定形の剥片を素材に、一縁に調整を施して台形状に形を整えた資料である。これらは台形様石器と分類される資料でもある。5 は接合資料に含まれており、剥片剥離の工程は周縁から求心的に剥ぎ取る形を具体的に示す資料である。石材は 7 点すべてが黒色安山岩である。

削器 (第 9 図 8) 8 の 1 点のみである。素材は大型の剥片で、一縁に急角度調整を施す。石材は黒色安山岩である。

使用痕ある剥片 (第 10・11 図 9～17) 9 点出土している。素材は縦長剥片や幅広い横長剥片で、その鋭い角度の一縁を利用している。石材は 9 がチャート、10・16 が珪質頁岩、他は黒色安山岩である。

石核 (第 12・13 図 18～32) 石核は 15 点が存在し、全体的な石器点数に対して数が多い方であるが、石材はす



第 7 図 旧石器時代の石器器種別分布

べて黒色安山岩である。残された剥片剥離の痕跡と最終形態から5形態に分類ができる。

第1形態(19)は分割した剥片の礫面や剥離面を打面とし、主に縦長剥片を剥ぎ取る資料である。一部は下方からの剥離が調整的に施されるが、剥片剥離の主体は当初の方向のみである。ただし、両側縁が平行な石刃とは異なり、真正な石刃技法には該当しない。形状は角錐状、あるいは立方体である。

第2形態(20~22, 24, 27, 30)は上下の両設、あるいは横位の複数の打面を設定する資料で、打面の転位が頻繁に行われており、前段階の剥離面が打面となることもある。形状はサイコロ状や長方体である。

第3形態(23, 26, 28, 31)は分割した大型の剥片を素材とし、石核に対して求心的な剥片剥離を施す事により幅広い横長剥片や長幅比がほぼ等しい不定形剥片を剥ぎ取る。打面は裏面側の前段階の剥離面であり、形状は大部分が円盤状を呈する。打面調整や剥離面頭部調整はほとんど認められない。

第4形態(18)は礫の周縁に沿って打面を移動し、求心的に交互に剥離を施すことにより不定形剥片を剥ぎ取る資料で、形状は片刃の礫形状になる。

第5形態(25, 29, 32)は大形剥片の単設の打面で、素材は剥片の一端から数回の剥片剥離を施す。

敲石(第14図33・34) 2点が存在する。33は楕円形のやや扁平な礫で、一端に打撃による剥離痕が、両側部に無数の敲打痕が残されている。34は長方形の棒状礫であり、敲打痕は顕著でない。石材は共に粗粒輝石安山岩である。

台石(第14図35・36) 2点が存在する。共に扁平な大形の礫で、地面に設置し易いように一辺がほぼ平らであり、一部にくぼみ痕が残されている。石材は共に粗粒輝石安山岩である。

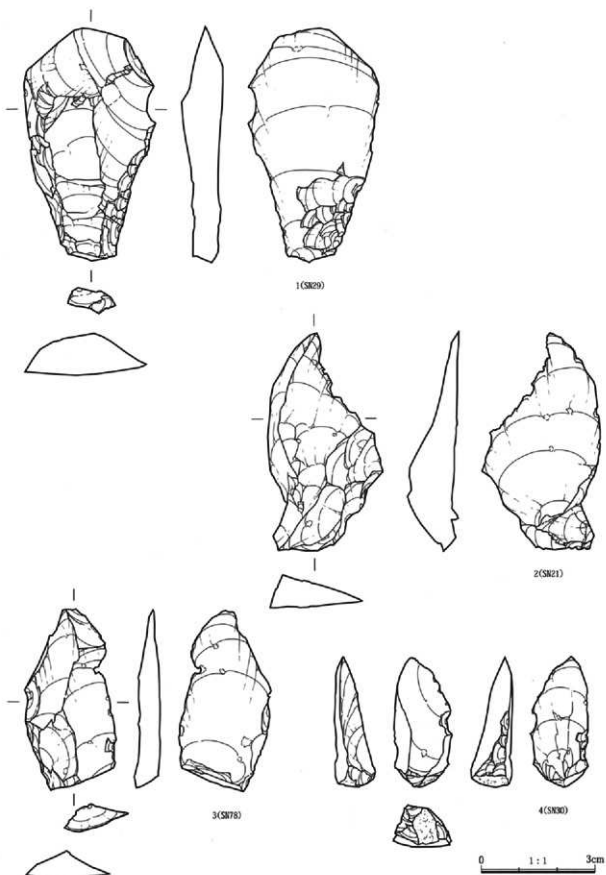
剥片 総数148点存在するが、個別剥片の実測図は掲載していない。主に幅広い横長剥片や不定形な剥片が主体であり、縦長剥片は数が極端に少ない。

C. 剥片剥離の様相

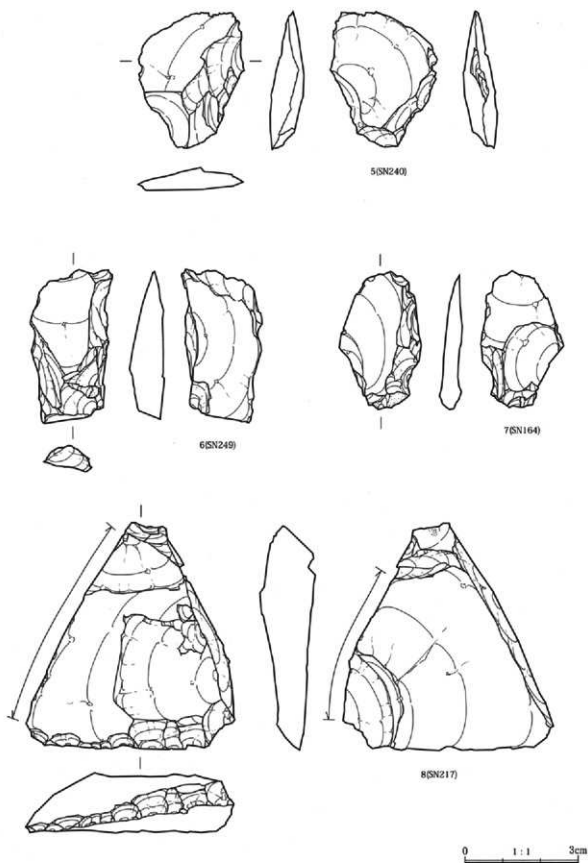
遺跡内での接合資料は、31例104点が確認されて

いる(太字はツール・石核を示す)。

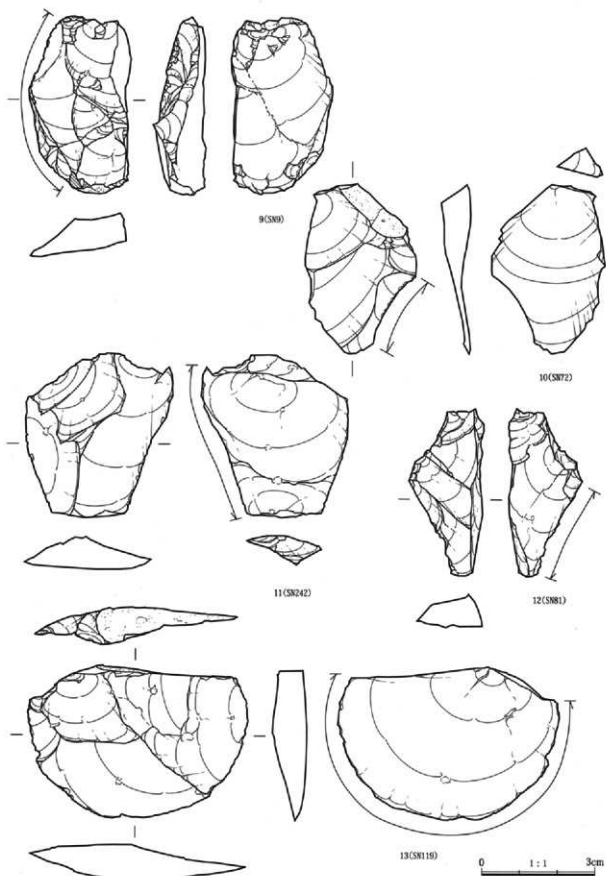
- ◎接1. 240→○→203 石核と剥片の接合。
- ◎接2. 178+196+195+192 加撃時の分断。
- ◎接3. ○→153→151→○ 剥片2点の接合。
- ◎接4. 50→53+55→44+47+118+116 連続した剥片の接合。うち、2点は加撃時の分断と折断。
- ◎接5. ○→144+142→149+140→258 剥片素材の石核と剥片の接合。
- ◎接6. ○→243→86→177 連続した剥片3点の接合。
- ◎接7. 302+291+284→286 剥片の接合。
- ◎接8. 45→○+43 石核と剥片の接合。
- ◎接9. 285+290→301→289 剥片の接合と折断。
- ◎接10. 294→293 剥片の接合。
- ◎接11. 193+208→207+234 剥片の接合と折断。
- ◎接12. ○→17→○→15→28→20→295+○ 打面転位を繰り返し、縦方向の剥片剥離。
- ◎接13. 27→22→52 剥片の接合。
- ◎接14. 251+253 加撃時の分断。
- ◎接15. 254+256 加撃時の分断。
- ◎接16. 158→176+161→159+○ 剥片の接合と折断。
- ◎接17. 49+60 加撃時の分断。
- ◎接18. 31+54+46+37→38→41→35+51→34 剥片の接合。
- ◎接19. ○→227→222+221→252 石核と剥片の接合。
- ◎接20. 145→133→143→137→138 剥片の接合。
- ◎接21. 128→131→122+127+155 石核と剥片の接合。
- ◎接22. ○→297→○→298 打面を転位して縦方向に剥離。(珪質凝灰岩)
- ◎接23. 156+165+○ 加撃時の分断。
- ◎接24. 135+152 加撃時の分断。
- ◎接25. 69+92+114 加撃時の分断。
- ◎接26. 113→179 剥片の接合。
- ◎接27. 272+273 加撃時の分断。
- ◎接28. 224→181+211→182 剥片の接合。



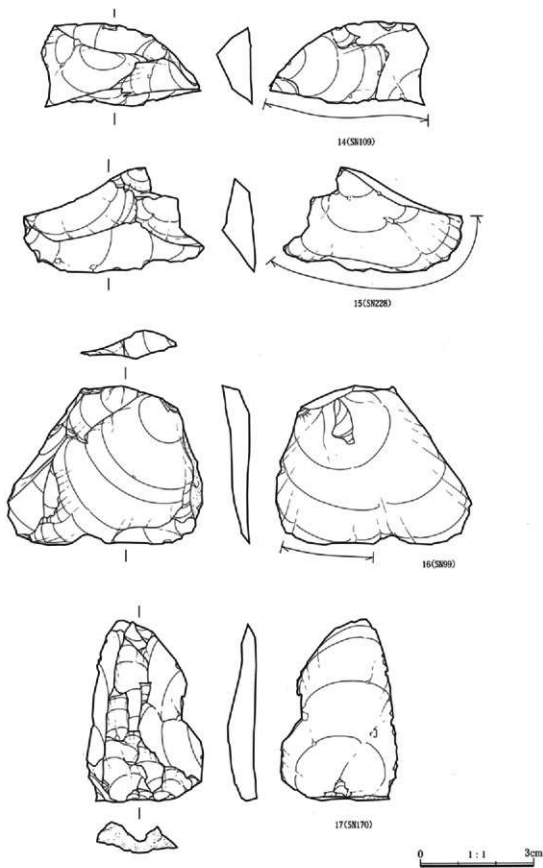
第8図 旧石器時代の石器群 (1)



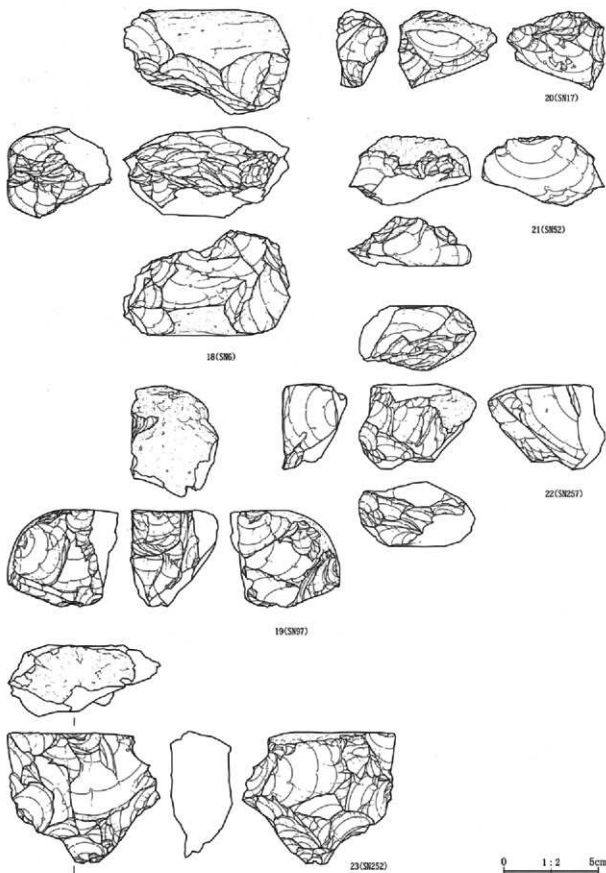
第9図 旧石器時代の石器群(2)



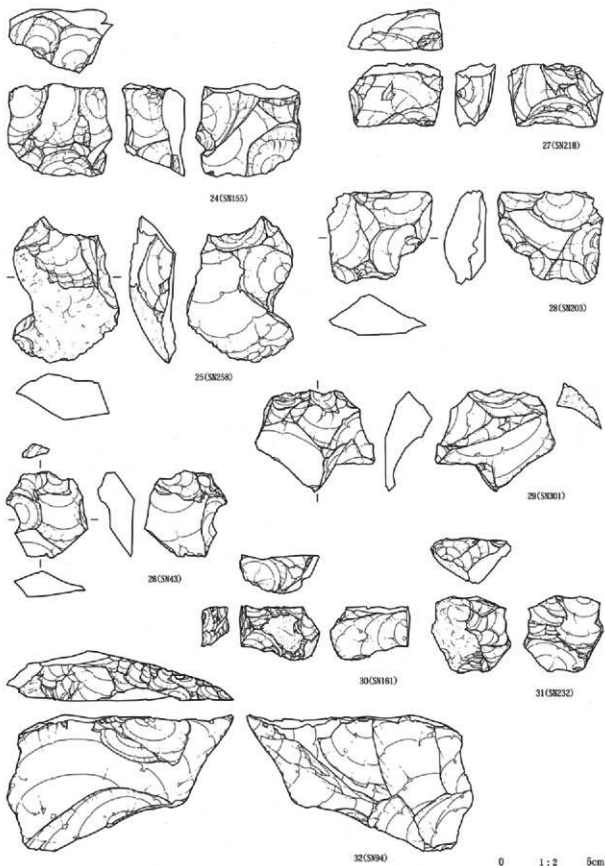
第 10 図 旧石器時代の石器群 (3)



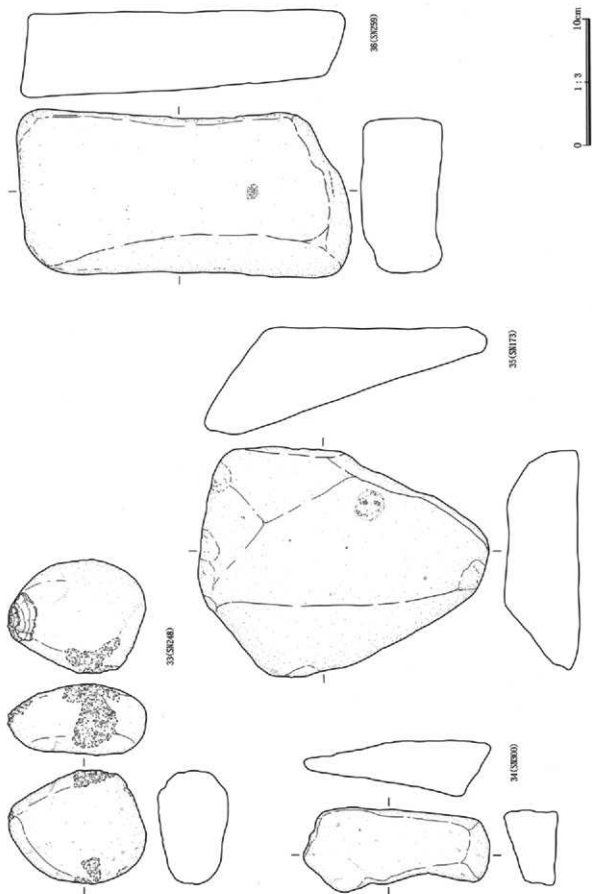
第 11 図 旧石器時代の石器群 (4)



第 12 図 旧石器時代の石器群 (5)



第13図 旧石器時代の石器群(6)



第 14 図 旧石器時代の石器群 (7)

◎接 29. ○→100→79 剥片の接合。

◎接 30. 5→236→238 打面転位後、剥片剥離。

◎接 31. ○→99→72 同一の打面から連続して縦方向に剥離。同石材が105と220の2点。(珪質)

これらの資料から窺える剥片剥離技術は、縦長よりもむしろ幅広い横長や不定形な剥片を作出するための剥片剥離を主体としていることが読み取れる。特に、周縁から求心的な剥片剥離を行う事例が主体を占めている状況が、接合資料1・6・9・20・30や前述した第3形態の石核の存在から読み取れる。この剥片剥離工程は、旧石器時代の各時期を通じて普遍的に認められるが、特に石刃技法の初現が明らかに確認できる群馬編年1期前半の主体を占めており、その後の石刃技法の隆盛と反比例するような形で減少していくのが特徴である。詳細に見れば、接合資料1・8のように両面に対して各剥離面を打面として交互に剥片剥離を施す円盤状の石核の存在が特徴的である。また、接合資料6・9・20・30については、最終形態としての石核までの剥片剥離工程が残されている訳ではないものの、周辺からの剥離を加えて剥ぎ取られた剥片の様子が読みとれる資料である。接合資料1では、剥ぎ取った不定形の剥片に平坦剥離を施すことで台形状の小形ナイフ形石器を作出しており、このような形状の剥片が主としてこの時期を代表する小形ナイフ形の素材として選択される。接合資料2・4は、連続して不定形剥片を剥ぎ取る資料である。接合資料5は分割した大きな剥片を石核の素材として、以前の剥離面を打面として周辺部に沿って打点を移動しながら、幅広い横長あるいは不定形の剥片を作出する第5形態の典型である。一方、接合資料18のように、縦長剥片を剥ぎ取る第1形態の事例も存在するが、石刃技法のように連続して縦長剥片を剥ぎ取るために、石核の打面や側面の調整を施す事例は少ない。また、1点のみであるが、接合資料16のように明確に縦長剥片を剥ぎ取る事例も認められる。

以上のことから、基本的には第3形態の石核に見られる幅広い剥片を剥ぎ取る剥片剥離技術が主体であり、他の同時期遺跡における石器群と同様に、主に黒色安

山岩が石材として多用される剥片剥離技術でもある。

D. 製作工程

資料の接合関係から把握される石器製作工程には、以下の工程1～5の存在が想定されるが、当遺跡ではどの工程が展開されていたのかを、原石から石核の残存までの過程と、素材となる剥片への調整過程を中心に見てみよう。

工程1 (該当無し) = 原石から石器の調整加工までと、石核の残存までの全工程が遺跡内に存在する。

工程2 (接合資料9・11・13・18・20・30) = 原石から剥片剥離過程の途中までしか存在せず、他の場所に移動したために石核が残存しない。

工程3 (接合資料1・5・8・12・19・21) = 剥片剥離の途中から遺跡内 (あるいは発掘調査範囲内) に運び込まれ、最終段階の石核まで残存する。

工程4 (接合資料4・6・7・10・12・14・20・24・28・30) = 剥片剥離の途中のみが残存する。

工程5 (9) = 石器単品だけの出土。搬入と考えられる。

上記で述べた工程を示す資料は、単品や接合資料から想定される剥片剥離工程をも含めて、遺跡内での大部分の剥片剥離工程や最終段階としての石器の形状を示している。ただし、これらの工程に分類される資料のうち、工程4については前後の剥片剥離の痕跡が認められるものの、接合関係にある資料が調査範囲内には検出されなかった。この点については、確実に遺跡外に持ち出されたとは限らず、未調査区域部分に存在する可能性も否定できないため、現状では仮の位置付けとしておく。また、接合資料4・5・7・9・12～14・16・18～20・22は、原石面を一部に残していることから、遺跡内に原石の状態、あるいは分割した際の状態で持ち込まれたと考えられ、現状では確認できないが工程1が存在した可能性もある。

E. 石器組成

各ブロックの性格付けを行うために、先ず石器組成についてみてみよう。接合資料の数は剥片の折断資料

も含めて31例104点(折衝資料を除くと26例94点)であり、主要な石器で接合資料内に含まれるものが13点存在する。接合点数が礫石や台石、自然礫を除く総点数284点に占める割合は36.6%(折衝資料を除くと33.1%)と高い割合である。これは本遺跡が石器製作の場であったと考えられる根拠のひとつと考えられ、他の遺跡と比較する事でさらに鮮明になるはずである。

当遺跡よりもやや時期は新しくなるものの、利根川上流域の石器製作遺跡として著名な月夜野町後田遺跡では、総点数4119点(その他に礫380点)のうち接合資料は249例953点で23.1%、同町善上遺跡が総点数933点のうち55例279点の29.9%、赤城山西麓の赤城村勝保沢中ノ山遺跡のA地点が総点数1772点のうち65例442点の24.9%で、B地点が総点数1867点で118例513点の27.5%、同村見立溜井遺跡第4文化層が総点数28点のうち2例6点の21.4%、同村諏訪西遺跡が総点数301点のうち21例70点の23.3%である。北橋村房谷戸遺跡第2文化層は、総点数1352点のうち146例629点の46.5%で、大部分の遺跡が20%代であるのに対してかなり高い割合である。また、前橋市熊の穴遺跡は総点数128点のうち7例18点の14.1%、月夜野町大友館遺跡の総点数12点のうち1例2点の16.7%と低い。

一方、当遺跡と同時期と考えられる北橋村分舞八崎遺跡が総点数287点のうち23例69点の24.0%、伊勢崎市三和工業団地遺跡が総点数1724点のうち93例361点の20.9%、同市波志江西宿遺跡3期が総点数391点のうち46例194点の49.6%、赤堀町下舂牛伏遺跡第2文化層が総点数2039点のうち81例289点の14.2%、榛名町白岩民部遺跡が総点数726点のうち45例207点の28.5%、同町三ツ子沢中遺跡が総点数541点のうち42例121点の22.4%、安中市古城遺跡1A区が総点数86点のうち6例21点24.4%で、同1C区が総点数523点のうち33例97点の18.5%、藤岡市北山B遺跡が総点数672点のうち29例128点の19.0%、甘楽町白倉下原遺跡A地点が総点数403点で178点の44.2%、B地点が総点数120点のうち15

例36点の30.0%、天引向原遺跡A地点が総点数268点のうち116点の43.3%、天引狐崎遺跡が総点数655点のうち149点の22.7%、多比良道部野遺跡が総点数422点のうち17例103点の24.4%である。下舂牛伏遺跡の割合が低いのに対して、波志江西宿遺跡や白倉下原遺跡A地点と天引向原遺跡A地点が40%台とかなり高い割合を示している。

以上の事から、大部分の遺跡では総点数に対して接合資料の点数が占める割合、つまり接合率が20%を越える傾向が窺え、石器製作を主体とした遺跡であったと考えられる。当遺跡についても、前述した割合からみて石器製作の場と想定できる。そして、この差は石器製作遺跡とそうでない遺跡、例えば居住のための遺跡との違いが明確に現れたものと考えられ、これは後述するように遺跡内の各ブロック(石器集中地点)の性格付けをする上で、指数の一つとなる。

F. 石材組成

石器の石材は、黒色安山岩271点(90.3%)、粗粒輝石安山岩16点(5.3%)、珪質頁岩6点(2.0%)、黒色頁岩5点(1.7%)、硬質頁岩1点(0.3%)、チャート1点(0.3%)であり、黒色安山岩の数量が最も多く9割と大部分を占める。

G. 分布状況

遺物の分布に関しては、発掘調査の対象が県道幅でしかないためにそのすべてを検出し得たわけではないが、調査範囲の中央部では長軸40m×短軸約15mの南西から北東の方向へ細長い楕円形状になると想定される。さらに、その南西から北東にかけて弧状に分布しているようであり、北西と南東にそれぞれ広がる可能性がある。また、仮に分布範囲のほぼすべてを検出した状態だと仮定すると、第7図でも分かるように遺物の全体分布範囲は長軸が南西～北東方向約27m、短軸が北西～南東方向西約10mの規模であり、可能性としては後述する「環状ブロック群」との関連も指摘される。石器の集中分布(以後、「ブロック」と呼称する)についてみてみると、現状の分布からは粗密

の差はあるものの、10箇所程のまとまりに区分することができる。そこで、石器石材や接合資料の分布状況とも合わせてみて、1～10までのブロックを設定した。(付図3参照)

H. ブロックの様相

旧石器時代の本来の分布範囲は、発掘調査範囲である道路の幅に規制されているものの、大部分は把握できたものと考えられ、遺物の分布状況から前記したように10箇所のブロックに分けることが出来る。そこで石器の集中の散漫の差はあるものの、南側から順次1～10ブロックを設定した。その際に、集中部分から離れて単独出土している資料については、無理にブロックに含めることはしなかったために、ブロック内の総点数と遺跡出土の総点数は一致しない。

特定の石器の分布をみると、ナイフ形石器は2・4・5の各ブロックにそれぞれ1点づつ、3・7の両ブロックに2点づつ認められる。石器製作に関わる石核は1・2・5・7・10の各ブロックにそれぞれ1点づつ、3・8の各ブロックにそれぞれ2点づつ、4・6の各ブロックにそれぞれ3点づつ認められる。同じく石器製作の場を知る上で重要な礫石は、7ブロックの南東の外れで6ブロックに隣接する位置と、9ブロックから北東で10ブロックの東のやや離れた調査範囲外の位置に存在する。同様に作業空間の位置を推定できる材料である台石は、5・8の各ブロックに位置する。こうした特定の石器の在り方からみて、大部分のブロックが石器製作に関わっていたことを示しており、遺跡全体が石器製作を主体とする活動を行った集団により形成されたことを窺わせる。

1ブロックは調査区域の最も南に位置し、分布が南に延びる可能性もあるが、明確に他のブロックからは分離している。点数は9点と少ないが、使用痕ある剥片と石核をそれぞれ備えている。2ブロックも17点と少ないものの、東西に縦長の楕円形で他のブロックから完全に分離しており、ナイフ形石器と石核が含まれている。3ブロックは4ブロックとの分離がやや難しいもののほぼ円形で、西側にナイフ形石器2点、東

側に石核2点が分布する。4ブロックは最も集中している部分で南北にやや楕円形であるが、分布の密度から北側と南側の2箇所にさらに分けられる可能性がある。ナイフ形石器1点と石核3点が分布する。5ブロックは南北に縦長の楕円形であり、あるいは西に延びる可能性もあるが、東側に位置する6ブロックとの境も明確には分離しづらい。ナイフ形石器と石核、それに台石がそれぞれ1点存在する。6ブロックは西側で集中するものの、東に分布が散漫に延びて調査区域外にも延びる可能性があり、石核3点が存在する。7ブロックは広がりはあるものの散漫な分布で、ナイフ形石器と礫石がそれぞれ2点と石核が1点分布する。8ブロックは22点で、石核が2点と台石が1点分布する。9ブロックは約10点と規模が小さい。10ブロックも規模が小さく散漫な分布であり、石核が1点分布する。

次に、ブロック間の関係について見てみよう。1ブロックは7ブロックとの間に接合資料30が存在し、その距離も18mとかなり離れている。2ブロックは9ブロックの間の接合資料12が約20mと最も離れており、3ブロックとの間には接合資料13が存在する。また、3ブロックは大部分が内部で完結する。4ブロックは多くのブロックと接合関係にあり、接合資料6が6・7ブロックと、接合資料5が8ブロックと、接合資料26が6ブロックとの間で接合関係にある。ただし、大部分の接合資料は各ブロック内部で完結する。また、接合のまとまり具合から、分布の説明でも述べたように2つのブロックに細分できるのかも知れない。5ブロックはすべてが内部での接合関係であり、6ブロックは内部での接合関係および4・7ブロック間で、7ブロックは内部での接合関係と6ブロック間で、8ブロックは内部での接合関係と4ブロック間で、10ブロックはすべてが内部での接合関係である。

以上のように、各ブロックが有する内容と各ブロック間での接合関係とを合わせて考えれば、ほぼすべての石器分布の同時性が立証される。

石材では、非在地系の代表的な搬入石材である硬質頁岩が3ブロックで1点、珪質頁岩が4ブロックで3

点と6ブロックで1点、それに9ブロックで2点分布している。本石器群の大半を占める黒色安山岩と共に県内の在地系石材を代表する黒色頁岩は、2ブロックの2点と8ブロックでの1点の分布だけであり、チャートは1ブロックで1点のみ、粗粒輝石安山岩は一部が敲石や台石として5ブロックや7ブロック、8ブロック内で利用されているものの、大部分は自然礫としてブロックの周辺や単独で離れた場所に分布している。

I. 結論

AT降灰以前に位置付けられる当遺跡の石器群は、その中でも幅広い剥片を素材として一部に調整を施した小形と、石刃や縦長剥片を素材とし基部や先端部に調整を施した大形のナイフ形石器を中心に、掻器、削器などを石器組成としている時期である。前者の小形のナイフ形石器の形状には多種がみられるが、石刃素材のものは少なく、斜刃や尖刃のベン先状や台形状の形状が多い。それらの石材も、黒色安山岩や黒色頁岩などの利根川の上流域に原産地が存在するものを多用している。ただし、黒色安山岩については西毛地域の鍋川上流域の荒船山から八風山にかけても分布しており、鍋川流域の遺跡は大部分がこれを利用していると考えられるが、位置的にみて当遺跡では利根川上流域のものを想定して間違いなであろう。

本石器群の出土層位は、給良一丹沢火山灰（AT）を含む暗色帯中とその下位が出土層位であることから、群馬編年の1期（岩宿フォーラム1994）に対比される。筆者と大工原 豊は、この時期を3段階に区分しており、その中で最も古い時期である第1段階は、主として幅広い剥片を素材とし、折断調整・平坦剥離・急角度調整・縁辺微調整など多様な調整技術によって整形された小形ナイフ形石器が安定して存在する。石材は県内産の黒色頁岩や黒色安山岩が多用される。一方、大形ナイフ形石器は素材の形状が多様で、打面が残存し微細な基部調整を施した資料が多い傾向にある。石材も東北地方を産出地とする硬質頁岩（珪質頁岩）などを利用しており、遺跡内での剥片剥離が確認

されることは少なく、主に遺跡外からの搬入品である。また、この段階の特徴的な石器である局部磨製石斧についてはそれぞれの遺跡での点数は少ないものの、大部分の石器群に普遍的に存在する。さらに、石器の分布状況には、直径20～50mの大きさで中央部に空白部を持つ「環状ブロック群」と呼称される特異な分布が多くみられる。県内でも19遺跡20地点が該当し、全国でも本県や千葉県などを中心としてこれまでに70遺跡近くが確認されている（小菅2003）。

本遺跡の資料も台形状の小形ナイフ形石器の存在などから、群馬1期（約2.5～3万年前後）の第1段階に比定され、年代も約2.8～3万年前後と考えられる。ただ、縦長剥片素材の大形ナイフ形石器や磨製石斧は出土しておらず、在地系の主要石材であるもう一方の黒色頁岩がほとんど見られないなど、他の遺跡と比較してやや異なる点もある。分布も環状ブロック群と呼ぶには、石器群全体が姿を見せているか否か不明なために判断できない。

個別の石器についてみていくと、剥片・砕片・自然礫以外の主要な石器は39点で、石器の占める割合は12.6%である。これはほぼ同時期の分舞八崎遺跡の21.3%、下雄牛伏遺跡第4文化層の4.9%、和田遺跡の17.2%、三和工業団地遺跡第4文化層の17.4%、波志江西宿遺跡の7.2%、白岩民部遺跡の9.1%、三ツ子沢中遺跡の16.3%、古城遺跡1A区の18.6%、古城遺跡1C区の11.5%、多比良追部野遺跡の16.1%、天引狐崎遺跡の11.6%、天引向原遺跡の14.6%、白倉下原遺跡A区の14.3%、白倉下原遺跡B区の35.2%などと比較すると、大部分の遺跡が10～20%の範囲に収まる状況から、完成された石器を多量に常時保有している状況ではなく、必要に応じて適時石器製作を行う剥片剥離の場を伴った居住地としての遺跡形態ではないかと考えられる。

利根川上流域での1期の遺跡は、前述した後田遺跡や善上遺跡、水上町大竹遺跡や同町小竹A遺跡などの2～3段階とやや新しい時期の資料の遺跡が多い。やや下流の赤城山西麓地域の勝保沢中ノ山遺跡や見立瀧井遺跡、諏訪西遺跡、房谷戸遺跡なども2～3段階で

あり、むしろ本遺跡の時期に近いのは、赤城山南西麓の分郷八崎遺跡や同南麓の前橋市内堀遺跡や下触牛伏遺跡・三和工業団地遺跡・波志江西宿遺跡、榛名山南東麓の白岩民部遺跡などの1段階の遺跡である。その中でも最も近いのは分郷八崎遺跡であるが、地理的には最短距離でも標高1296mの子持山西側の中山峠を抜けて約18kmとやや離れている。当遺跡そのものも、利根川という大規模な河川流域を中心とした行動形態からはやや外れた位置にあり、その立地・形成の解釈には別の要因を想定せざるを得ないであろう。それは前記したように、利用される石材は黒色安山岩が主体(9割)を占めることから、あるいはこの石材を主に使用する集団と、もう一つの主要な石材である黒色頁岩を占有する集団というような関係が存在したのかもしれない。

両方の石材は共に利根川上流部に原産地が存在し、利根川支流の赤谷川や片品川の河原などで調達が可能である。これに際しては、勿論利根川流域まで出向いたと考えるのが現状では妥当である。その場合に、本遺跡から利根川までは地図上の最短で約7kmの距離であるが、実際には標高590mの本遺跡から標高699mの権現峠を越えて、沼田市川田に至る経路を辿ることとなり、走行距離も約8kmとなる。もう一つの利根川に至る経路として、遺跡のすぐ東を流れる西沢川に沿って北に通り、標高817mの金比羅峠を越えて月夜野町上津に至るルートが想定される。この行程では地図上の最短で約6kmの距離であり、実際の走行距離も約7kmである。累積で前者が約500m、後者が700mもの高低差があるが、こうした点を考慮に入れても1日の行程の中で容易に石材入手が可能であったと言える。

石器の石材では、前述したように黒色安山岩が多用されており、この時期の遺跡で黒色安山岩を多用している遺跡は、後田遺跡、勝保沢中ノ山遺跡A地点・B地点、分郷八崎遺跡、下触牛伏遺跡、和田遺跡、などがある。この他に、黒色頁岩を主体とする遺跡、あるいは黒色安山岩と黒色頁岩をほぼ均等に保有する遺跡、さらには搬入石材としての黒曜石を主体とする遺

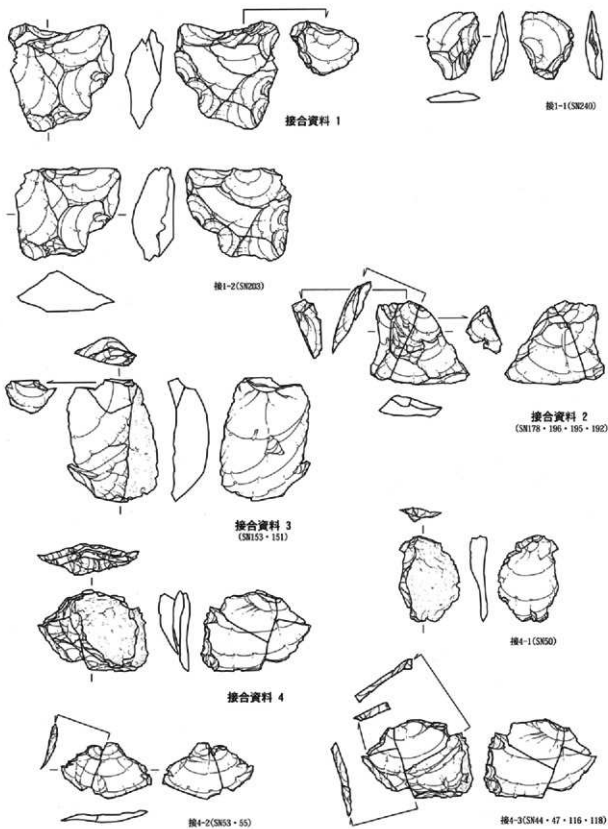
跡など幾つかに分けられる。

比較的大型のために遠距離からは運び入れない石材が選択され易い敲石や台石については、粗粒輝石安山岩が利用されており、遺跡内に分布する自然礫の大部分も粗粒輝石安山岩であることから、遺跡の周辺から容易に入手が可能であった石材と考えられる。

最後に、吾妻地区で初めてとも言える本格的な旧石器時代の遺跡であるものの、山をひとつ越えると利根川が存在することから、大きくは利根川流域の遺跡群に含めて考えてもよいようである。その意味では、本来の吾妻川流域での今後の遺跡の増加が待たれる。

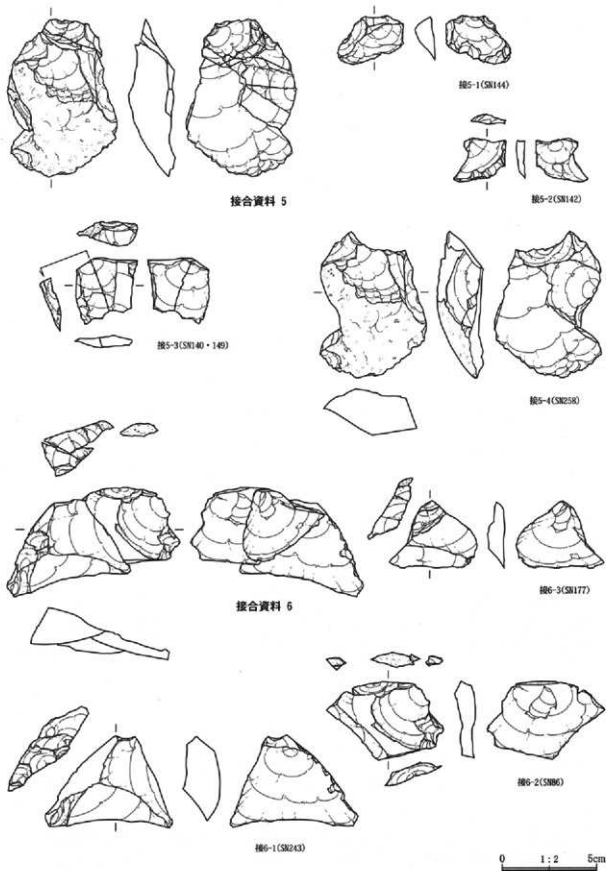
参考文献

- 小菅将夫 2003「現状ブロック群研究の現状と課題」『旧石器人たちの活動をさぐるー日本と韓国の旧石器研究からー講演会・シンポジウム予稿集』大阪市学芸員共同研究「朝鮮半島総合学術調査団」旧石器シンポジウム実行委員会
- 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1994「群馬の岩宿時代の実態と特徴 予稿集」
- 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1995「石器石材ー北関東の原石とその流通を中心としてー 予稿集」
- 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1997「石器石材IIー北関東の原石とその流通を中心としてー 予稿集」
- 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1993「現状ブロック群ー岩宿時代の集落の実態にせまるー 予稿集」
- 月夜野町教育委員会 1986「善上遺跡」
- 北橋村教育委員会 1986「分郷八崎遺跡」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986「下触牛伏遺跡」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987「後田遺跡」
- 安中市教育委員会 1988「古城遺跡」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988「勝保沢中ノ山遺跡I」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994「白倉下原遺跡I(旧石器時代編)」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994「天引尾崎遺跡I(旧石器時代編)」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997「多比良追部野遺跡」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「白岩民部遺跡」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999「三和工業団地1遺跡(1)ー旧石器時代編ー」

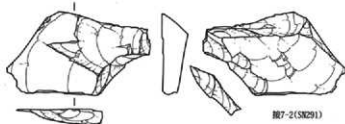
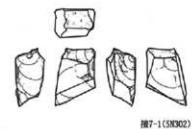
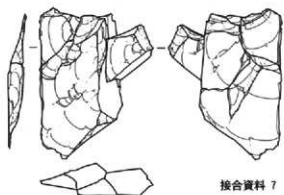


※()内は付図1・2の取り上げ番号

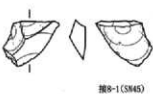
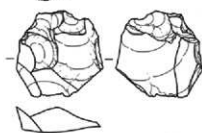
第 15 図 接合資料 1～4



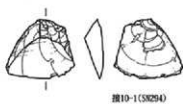
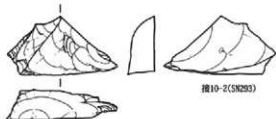
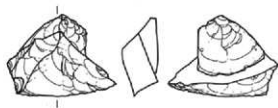
第 16 図 接合資料 5・6



接合資料 8

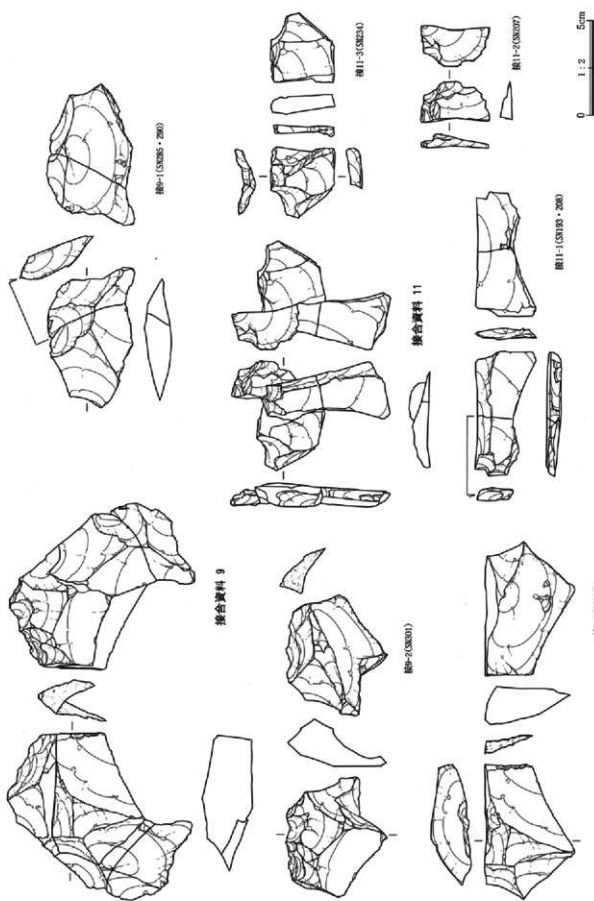


接合資料 10



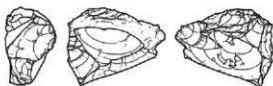
0 1:2 5cm

第 17 图 接合資料 7・8・10

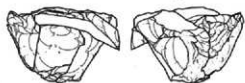


第 18 図 接合資料 9・11

接合資料 12



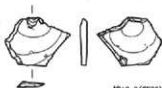
接12-1(SN17)



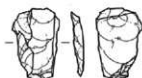
接12-4(SN20)



接12-2(SN15)



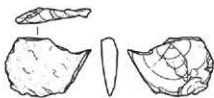
接12-3(SN28)



接12-5(SN295)



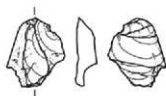
接合資料 13



接13-2(SN22)



接13-3(SN52)

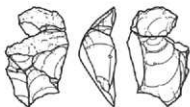


接13-1(SN27)

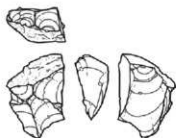


第 19 圖 接合資料 12・13

接合資料 14

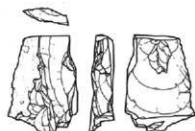
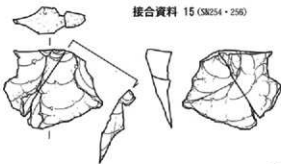


接14-1(SR251)



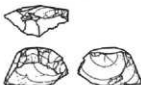
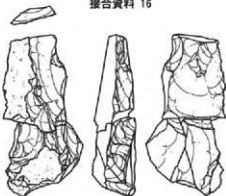
接14-2(SR253)

接合資料 15 (SR254・256)



接16-2(SR176)

接合資料 16



接16-4(SR159)



接16-1(SR158)

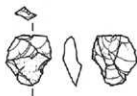


接16-3(SR161)

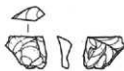
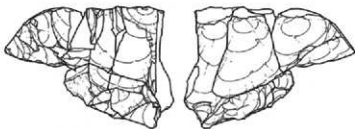
接合資料 18



接18-1(SR31)



接18-2(SR54)



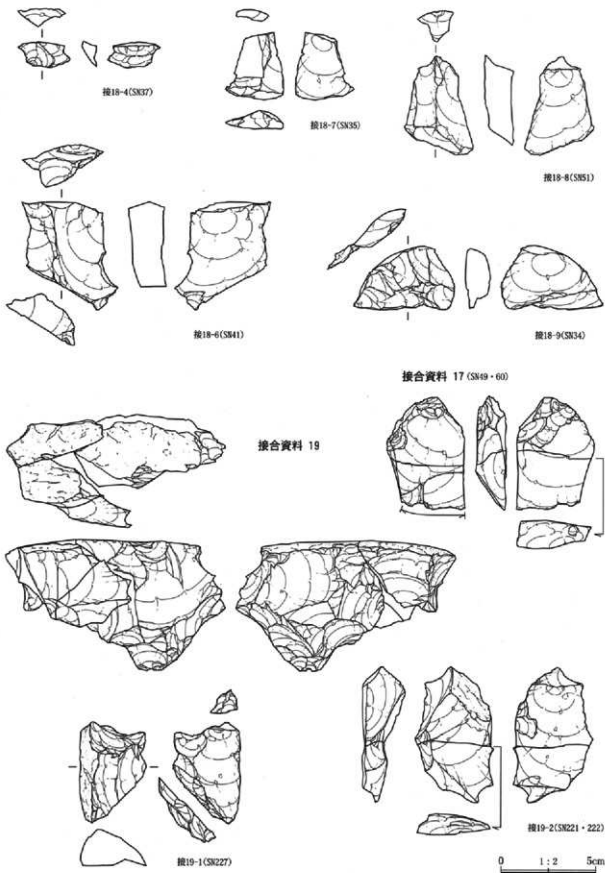
接18-3(SR46)



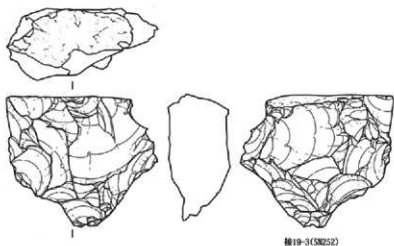
接18-5(SR38)

0 1:2 5cm

第20圖 接合資料 14 ~ 16・18

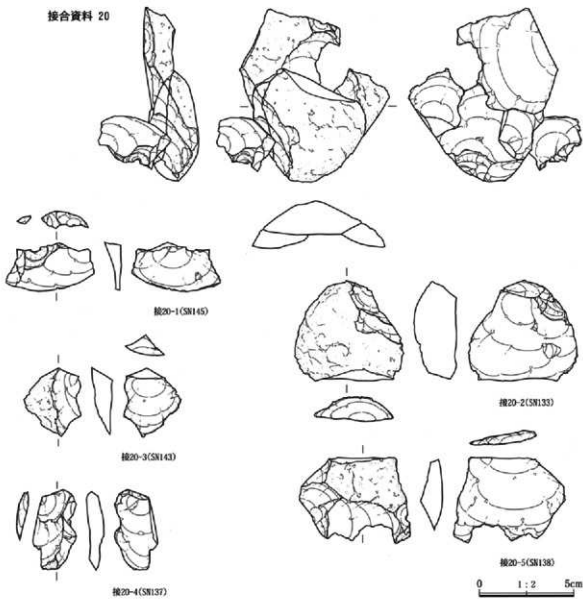


第 21 圖 接合資料 17 ~ 19



接合資料 19・20

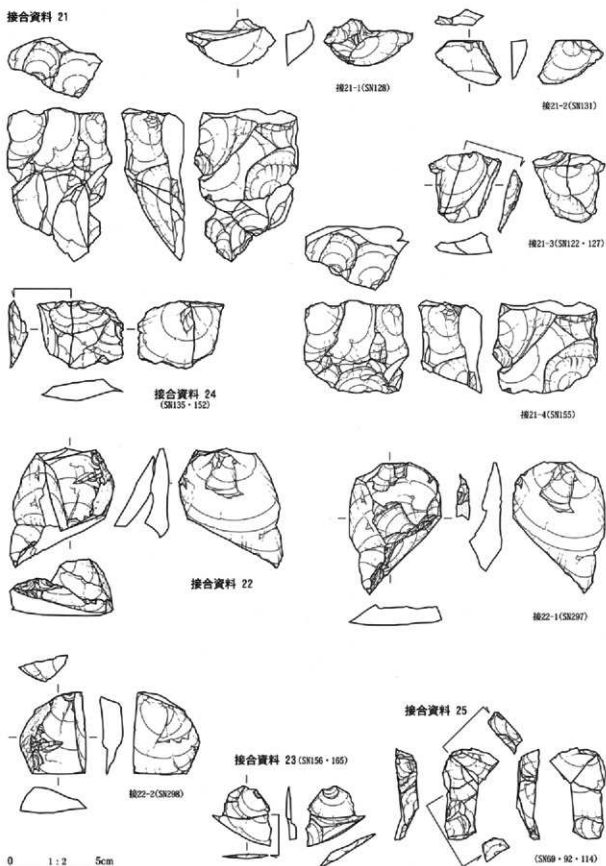
接合資料 20



0 1:2 5cm

第 22 圖 接合資料 19・20

接合資料 21

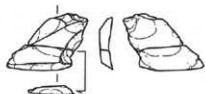


第 23 圖 接合資料 21～25

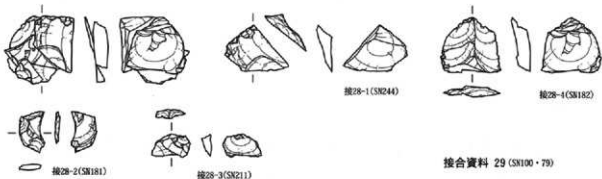
接合資料 26 (SN113・179)



接合資料 27 (SN272・273)



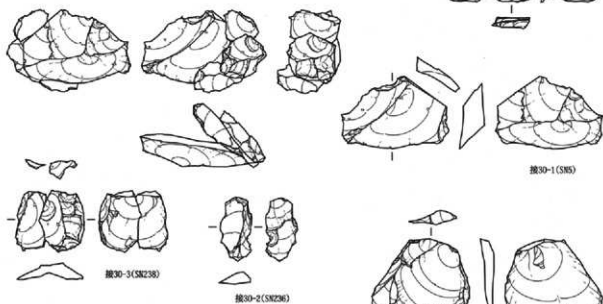
接合資料 28



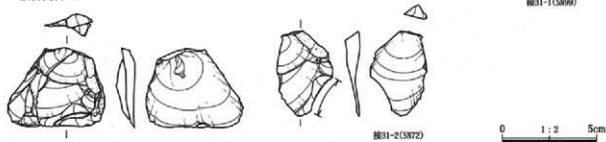
接合資料 29 (SN100・79)



接合資料 30



接合資料 31



0 1:2 5cm

第 24 図 接合資料 26 ~ 31

旧石器時代 石器群の計測一覧

取上 番号	周縁番号	接合番号	器種	石材 コード	大きさ (cm)			重量 (g)
					長さ	幅	厚さ	
1			砕片	14	11	9	2	0.2
2			自然磨	16	64	35	22	52.2
3			砕片	17	24	40	8	7.8
4			砕片	17	45	39	10	34.8
5	接 30-1		砕片	17	49	47	15	35.3
6	第 12 図 18		石核	17	83	53	47	268.3
7			砕片	17	37	56	17	20.9
8			砕片	17	41	52	19	28.1
9	第 10 図 9		使用痕ある砕片	16	27	47	10	15.0
10			砕片	17	13	17	4	0.6
11			砕片	17	32	62	16	28.7
12			砕片	17	20	30	10	5.7
13			砕片	17	35	24	9	4.7
14			砕片	14	50	70	12	37.0
15	接 12-2		砕片	17	43	35	15	16.3
16			砕片	14	21	32	8	5.3
17	第 12 図 20	接 12-1	石核	17	41	53	25	42.4
18			砕片	17	19	28	4	2.4
19			砕片	14	42	20	8	7.7
20		接 12-4	砕片	17	46	33	12	11.6
21	第 8 図 2		ナイフ形	17	31	50	17	17.8
22	接 12-3		砕片	17	41	32	9	12.2
23			砕片	17	12	16	5	0.8
24			砕片	17	15	29	9	2.5
25			砕片	17	32	19	6	3.6
26			砕片	17	23	13	2	0.5
27	接 13-1		砕片	17	31	36	12	10.2
28	接 12-3		砕片	17	26	34	4	3.9
29	第 8 図 1		ナイフ形	6	59	34	11	21.7
30	第 8 図 4		ナイフ形	17	33	19	10	4.3
31	接 10-1		砕片	17	44	22	13	9.0
32			自然磨	18	47	35	19	38.5
33			砕片	17	8	12	2	0.1
34	接 10-9		砕片	17	36	52	14	23.0
35	接 10-7		砕片	17	35	30	10	8.6
36			自然磨	18	47	24	22	29.4
37	接 10-4		砕片	17	10	28	9	2.2
38	接 10-5		砕片	17	20	12	3	0.8
39			自然磨	11	34	24	17	10.1
40			砕片	17	19	19	23	1.1
41	接 10-6		砕片	17	59	49	19	42.2
42			砕片	17	35	14	6	1.9
43	第 13 図 26	接 0-2	石核	17	46	42	20	27.7
44		接 0-3	砕片	17	24	30	5	4.3
45		接 0-1	砕片	17	33	22	9	4.3
46		接 10-3	砕片	17	20	18	8	2.7
47		接 0-3	砕片	17	48	32	7	7.2
48			砕片	17	29	23	5	2.9
49	接 17		砕片	17	37	48	9	28.9
50	接 0-1		砕片	17	44	31	9	10.7
51	接 10-8		砕片	17	55	33	17	33.0
52	第 12 図 21	接 13-3	石核	17	58	65	25	49.0
53		接 0-2	砕片	17	30	29	5	3.8
54	接 10-2		砕片	17	27	35	12	5.7
55		接 0-2	砕片	17	19	35	4	1.7
56			砕片	17	29	48	8	10.1
57			砕片	17	45	26	9	9.8
58		失	遺					
59			砕片	17	27	38	9	5.9
60	接 17		砕片	17	33	38	16	18.0
61			砕片	17	12	9	9	1.2
62			砕片	17	32	37	8	5.0
63			砕片	17	44	63	11	30.6
64			砕片	17	10	9	4	0.2
65			砕片	17	23	33	10	4.8
66			砕片	17	9	7	3	0.2
67			砕片	17	26	24	7	2.5
68			砕片	17	19	10	9	0.4
69	接 25		砕片	17	20	17	10	3.5
70			砕片	17	37	11	8	1.8
71			砕片	17	17	6	4	0.3
72	第 10 図 10	接 31-2	使用痕ある砕片	5	44	30	9	7.5
73			砕片	17	13	10	7	0.9
74			砕片	17	10	3	3	0.1
75			砕片	17	12	4	2	0.1
76			砕片	17	10	14	5	0.9
77			砕片	17	41	38	6	20.8
78	第 6 図 3		ナイフ形	17	46	23	7	7.0
79		接 29	自然磨	17	18	18	3	1.0
80			自然磨	22	43	35	24	42.1
81	第 10 図 12		使用痕ある砕片	17	19	43	8	6.9
82			砕片	17	14	6	4	0.2
83			砕片	17	21	15	6	2.1
84			砕片	17	7	20	3	6.3
85			砕片	17	17	11	4	0.5
86		接 0-2	砕片	17	41	61	10	23.5
87			砕片	17	20	15	6	1.7
88			砕片	17	40	38	12	12.2
89			砕片	17	24	15	5	1.4
90			砕片	17	25	25	9	4.5
91			砕片	17	25	19	4	1.4
92		接 25	砕片	17	31	16	10	6.3
93			砕片	17	32	35	10	9.1
94	第 13 図 32		石核	17	99	112	29	192.7
95			砕片	17	39	26	11	9.2
96			砕片	17	13	17	4	0.6
97	第 12 図 19		石核	17	51	45	52	162.5
98			砕片	17	11	10	6	0.6
99	第 11 図 16	接 31-1	使用痕ある砕片	17	60	51	7	14.7
100		接 29	砕片	17	19	15	3	1.1
101			砕片	17	12	7	4	0.5
102			砕片	17	42	38	8	13.0
103			砕片	17	26	15	7	1.8
104			砕片	17	42	21	12	7.8
105			砕片	5	13	28	6	2.3
106			砕片	17	31	12	6	2.0
107			砕片	17	31	25	11	3.8
108			砕片	17	7	12	3	0.3
109	第 11 図 14		使用痕ある砕片	17	24	44	11	7.0
110			砕片	17	14	17	5	1.5
111			砕片	17	9	28	4	1.1
112			砕片	17	35	21	6	4.7
113		接 20	砕片	17	17	30	4	1.5
114		接 25	砕片	17	21	16	8	3.0
115		接 4-3	砕片	17	37	27	16	10.3
116		接 0-3	砕片	17	22	30	5	2.9
117			砕片	17	12	12	4	0.2
118	第 10 図 13	接 0-3	砕片	17	16	16	4	0.8
119			使用痕ある砕片	17	40	58	10	23.0
120			砕片	17	26	36	8	8.2
121			砕片	17	10	13	3	0.3
122		接 21-3	砕片	17	32	21	7	3.4
123			砕片	17	13	24	4	2.6
124			砕片	17	29	47	13	22.9
125			砕片	17	71	27	15	36.1
126			砕片	17	14	7	4	0.3
127		接 21-3	砕片	17	42	20	12	16.9
128		接 21-1	砕片	17	24	47	15	12.0
129			砕片	17	16	11	6	1.0
130			砕片	17	32	49	11	19.8
131		接 21-2	砕片	17	22	36	8	5.2
132			砕片	17	36	19	14	9.2
133		接 20-3	砕片	17	57	31	27	72.5
134			砕片	17	19	13	3	0.8
135		接 24	砕片	17	58	38	10	11.3
136			砕片	17	19	15	7	2.2
137		接 20-4	砕片	17	42	22	10	8.5
138		接 20-5	砕片	17	42	64	13	26.3
139			砕片	17	26	40	13	13.1
140		接 0-3	砕片	17	32	15	6	3.1
141			砕片	17	55	38	9	29.5
142		接 0-2	砕片	17	27	39	4	3.0
143			砕片	17	30	32	12	9.1
144		接 0-1	砕片	17	35	21	11	6.8
145		接 20-1	砕片	17	24	48	9	6.6
146			砕片	17	24	24	8	3.0
147			砕片	17	26	12	4	1.3
148		失	遺					
149		接 0-2	砕片	17	29	26	11	6.9
150			自然磨	22	37	10	10	4.3

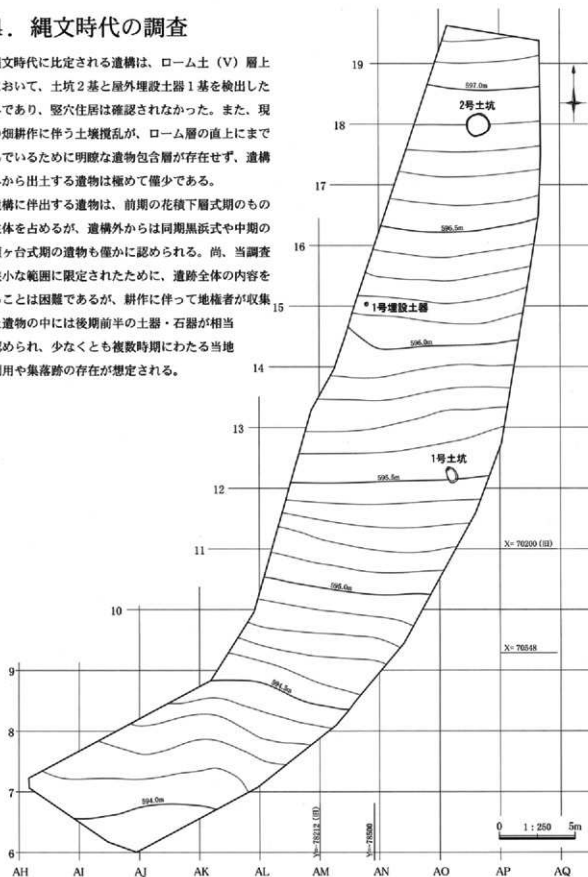
● 石材コードに対応する石材名は 1 2 8 頁石材コード一覧表に示す。

取上 番号	掲載番号	採合番号	原種	石材 コード	大きさ (cm)			重量 (kg)
					長さ	幅	厚さ	
151		採3	面片	17	60	51	21	61.3
152		採3	面片	17	33	18	9	4.6
153		採3	面片	17	25	17	7	2.9
154			面片	17	41	30	8	8.8
155	第13図24	採21-4	石積	17	60	58	30	90.7
156		採23	面片	17	18	24	3	1.3
157			砕片	17	7	5	3	0.1
158		採19-1	砕片	17	40	17	11	6.8
159		採16-4	面片	17	20	34	13	8.8
160			面片	17	15	20	2	0.7
161	第13図30	採16-3	石積	17	43	32	19	22.6
162			面片	17	17	24	4	1.3
163			砕片	17	12	16	6	1.0
164	第9図7	ナイフ形	17	30	20	7	4.4	
165		採23	砕片	17	17	33	5	2.1
166			砕片	17	18	18	3	0.8
167			面片	17	31	26	8	5.1
168			砕片	17	45	35	10	12.6
169			砕片	17	11	16	5	0.5
170	第11図17		面片	17	47	31	7	12.0
171			面片	17	16	34	6	2.4
172			面片	17	49	45	9	25.4
173	第14図33		石石	22	227	185	92	338.0
174			面片	17	22	25	4	2.1
175			面片	17	13	23	5	2.1
176	採10-2		面片	17	50	36	7	24.0
177	採9-3		面片	17	31	41	1	12.2
178	採2		面片	17	42	18	1	5.7
179	採20		面片	17	21	24	4	2.6
180			面片	17	16	17	4	1.0
181	採28-2		砕片	17	16	20	4	1.0
182	採28-4		面片	17	34	33	7	6.3
183			面片	17	9	9	3	0.2
184			砕片	17	9	13	3	0.2
185			面片	17	12	8	4	0.3
186			砕片	17	28	14	6	2.9
187			砕片	17	5	8	3	0.2
188			砕片	17	28	13	8	2.7
189			砕片	17	24	15	8	2.4
190			砕片	17	8	7	3	0.1
191			砕片	17	30	22	6	2.8
192	採2		砕片	17	25	10	4	1.5
193	採11-1		砕片	17	44	27	7	11.6
194			砕片	17	10	6	2	0.1
195	採2		砕片	17	30	12	6	2.1
196	採2		面片	17	44	37	8	8.0
197			砕片	17	28	13	9	2.1
198			面片	17	9	14	1	0.2
199			砕片	17	8	5	2	0.1
200			砕片	17	9	7	2	0.1
201			砕片	17	17	14	2	0.4
202			砕片	17	20	25	6	2.2
203	第13図28	採1-2	石積	17	83	67	23	81.4
204			砕片	17	9	15	6	0.5
205			砕片	17	16	9	3	0.4
206			砕片	17	8	6	1	0.1
207		採11-2	砕片	17	35	20	8	4.4
208		採11-1	砕片	17	22	31	7	7.0
209			砕片	17	7	9	1	0.1
210			砕片	17	11	23	4	0.9
211		採20-3	砕片	17	11	21	5	1.0
212			砕片	17	12	9	2	0.2
213			砕片	17	18	20	8	3.2
214			砕片	17	21	46	9	7.5
215			砕片	17	20	11	4	0.6
216			砕片	17	17	14	5	0.9
217	第9図8		石積	17	60	53	14	49.4
218	第13図27		石積	17	49	31	20	41.4
219			砕片	17	23	21	8	3.6
220			砕片	5	21	29	6	3.3
221		採19-2	砕片	17	45	31	14	14.2
222		採19-2	砕片	17	48	44	22	34.5
223		自然産	22	5	4	2	0.1	
224			砕片	17	22	34	7	3.8
225			砕片	17	13	11	2	0.5
226			砕片	17	20	33	7	4.0
227			砕片	17	43	36	20	25.8
228	第11図18	採19-1	自然産ある面片	17	37	29	9	8.5
229			面片	17	18	13	4	0.8
230			面片	17	28	21	8	3.7
231			面片	17	86	48	19	73.9
232	第13図31		石積	17	43	41	23	40.0
233			面片	17	27	27	9	4.6
234	採11-3		砕片	17	42	35	9	15.2
235			砕片	17	30	28	12	10.1
236	採30-2		砕片	17	32	15	6	3.1
237		天然産	22	53	41	28	85.4	
238	採30-3		面片	17	38	35	8	8.8
239			面片	17	39	33	7	11.8
240	第9図5	採1-1	ナイフ形	17	26	27	8	6.9
241			面片	17	35	28	11	6.1
242	第10図11		使用痕ある面片	17	43	39	9	14.8
243		採9-1	面片	17	56	62	21	49.9
244		採29-1	砕片	17	49	22	9	10.7
245			面片	17	30	22	9	6.7
246			砕片	17	32	15	6	3.1
247			面片	17	19	48	13	9.6
248	第14図35		天然産石	22	105	90	66	760.5
249	第9図6	ナイフ形	17	39	20	9	8.8	
250			砕片	17	32	25	11	7.9
251		採14-1	面片	17	22	17	10	4.1
252	第12図23	採19-3	石積	17	49	87	35	202.8
253		採14-2	面片	17	45	35	17	22.3
254		採15	砕片	17	41	25	15	8.2
255		自然産	17	33	21	8	6.1	
256	採15		砕片	17	32	45	9	9.3
257	第12図22		石積	17	62	49	33	161.3
258	第13図25	採5-4	石積	17	67	71	24	93.6
259	第14図36		石石	22	250	190	74	648.0
260			砕片	17	16	5	5	0.5
261			砕片	17	15	17	8	1.8
262			砕片	17	22	15	9	2.2
263			面片	17	22	16	3	1.3
264			面片	17	46	38	18	28.7
265			砕片	17	18	25	5	2.7
266			面片	17	13	23	3	1.7
267			砕片	17	27	14	7	3.2
268			面片	14	25	19	5	1.9
269			面片	17	39	27	11	5.7
270			面片	17	31	40	12	9.5
271			面片	17	25	14	4	1.6
272		採27	砕片	17	34	22	9	4.2
273	採27		面片	17	14	33	7	3.3
274			面片	17	48	79	10	63.2
275			砕片	17	19	32	7	3.9
276			面片	17	22	11	5	1.3
277			砕片	17	13	11	5	0.8
278			面片	17	32	36	12	14.5
279		自然産	22	20	13	8	2.5	
280			面片	17	26	37	12	11.4
281		自然産	22	43	20	18	11.5	
282		自然産	22	43	31	13	23.8	
283			砕片	17	13	19	9	2.1
284		採7-3	砕片	17	32	23	8	5.3
285		採9-1	面片	17	45	47	14	30.6
286		採7-4	面片	17	38	26	6	5.8
287		自然産	22	49	33	20	27.5	
288			面片	17	11	24	7	0.9
289	採9-3		砕片	17	48	72	20	59.0
290	採9-1		砕片	17	29	56	12	13.3
291	採7-2		砕片	17	77	46	14	43.9
292			砕片	17	36	38	10	13.2
293	採10-1		面片	17	59	34	15	25.0
294	採10-2		面片	17	31	38	11	9.9
295	採13-5		砕片	17	24	28	11	6.7
296			面片	17	15	27	4	1.8
297	採22-1		砕片	5	70	48	17	37.5
298	採22-2		砕片	8	41	35	15	18.4
299			砕片	17	26	20	7	2.5
300	第14図34		天然産石	22	149	69	50	584.1
301	第13図29	採9-2	石積	17	63	56	20	51.8
302		採7-1	砕片	17	30	19	15	11.2

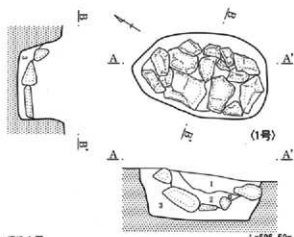
4. 縄文時代の調査

縄文時代に比定される遺構は、ローム土（V）層上面において、土坑2基と屋外埋設土器1基を検出したのみであり、堅穴住居は確認されなかった。また、現代の畑耕作に伴う土壌攪乱が、ローム層の直上にまで及んでいるために明瞭な遺物包含層が存在せず、遺構以外から出土する遺物は極めて僅少である。

遺構に伴出する遺物は、前期の花積下層式期のものが主体を占めるが、遺構外からは同期黒浜式や中期の五領ヶ台式期の遺物も僅かに認められる。尚、当調査は狭小な範囲に限定されたために、遺跡全体の内容を知ることは困難であるが、耕作に伴って地権者が収集した遺物の中には後期前半の土器・石器が相当量認められ、少なくとも複数時期にわたる当地の利用や集落跡の存在が想定される。

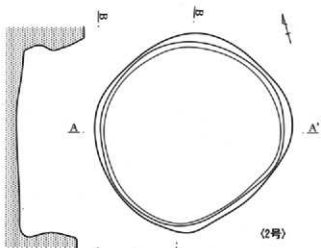


第25図 縄文時代の遺構配置



埋設土層

1. 黒色土 (10YR2/1) を主体にロームブロック 10% 混入。少量の炭化物粒と浅間C軽石を含む。
2. ロームブロックを主体に黒色土 (10YR2/1) が 40% 混入。他は 1 層に類似。
3. ロームブロックを主体に黒色土 (10YR2/1) が 10% 混入。締まり強く、粘性を持つ。



埋設土層

1. 黒色土 (10YR2/1)。現地耕伴の擾乱層で、I 層に相当。
2. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体にロームブロック 20% 混入。少量の炭化物・As-YP を含む。
3. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体にロームブロック 40% 混入。多量の炭化物・As-YP を含む。

4. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体にロームブロック 5% 混入。中量の炭化物・As-YP を含む。遺物出土の最多層。
5. 3 層に類似。
6. ロームブロックを主体に黒色土 (10YR1.7/1) 20% 混入。

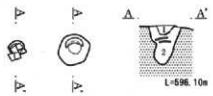
(1) 土 坑

1・2号の各土坑は、相互に南北方向に約20mの間隔を置いて存在するが、その平面形状や埋設土の状況は同一ではなく、性格を違えんと考えられる。各土坑の内容は、以下の通りである。

1号土坑 長径110cm、短径57cmの楕円形状を呈し、深さ40cmを測る。底面付近には、第1次埋設土(3層)の上位面に沿って長径15cm~30cm前後の19個の垂角礫を敷き詰めるように埋填しているが、組石状の丁寧な配列状態を呈していない。埋設土の堆積状況を観察すると、2層および3層はロームブロックを多量に含み人為的な埋填状況を示しているが、1層はレンズ状に自然堆積している。このことは、土坑の掘り方を掘削した後一旦3層を埋め戻してその上位面に礫を敷き詰め、さらにその上に2層を被覆したことを示している。1層は、その後2層上面が窪地化して、当該部位に自然堆積したと想定される。伴出遺物は皆無であり、当土坑の機能・用途や時期を窺うことは困難であるが、礫の敷設や埋設土の状況から見て、墓的な用途が推定される。また、その時期については、1層が基本層序のII層に類似した浅間C軽石を含む黒色土であることを考慮すれば、弥生時代以降の可能性が高い。

(遺物観察表:126頁、写真:PL15)

(1号層外埋設土層)



埋設土層

1. 黒色土 (10YR2/1)。I層に類似し、浅間Dに似た軽石や炭化物粒を少量含む。
2. 黒色土 (10YR2/1) を主体にロームブロック 30% 混入。他は 1 層に類似。

第 26 図 1・2号土坑と1号層外埋設土層

2号土坑 円形の平面形状を持ち、元来は開口部径が底径よりも小さく、壁面がオーバーハングするいわゆる袋状形態の土坑である。規模は、最大径160cm、深さ53cmを測るが、開口部付近は崩落によって径を増し、底径よりも大きくなっている。埋没土は、黒ボク的な黒色土を主体に1~6層がレンズ状堆積しており、自然埋没状況を示している。こうした形態や埋没土の状況から見て、貯蔵穴的な用途が推定される。遺物は4層を中心にして、前期花積下層式の土器片4点、後期堀之内式2点の他に、石匙と加工石器各1点の石器が出土しているのみである。帰属時期を決定するにはやや乏しい遺物量であるが、総体的には花積下層式期に比定される可能性が高い。

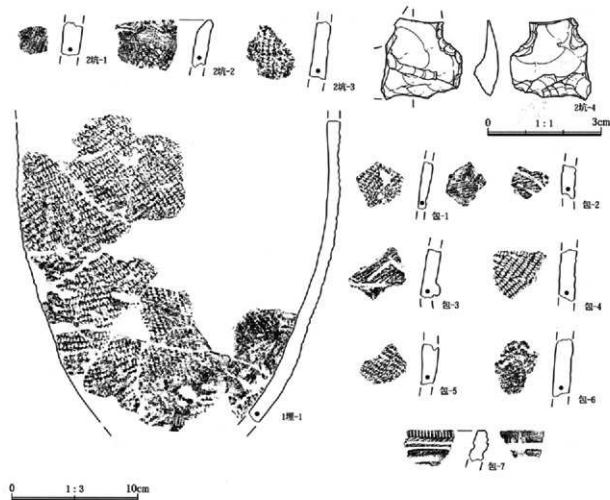
第27図の2坑・1~3は、直前段反摺りの多条LR縄文を施しており、3は斜位施文により原体の条方

向が縦位となっている。ともに、花積下層式に比定される。4は模型の石匙で、左半部を欠損している。

(遺物観察表：126頁、写真：PL15)

(2) 屋外埋設土器

1号埋設土器の1基が検出されたのみであるが、2号土坑から南西へ13m離れて存在している。直径25cm、深さ30cmほどの円筒形状の掘り方を持つ小穴の壁面上位部分を中心にして、口縁部および底部を欠失する花積下層式の尖底深鉢土器の同一大形破片5点(1)を貼付するように配置している。機能・用途については不明であるが、土器片に被熱の痕跡や焼土粒の混在などが認められないことから、少なくとも屋外炉ではないだろう。時期的には先の2号土坑とも共通しており、何らかの関係性を有すると考えられる。



第27図 遺構および包含層の出土遺物

第27図の1埋-1は、直前段反摺りの多条LR縄文を縦・横位に施文して、菱形のモチーフを構成すると推定される。底部付近は、斜位施文により条方向が縦位となる。尖底深鉢の花積下層式に比定される。

(遺物観察表:126頁, 写真:PL15)

(3) 遺構外の出土遺物

現在の畑耕作面での表採品を含め、土器片28点、石器類60点が検出されている。以下、土器と石器とに分けてその概略を記述する。尚、各土器・石器の分類基準や観察一覧については、125・126頁を参照されたい。

A. 出土土器の概要

総数60点の土器片の型式別内訳は、前期花積下層式11点、有尾式1点、兩型式いずれかに帰属する縄文施文の小破片10点、中期加曾川E3式1点、後期称名寺Ⅱ式1点、堀之内Ⅰ式4点である。前期の花積下層式が主体的であるが、中・後期の土器が存在していることから明らかのように、遺跡は複数時期にまたがって展開していたと言える。

(遺物観察表:126)

a. 前期の土器(第27図包1~包6)

いずれも小破片のために明確に識別することは難しいが、内面に原体条痕を持つ1や1号埋設土器と類似した相貌を持つ4などは、花積下層式に比定されよう。原体は直前段反摺りの単節斜縄文で、横位に施文されている。2・3は、半載竹管による平行沈線で菱形文や窟歯状文が構成されると思われ、有尾式に比定できるだろう。

b. 中期の土器(第27図包7)

口唇部の外縁に刻み目状の短沈線を施し、内面には1条の沈線文が横位に巡っており、五頸ヶ台式に比定されよう。

B. 出土石器の概要

石器類については、削器13点、打製石斧4点、凹み石類4点、石核4点、剥片35点が存在するが、削

器1点、石核3点、剥片全点を除いて図化している。以下、各器種ごとにその内容を記述する。

(遺物観察表:126頁, 写真:PL16)

a. 削器(第28~29図1~12)

不定形の横長や縦長の剥片を用材として、その縁辺部に粗雑な刃部加工を施す一群(1~6)と、刃こぼれ状の使用痕を有するもの(7~12)の二者があるが、基本的には両者ともに類似した部位に機能部を有する。形状による分類では、便宜的に円・縦楕円形状を1類、横楕円形状を2類、台形状を3類、三角形形状を4類、逆三角形形状を5類、縦長長方形形状を6類とした。ただし、素材の剥片形状を大別すれば、2~4類が横長剥片を、1・5・6類が縦長剥片を用いている。また、加工および使用痕の存在する機能部位による分類では、A~Fまで6分類してある。

上記の分類に即して先ず形状を観察すると、1・2類は存在しないが、3・4類の横長剥片が7点(1~3・5・8・11・12)、5・6類の縦長剥片が5点(4・6・7・9・10)となり、前者がやや優勢な状況にある。加工・使用部位による分類では、下縁を刃部とするA類が5点(3・5・8・11・12)、片側縁のB類が2点、両側縁のC類が3点(2・10、4・6・7)、下縁と両側縁のE類やラウンドスクレーパー的なF類が各1点(9、1)で、A類が他を凌駕している。基本的に、横長剥片系では下縁を刃部とするA類が、縦長剥片系では側縁を刃部とするB・C類が多い傾向にある。

石材は、珪質頁岩・黒曜石などが約38%認められるが、他は全て黒色頁岩であり、その多さが際立っている。また、約5割の削器の片面または縁辺に原礫面が残されており、外皮に近い副次的な調整剥片を用いるケースの多いことを示している。

b. 打製石斧(第29図13~16)

新田平林遺跡の分類と共通化する必要のあることから、ここでは短冊形・撥形・分銅形の三形態と、基部と刃部との寸法比率や側縁部の形状を加味して、1~5類に分類した。1類は基部・刃部幅比が1:1.5未満の短冊形、2類は同比が1:1.5以上の撥形、3類は同比が1:1.5以上で両側縁部が緩く湾曲する撥形、

4類は挟入が浅い分銅形、5類は挟入が深くノッチ状となる分銅形である。

当遺跡で認められるのは、2類(13・14・16)と1類(15)のみであるが、それらの刃部形状は直刃(16)と円刃(14・15)とに分かれる。打製石斧の製作技法には、前期前半における水平回転技法と同期後半の諸磯b式期以降の垂直打撃技法の存在することが指摘されている(大工原:1998)。当遺跡の資料には、水平回転技法による16と、垂直打撃技法による13~15のような両技法が存在しており、时期的に新旧段階のものが混在していると考えられる。また、前者の場合は片面からの調整加工が行われ、後者は両面加工と共に側縁部が刃つづぶしの階段状剥離となる点が特徴的である。素材の面では、幅広の大形素材剥片の打点部を長軸に対して斜め上方あるいは横位に置いて加工してゆく場合が多い。

15・16の完形品で見える大きさは、長さ11~13cm、重さ170g前後を測る。石材は、黒色頁岩が75%を占めており、「打製系列」における同石材の卓越した状況を示している。

c. 石核(第30図17)

4点の石核の石材は、黒色頁岩3点、黒曜石が1点であり、黒色頁岩の卓越性が窺える。先にも見てきたように、黒色頁岩は、削器や打製石斧などの「打製系列」の中心的な石器母材であり、ともに整合性のある傾向と言えよう。また、当遺跡から黒色頁岩の原産地である赤谷川中流域とは、直線距離にして約10kmと近接しており、こうした点も黒色頁岩が主要石材となる背景の一つであろう。17は厚さ8cmの扁平な河床礫を利用して、最大長が10cmに満たない小形の横長剥片を作出している。その大きさから見て、石鎌・石匙・石錐などの小形石器の素材剥片の作出を意図したものと考えられる。

d. 剥片

図としては掲載していないが、素材・調整剥片を含めて総数34点が存在する。石材別の内訳は、黒色頁岩28点、黒色安山岩6点となっている。黒色頁岩が主体を占める点は、先の「打製系列」の石器石材や石

核石材のあり方と軌を一にしている。剥片の平均的な大きさと重量は、長径36mm×短径35mm・14gであり、小振りな剥片類が主体を占めている。

e. 凹み石類(第30図18~20)

片手で掌握できる大きさと、円形や楕円形状を呈する扁平な河床礫を素材として、その礫面に使用による窪み穴や磨り面(摩耗痕)を有するものを一括した。同一個体において、窪み穴・敲打痕・磨り面などの使用痕が併存するのが当該石器の特徴と言える。こうした使用痕が、一連の作業工程の中で複合的に形成されていくのか、あるいは時間的な前後関係の中で一定の作業順序の基に形跡されるのか、興味深い問題であるが、実際のところ各使用痕の観察から判別することは難しい。

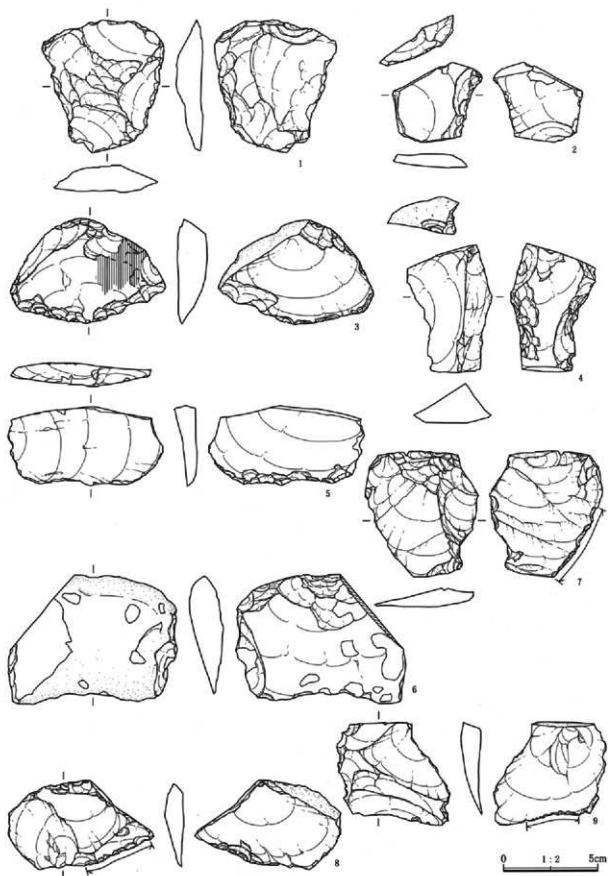
素材形状は、楕円形(18・20)と円形(19)の二者が見られるが、窪み穴と磨り面とが併存するのは19のみである。大きさは長径11~13cm、短径7~9cmで、重量は500~600g前後を計る。石材は、粗粒輝石安山岩(20)、石英閃緑岩(18)などがある。

f. 敲き石(第30図21)

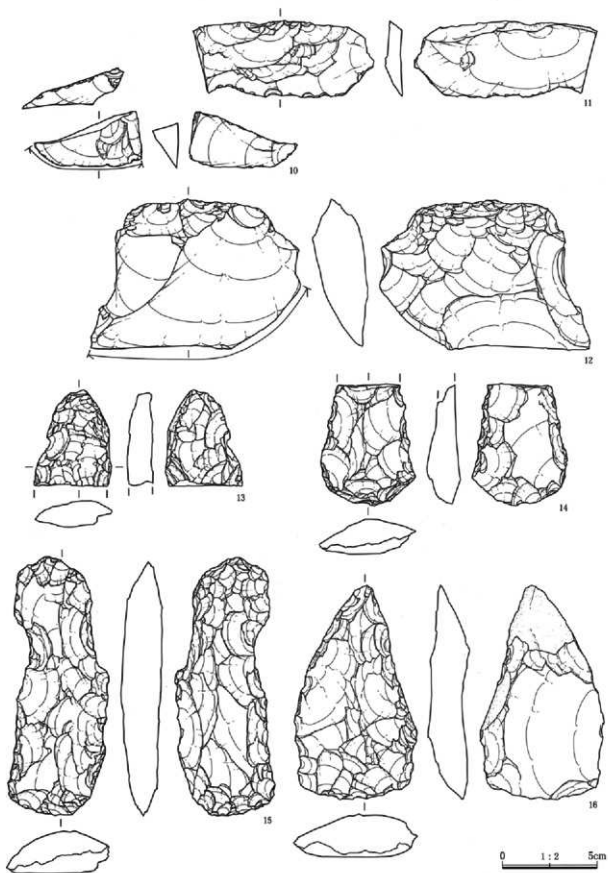
球形状の河床礫を利用して、その周縁部に敲打による使用痕を持つものである。石器製作の荒削り工程での使用を想定させる、いわばハンマーストーン的な石器と考えられる。石材は、粗粒輝石安山岩。

参考文献

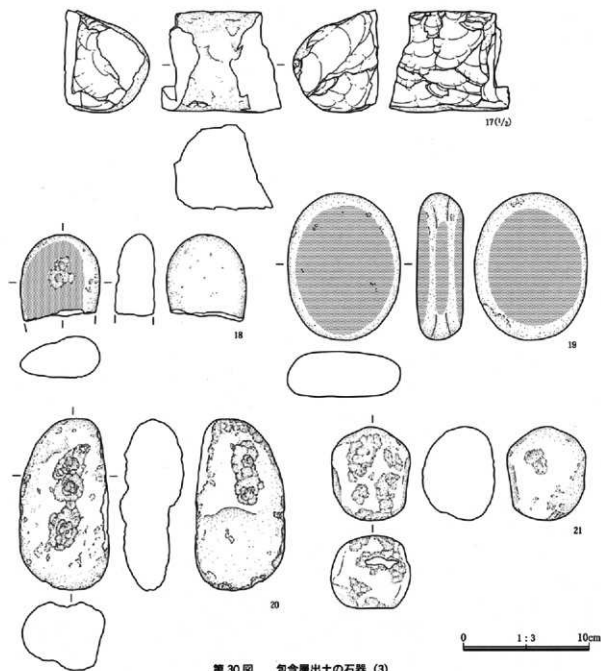
- 大工原 豊 1996「縄文時代 石器」『考古学雑誌』第82巻第2号
大工原 豊 1998「縄文前期中葉から後葉の打製系列(A類・B類)について」『中野谷松原遺跡—縄文時代遺物本文編—』安中市教育委員会



第28図 包含層出土の石器(1)



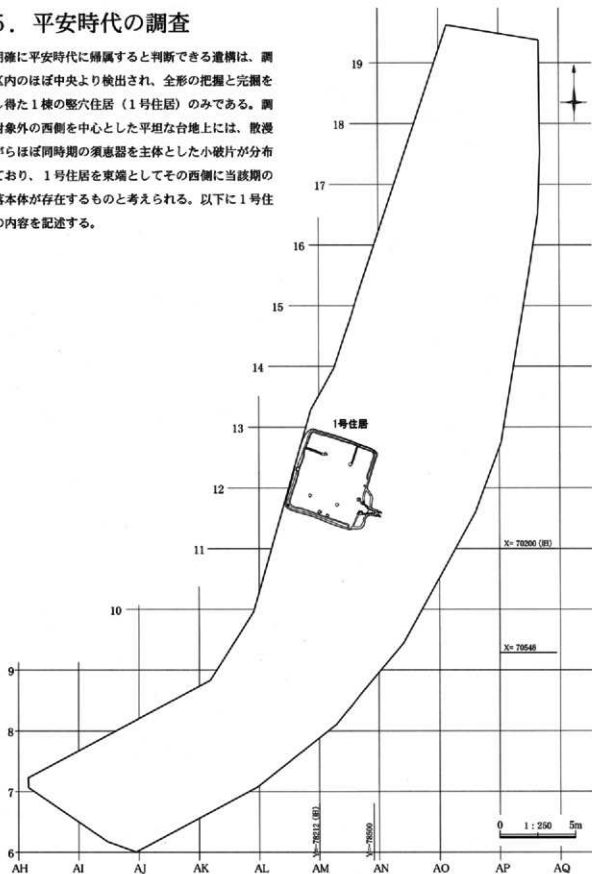
第29回 包含層出土の石器(2)



第30図 包含層出土の石器(3)

5. 平安時代の調査

明確に平安時代に帰属すると判断できる遺構は、調査区内のほぼ中央より検出され、全形の把握と完備をなした1棟の竪穴住居（1号住居）のみである。調査対象外の西側を中心とした平坦な台地上には、散漫ながらほぼ同時期の須恵器を主体とした小破片が分布しており、1号住居を東端としてその西側に当該期の集落本体が存在するものと考えられる。以下に1号住居の内容を記述する。



第31図 平安時代の遺構配置

(1) 竪穴住居

A. 1号住居

位置 AM-12グリッド 写真 PL-17~27
形状 長辺5.6m、短辺5.0mの長方形を呈する。
四隅はほぼ直角で、各辺も直線的かつ垂直に整然と掘り込まれている。

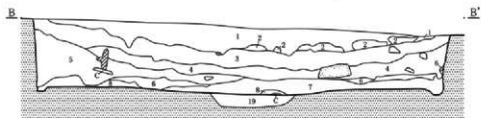
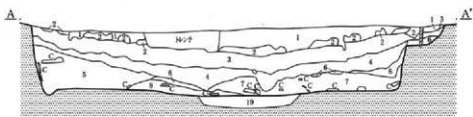
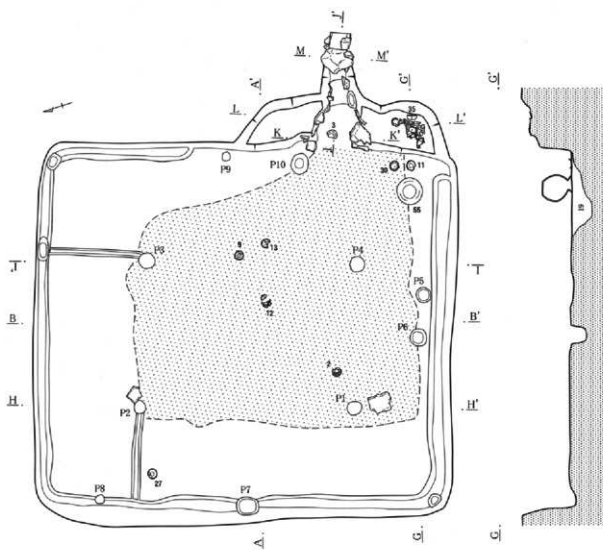
面積 22.63 m² 方位 N-110°・E
床面 III層の黒色土からVII層のローム土にかけて57~88cm掘り込み、床面を構築している。周壁際比べて中央部が5cmほど低くなるが、概して凹凸や傾斜の少ない平坦な床面である。甕手前や主柱穴を結んだ範囲および南側の出入口部(P5・P6)周辺は、叩き床状の堅緻な踏み固めが認められる。また、P2とP3に接続して幅10cm、深さ3cmの間仕切り状の溝が存在するが、西壁から北壁にかけた幅80~100cmのL字状のゾーンからは、タケ亜科を簾状に編み込んだ床材(炭化)が検出されており、これを支えるための「根太材」を埋填した可能性が高い。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、燃焼部は周壁ラインの外側に造り出されている。燃焼部の規模は奥行き55cm、横幅63cm、推定天井高45cmである。残存状態はやや不良であるが、焚き口部から煙道部にかけて左右の両壁面は扁平な安山岩の垂角礫を使用して構築されている。また、焚き口部の両側には、長さ30~40cmの砂岩の載石を立位にして補強材としている。煙道部の規模は確認長65cm、横幅15cm、高さ15cmであり、燃焼部底面から59cm上位に約15度の勾配で掘り込まれている。煙道部の左右両壁面には、安山岩の垂角礫が部分的に残存しており、基本的にその天井部を扁平礫で蓋する組石構造と推定される。ただし、焚き口部から煙道部手前にかけての天井部用石は、竈内には崩落・残存していないことから見て、少なくとも廃絶時かそれ以降に人為的な用石抜き等の破壊を受けていたと考えられる。伴出遺物は僅少であるが、焚き口部近くの燃焼部底面から須恵器環1点(3)が出土している。竈本体の構造とは直接関係しないが、左右両側には旧地表面を約25cm掘り下げた

横幅約80cm、奥行き50cmの棚状のテラスが存在し、その右側テラスからは小形台付甕(35)や坏・甕の破片などが出土した。尚、これら土器の下には炭化した筵状の編み物が残存しており、当時はこのテラス全体にこの編み物が敷かれていた可能性が高い。

柱穴 住居のほぼ対角線上に4本の主柱穴(P1~P4)が存在する他に、南壁中央部際に出入口部に関連すると想定される2本の柱穴(P5・P6)や、周壁面の張り板を押さえる杭的な4本の柱穴(P7~P10)等が存在する。尚、当住居は焼失家屋であるために、屋根材や柱材などの建築材が良好に遺存しており、主柱P1・P2には直径17~18cm、残存長6~9cmの丸材(カヤ)が、P8には一辺10cm、残存長45cmの角材が、またP9には直径6cm、残存長9cmの丸材がそれぞれ床面に屹立していた。主柱P3・P4には、床面上に顔をのぞかせるような炭化材は認められなかったが、ともに空洞化した柱痕の底面付近には燃え残った炭化材の破片が検出されている。空洞の直径は18cm前後であり、P1・P2と同様の太さの丸材と考えられる。各主柱穴の芯々間を連結した形状は、住居の外形とほぼ相似形を呈し、その距離はP1~P2:2.83m、P2~P3:1.98m、P3~P4:2.81m、P4~P1:1.90mである。また各柱穴の掘方の規模(径×深さ)は、P1:32×60cm、P2:33×51cm、P3:34×62cm、P4:33×57cm、P5:20×7cm、P6:23×20cm、P7:24×57cm、P8:27×62cm、P9:25×31cm、P10:23×18cmである。

周溝 竈の敷設された東壁の南半部を除いて全周し、その規模は幅11~25cm、深さ3~8cmである。西壁際の周溝と重複する位置には、第36図のようにその両壁面を被覆するように配置された炭化材が検出されている。この炭化材は、長さ100cm強、幅9~24cm、厚さ3~4cmの板材であり、これを横位に3~4段張り込み、その側面をP8の杭状の柱材(C-150)で支持した状況が観察できるが、おそらくこうした板張りが竈周辺を除く全壁面に敷設されていた可能性が高い。また、この板材と壁面との間には、炭化したススキ属が密集した状態で検出されており、これをサン



L=595.80m
0 1:50 1m

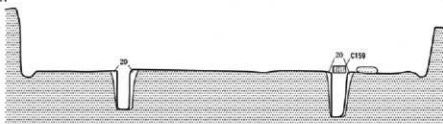
第32图 1号住居(1)

埋設土層

1. 浅間川軽石(A₂K₂)と黒色土(10YR1.7/1)との混土層。
- 1a. 褐色土(10YR4/4)を主体にローム・焼土ブロックが10%混入。
2. 浅間川軽石の純埋積層。
- 2a. 黒褐色土(10YR2/3)を主体にロームブロックが5%混入。
3. 黒色土(10YR1.7/1)、多量の炭化物粒・浅間C軽石と少量の糠名山ニッ岳軽石を含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)を主体にロームブロックが10%混入、多量の焼土粒と少量の炭化物・ニッ岳軽石を含む。
- 4a. 焼土ブロックを主体にロームブロックが30%混入。
- 4b. 黒褐色土(10YR2/3)とローム・焼土ブロックが1:1で混入。
- 4c. 焼土ブロックとロームブロックが1:1で混入。
5. 黒褐色土(10YR2/3)を主体にロームブロックが30%混入、多量の焼土粒・炭化物と少量のニッ岳軽石を含む。

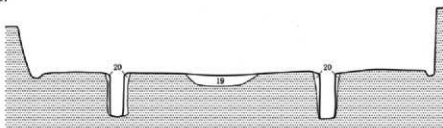
6. 焼土層、被熱により固化している。
7. 黒褐色土(10YR2/3)を主体に黒色土(10YR1.7/1)と焼土ブロックが20%混入、上位に炭化材が集中する。
8. 炭化物の集積層、形状の崩れた炭化材が集中する。
9. 黒褐色土(10YR2/3)を主体に焼土ブロックが30%混入。
10. 焼土ブロックを主体に黒褐色土(10YR2/3)が10%混入、多量の炭化物粒を含む。
11. 9層に類似。
12. 焼土ブロックと炭化物との混土層。
13. 黒褐色土(10YR2/3)を主体にローム・焼土ブロックが10%混入。
14. 覆鋼管の粘土材で、被熱により硬化、赤化。
- 14a. 覆鋼管の粘土材で、被熱していない部分。
15. 炭化物・灰・焼土ブロックの混土層。
16. 黒褐色土(10YR2/3)を主体にローム・焼土ブロックが20%混入。

H.



H'

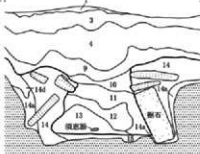
I.



I'

L=595.80m
0 1:50 1m

K.



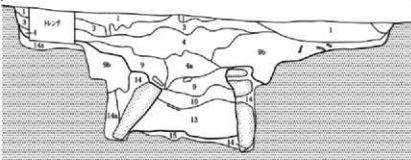
K'

J.



J'

L.



L'

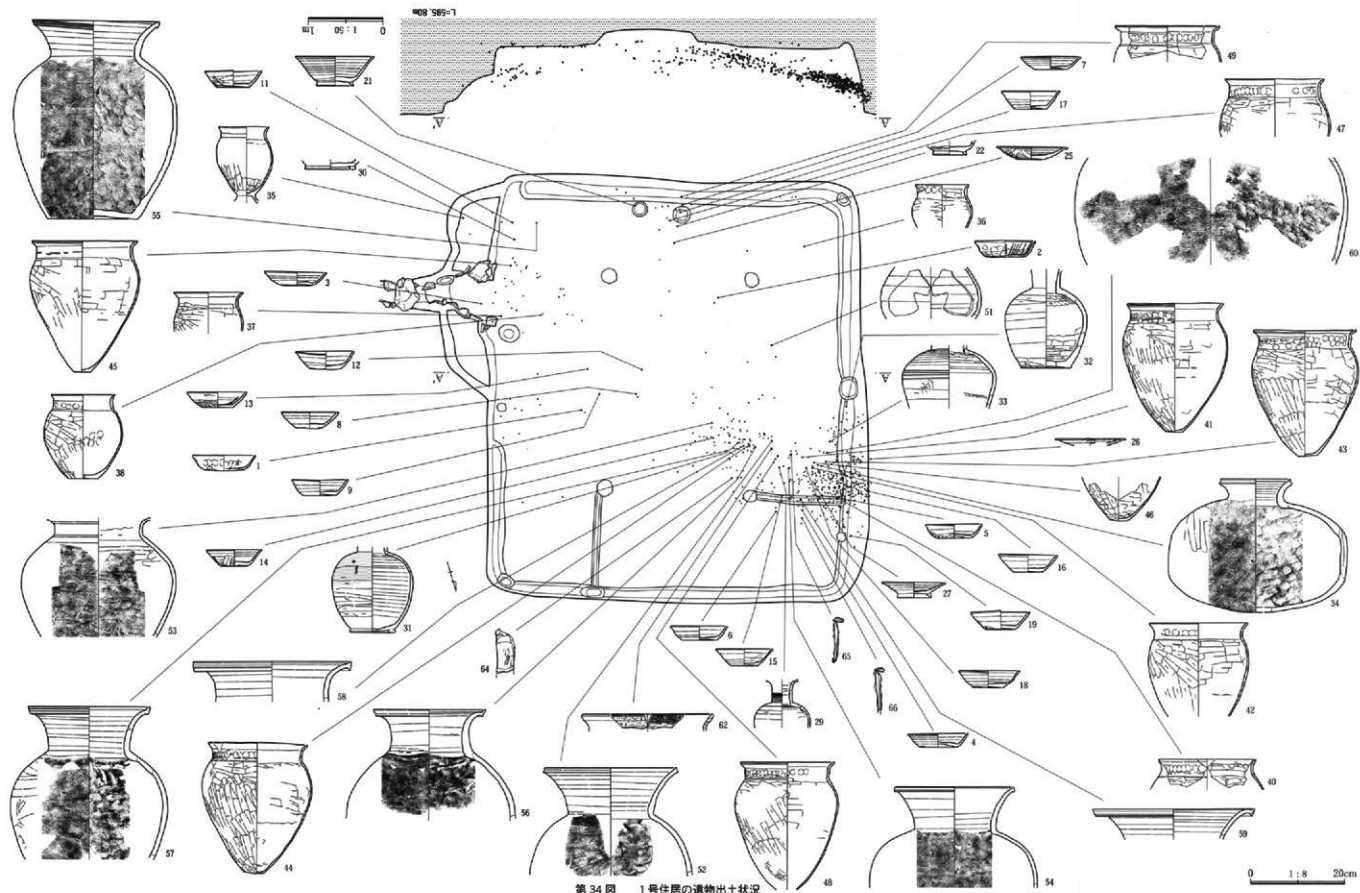
M.



M'

L=595.70m
0 1:25 50cm

第33図 1号住居(2)



第34図 1号住居の遺物出土状況

ドウィッチするように板張りする構造であったと想定される。炭化材の出土状況から見て、周溝はこれら壁材の下端部を埋填するための機能を有していたことが確実であろう。

遺物 床面に密着して出土した確実な伴出土器は、甕の左右全面を中心に分布する坏5点(1・9・11～13)、壺1点(30)、甕2点(55・35)などである。55の須恵器甕は、火災時の被熱により全体にひび割れが入っていたが、部分的に欠損した口唇部を除けば全くの完形品であり、甕右横のコーナー付近に口縁部を下にして倒置された状態で出土した。第38～46図に掲載した遺物の大半は、当住居の焼失・廃絶後に西方から投棄されたものであるが、土屋根の被覆土と想定される4層の直上より出土しており、埋没時における床面直上遺物との時間差はさほど大きなものではないと思われる。総合的な出土遺物の内訳は、須恵器の坏110点・坏蓋1点・柄10点・甕156点・小形甕3点・皿10点・長頸壺30点・瓶47点、土師器の坏2点・甕453点・小形甕26点・小形台付甕11点、灰軸陶器の長頸壺22点、鉄釘2点などである。土師器の点数が多いが、これは器壁が薄く小破片になり易い甕類などの総破片数をカウントしたものであり、実個体数を意味しない。実個体数では、須恵器が7割以上と高い比率を占めている。また、器種的に稀少な灰軸の長頸壺が検出されている点で、注目される。これら土器類の年代観から、当住居の築造は9世紀第3四半期のものと考えられる。

(遺物観察表：127～129頁)

炭化材 当住居は焼失家屋であるが、燃焼しきらずに炭化・残存した建築部材163点が検出されている。その内訳は、角材69点(42%)・板材52点(31%)・丸材30点(18%)・カヤ材等12点(7%)であり、角・板材などの加工材が全体の70%以上を占めている。各材の分布状況や寸法に関しては第35図と146頁第1表に示したが、位置的に樑・梁・桁に相当すると推定される各部材には角材が多用され、周壁を被覆したと想定される板材は比較的周壁に近接して出土しているのがわかる。住居中央部を南北方向の軸線に沿って出

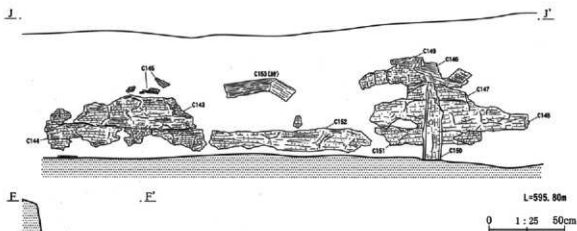
土したC125の角材は、幅17cm、厚さ6cm、残存長159cmの寸法を持ち、屋根の棟材として使用された可能性が高い。同様に、主柱P3とP4を連携する位置に存在するC58の角材は、桁材としての使用が想定される。

尚、これら炭化材と関連すると思われる遺物に、長さ6cm、太さ5mmの断面四角形状の鉄釘があるが、僅か2点のみの出土であることから建築各部材の結合に使用された可能性は低く、他の用途が想定される。

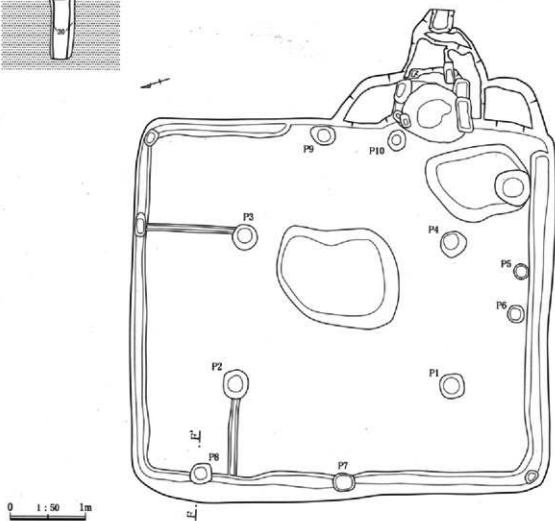
埋没土 総合的には各埋没土層ともにレンズ状に堆積し、自然的な埋没状態を示す。最上層(1～2層)には、1128年噴出の浅間柏川軽石(As-Kk)が最大38cm厚で堆積し、廃絶後から同軽石による完全埋没まで約300年間の時間を要したことが判る。注意されるのは、セラミック状に硬化した焼土の6層が、床面より5～20cm浮き上がった位置に堆積し、しかもこの焼土層の上面に比べて下面がより赤色・硬化している点である。これは、同層が下位方向からの被熱で化学変化を起こしたものであることが明らかであり、火災時に屋根などの建築部材の火焰を直接受けて生成されたと考えられる。換言すれば、少なくとも6層は火災時には屋根材を被覆するような形で存在していたことになる。また、6層はロームブロックを多量に含む4・5層の最下面が被熱・焼土化したものと考えることができ、この場合には4～6層までの約10～30cm厚の土が、屋根全体を被覆するような「土屋根」構造を有していたと推定される。

(2) 遺構外の出土遺物

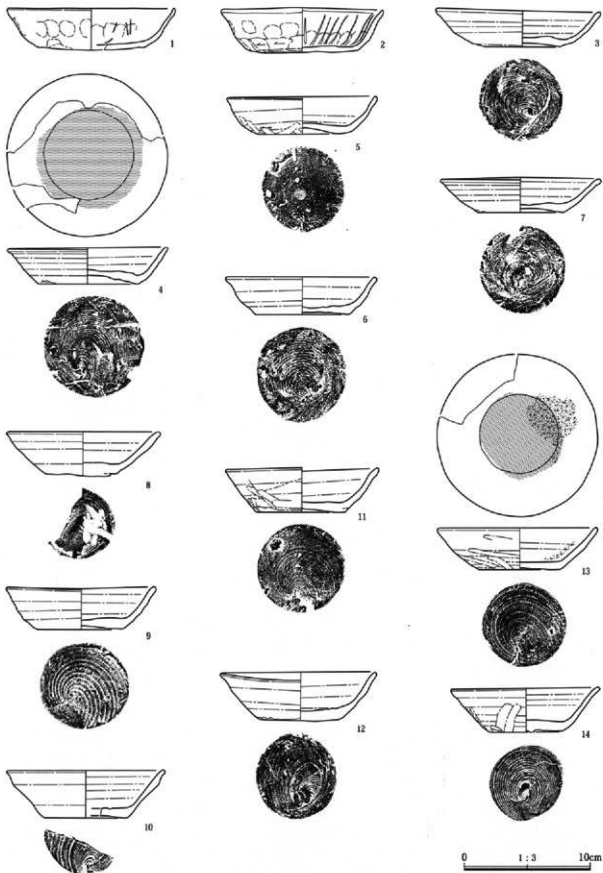
平安時代の遺物包含層は存在していないため、遺構以外から出土している遺物は僅少である。土師器片16点、須恵器片5点が存在するが、いずれも小破片であるために図化は行わなかった。散漫ではあるが、発掘調査区域外でも須恵・土師器片の分布が認められ、当該期の遺構の広がりが想定される。



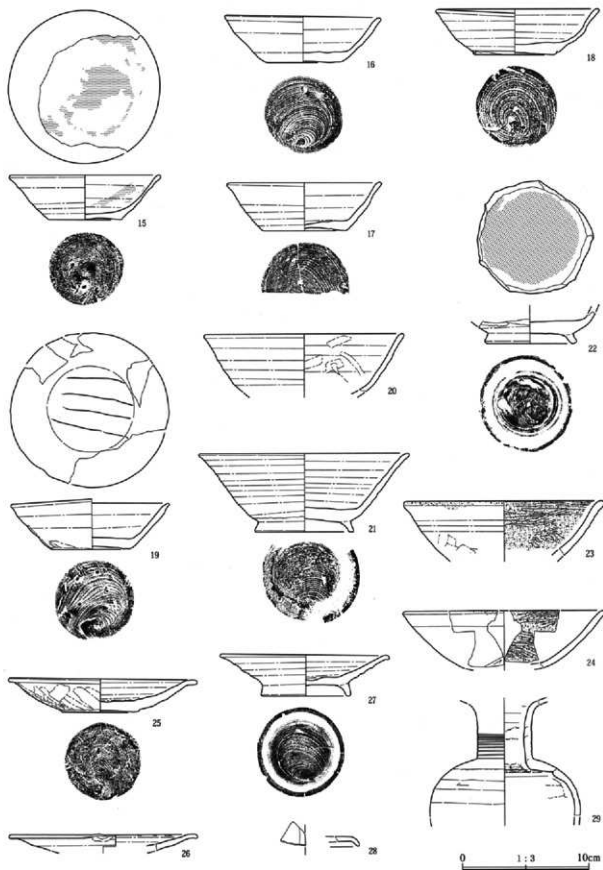
第36図 1号住居の炭化材出土状況(2)



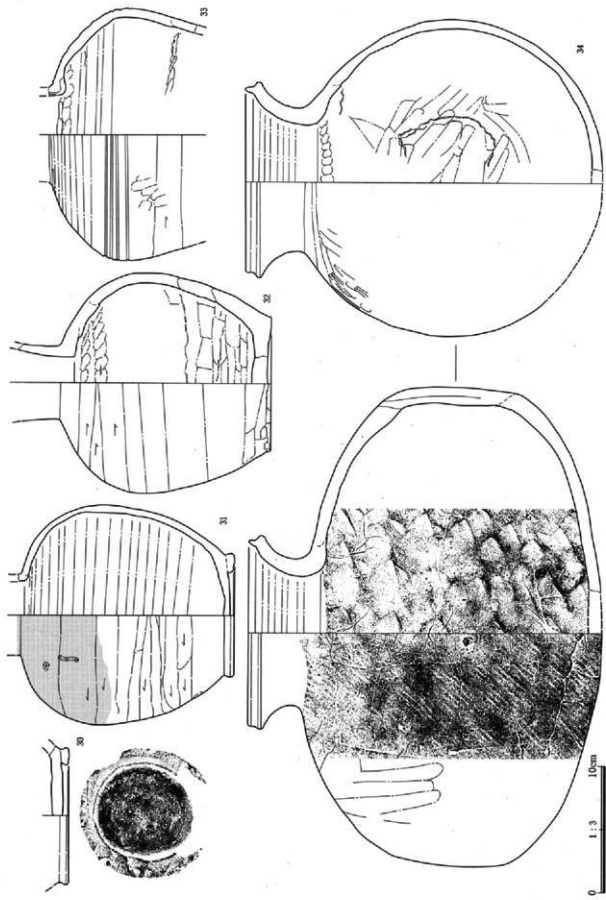
第37図 1号住居の掘り方



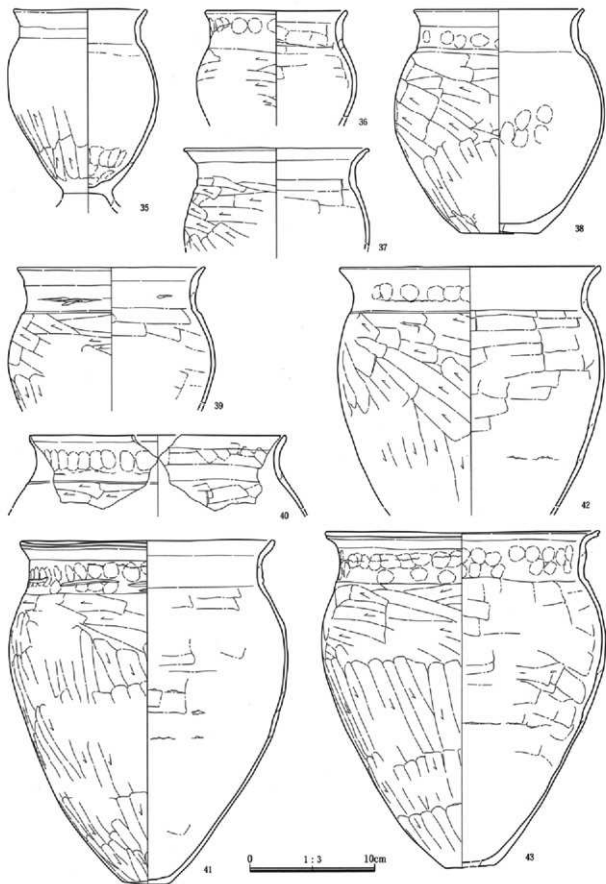
第38图 1号住居出土遺物(1)



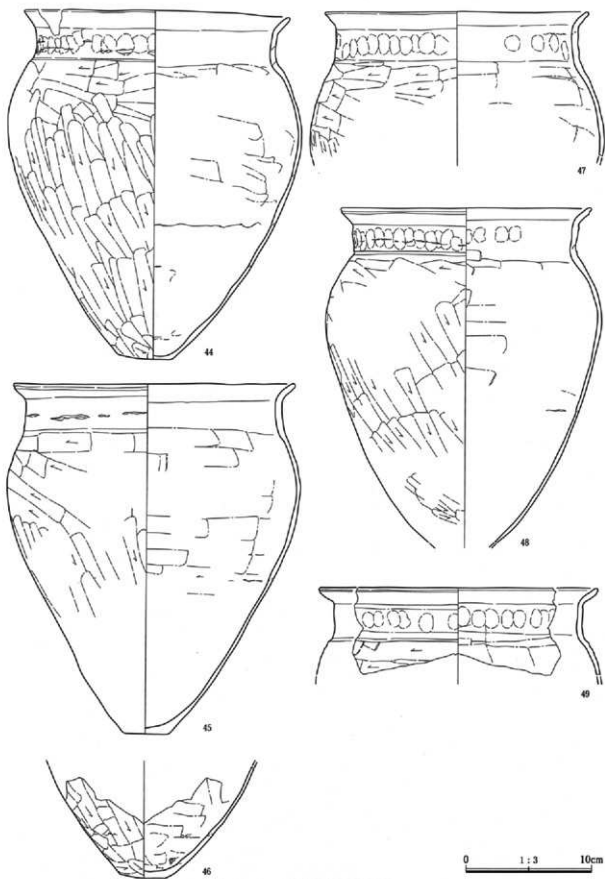
第 39 图 1号住居出土遺物 (2)



第40圖 1号住居出土器物(3)



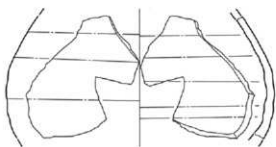
第41图 1号住居出土遺物(4)



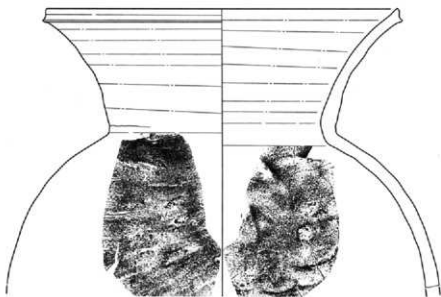
第42圖 1号住居出土遺物(5)



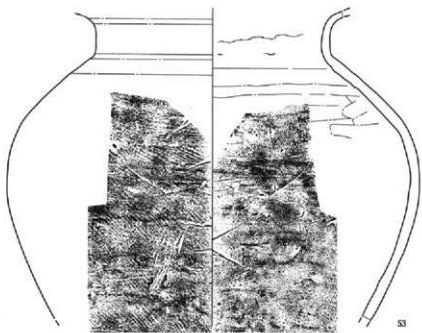
90



91



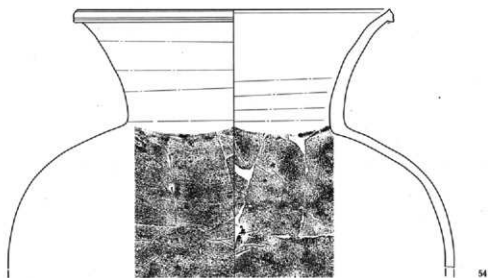
92



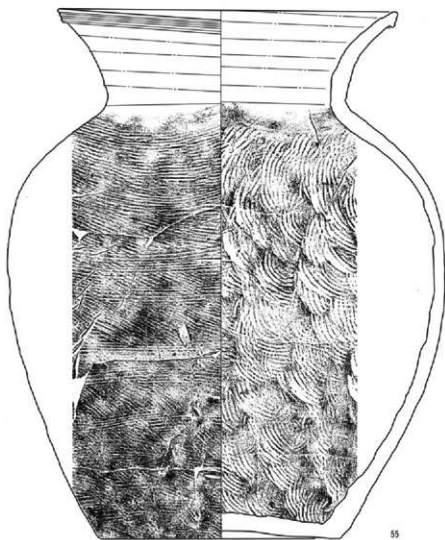
93

0 1:3 10cm

第43图 1号住居出土遺物(6)



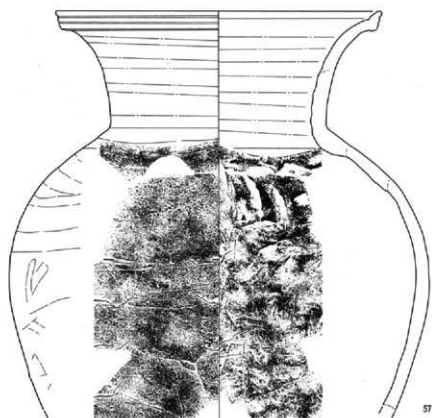
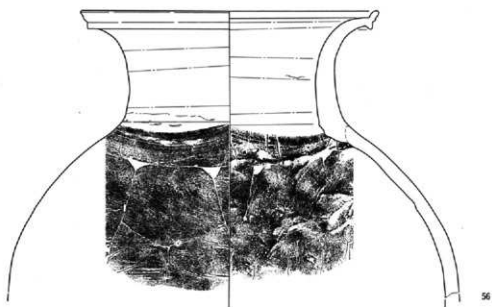
54



55

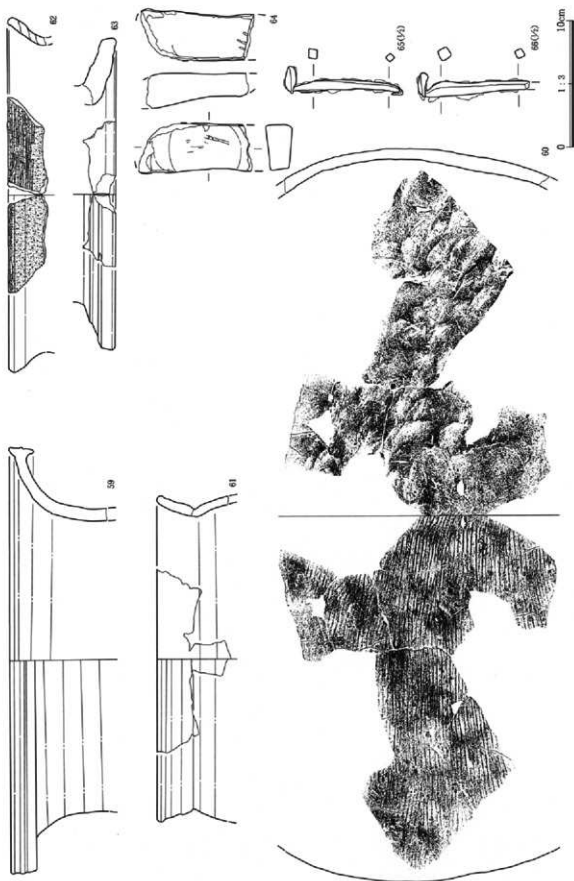
0 1:3 10cm

第44圖 1号住居出土遺物(7)



0 1:3 10cm

第45图 1号住居出土遺物(8)



第46図 1号住居出土遺物(9)

6. 近世以降の調査

(1) 溝状遺構

段丘の崖線と平行して南北に走る1・2号溝と、それらにほぼ直交する3号溝の3条が検出された。各溝の掘り込み面は、I層の下位に存在するが、調査の都合上、V層のローム土上面にて確認・調査した。各溝状遺構の埋没土中には、流水の痕跡を示す砂層やラミナ状の堆積は見られないことから、少なくとも用水路のような通水を目的とした遺構ではないと推定される。

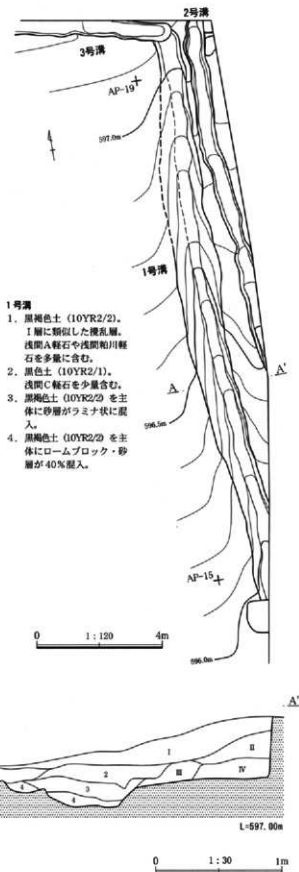
これら溝状遺構の開削時期については、明確な伴出遺物が存在せず、特定することは困難である。ただし、その掘り込みが耕作土のI層下面にあることや、その埋没土中にAs-Kk(1128年)およびAs-A(1783年)などの浅間山系火山灰の純堆積層が認められないこと、さらにその走行が現在の農道とも近接・併行関係にあること考慮すれば、近代～現代にかけた時期が想定される。

1号溝 ほぼ南北方向に直線的に走行する。上幅0.75～1.45 m、底面幅0.35～0.50 m、掘り込み深度0.04～0.28 m。検出長18.5 m。底面は北側から南側へ低下し、比高差1.10 m、平均勾配7%を測る。法面勾配は30～45度。北端にて3号溝により切られている。

2号溝 1号溝の約1 m東側をほぼ並行して南北に走行する。上幅0.30～0.70 m、底面幅0.20～0.50 m、掘り込み深度0.05～0.19 m、検出長11.3 m。

底面は北側から南側へ低下し、比高差0.52 m、平均勾配5%。

3号溝 1・2号溝に直交するように、ほぼ東西に走行する。上幅0.60 m、底面幅0.40 m、掘り込み深度0.08～0.13 m。検出長5.0 m。底面は西側から東側へ低下し、比高差0.12 m、平均勾配3%。東端にて1号溝を切つて掘り込まれている。



Ⅲ 新田平林遺跡の調査

1. 遺跡の概要

当遺跡は、西沢川を挟んで新田西沢遺跡の北方 80 m に位置するが、遺跡内は西沢川に面した 1 区と 110 m 北方に離れた 2 区とに分かれている。1 区は平成 14 年度調査分の 663 m² と同 15 年度調査分の 646 m² の合わせて 1,309 m² の範囲であり、縄文時代後期初頭の配石遺構 3 基や遺物包含層からの出土土器・石器 5,675 点の他に、平安時代の祭祀遺構 2 基が検出されている。2 区は、659 m² の範囲に近世以降の炭焼き窯 1 基が検出されたのみで、縄文時代や平安時代の遺物包含層も検出されなかった。1 区と 2 区の約 110 m 間には、何ら遺構・遺物が検出されていないことから、基本的に当遺跡のエリアは西沢川に近接した 100 m × 100 m の範囲に収斂されると推定される。地形的に見ると、縄文時代後期初頭の配石遺構が確認された 1 区南端の地点は、西沢川による浸食を受けて同区の中でも小段丘状に低平となっている区域であり、配石遺構はこのテラス状の平坦部をねらって造設されている。

各遺構の確認にあたっては、1 区では現耕作土の 40 cm 下位に縄文時代後期の遺物包含層が存在していることから、掘削重機により現耕作土層（Ⅰ層）までを掘削・排土し、その後は人力によりこの遺物包含層（Ⅴ層）を掘り下げて遺物出土状況の記録とともに、平安時代の祭祀遺構や縄文時代後期の配石遺構の確認を行った。最終的な遺構の検出・確認は、縄文・平安時代ともにⅤ層下位およびⅥ層上面である。2 区は、旧河道が入り組んで微地形が存在し、土層の堆積状態も一様ではない。炭焼き窯は 40 cm 厚の現耕作土（Ⅰ層）の直下で確認されたため、この耕作土のみを掘削重機で除去し、他は人力にて調査を行った。この地点では、現耕作土を除去した段階で扇状地礫層（Ⅵ・Ⅶ層）が露出し、炭焼き窯はこの上面に構築されている。

2. 遺跡の基本土層

1・2 区ともに扇状地礫層を基盤としているが、複数の旧河道の存在により、土層の堆積状況は相互に異なっている。以下、現地表面から縄文時代遺構の検出面を含む扇状地礫層までの堆積土層について、調査区別にその概略を記述する。

(1) 1 区の基本層序

南端のテラス部分周辺ではⅠ～Ⅶ層に分層されるが、現水道管理設部分を境にその南側での堆積状況が良好である。縄文時代後期の配石遺構が存在する北側は、畑耕作に伴う攪乱により浅間粕川軽石層（Ⅳ層）などが削平されている。

Ⅰ層：黒色土（10YR2/1）。層厚 20～40 cm を測る。現在の畑耕作土で浅間 A・粕川軽石や小砂礫を多量に含む。

Ⅱ層：黒色土（10YR1.7/1）。層厚 5～15 cm を測る。

Ⅲ層：類似するが、軽石や砂礫の含有量が少ない。

Ⅳ層：浅間粕川軽石と黒色土（10YR1.7/1）との混土層。層厚 20～40 cm を測る。

Ⅴ層：浅間粕川軽石の純堆積層。層厚 10～15 cm を測る。

Ⅵ層：黒褐色土（10YR3/2）。層厚 10～50 cm を測る。

浅間 C・D 軽石に類似した軽石や炭化物粒を少量含む。上半は平安時代、下半は縄文時代の遺物包含層。

Ⅶ層：明黄褐色土（10YR6/8）。層厚 10 cm を測る。ロームの二次堆積土で多量の砂粒を含む。

Ⅷ層：黒色土（10YR1.7/1）。層厚 15～25 cm を測る。多量の浅間系軽石と少量の炭化物粒を含む。

(2) 2区の基本層序

現在の県道渋川新治線に近接する調査区東半部では、現在の耕作土（I層）の直下に扇状地礫層（VI層）が露出するために土層堆積は薄いが、西半部には旧河道の浸食による小さな谷地形が存在し、I～VII層までの堆積を確認することができる。

I層：黒褐色土（10YR2/2）。層厚 30～35 cmを測る。
浅間A軽石や柏川軽石を多量に含む。

II層：黒褐色土（10YR3/2）。層厚 25～35 cmを測る。
浅間柏川軽石を少量含む。

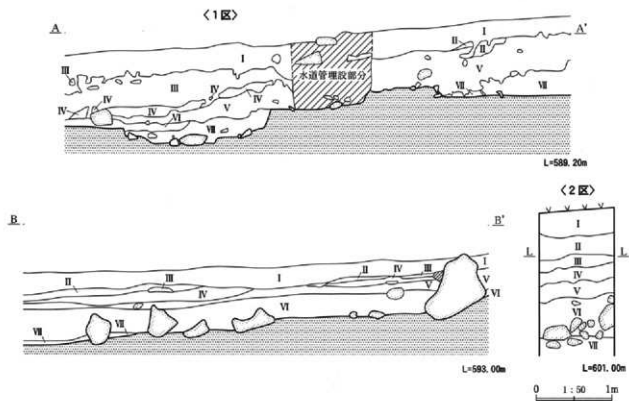
III層：浅間柏川軽石の純堆積層。層厚 10～15 cmを測る。

IV層：黒褐色土（10YR3/1）。層厚 15～20 cmを測る。
浅間C軽石を少量含む。

V層：黒色土（10YR1.7/1）。層厚 20～25 cmを測る。
浅間C軽石と小砂礫を少量含む。

VI層：黒色土（10YR1.7/1）を主体に径 40 cm大の河床礫や砂を 30%前後含む。層厚 50 cmを測る。

VII層：二次堆積ロームと径 30～40 cm大の河床礫や砂との混土層。扇状地礫層である。



第48図 1・2区の堆積土層

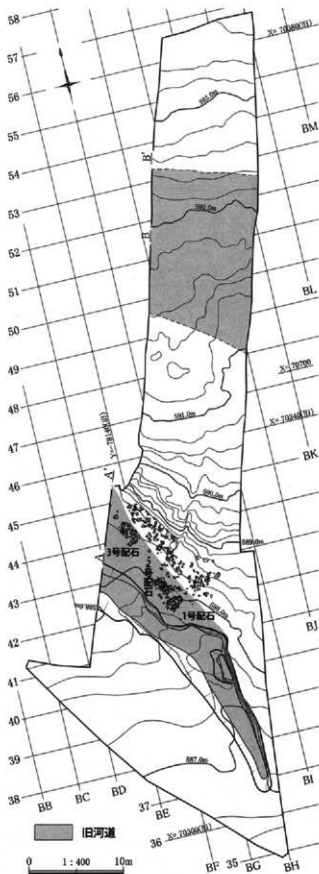
3. 縄文時代の調査

縄文時代の遺構および遺物包含層の分布は、2区までの広がりを持たず、1区の1,309 m²の範囲に限定されている。検出された遺構は、後期の堀之内1式期を中心とした配石遺構3基と、それらの周辺に散在的に分布する列状的な配石のみである。調査面積が狭小なこともあり、数石住居を含む居住施設についてはその存在の有無を確認することはできなかったが、北側に隣接する未調査区域にその存在が想定される。また、配石遺構群の存在する南側周辺域を中心として、層厚約50 cmの遺物包含層が存在し、土器片や石器等が約2,665点出土している。

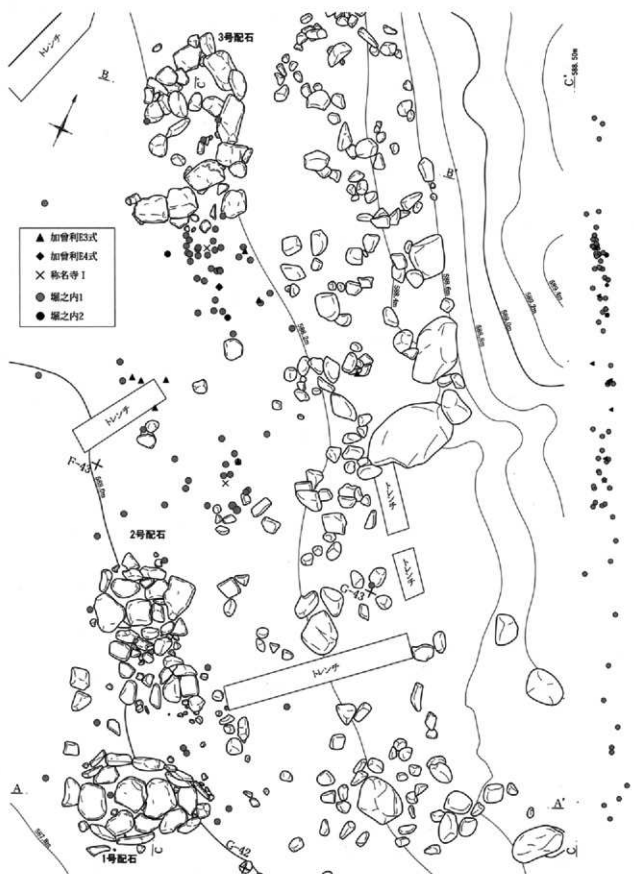
(1) 配石遺構

配石遺構群は、西沢川に面した1区南端の幅約10 mという幅狭なテラス状の平坦部に形成されている。この平坦部は、約3%の緩い勾配で南西方向へと下っているが、その南側には幅2~6 m、深さ20~50 cmの旧河道が南東方向へ走行して平坦面端部を侵食し、さらにこの旧河道の南側および東側には扇状地礫層が露出するような地形的状況が認められる。また、当平坦部の北側には、段丘状に比高差2 mの小規模な崖線が形成されており、配石遺構の立地するテラス状の部分は、いわば崖線と旧河道とで挟まれた狭小な範囲となっている。

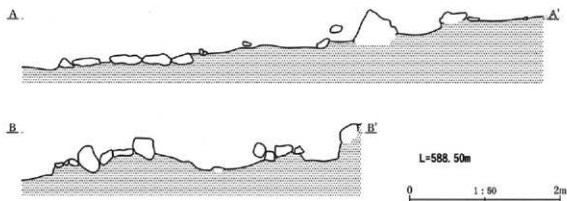
配石遺構群は、明瞭な組石配置を行っている1~3号配石と、その北側に近接する散在的な列状配石とから構成されている。しかし、この列状配石については、崖線に露出した扇状地礫層から崩落・供給された礫が混在し、列状配石の用材との区別を難しくしているために、配列方向や単位という点において不明確となっている。また、これらの配石遺構群は、黒ボク的なV層内の下位部に構築されているため、その掘り方と地山とを識別するのが難しい。このV層の下位には、類似した黒色土のVII層が存在するが、これはより古い旧河道が侵食した窪地に堆積した土層であり、その堆積



第49図 1区縄文時代の遺構配置



第50図 1～3号配石遺構の配置



第51図 配石遺構の垂直断面

時期は少なくとも縄文時代中期を遡る時期が推定される。配石遺構群が、扇状地礫層の露出する地点には構築されていないことを考慮すると、黒ボク土の堆積する地点を意図的に選択していた可能性が高い。

1～3号配石は、1・2号が1m以内に近接し、3号はそれらから4m強ほど北方に離れて位置しているが、全体的に見ると南北方向の旧河道に沿って列状配置されている。また、各配石ともに楕円形状を呈するが、その長軸方向は1号が東西方向であるのに対して、2・3号はそれとほぼ90度ずれた南北方向を基軸としており、配置の「2方向性」を認めることができる。

各配石の機能・用途については、確定することはできないが、組石上面での焚火行為やその下部に土坑状の掘り込みが無いこと、また副葬品的な伴出遺物も存在しないことなどを考慮すれば、墓標あるいは配石墓的な要素は乏しいと言えよう。

構築時期については、明確な伴出遺物がないために断定できない。埋没土中や周辺部からは、中期末葉の加曾利E3式の土器片101点、同4式13点、後期の称名寺I式13点、同II式43点、堀之内1式2,316点、同2式24点などが検出されているが、堀之内1式を除いて他は僅少であることから、配石遺構群の構築は同式期を中心とした時期に比定される可能性が高い。

(遺物観察表：130～134頁、写真：PL29～45)

A. 1号配石 (写真：PL29～31)

3基の配石遺構の中で、最も南東寄りのBF-42

グリッドに位置している。長径30～50cm、短径20～40cm、厚さ10～15cmの扁平な輝石安山岩の直角礫9点を用材として平板的に敷き詰めた後で、同様の石材13点を用いて前者の周縁部を長径160cm、短径90cmの楕円形状に圍繞するように配石している。この外縁部を圍繞する配石は、いずれの用材も横口面を天地置きして1段に連接配置されているが、南東部および西部の2カ所(第52図)で途切れている。また、相互の石材の間隙部を埋めるように、径10cm前後の礫を充填配置している箇所も認められる。長軸の方向は、N70度Eであり、東西方向を基軸としている。

一部用材の表面露出部には、炭化による剥離や赤化などが認められるが、地面に接する裏側部分には全く看取されないことから、石組みを設置した後でその上面において何らかの焚火行為が存在したと考えられる。埋没土が黒色土であることから焼土の痕跡は確認できないが、かなり多量の炭化物粒が含まれており、焚火行為に伴うものである可能性が高い。

掘り方については、V層の黒色土中に存在することから埋没土と地山との区別がかなり難しかったが、詳細な断り調査により観察した中では、外縁部の圍繞配石を安定配置するための深さ5cmほどの僅かな掘り込みが確認されたのみで、土坑状の深い掘り込みは存在しなかった。

伴出遺物については、土器・石器や装身具類を含め明確なものは認められなかったが、第50・55図に示したように埋没土中から堀之内1式の土器片が207

点検出されており、時期的には同式期に比定される可能性が高い。

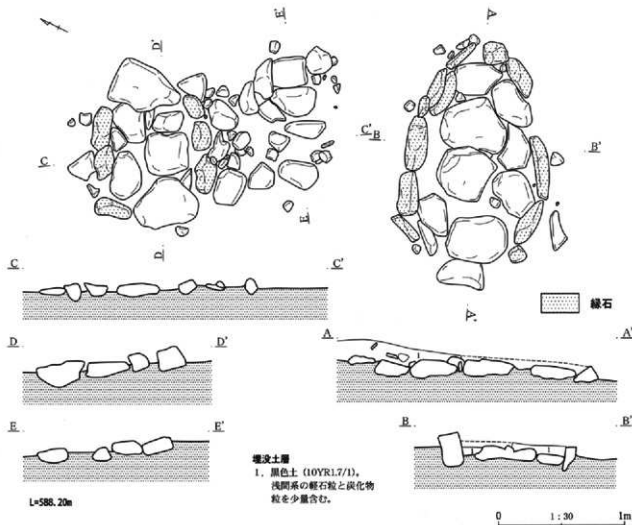
B. 2号配石（写真：P.L. 29～31）

1号配石の西側60cmに近接して位置する。1号配石と類似した大きさの扁平な輝石安山岩の亜角礫を用材とし、長軸を南北方向に持つ長径210cm、短径140cmの楕円形状に配置しているように見える。しかし、組石の状況を詳細に観察すると、北半部と南半部とは異なっており、2つの小配石が眼鏡状に接続して構成されていることがわかる。北半部小配石は、大振りな7個の扁平亜角礫を東西140cm、南北60cmの楕円形状の範囲に敷き詰めた後で、長径20～30cmの小振

りな亜角礫の横断面を天地置きして、北・南外縁部ともに3石を連接配置している。これらの縁石は、外縁全部を圍繞せずに東・西側部分（第52図）が途切れており、1号配石とは若干異なったあり方を示している。

一方、南半部小配石は、北半部よりもやや小振りの扁平な亜角礫11個を東西110cm、南北90cmの方形の範囲に散漫に敷き詰めているが、その外縁部を圍繞する縁石を持たない。

これら北・南半部小配石の構築順序は、両者が接する中央部分で観察すると、南半部小配石の用石の一部が北半部小配石の縁石に乗り上げており、北半部→南半部の順に構築された可能性が高い。また、各小配石



第52図 1区1・2号配石遺構

の長軸方位は、ほぼ同一のN 60～70度Eであり、1号配石とも近似している。ただし、北・南半部小配石を一体のものとした場合には、その主軸方位はほぼ90度ずれてN 30度Wとなる。

石材の表面露出部には、1号配石と同様に被熱による剥離や赤化などが認められ、配石構築後に焚火行為が存在したことを窺わせるが、埋没土が黒色土をベースとしているために焼土の痕跡は確認できなかった。掘り方についても1号配石と同様であり、緑石を配置するための3～5cmほどの浅い掘り込みが黒色土中に確認されたのみで、土坑状の深い掘り込みは皆無であった。

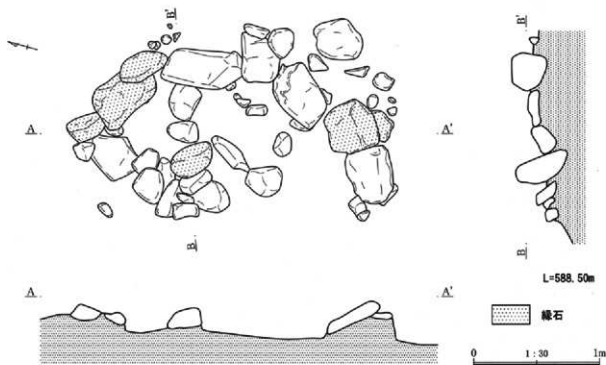
伴出物については明確なものはなく、埋没土中から堀之内1式の土器片1点が検出されている。

C. 3号配石 (写真: PL 29～31)

3基の配石遺構の中で、最も北寄りに位置している。長径40～60cmの扁平な輝石安山岩の亜角礫20点ほどを用材として、長軸を南北方向に持つ長径260cm、短径140cmの楕円形状に配置している。ただし、これらの用材は、緑石的に楕円形配置されており、1・2

号配石のような緑石内側への敷き石は認められない。また、その配置を詳細に見ると、基本的に各垂角礫の横口面を天地置きして連接配置したものが、何らかの理由で配石の内側へと求心的に倒れ込んだ状況が観察できる。特に、北半部の緑石では、相互に重畳しながら転倒した様子が窺える。その他の石材配置で注意されるのは、長軸方向の約2/3の位置で南北に区画するような石列が存在する点である。2号配石で見られたような2つの小配石が接続したのではなく、大きな楕円形配石の中をさらに小さく区画する意識が備った結果と考えることができよう。緑石状の配列は、西側部分の約100cmの間が欠落しているが、全体的な配列に乱れもあることから、後世での攪乱による抜去の可能性もある。主軸の方位については、1号配石とはほぼ90度北側にずれてN 10度Wとなる。

石材の表面露出部には、1・2号配石と同様に被熱による剥離や赤化などが認められ、配石構築後に焚火行為の存在したことを想定させるが、焼土の痕跡は確認できなかった。掘り方については、調査時にその確認面を下げ過ぎてしまったために、緑石を配置するための掘り込みの有無を確認することができなかった



第53図 1区3号配石遺構

が、配石下に土坑状の掘り込みが存在しないことは確認できた。

伴出遺物については、用石の一部に凹み石が存在した他は明確なものはない。埋没土中からは、堀之内1式の土器片2点が検出されている。

D. 列状配石

前述したように、この列状配石は南北方向に列状配置された1～3号配石の東側1mに隣接して存在しているが、崖線に露出した扇状地礫層から崩落・供給された礫が多数混在することや、後世の擾乱の影響による散在的な配石状況ということもあり、明確な列石構成やその単位を把握することは困難であった。総体的に見れば、先の配石遺構に見られるような扇平礫ではなく、径20～50cmの大小の不定形な亜角礫約200個を用いて、北西から南東方向へと長さ13m、幅2mの規模で帯状に配石している。この礫群中には、組石遺構や立石などの存在を確認することはできなかったが、BF-43グリッド付近に露出した扇状地礫層内の直径1mほどの大形礫を、その配石の一部に取り込んでいる可能性も窺える。また、BF・BG-42やBF-44グリッド内では、部分的ながら直線的な列状配置も認められる。しかし、各礫の配置は相互に広口面や小口面をきちんと揃えての連続的なものではなく、「乱石配列」とも言うべき不規則な状態であった。また各礫の表面には、1～3号配石遺構で認められたような被熱の痕跡は看取されなかった。正確を期するならば、配石遺構としての認定を避けるべきと思われる。

出土遺物としては、BF-43グリッドで自然の棒状礫を使用した石棒破片1点が礫群内に挟在する状態で確認されているが、その他にBF-43～44グリッドを中心域にして堀之内1式を主体とした土器片約1,000点と石器類44点（打製石斧2点、削器9点、加工1点、石核3点、磨り石・凹み石類4点、剥片）が検出されている。

(2) 配石遺構と包含層の出土遺物

前述したように、配石遺構群に明確に伴う遺物は僅少であるが、これらの遺構が存在する地点を中心にしたBE～BG-37～45グリッドには、その埋没土を含んだ層厚約50cmの遺物包含層（V層）が存在し、土器片2,167点、石器類101点の総数2,268点の遺物が検出されている。土器片の型式別内訳は、第54図や第1表に示したように、堀之内1式が1,957点で全体の9割を占め、次いで加曾利E3式96点、堀之内2式48点、称名寺Ⅱ式42点、同Ⅰ式12点、加曾利E4式12点の順となる。また、石器の器種別内訳は、削器が21点と最も多く、次いで磨り石・凹み石類が7点、打製石斧3点、加工石器2点、石錐1点、敲石1点、石棒1点の順となる。その他に石核7点、剥片58点等がある。

こうした出土遺物と配石遺構群との関係は、不明確ではあるものの、共時的関係をもつものが多数含まれている可能性が高い。例えば、土器片で見れば、数量的に堀之内1式が他型式を遙かに凌駕しており、確率的には配石遺構群の時期を指示すると考えられる。また、第54図に堀之内1式土器のグリッド別の分布状況を掲載してあるが、BE～BG-41～44グリッドの配石遺構群の上面部を中心に分布しており、先の想定を補完するものと言えよう。同様に、削器を主体とする石器群の分布状況についても第74図に掲載してあるが、やはり堀之内1式土器の分布と類似したあり方を示しており、その大半が配石遺構群に伴うものと推察される。

一方、配石遺構群の立地する当該地点よりも一段上位の段丘斜面（比高差2m）に当たる北側のBH～BK-51～55グリッドでも、土器片2,820点、土製品3点、石器類148点の総数2,971点に及ぶ遺物が検出されている。この地点では、現代の畠耕作に伴う擾乱・削平等もあり、遺構の存在を確認することはできなかったが、やはり層厚約50cmのV層内に前述の遺物が包含されていた。当該地点の土器片は、堀之内1式が1,351点と最多を占め、次いで加曾利E3式

1,286点、同4式116点、称名寺I式35点、加曾利B1式17点、堀之内2式9点、晩期1点、称名寺II式5点の順となる。量的に加曾利E3・4式が堀之内1式に匹敵していることや、加曾利B1式土器が組成する点で、南側の配石遺構群の周辺とは大きく異なっており、時期毎にその占地場所を違えていることが窺える。また、石器の器種別内訳は、やはり削器が35点と最も多く、次いで打製石斧5点、石鏃4点、磨製石斧4点、磨り石・凹み石類が3点、加工石器2点、石棒1点の他に、石核7点、剥片87点等がある。

ところで、北側のBI～BK-54～55グリッド出土

の加曾利E3・4式土器の中には、第57図15・第59図50のように完形に近い状態まで復元できるものもあり、包含層の黒色土中に住居以外の何らかの遺構が存在した可能性も否定できない。

(遺物観察表：130～134頁、写真：PL32～45)

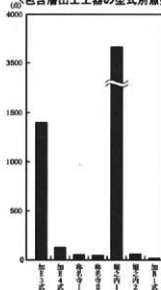
A. 出土土器の概要

前述したように、配石遺構群周辺とその北側地点で出土する土器型式の傾向は異なっている。前者地点では、中期末葉の加曾利E3式96点(4%)、同4式12点(0.5%)、称名寺I式12点(0.5%)、同II式

第 表 包含層出土土器の型式別一覧

	中 期		後 期				総計
	加曾利E3式	加曾利E4式	称名寺I	称名寺II	堀之内1	堀之内2	
合計	1402	130	54	49	3662	60	5374

〈包含層出土土器の型式別点数〉



〈加曾利E3式の分類別点数〉

分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類
合計	492	252	8	577	6	67

〈加曾利E4式の分類別点数〉

分類	1類	2類	3類	4類	5類
合計	18	44	6	46	16

〈称名寺Iの分類別点数〉

分類	1類	2類	3類	4類	5類
合計	10	14	2	26	2

〈称名寺IIの分類別点数〉

分類	1類	2類	3類	4類
合計	13	30	4	2

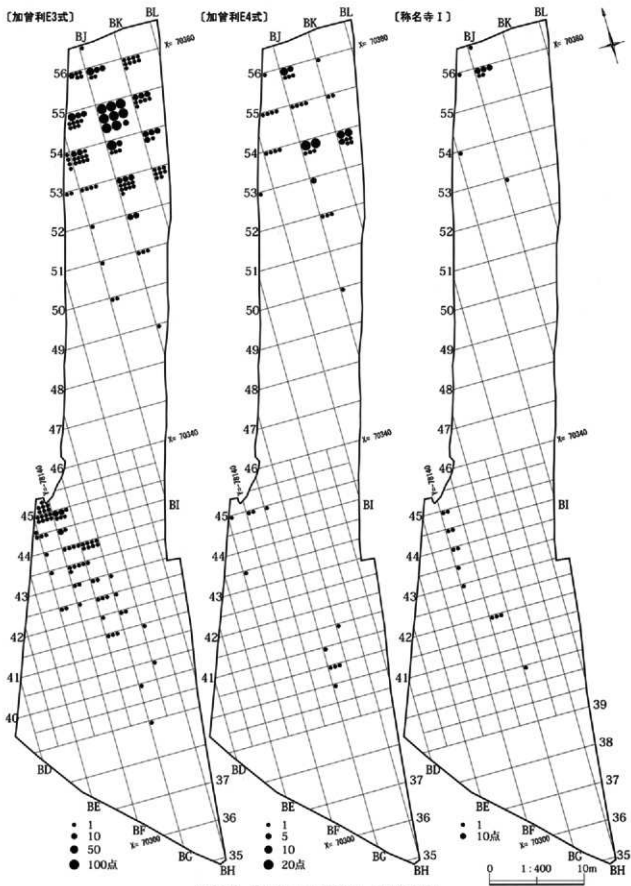
〈堀之内1の分類別点数〉

分類	1類						2類	3類	4類	5類	6類	7類					
	A	B	C	D	E	F						A	B	C	D	E	F
合計	33	48	4	12	1	384	14	64	1	6	249	5	4	2	7	12	12

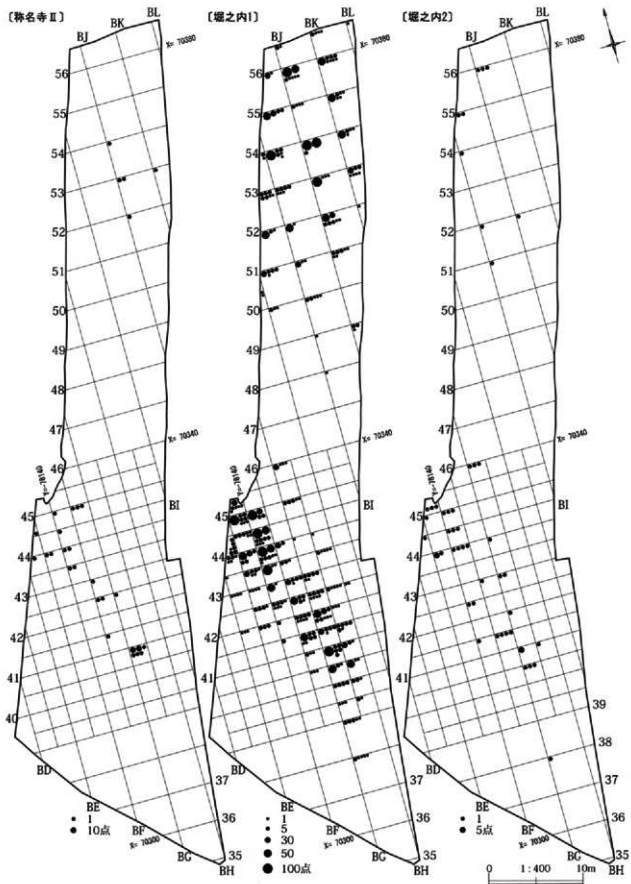
分類	8類	9類				10類
		A	B	C	D	
合計	9	141	286	257	2100	11

〈堀之内2の分類別点数〉

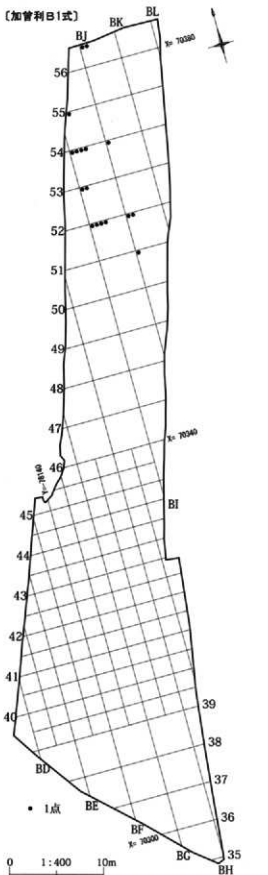
分類	1類	2類
合計	10	50



第 54 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (1)



第55図 包含層出土土器のグリッド別分布(2)



第56図 包含層出土土器のグリッド別分布(3)

42点(2%)、堀之内1式1,957点(90%)、同2式48点(2%)の総数2,167点が出土し、後者地点では加曾利E3式1,286点(45%)、同4式116点(4%)、称名寺I式35点(1%)、同II式5点(0.2%)、堀之内1式1,351点(48%)、同2式9点(0.3%)、加曾利B1式17点(0.6%)、晩期1点(0.03%)の総数2,820点が存在する。以下、その概要を記述する。

(遺物観察表：130～133頁、写真：PL32～41)

a. 加曾利E3式(第57～60図1～63)

総数1402点の土器片は、体部文様と器形により1～6類に分類される。各類の出土数量は、1類が492点(35%)と最多を占め、以下2類252点(18%)、3類8点(0.5%)、4類577点(41%)、5類6点(0.4%)、6類67点(4.7%)の順となる。

文様的には、2類が新しい要素を有するが、他類の中にも古式の様相が認められず、ともに3式終末段階に位置付けられる。縄文はバラエティに乏しく、単節LRが主体を占めている。1・2・9～13は配石遺構群の周辺から出土。

1類(1～34) 幅広の太い沈線により、口縁部には渦巻文の省略化された楕円区画文が、また胴部には平行状や蕨手状の懸垂文が施文される。15の縄文はRLであるが、口頭部・胴部中心・同下半部の各部位に各々異なった原体を使用する。

2類(38～50) 1類よりもやや細い沈線によりU字・逆U字状の区画文が、上下に対向あるいは入り組む構成となる。

3類(51・52) 一对の橋状把手をもついわゆる両耳壺と、口縁部が強く内湾する鉢形を一括した。文様構成は、口頭部に横線を施すのみのものが多い。

4類(53～59) 櫛歯状工具による条沈線を縦位に施す深鉢土器である。文様構成は3類に類似する。

5類 図示をしていないが、全く文様を持たない粗製の無文深鉢である。

6類(35～37・60～63) 1・2類に該当するが、小破片のために分類不能なものを一括した。

b. 加曾利E4式(第60～61図64～82)

総数130点の土器片が存在し、体部文様と器形によ

り1～5類に分類される。各類の出土数量は、4類が46点(35%)と最多を占め、以下2類44点(34%)、5類16点(12%)、3類6点(5%)の順となる。縄文は、3式と同様に単節LRが多い。64・65・68・72・79は配石遺構群の周辺から出土。

1類(64～67) 細目の沈線により、V字・逆V字・渦巻状の区画文を施し、その区画内に縄文を充填する。64のように口縁部に刺突文を巡らせるものもある。

2類(68～78) 微隆起帯により、V字・逆V字状の区画文を施し、1類と同様に縄文を充填する。

3類(79～80) 無文地に微隆起帯の渦巻文を施す。いわゆる瓢形土器である。

4類(81～82) 微隆起帯により文様構成される、いわゆる両耳壺であり、1類に似た文様構成を持つ。

5類 図示していないが、小破片のために分類不能ものを一括した。

c. 称名寺I式(第60～61図83～89)

称名寺I式と併行段階の土器を一括した。総数54点の土器片は、体部文様を基本にして1～5類に分類される。各類の出土数量は、4類が26点(48%)と最多を占め、以下2類14点(26%)、1類10点(19%)、3類2点(4%)、5類2点(4%)の順となる。各類ともに、文様構成の判然としないものが大半を占めている。85・86は配石遺構群の周辺から出土。

1類(83・84) 4単位に付された口縁部の突起下に、ネガティブな縦位のS字状文を描出するもので、胴括れ部の横位帯状文で連繋される。本類は「開沢類型」と仮称されているものに該当する。

2類(85・86) 口縁から体部下半にかけてJ・Y字状の沈線区画文や充填縄文を施すものである。

3類(87) 体部の全面に縄文を施す小形深鉢土器。

4類(88・89) 中期末葉の加曾利E4式や曾利式の文様要素を残した深鉢土器である。

5類 図示していないが、小破片のために分類不能ものを一括した。

d. 称名寺II式(第62図90～98)

I式と同様に、総数49点の土器片の中で文様構成の識別できるものは僅少であるが、体部文様を基本に

して1～4類に分類される。各類の出土数量は、2類が30点(61%)と最多を占め、以下1類13点(27%)、3類4点(8%)、4類2点(4%)の順となる。90～94・96・98は配石遺構群の周辺から出土。

1類(90) 口縁部が外傾気味に開口し、体部の括れが弱い深鉢であるが、縄文を横位施文後に口縁部や体部に幅広い沈線区画文を数段に施す。括れ部には、8字状の貼付文が見られる。

2類(91～96) 口縁部にやや幅広い無文部を置いて鎖状隆帯を巡らせるものである。条線文を縦位に施す93・94と列点文や刺突文を持つ95・96は、本類の胴部破片と考えられる。

3類(97・98) 区画内への充填縄文をもたず、単沈線によるJ字状文などが施されると推定される深鉢を一括した。

4類 小破片のために分類不能無文部破片を一括したが、ここでは掲載していない。

e. 堀之内1式(第62～72図99～330)

3,662点の土器片については、体部文様や器形を中心に以下のように1～10類に分類することができる。各類の出土数量は、文様構成や器形の判別できない無文土器の9D類が2,100点(57%)と最多を占め、以下1類が482点(13%)、6類が249点(7%)、3類64点(1.7%)、2類14点(0.4%)、10類11点(0.3%)、8類9点(0.2%)、5類6点(0.2%)、4類1点(0.03%)の順となる。縄文はバラエティに乏しく、単節LRが主体を占めている。

尚、1～10類については、堀之内1式として分類したが、この中には同2式が混在している可能性もある。特に6類の粗製の無文深鉢土器や9D類については、両式を区別する具体的な特徴に乏しく、ここでは便宜的に堀之内1式に区分した。

1類(99～205) 口頭部を無文帯として、強い括れ部以下の胴部下半に文様帯を構成する鉢形土器であり、単位文様のあり方によりA～Fに6細分することができる。総点数482点の中で最多なのは、文様構成の不明なF類の384点である。次いで、Bが48点、Aが33点、Dが12点、Cが4点、Eが1点となる。

1類における「口縁部裝飾帯」の有無は確定できないが、Fの口縁部破片では約2/3に認められ、基本的な構成要素の一つとして考えることができよう。99～129・131～161・179～188は配石遺構群の周辺から出土。

尚、1A類は「関沢類型」の系統上に位置する「茂沢類型」、1B類は「矢太神沼類型」とそれぞれ仮称されているものである（鈴木：1990・1991）。

A（99～112）：2～3本単位の沈線文により、横位または帯状に連続する渦巻文や横S字文を施す。充填縄文を施すもの（99～105・112）が主体的であるが、沈線文のみのもの（106～111）も存在する。

B（113～130）：2～4本単位の沈線懸垂文を主体として、文様構成するものである。懸垂文は、上端の多重渦巻文を起点として施されるもの（115・119・122・124）や懸垂文間に縄文を充填するものが主体的であるが、縄文を施さないもの（129）も若干存在する。

C（131～133）：口縁部から胴部にかけての垂下隆帯を基軸にして、懸垂文が構成されるものである。隆帯上には棒状工具による刻目文が施され、懸垂文間には縄文が充填されている。

D（134・135）：1本単位の沈線により蛇行懸垂文を施すが、懸垂文間に縄文を充填するもの（134）と、充填しないもの（135）がある。

E（136・137）：横帯状の区画文を構成するものである。小破片のため、縄文施文の有無は確認できない。

F（138～205）：全体の文様構成は不明であるが、1類に分類できる口縁部および胴部破片を一括した。口縁部破片は、「口縁部裝飾帯」を持つもの（138～171）と持たないもの（172～179）があるが、前者が主体的である。「口縁部裝飾帯」は、2本単位の横位沈線文により幅広となるもの（138～142・149～155・163・171）が多く、1本の横位沈線文を施す幅狭なもの（141・143～147・156～162・164～171）は少ない傾向にある。また、裏面に横位沈線文を持つもの（143・163・164・173）もある。胴部下半の有文土器は、充填縄文を持つものが主体的である

が、無施文のもの（185・187・193・195・196・199）もある。200は、縄文施文のみで懸垂文や渦巻文を持たない可能性もある。

2類（206～211）口縁部から胴部下半にかけて、2～5本単位の沈線による懸垂文を施し、その懸垂文間に斜行沈線文を附加して「水」・「米」字状などのモチーフを描くものである。区画内には、縄文を充填している。胴部中位で緩く括れて外傾気味に開口する深鉢土器で、出土数量は14点と僅少である。208～211は配石遺構群の周辺から出土。

3類（212～220）口縁部から胴部下半にかけて、1～2本単位の沈線により、平行懸垂文とともに「J」字文の変形した蛇行状・蕨手状の懸垂文を施す。本類は「下北原式」と呼ばれてきた一群で、基本的に縄文施文は認められない。2類に近似した器形を持つ深鉢土器であり、出土数量は64点である。213～217は配石遺構群の周辺から出土。

4類（221）1類と同様に、口頭部には文様を構成せず、胴部下半にのみ文様を持つ鉢形土器であるが、網取式の影響による器形・モチーフを持つと想定されるものである。221は、口頭部に縄文を施文している。出土数量は1点と僅少であり、221は配石遺構群の周辺から出土している。

5類（222・223）底部から口縁部に向かって外傾気味に開口する、朝顔形の深鉢形盤を持つ。口縁波頂部から胴部中位にかけて隆帯懸垂文を施し、その下端部を横位に文様区画するものである。区画内には、渦巻状の沈線文や縄文が充填される。文様構成の明瞭なものは皆無であるが、222・223ともに刻目を施す縦位の隆帯が垂下している。出土数量は6点と僅少である。222・223ともに配石遺構群の周辺から出土。

6類（224～264）口縁部から底部にかけて、全く文様を持たない無文の深鉢土器である。器面には、篋状の工具により横位・斜位方向の粗い撫で状の整形痕が認められる。小破片のために器形の判別できるものは少ないが、227・228・260で見ると胴部上位で緩く括れて外傾気味に開口している。数量は249点とかなり多く、出土総点数の約7%を占める。230～259は

配石遺構群の周辺から出土。

7類 (265～282) 浅鉢形あるいはそれに近似した鉢形の土器を一括した。口縁部の文様のあり方により、A～Fに6細分される。総点数は42点と少ないが、E・Fの12点を最多として、Dが7点、Aが5点、Bが4点、Cが2点。265・266・268・273・274は配石遺構群の周辺から出土。

A (265・266) : 口縁部にやや幅広い施文域を持ち、沈線による渦巻文や区画文を施して縄文を充填するもの。口縁部が内湾する浅鉢土器である。

B (267～269) : 口縁部に幅状な横位区画文や沈線文を施すもので、縄文は充填されない。267の口縁部は、く字状に大きく内折し、波状を呈している。

C (270) : 口唇部の上端に、籠状工具による連続した刻目を施すもの。体部は無文であるが、器面に籠状工具による粗い櫛状の研磨痕が残る。筒状の浅鉢土器。

D (271～274) : 口縁部の内面に横位の沈線文や弧状文を施すもので、外面は無文となる。口縁部が外反気味に開口する浅鉢土器で、波状口縁を持つもの (271) もある。

E (275～280) : 口縁部の内外面ともに無文となるもの。器形はDに類似する。

F (281・282) : 口縁部の文様構成は不明であるが、7類に分類できる口縁部・体部および把手等の破片を一括した。

8類 (283・284) 注口土器を一括した。283は口縁から体部上位にかけて橋状の把手が付されるが、欠損している。出土数量は9点と僅少である。283・284ともに配石遺構群の周辺から出土。

9類 (285～329) 1～4・6・7類のいずれかに該当すると推定されるが、小破片のために判別できないものを一括した。文様要素の組み合わせにより、A～Dに4細分される。総点数は2,784点と多く、Dの2,100点を最多として、Bが286点、Cが257点、Aが141。

A (285～300・313) : 沈線文や刺突文と充填縄文を持つもの。

B (301～312・314) : 沈線文や刺突文のみで構成され、

充填縄文を持たないもの。

C (315～320) : 縄文以外の文様を持たないもの。原体は、単面LRが主体を占めている。

D (321～329) : 無文部のみで、全く文様の確認できない小破片。

10類 (330) 頸部に施された2本の平行状の横位沈線文間に、鋸歯状の沈線文を加えているものである。縄文は施されず、無文地となっている。

f. 堀之内2式土器 (第72・73図 331～346・350)

総数60点が検出されているが、いずれも小破片のために文様構成の不明なものが多い。文様および器形的に見ると、大きく1・2類に2細分される。出土数量は1類が10点、2類が50点である。333～335・337～345は配石遺構群の周辺から出土。

1類 (331～335) 前述の堀之内1式1類の系統上に位置するもので、口頸部を無文帯として、強い括れ部以下の胴部下半に文様帯を構成する鉢形土器である。同1式に比べて器面は丁寧に研磨され、より細い沈線を用いている。333～335は配石遺構群の周辺から出土。

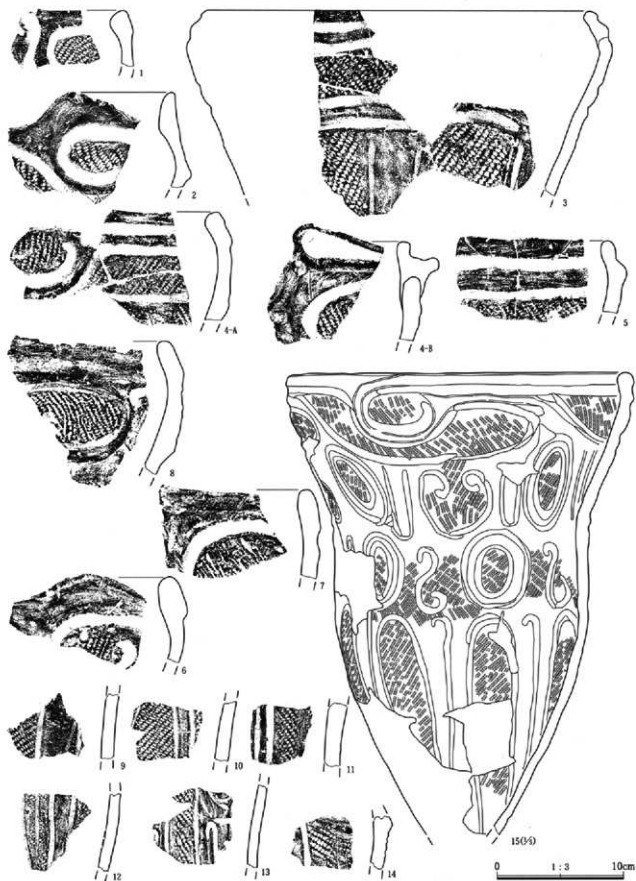
2類 (336～346・350) 前述の堀之内1式5類の系統上に位置するもので、底部から口縁部に向かって外反しつつ開口する、朝顔形の深鉢形態を持つ。文様は口縁部から胴部上半に集約され、細沈線により菱形・三角形・渦巻状のモチーフが描かれる。文様帯の下部に隆帯を巡らせるもの (346) や、胴部中心付近に段状の屈曲部を持つもの (341) も存在する。337～345は配石遺構群の周辺から出土。

g. 加曾利B式土器 (第73図 347～349)

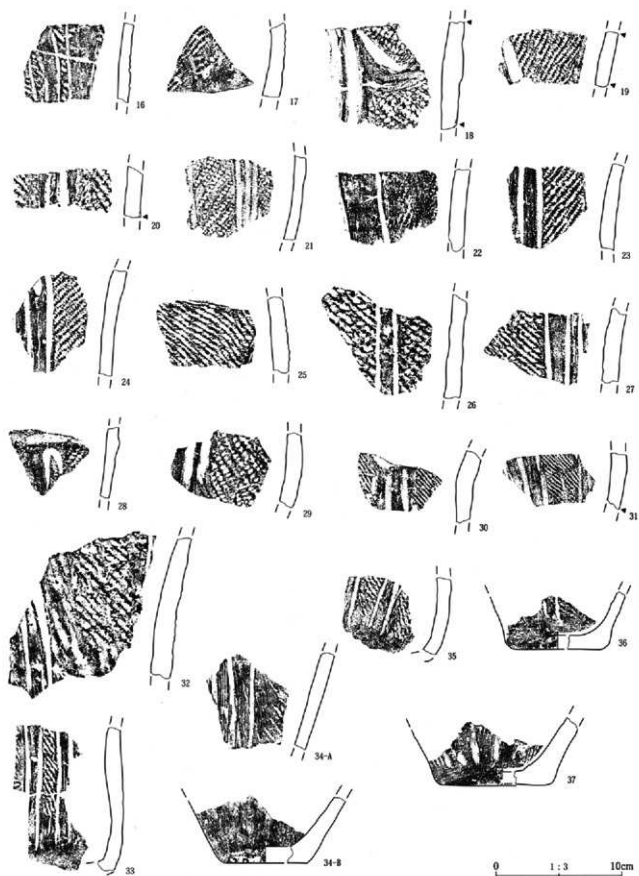
僅少ではあるが、総数17点が検出されている。1・2式を主体としており、3式は認められない。また、それらの出土位置は北側に限定されており、配石遺構の周辺部には存在していない。

h. 晩期の土器 (第73図 351)

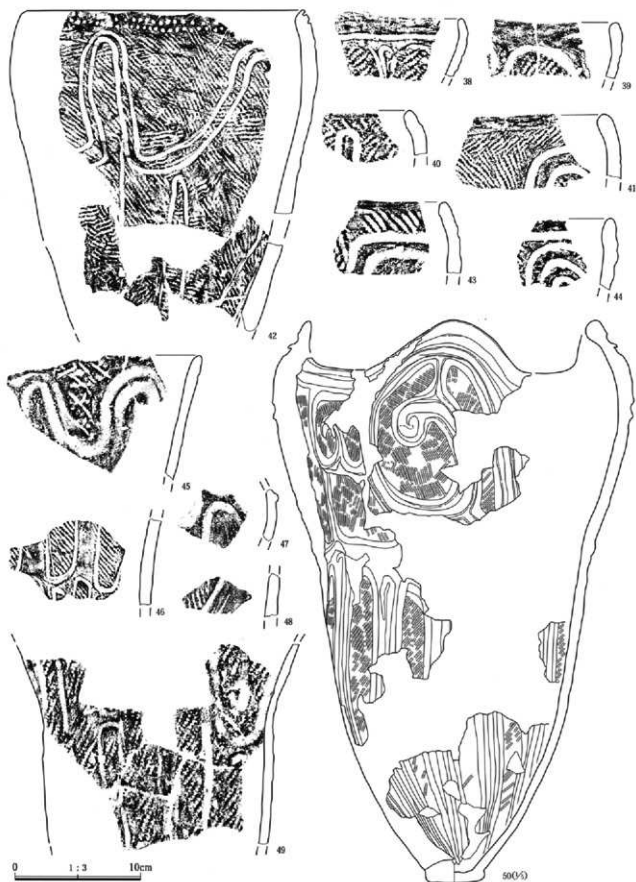
小形の鉢形土器である351を1点検出したのみである。波状口縁下に縦位の短沈線を施し、その下に2条の横位沈線が巡る。後半段階の水式段階に比定されると思われる。



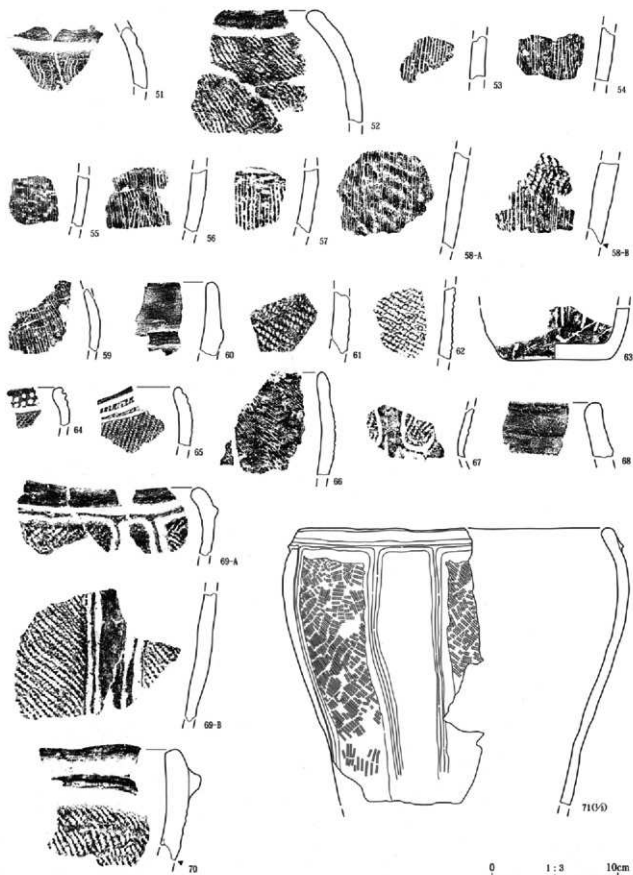
第57図 配石遠構および包含層の出土土器(1)



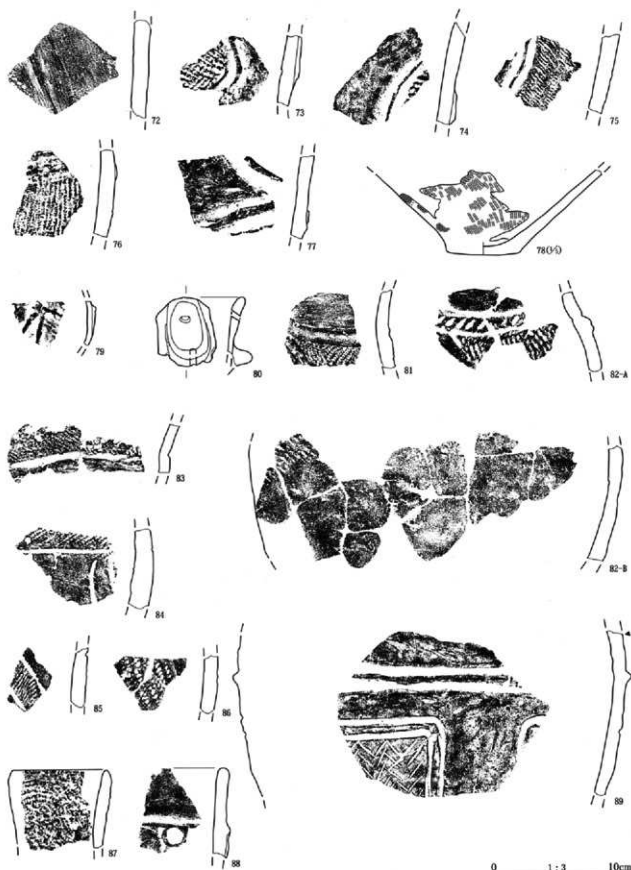
第 58 図 配石透構および包含層の出土土器 (2)



第59図 配石遺構および包含層の出土土器 (3)



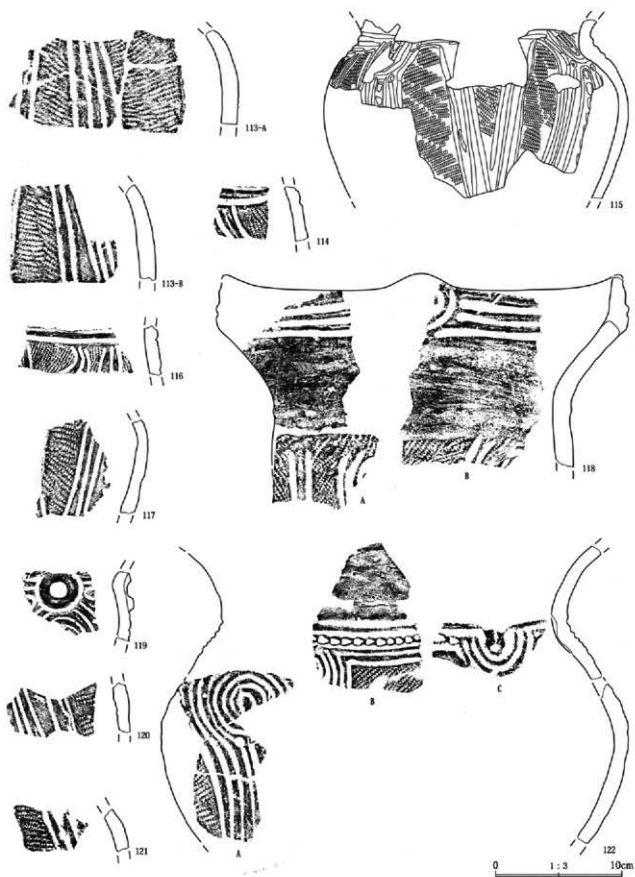
第60図 配石透構および包含層の出土土器(4)



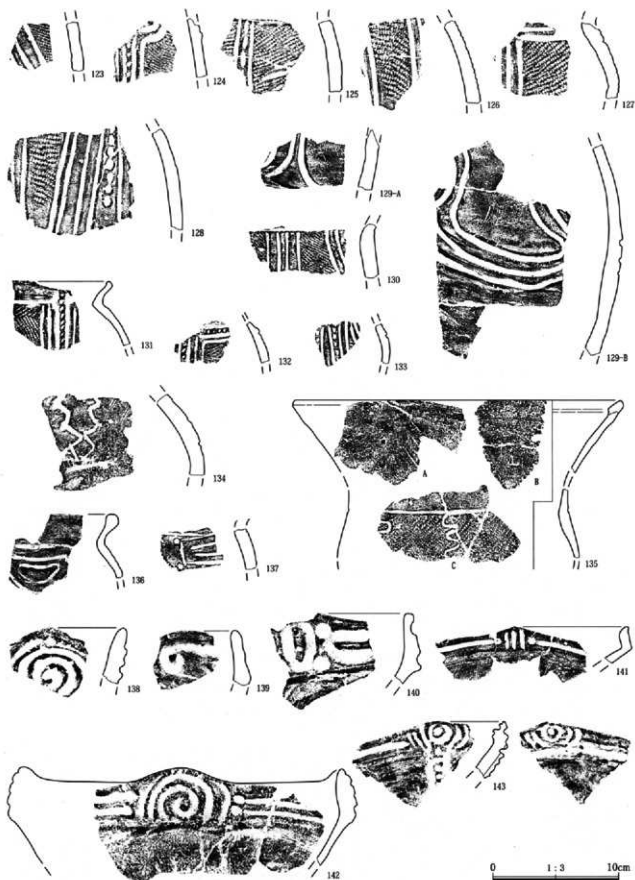
第 61 図 配石遺構および包含層の出土土器 (5)



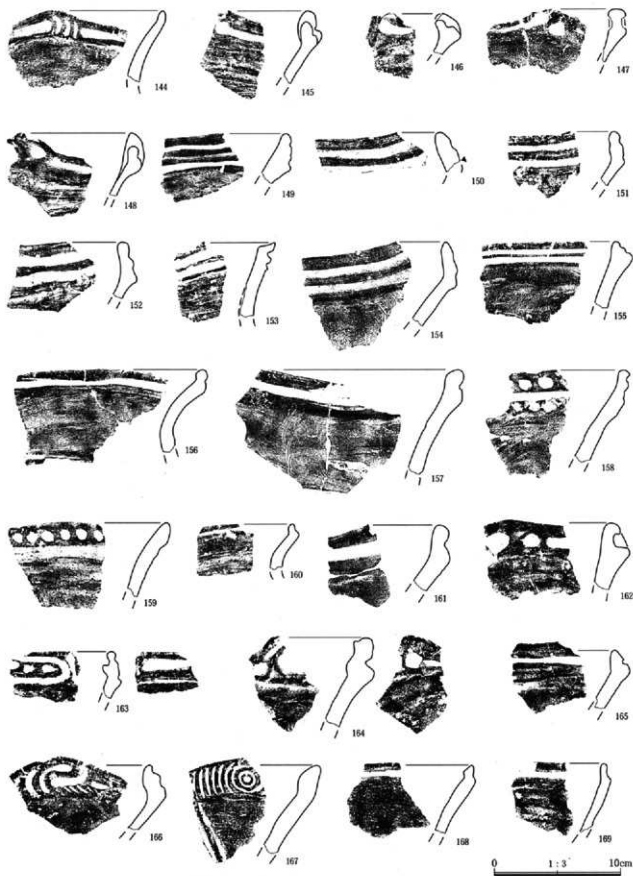
第62図 配石透構および包含層の出土土器 (6)



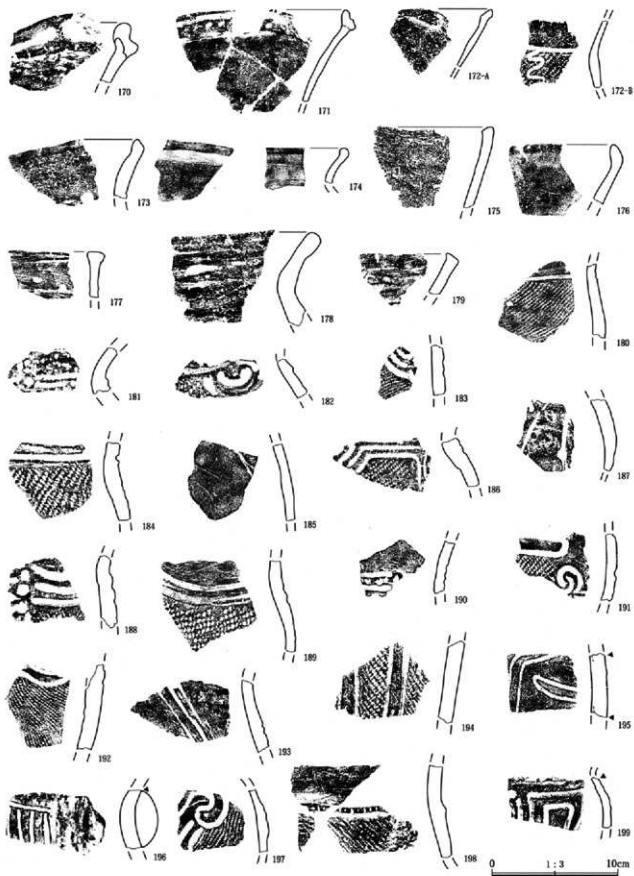
第63図 配石遺構および包含層の出土土器 (7)



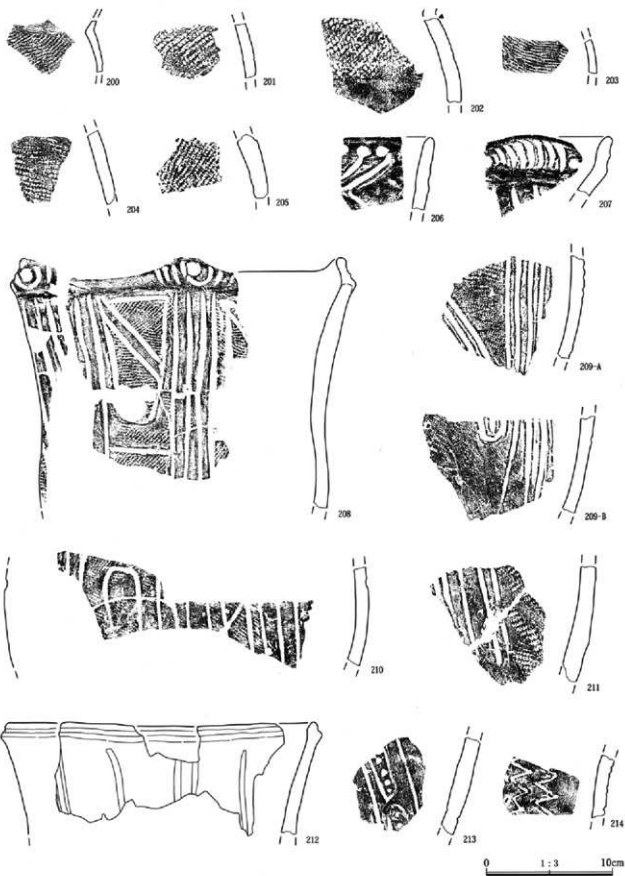
第64図 配石遺構および包含層の出土土器 (8)



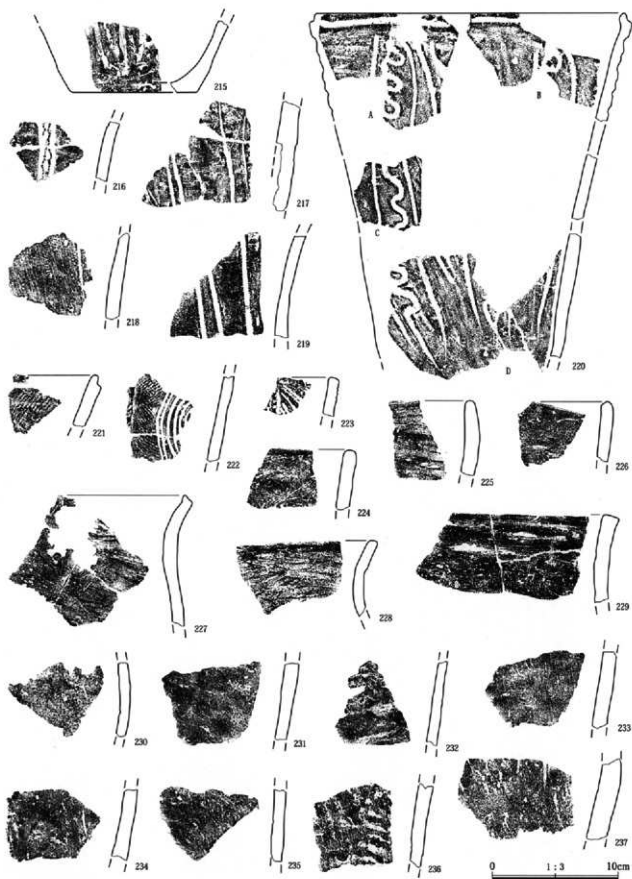
第 65 図 配石遺構および包含層の出土土器 (9)



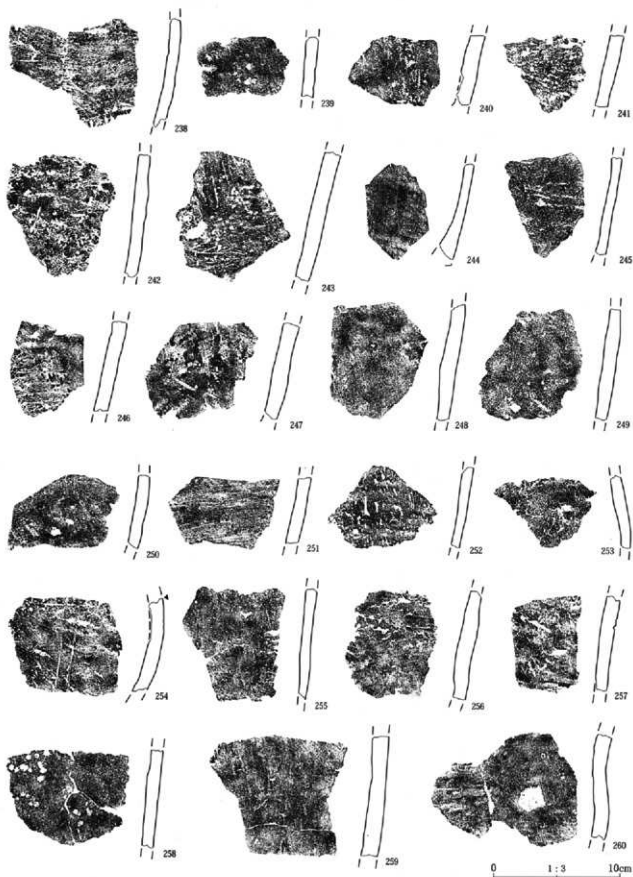
第66図 配石透構および包合層の出土土器 (10)



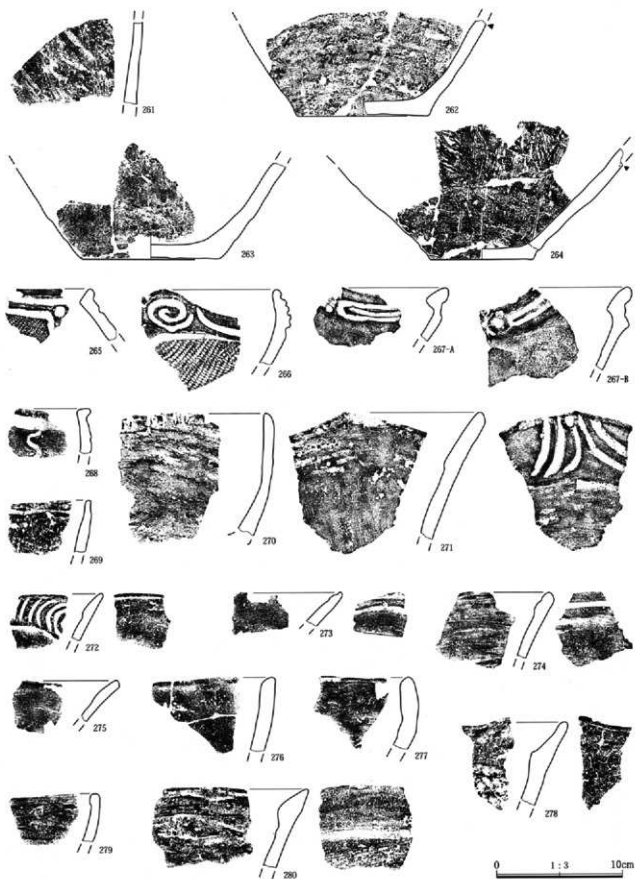
第 67 図 配石遺構および包含層の出土土器 (11)



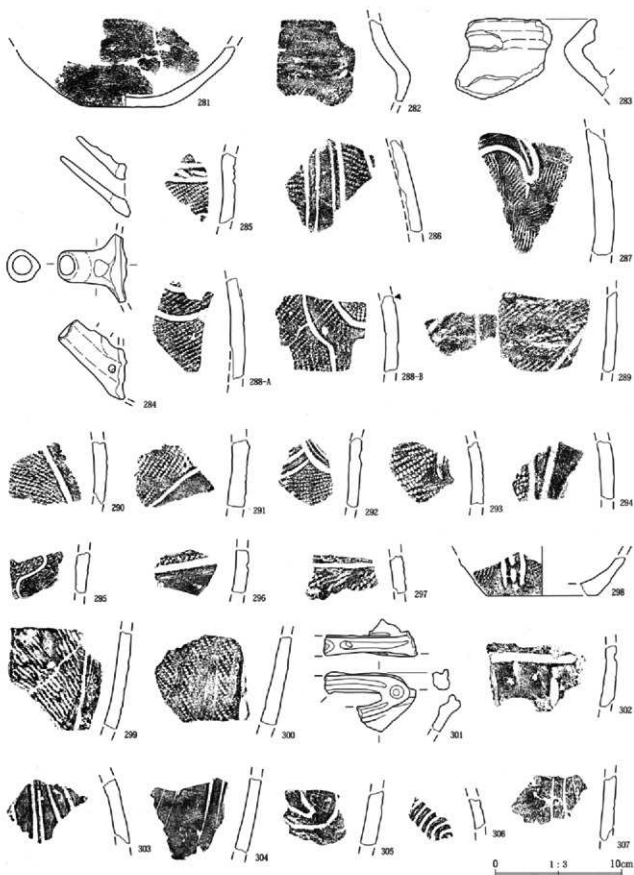
第 68 図 配石遺構および包含層の出土土器 (12)



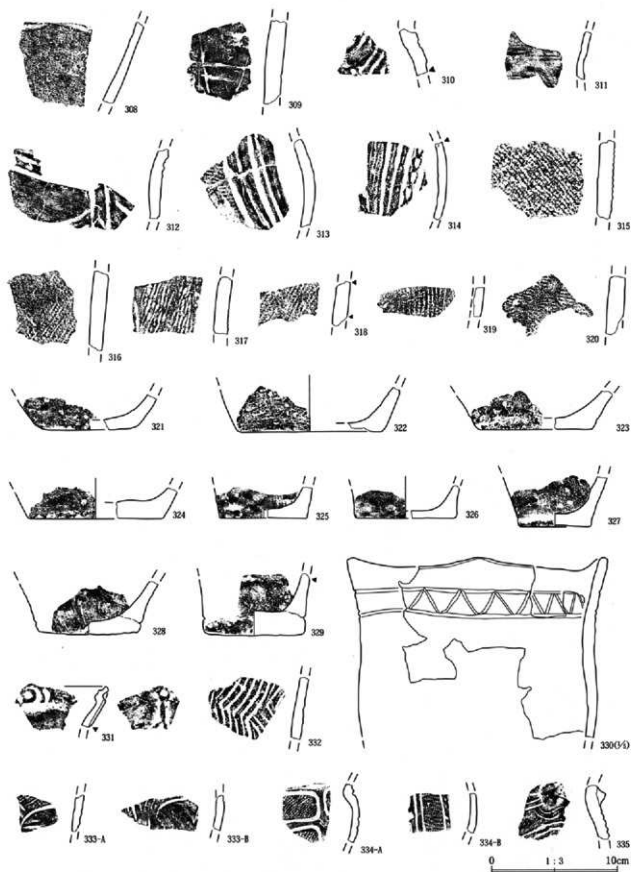
第 69 図 配石遺構および包含層の出土土器 (13)



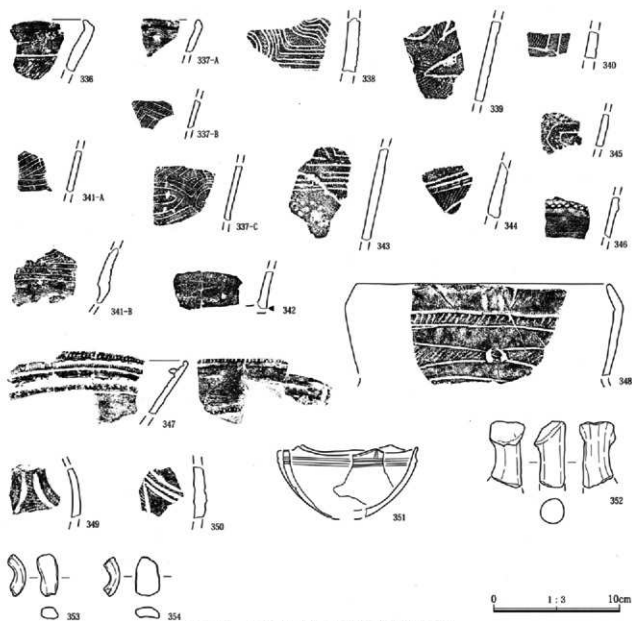
第70図 配石遺構および包含層の出土土器 (14)



第71図 配石遺構および包含層の出土土器 (15)



第 72 図 配石透模および包含層の出土土器 (16)



第73図 配石遺構および包含層の出土土器(17)

1. 土製品 (第73図 352～354)

352は後期土偶の左脚部。353・354は種別不明のリング状土製品の一部分であるが、やや粗雑な成形であり、少なくとも土偶の一部ではない。

参考文献

- 木部 雄 1990「称名寺・堀之内1式の諸問題」『縄文後期の諸問題』
縄文セミナーの会号
鈴木裕雄 1991「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』第16号
石井 寛 1993「1. 堀之内1式期土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡』横浜市ふるさと歴史財団

B. 出土石器の概要

1区南端の配石遺構群の周辺では総数101点が、またその北側では総数148点が検出されている。これらの器種別内訳は、前者地点では削器21点(21%)、磨り石・凹み石類7点(5%)、打製石斧3点(3%)、加工石器2点(2%)、石錐・敲石が各1点(1%)、石棒1点(0.7%)、石核7点(7%)、剥片58点(59%)であり、後者地点では削器35点(24%)、打製石斧5点(3%)、石錐4点(3%)、磨製石斧4点(3%)、磨り石・凹み石類3点(2%)、加工石器2点(1%)、石棒1点(0.7%)、石核7点(5%)、剥片87点(58%)となる。両地点共に、削器の数量が最多を占め、その比率が20%前後となる点で同様の傾向を示すが、後者地点では磨製石斧が少量ながら組成する点で違いがある。また、こうした石器組成で注目されるのは、前者の地点では削器・打製石斧・磨り石類等の実用的石器が主体的であるのに対して、石棒や多孔石が皆無

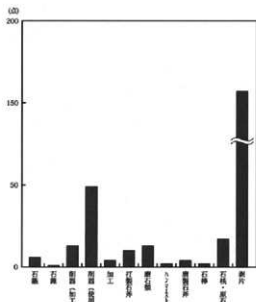
あるいはそれに近い状況であることなど、呪術的石器が極めて僅少な点である。こうしたことは、配石遺構を含む遺跡空間において、これら実用的な石器を使用している生産活動が行われていたことを物語るっており、未調査区域における集落の存在を窺わせる。

石材では、石錐・削器・打製石斧・加工石器などの「打製系列」の石器の場合、黒色頁岩が多用され、全体の64%を占めている。また、それらの母材である石核や石器製作工程上で生じる剥片・碎片に占める黒色頁岩の比率も46%と類似した数値となっており、「打製系列」に占める同石材の優位性が認められる。他方、磨り石・凹み石類などの「使用痕系列」の石器には、当遺跡近縁の西沢川河床や扇状地礫層に存在する粗粒輝石安山岩が75%と多用され、「打製系列」の石材とは明確な差異を看取することができる。

(遺物観察表：134頁、写真：PL42～45)

〔包含層出土石器の器種別数量一覧〕

	打製系列					使用痕形別		適合技術系列			その他		総計	
	石錐	石錐	削器1	削器2	加工	打斧	磨石類	磨斧	石棒	石核	原石	剥片		
合計	6	1	13	49	4	10	13	1	4	2	16	1	157	277



〔包含層出土石器の器種別点数〕

〔各種石器の分類数量一覧〕

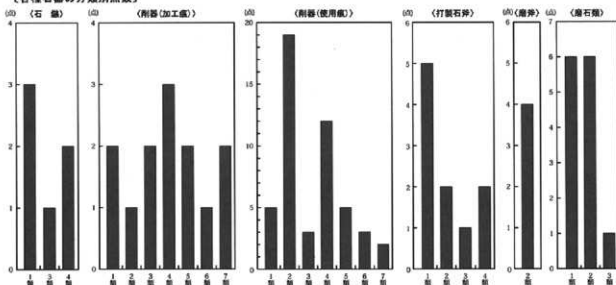
石錐				打製石斧				
分類	1類	3類	4類	分類	1類	2類	3類	4類
合計	3	1	2	合計	5	2	1	2

削器1(加工痕)							
分類	1類	2類	3類	4類	5類	7類	
合計	2	1	2	3	2	1	2

削器2(使用痕)							
分類	1類	2類	3類	4類	5類	7類	
合計	5	19	3	12	5	3	2

磨製石斧		磨石類			
分類	2類	分類	1類	2類	3類
合計	4	合計	6	6	1

〔各種石器の分類別点数〕



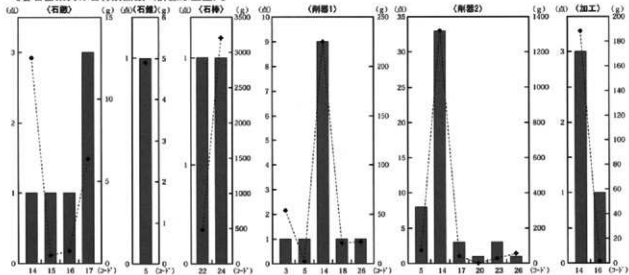
〔各種石器の石材別・重量一覧〕

石鏃				石鏃		削器1				削器2						石棒						
コード	14	15	16	17	コード	5	コード	3	5	14	18	26	コード	5	14	17	20	23	26	コード	22	24
点数	1	1	1	3	点数	1	点数	1	1	9	1	1	点数	8	33	3	1	3	1	点数	1	1
重量	12.5	0.5	0.8	6.4	重量	4.9	重量	54	2.1	224.9	20.8	22.4	重量	75.1	1311.1	42	2.3	29	56.8	重量	482.7	3025.6

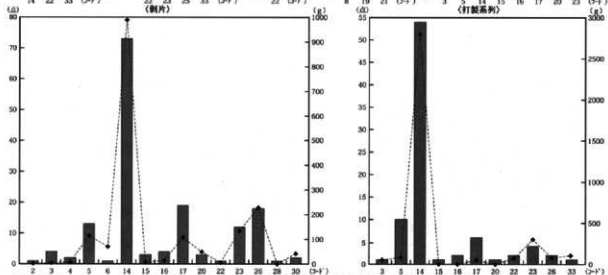
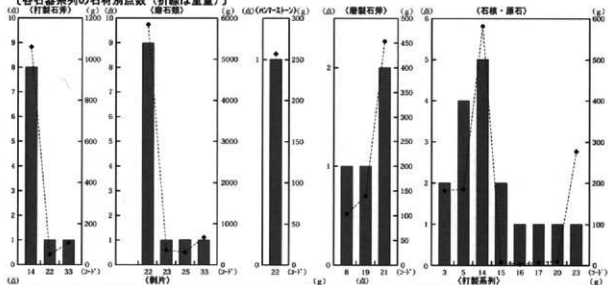
打製石斧				磨石類			石核・原石						ハマー・ストーン						
コード	14	18	30	コード	22	23	25	33	コード	3	5	14	15	16	17	20	23	コード	22
点数	8	1	1	点数	10	1	1	1	点数	2	4	5	2	1	1	1	1	点数	1
重量	109.2	50.3	105.4	重量	397.5	359	302.6	662.5	重量	181.3	185.1	581.4	7.3	2.1	6.9	9.3	272.6	重量	256.6

加工			磨製石斧			剥片																
コード	14	16	コード	8	19	21	コード	2	3	4	5	6	14	15	16	17	20	18	23	26	28	30
点数	3	1	点数	1	1	2	点数	1	4	2	13	1	73	3	4	19	3	1	12	18	1	2
重量	188.5	1.7	重量	103.3	139.8	453.6	重量	1.6	4.8	7	113.9	69.4	992	7.4	14.5	107.1	48.9	5.7	134	228.4	1.1	41.2

〔各石器系列の石材別点数(折線は重量)〕

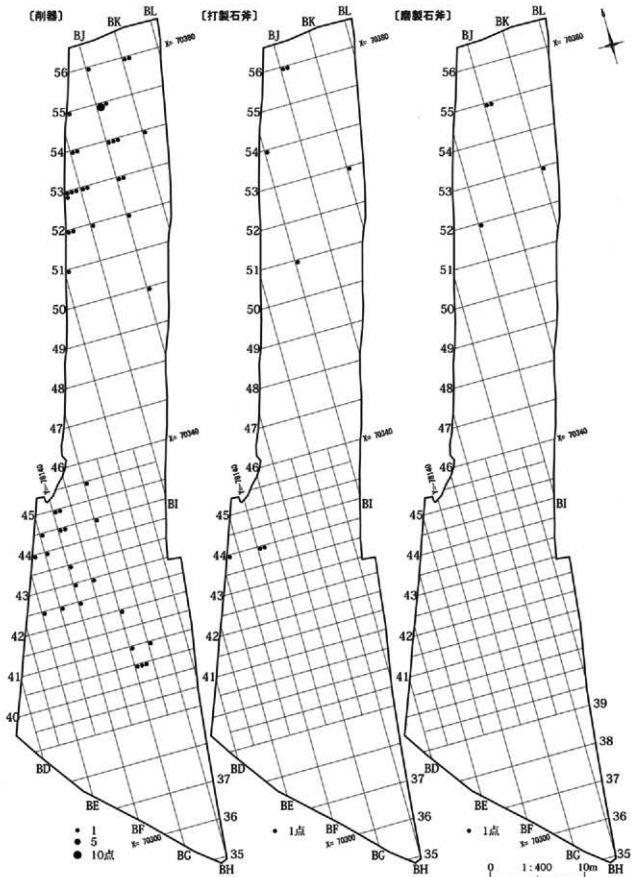


〔各石器系列の石材別点数（折線は重量）〕

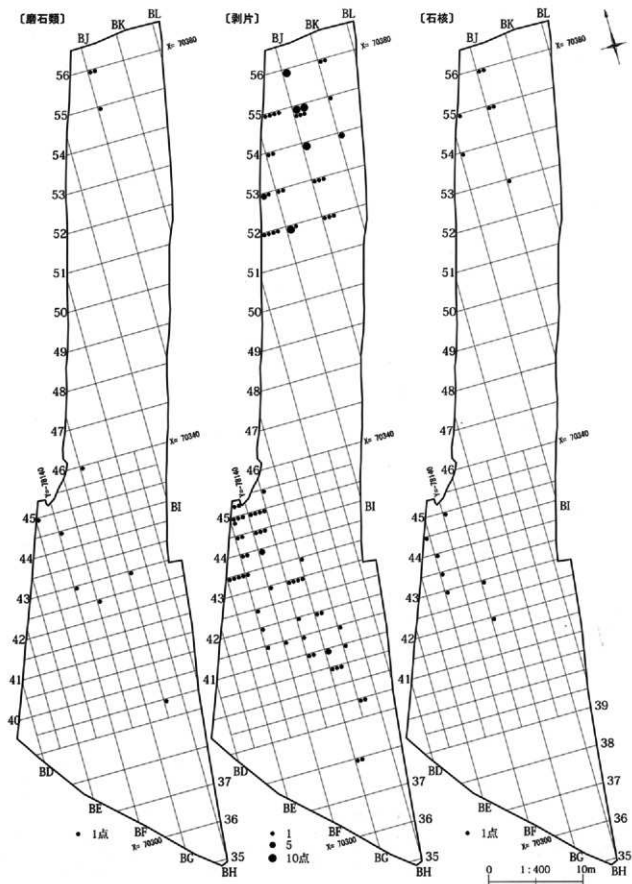


〔包含層出土石器の系列・石材別重量一覧〕

石材名	石材コード	打製系列		使用痕系列		複合技術系列		石核・原石		割片		
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	
玉	割	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.6
赤 碧 玉	3	1	54	0	0	0	0	2	181.3	4	4.8	
頁 岩	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7
珪 質 頁 岩	5	10	82.1	0	0	0	0	4	185.1	13	113.9	
硬 質 頁 岩	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	66.4
寛 玄 武 岩	8	0	0	0	0	1	103.3	0	0	0	0	0
黒 色 頁 岩	14	54	2796.2	0	0	0	0	5	581.4	73	992	
黒 曜 石	15	1	0.5	0	0	0	0	2	7.3	3	7.4	
チャート	16	2	2.5	0	0	0	0	1	2.1	4	14.5	
黒 色 安 山 岩	17	6	48.4	0	0	0	0	1	6.9	19	107.1	
粗粒輝石安山岩	18	1	50.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
はんれい岩	19	0	0	0	0	0	1	139.8	0	0	0	0
褐色碧玉	20	1	2.3	0	0	0	0	1	9.3	3	48.9	
炭 酸 鈣 岩	21	0	0	0	0	2	453.6	0	0	0	0	0
粗粒輝石安山岩	22	2	71.1	11	6254.1	1	482.7	0	0	0	1	5.7
珪 質 頁 岩	23	5	29.1	1	359	0	0	1	272.6	12	134	
緑 色 片 岩	24	0	0	0	0	1	3205.6	0	0	0	0	0
か ころ 岩	25	0	0	1	302.6	0	0	0	0	0	0	0
硬 質 頁 岩	26	2	79.2	0	0	0	0	0	0	0	18	228.4
安 山 岩 ガ ラ ス	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.1
炭 質 安 山 岩	30	1	105.4	0	0	0	0	0	0	0	2	41.2
砂 岩	33	0	0	1	662.5	0	0	0	0	0	0	0
合 計		83	3270.7	14	7578.2	6	4386	17	1246	157	1777	



第74図 包含層出土石器のグリッド別分布(1)



第 75 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (2)

a. 石鏃 (第76図1~6)

全体形状を確認できるものは、全て無茎鏃であるが、凹基(1・2)と平基(3・4)が認められる。石材は、1・3・6が黒色安山岩、5が黒曜石である。1~4・6は北端側での出土であり、配石遺構群の周辺からは出土していない。

b. 石鏃 (第76図7)

1区の北端側で1点出土したのみである。珪質頁岩の縦長小剥片の鋭利な先端部をそのまま利用したものであり、細部加工を施さない。

c. 削器 (第76~79図8~42)

不定形の横長または縦長の剥片を素材として、その縁辺部に粗雑な刃部加工を施すもの(8~18)と、刃こぼれ状の使用痕を有するもの(19~42)の2種類が認められるが、加工痕の有無にかかわらず機能部の部位や全体形状などが共通することから、ここでは両者を削器として分類した。

各器種を通じて最も出土点数が多く、前者が13点、後者が49点確認されている。剥片形状による分類では、縦位の楕円形や長方形などの縦長剥片系を1類、横位の楕円形や長方形などの横長剥片系を2類としたが、数量的には2類のものが20点(32%)と多数を占め、1類は7点(11%)に止まる。また、加工および使用痕の存在する部位による分類では、パルプ除去の加工を含めてA~F類まで5分類したが、A類が19点(30%)、B類が19点(30%)、D類が9点(14%)、E類が8点(13%)、C類が4点(6%)、F類が4点(6%)という順になる。素材形状と機能部位との間には、あまり有意な関係は認められず、下縁や片側縁を機能部とするA・B・D類が全体の90%以上を占めている。平均的な大きさ(縦幅×横幅)や重量は、横長剥片系が43mm×52mm・32.9g、縦長剥片系が53mm×35mm・24.2gであり、両者ともに類似した大きさを有している。こうした傾向は、用材としての剥片に対して、ある程度の選択性が働いた結果と言えるだろう。また、約50%が片面に原礫面を残しており、石核の剥片剥離工程において早い段階に産出する外表皮を残した剥片を用材としていることが窺える。石材は、黒色頁岩が42点(67%)

と最も多く、次いで珪質頁岩が9点(14%)、珪質変質岩が3点(5%)、黒色安山岩が3点(5%)の順となる。8~10・21~29・35は配石遺構群の周辺から出土。

d. 打製石斧 (第79~80図43~51)

10点が存在し、形態的には楕形(43・44)・短冊形(45~49)・分銅形(50・51)の3種類に分かれるが、基部と刃部の寸法比率や側縁部の形状等を加味して1~4類に分類した。1類は基部・刃部幅比が1:1.5未満の短冊形、2類は同比が1:1.5以上の楕形、3類は挟り部の浅い分銅形、4類は挟り部が深くノッチ状となる分銅形である。数量的には1類の短冊形が5点(50%)と多いが、総点数が僅少なこともあり傾向的な把握は難しい。

調整加工は、各類ともに側縁部の整形は片側縁を下にして垂直に立てた状態で敲打する、いわゆる「垂直敲打技法」(大工原:1996)によって行われており、エッジのつぶれや階段状剥離が顕著に認められる。また1・2類は、幅広の大形素材剥片の打点を長軸に対して斜め上方に置いて行うものが主体的である。刃部は、基本的に両面調整によって作出されているが、その形状は1・2類では平縁状のものが多く、3・4類では円弧状を呈するものが多い。

素材の面では、片面に原礫面を残すものと両面に残すものが1:1の割合で認められる。前者はかなり大きな原礫からの素材剥片を用いているのが特徴的で、1・2類の石斧に多用されている。後者は、仕上がり寸法よりもやや大きめの楕円形状の扁平礫を素材としてその周縁部に加工を施すもので、3・4類に多見される。

1点を除く他の全てが欠損しているが、1・2類の場合、その破断面の方向は基部から刃部への長軸方向の平坦面に対して、垂直方向からの加力により折損しているものが多い。また、短軸方向に対して水平方向からの加力により折損している場合も僅かに認められる。このような折損状況から見て、1・2類は使用時における前後・左右にこじめるような運動が想定できる。

石材については、黒色頁岩が8点(80%)、変質安山岩が1点(10%)、細粒輝石安山岩が1点(10%)

認められるが、黒色頁岩を多用する点はこの打製系列石器との有機的な関係を物語っている。43～45は配石遺構群の周辺から出土。

e. 加工石器 (第80図 52・53)

不定形の剥片を利用する点で削器とも類似するが、機能部の角度が60度以上のものを一括した。52・53ともに極器的な機能が想定される。

f. 石核 (第81～82図 54～63)

原石1点を含む17点が存在し、総重量は973.4gである。石材別に見ると、黒色頁岩5点(数量比率29%、重量比率60%)、珪質頁岩4点(数量比率24%、重量比率19%)、赤碧玉2点(数量比率11%、重量比率19%)、黒曜石2点(数量比率11%、重量比率0.7%)等が認められる。全体として黒色頁岩の占める比率が高いのが特徴的であり、こうした様相は先の「打製系列」における黒色頁岩の優越性と軌を一にしたものと理解されるが、同時に当遺跡内において同石核を用いての剥片剥離や石器製作が行われたことを示している。2点の黒曜石の石核(54・55)はいずれも原礫面を残しており、当初の原礫サイズ自体が5cm(90g)に満たない小形品であったことが窺える。

各石核を原礫形状をもとにして分類すれば、径10～15cmの分割礫や扁平な原礫を用いて中形剥片を剥離する1類(56・58～60・62)と、径5cm未満の原礫平坦面を打面にして小形剥片を剥離する2類(54・55・58・61)に大別される。1類は黒色頁岩を用いる石核に多見され、周縁の平坦面を打面として求心的な剥片剥離をするもの(56・59)や、扁平な分割礫の表裏平坦面を打面にして特定部位を中心に剥片剥離するもの(58・60・62)などがある。これらの石核からは、最大幅が10cmに満たない横長剥片を中心に作出したと考えられるが、このサイズでは打製石斧の素材剥片として小さすぎることから、主に削器などの小形石器用の素材剥片の作出を意図したものであろう。一方、2類には黒曜石の石核のみが認められ、主に縦長剥片の作出を意図した対向する打面からの剥片剥離が行われているが、3～4cm程の剥片長から判断すれば、石礫用の素材剥片と見るのが妥当であろう。

54～59は配石遺構群の周辺から出土。

g. 剥片

図としては掲載していないが、素材・調整剥片を含めて総数157点・1.777gが存在している。石材別には、黒色頁岩73点・992g(数量比率47%、重量比率56%)、黒色安山岩19点(数量比率12%、重量比率6%)、硬質泥岩18点(数量比率12%、重量比率13%)、珪質頁岩13点(数量比率8%、重量比率6%)等が認められる。黒色頁岩が主体を占めるあり方は、先の「打製系列」石器や石核とも共通するものであり、当遺跡での石器製作の存在を傍証している。石材別の平均的な大きさ(長径×短径)と重量は、黒色頁岩37mm×35mm・14g、黒色安山岩29mm×25mm・5.6g、硬質泥岩41mm×38mm・13g、珪質頁岩30mm×27mm・10gとなる。黒曜石の剥片は3点と僅少であるが、状況的には同石材が2点の石礫のみに利用されていることと軌を一にした現象と言えらる。ちなみに、X線回折による産地同定では、石礫とともに長野県の和田峠産に比定されている。

h. 磨製石斧 (第82・83図 64～67)

総数4点が存在するが、1点を除いて他の全てに使用による基部や刃部の欠損が認められる。形態的には、体部断面が隅丸方形を呈し、刃部幅が基部幅に対して1.5～1.7倍程度の定角的なものが主体を占めている。大きさについては、完形品の65を基準とすれば、体長10cm前後、刃部幅5cm前後、基部幅3cm前後が想定される。石材は変輝緑岩が2点(50%)と最多を占め、他に変玄武岩が1点(25%)存在する。磨製石斧の製作に係わる原石や調整剥片類の出土は皆無であり、遺跡外よりもたらされていることが窺える。

i. ハンマーストーン (第83図 68)

棒状礫を素材として、基部と先端の両端に敲打痕のみを有するもので、1点が検出されている。石材は、性状面で比較的硬さと粘りのある粗粒輝石安山岩を使用している。68は配石遺構群の周辺から出土。

j. 凹み石・磨り石類 (第83～84図 69～78)

片手で掌握できる大きさで、円形や楕円形状を呈する扁平な河床礫を素材として用い、その礫表面に使用

による窪み穴や磨り面（摩耗痕）・敲打痕を持つものを一括した。窪み穴は、礫面中央部を中心として微細な敲打痕の集合により形成され、周縁部にはかなり大きな加撃による敲打痕が存在するものもある。ただし、器面の窪み穴や磨り面は1個体の中で複合することが少なく、他遺跡での様相に比べてやや特異なあり方を示している。

素材とする礫の形状により、楕円形状の1類、円形状の2類、不定形状の3類に大別され、1類は6点(46%)、2類は6点(46%)、3類は1点(8%)で、各類ともほぼ拮抗した数量となっている。また、1個体中に窪み穴・磨り面・敲打痕が複合する例は2点(15%)、敲打痕・磨り面の複合は2点(15%)、窪み穴のみは1点(8%)、磨り面のみは3点(23%)、敲打痕のみは5点(38%)が各々認められる。石材は、粗粒輝石安山岩が全体の77%を占めて卓越した状況にあるが、他に珪質変質岩が1点(8%)、花崗岩が1点(8%)存在する。68～70・73は配石遺構群の周辺から出土。

k. 礫塊（第84図79）

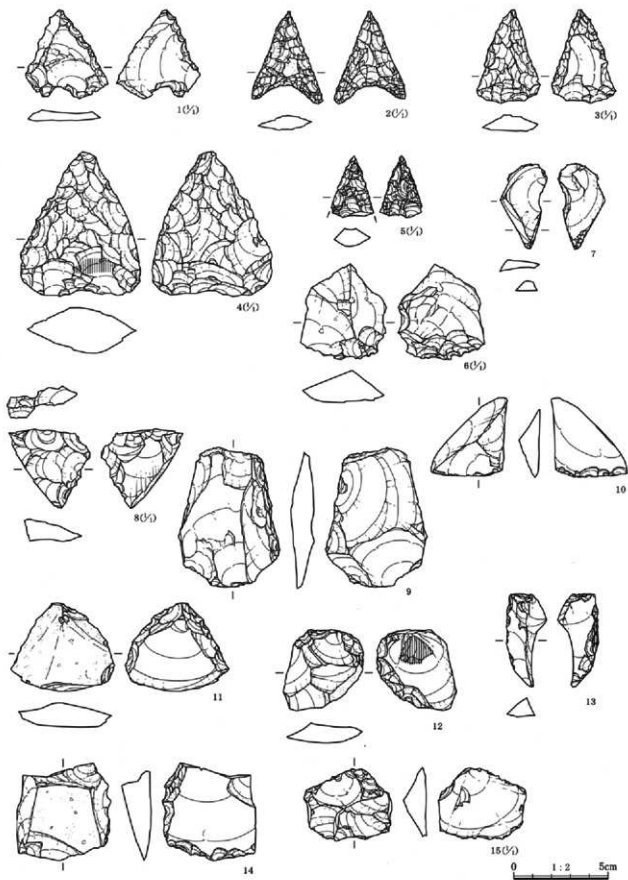
砲丸状の円礫に煤状の炭化物が付着したものであり、磨り面や敲打痕などの使用痕は認められない。配石遺構群の周辺から出土している。

l. 石棒（第84図80・81）

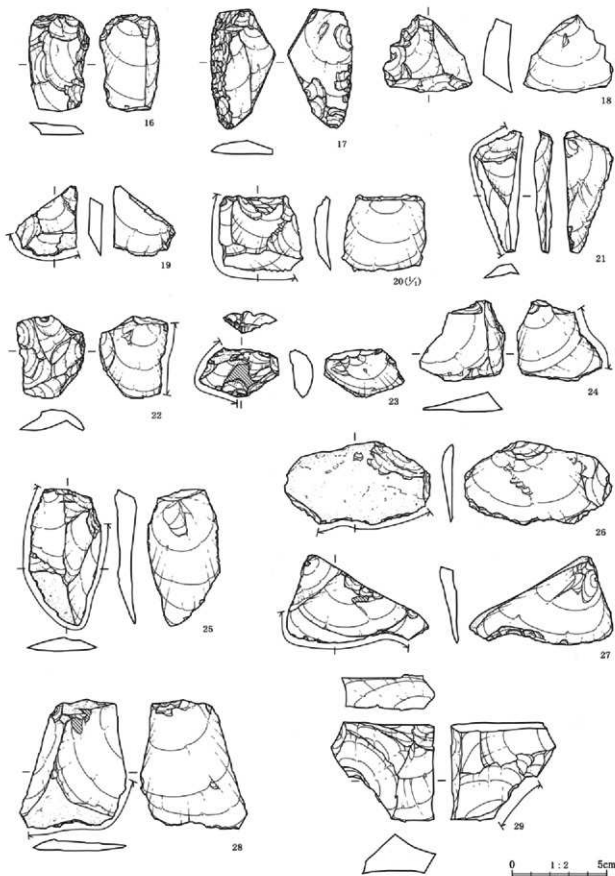
小破片を含めて、2点が検出されている。80は円柱状の棒状礫を素材として、若干の敲打による整形を先端部に施しているが、体部には敲打・研磨等の整形加工は認められない。先端部のみを残して、体部の大半が欠損している。81は結晶片岩を素材として、敲打・研磨により成形されているが、表面は被熱による変色や剥離が認められ、2カ所で折断されて基部は欠損している。80は配石遺構群の周辺から、81は北端側より出土している。

参考文献

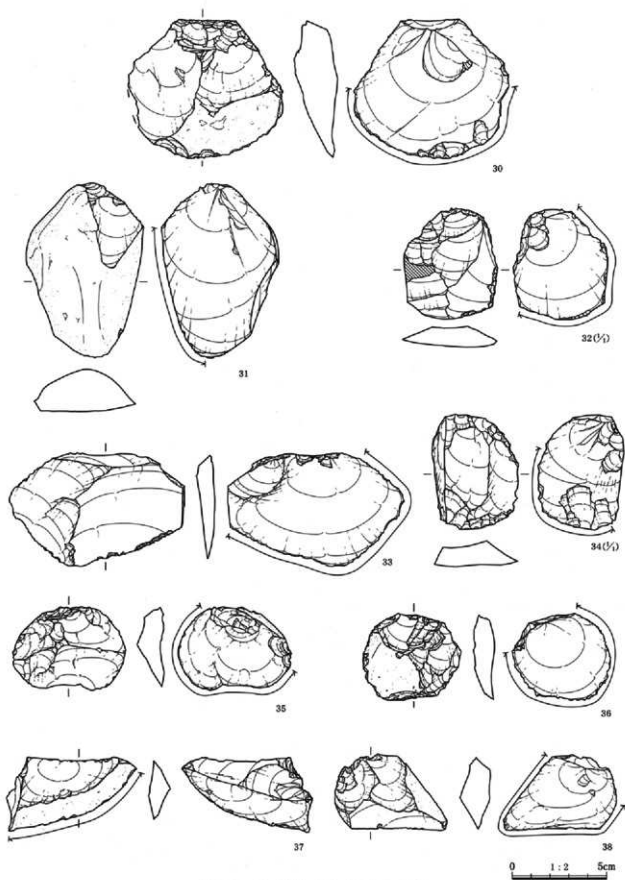
- 大工原 豊 1996『縄文時代 石器』『考古学雑誌』第82巻第2号
大工原 豊 1998『縄文前期中葉から後葉の打製系列（A類・B類）について』『中野谷松原遺跡—縄文時代遺物本文編—』安中市教育委員会



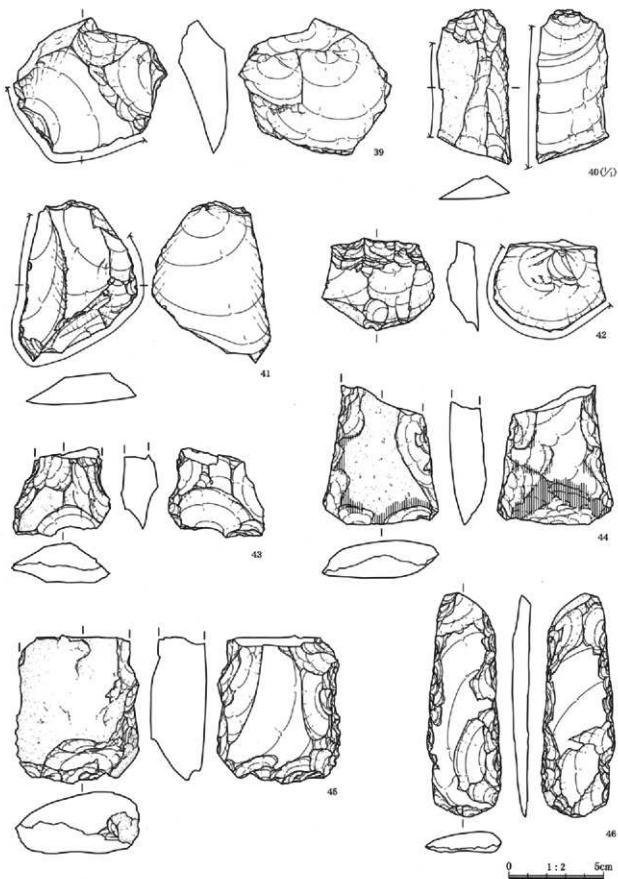
第 76 図 配石遺構および包含層出土石器(1)



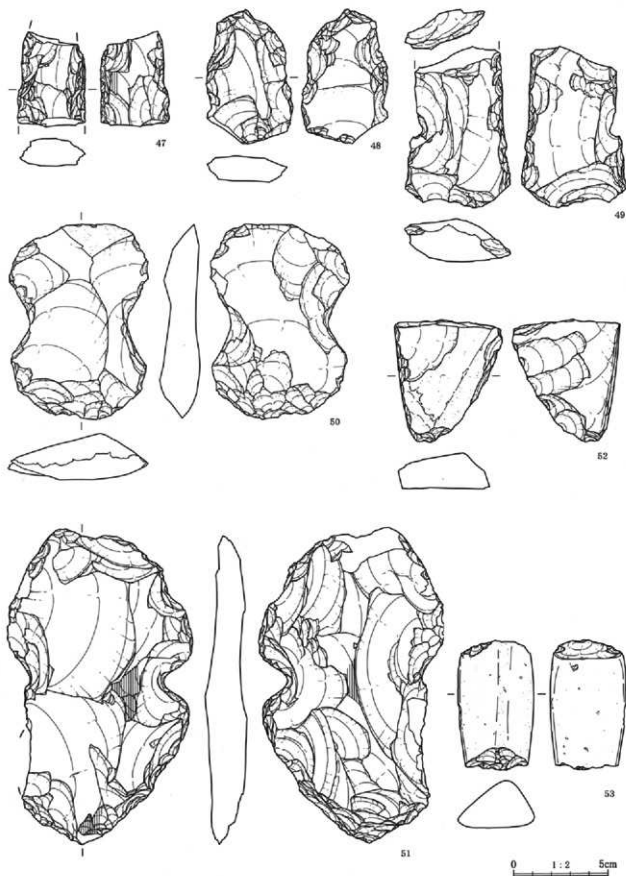
第 77 図 配石遺構および包含層出土石器 (2)



第78図 配石遺構および包含層出土石器(3)



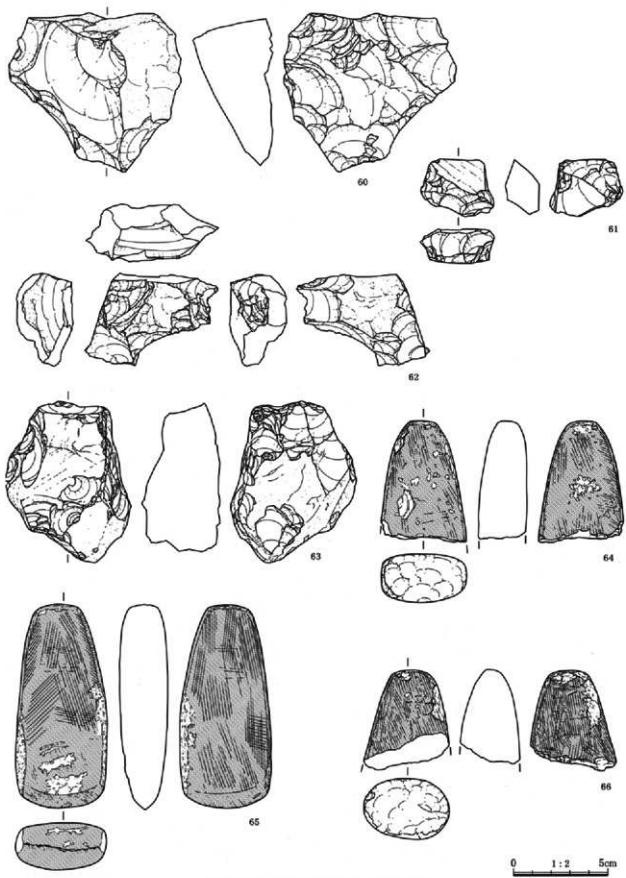
第 79 図 配石透構および包含層出土石器 (4)



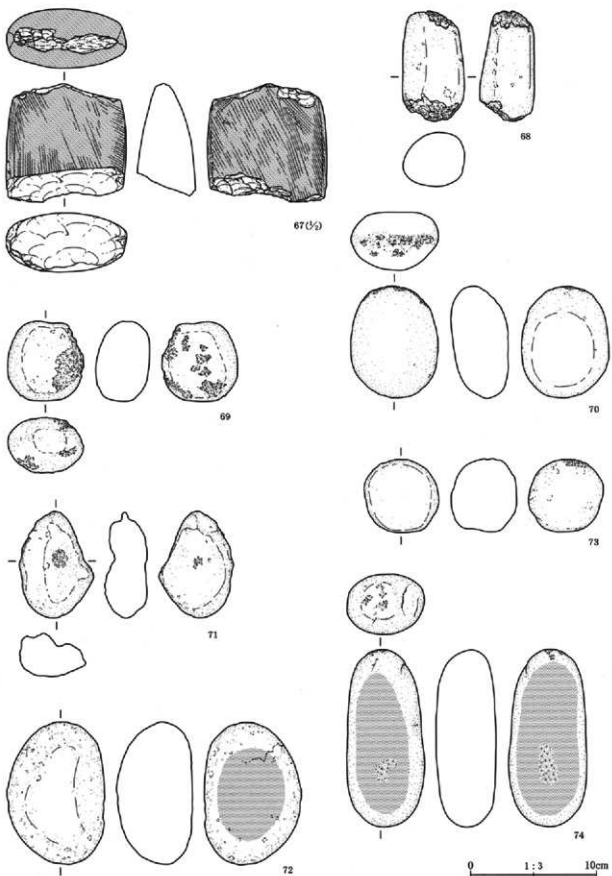
第80図 配石遺構および包含層出土石器(5)



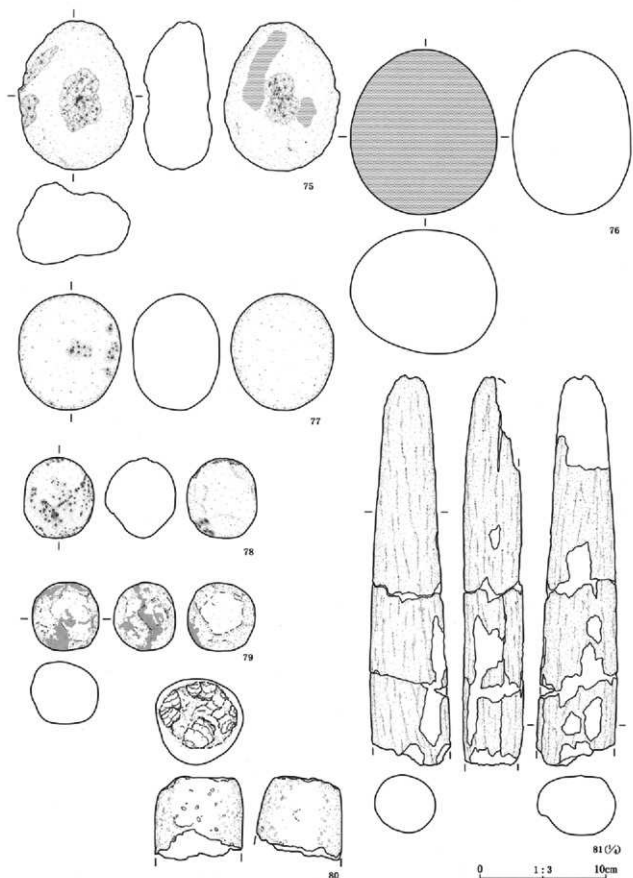
第81図 配石遺構および包含層出土石器(6)



第 82 図 配石遺構および包含層出土石器 (7)



第83図 配石遺構および包含層出土石器(8)



第 84 図 配石透構および包含層出土石器 (9)

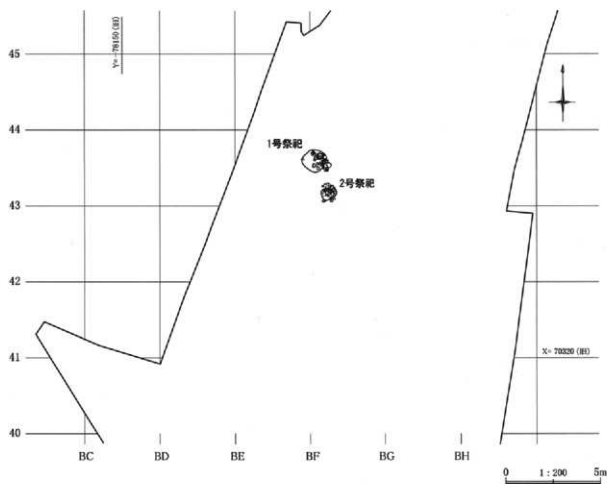
0 1:3 10cm

4. 平安時代の調査

1区の南端で確認された縄文時代の配石遺構とはほぼ同位置に、9世紀第3四半期に比定される2基の祭祀遺構が検出されたのみである。また、この祭祀遺構の周辺には、須恵器を主体とする極かな遺物包含層が存在しているが、その分布は極めて狭小な範囲に限定されている。今回の調査対象区域外に竪穴住居をはじめとする集落の存在も想定されるが、西沢川を隔てて南西130mに近接する新田西沢遺跡の9世紀前半の集落との関係も考慮する必要があるだろう。つまり、当遺跡が新田西沢遺跡の祭祀場としての機能・性格を有し、本来は両遺跡が一体のものであった可能性も想定されるからである。いずれにしても、両遺跡が有機的な関係を保持して併存していたと考えられる。

(1) 祭祀遺構

基本土層のV層の上位において、2基を検出した。両祭祀遺構は相互に1mの距離を置いて近接し、長径80～110cm、短径60～110cmの方形状の掘り込みを持つとともに、部分的に径20～30cm大の垂直礎を配置するかのような箇所も見受けられる。V層は黒色土のために遺構埋没土との区別が困難であり、その上面にて当該遺構の掘り込みを確認することはできなかったが、検出深度から見て少なくともV層上位面から40cm前後の掘り込みを持つと考えられる。出土遺物は、2基の祭祀遺構や包含層からのものを含めて、須恵器の坏139点・坏蓋3点・碗24点・甕3点・羽



第85図 1区平安時代の遺構配置

釜2点・鉢22点、土師器の坏1点・甕80点・小形甕2点・小形台付甕8点などの破片資料と、不明鉄製品1点である。土器の点数については、破片総数をカウントしたもので個別実数を表すものではないが、量的に須恵器の坏と土師器の甕が卓越している点には注意を要する。これらの土器は、小破片となって各祭祀遺構の埋没土上面に集中して出土しているが、上下に積み重ねられた複数個の坏が横倒しになったものや甕が埋置された状況を示すものもあり、供献的に配置されていたことを窺わせる。また、完形に復元されたいくつかの土器は、1・2号祭祀遺構にまたがって出土しており、両祭祀遺構が同一時期に併存した可能性が高い。尚、祭祀遺構の埋没土中には焼土粒が混在し、周辺には炭化材も散在することから、何らかの焚火行為が存在したことを窺うことができる。

当該遺構の性格については、不明な点が多く断定できる状況にはないが、類例が上野国分寺・尼寺中間地域遺跡のG区第1・2号埋設土器(板岡:1987)や三ツ木里沼遺跡のA6区祭祀址(小島:2000)などにも認められており、本報告書では便宜的に祭祀遺構として扱っておきたい。

A. 1号祭祀

一辺が110cmの隅丸形状の平面形を呈し、掘削深度10～20cmの土坑状の掘り込みを持っている。北壁際から東壁際にかけて、径10～20cm(重量0.2～9.5kg)の扁平な重角礫24点が散在しているが、部分的に2～3個の礫の横口面を天地置きしている箇所も認められ、人為的に配置された可能性も窺える。また、これら礫の上位には、本来上下に積み重ねてあったものが横倒し状態となった須恵器の坏1点(4)や、底部を下にした土師器の甕1点(10)が出土しており、土坑の上位面を中心にこれらの土器が意図的に置かれていたと考えられる。この他に、カヤの炭化材2点が検出されているが、各礫の表面に被熱による赤化・剥離痕が認められることや、埋没土中での焼土のブロック・細粒の存在をも考慮すると、何らかの焚火行為があったことが確実である。

出土遺物は、埋没土中を含めた破片総数では須恵器の坏35点・輪6点・鉢2点、土師器の甕12点・坏1点などがあり、その内の完形・半完形品10点について図化した。9・10などの破片の一部は2号祭祀の埋没土中からも出土している。須恵器の坏を中心に、須恵器鉢や土師器甕が組成する点で特徴的であり、時期的には9世紀第3四半期に比定される。

(遺物観察表:135頁、写真:PL46・47)

B. 2号祭祀

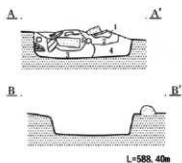
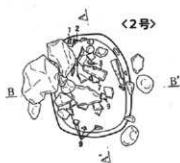
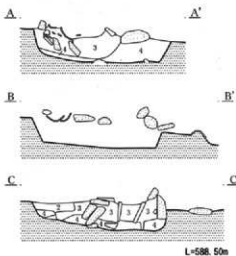
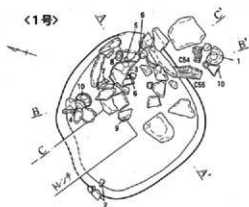
平面形は長辺80cm×短辺60cmの長方形を呈し、深さ10～20cmの掘り込みを持つ。掘り込み上位面の北壁から中央部付近にかけて、径10～40cm(重量0.2～10.9kg)の扁平な重角礫22点が散在し、各礫の間隙には小破片の須恵器36点、土師器36点などが検出されている。1号祭祀のように、土器の完形品が意図的に配置される状況は認められないが、掘り込みの上位面を中心にして礫とともに出土する点は共通している。また、各礫の表面には被熱による赤化・剥離痕が認められ、埋没土中にも焼土のブロック・細粒が存在することから、1号と同様に焚火行為があったことが窺える。

出土遺物は、須恵・土師器の土器類を中心に鉄製品の破片1点が検出されている。土器類を破片総数で見ると、須恵器の坏25点・鉢11点と土師器の甕36点などがあり、その内の完形・半完形品9点について図化した。9の破片の一部は1号祭祀の埋没土中からも出土し、坏を中心にして甕・鉢が少数組成する点は、1号祭祀と類似したあり方を示している。時期的には、1号祭祀と同様に9世紀第3四半期に比定される。

(遺物観察表:135頁、写真:PL46・47)

参考文献

- 板岡正信・他 1987『上野国分寺・尼寺中間地域遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
小島敦子・他 2000『三ツ木里沼遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

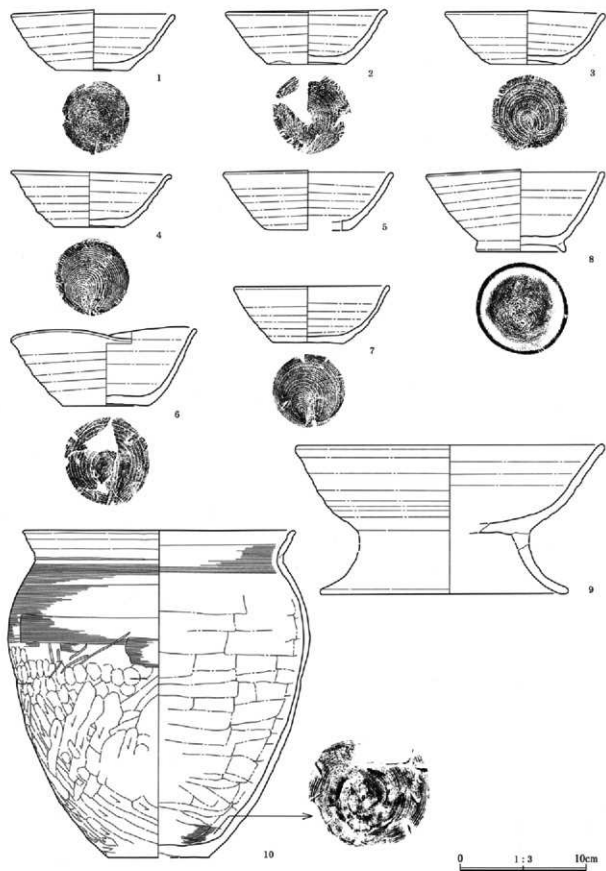


埋没土層

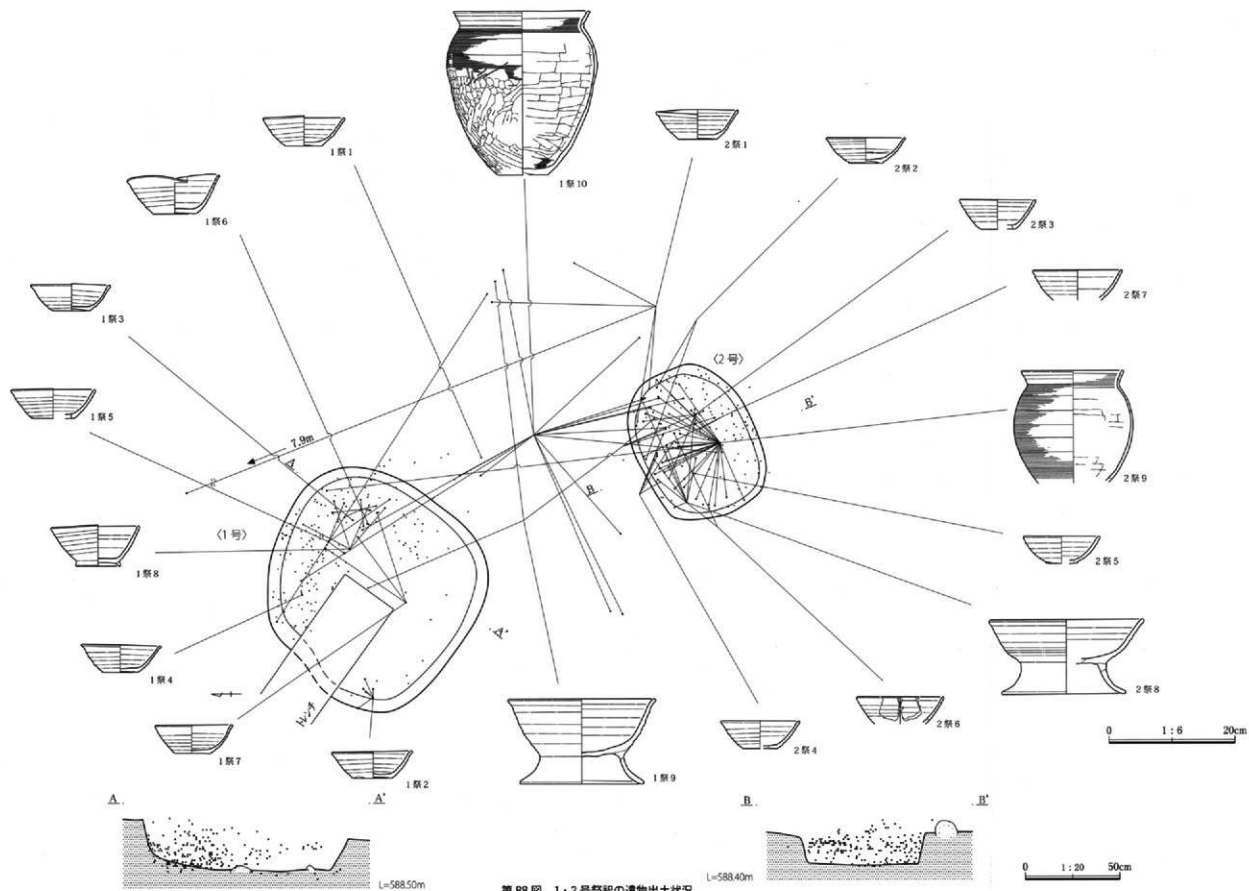
1. 黒褐色土 (10YR2/2) と焼土とが 1 : 1 で混入。炭化物粒を 3 % 前後含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体に焼土粒が 20% 混入。炭化物粒を 1 ~ 2 % 含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体に焼土粒が 10% 混入。炭化物粒を 1 % 含む。
4. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体に焼土粒と炭化物粒が各 5 % 混入。

0 1:30 1m

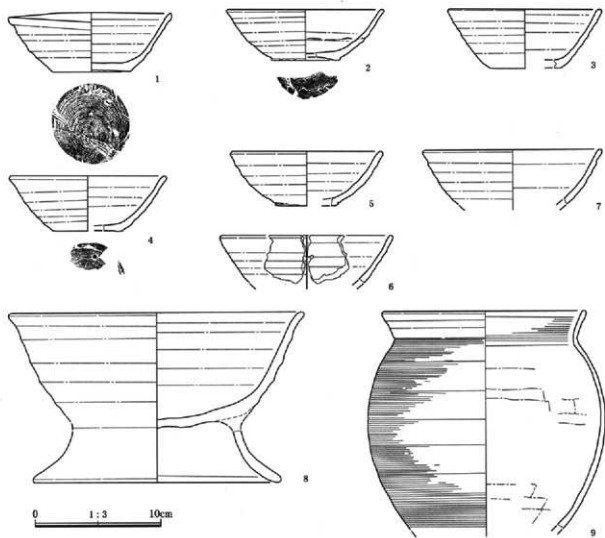
第 86 図 1・2 号祭祀



第 87 图 1号祭祀出土遺物



第88図 1・2号祭祀の遺物出土状況

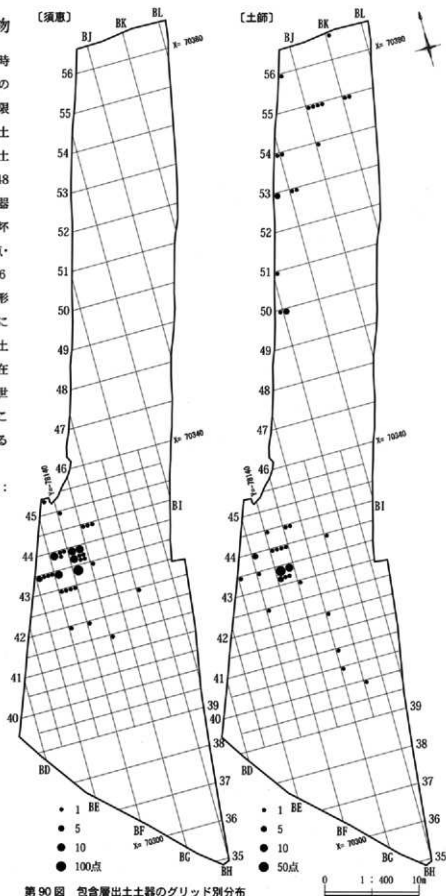


第89圖 2号探紀出土遺物

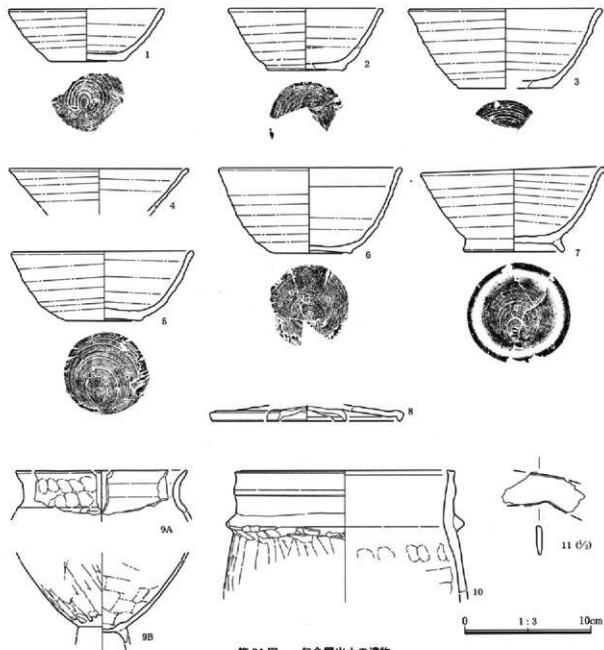
(2) 遺構外の出土遺物

遺構外から出土している平安時代の遺物は、1・2号祭祀遺構の近縁を中心にして1区の南端に限定された範囲に分布し、その出土層位はV層上位に該当する。出土遺物は須恵器114点と土師器48点、不明鉄製品1点がある。土師類の器種別の内訳は、須恵器の坏79点・坏蓋3点・柶18点・甕3点・羽釜2点・鉢9点、土師器の坏6点・甕32点・小形甕2点・小形台付甕8点である。これらの中には、1・2号祭祀出土の須恵・土師器と接合関係を持つものも存在し、また他の土器も時期的に9世紀第3四半期に限定されていることから、祭祀遺構の設置に関わる遺物と考えられる。

(遺物観察表：136頁、写真：PL48)



第90図 包含層出土土器のグリッド別分布



第91図 包含層出土の遺物

5. 近世以降の調査

2区において、炭焼窯1基が検出されたのみである。現在の畑耕作により、炭焼窯本体を含む周辺部は土壌攪乱を受けているため、遺物包含層も存在していない。炭焼窯に伴って出土した遺物はなく、帰属時期を確定することはできないが、旧地権者への聞き取り調査による範囲では、少なくとも昭和期以前の所産であるこ

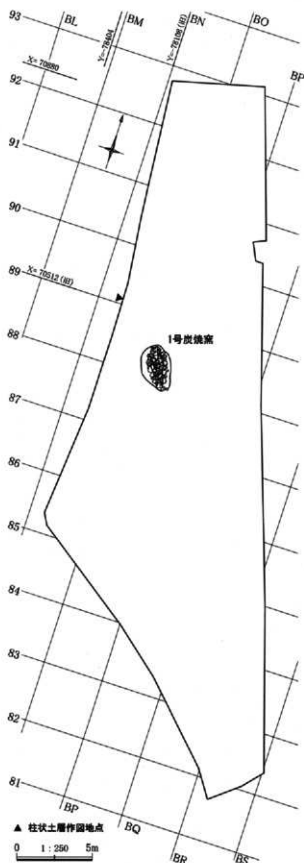
とがほぼ確実である。また、構造的にも赤堀町多田山遺跡群などで検出されている近世期の炭焼窯と類似しており、おそらく近世～明治期に比定される可能性が高いと思われる。

(1) 炭焼窯

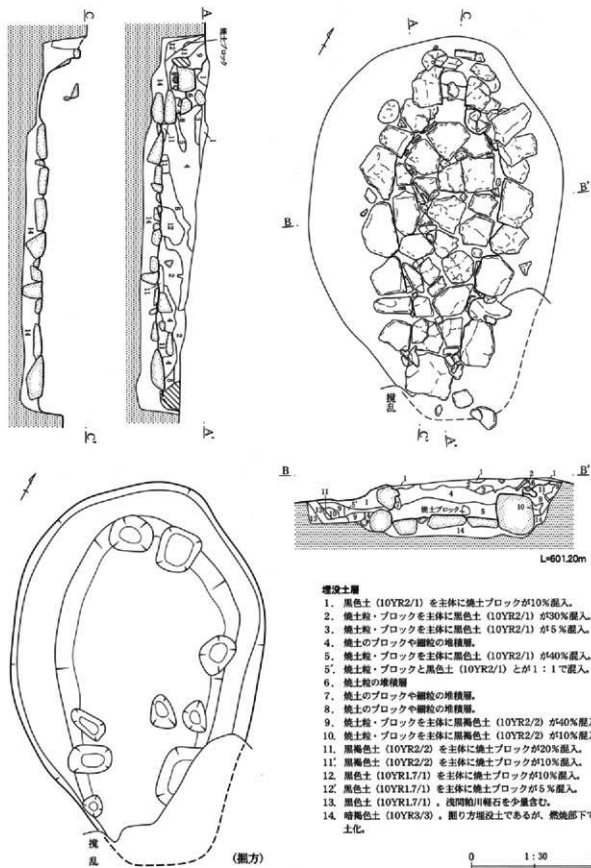
A. 1号炭焼窯

1号炭焼窯は、現在の畑耕作土である20～30cm厚のI層を除去した段階で検出された。後世の攪乱・削平を受けて、燃焼部の底面石敷きや側壁の根石1段を残すのみとなっているが、II層からIII層にかけて30～50cm掘り留めて整地し、西沢川の河床や扇状地礫層内に存在する扁平な粗粒輝石安山岩の亜角礫をドーム状に石積みして燃焼部を造り、その上部を粘質土で被覆する構造を持つと想定される。燃焼部の大きさ・形状は、長径2m、短径0.9mの楕円形状を呈し、奥壁部の下位面には約60～70度の角度で立ち上がる煙道が付設されている。燃焼部の構築方法は、先ず長径3m、短径2m、深さ0.5m程の掘り方を設置した後に、長径30～40cmの石材を横口積みして煙道部スペースを確保しつつ側壁の根石を構築する。そしてその内側に広口面を天地置きして底面の石敷きを施し、側壁2段目からは構造的に安定した小口積みによりドーム構造を完成させるものと思われる。しかし、天井部の構造については、平易・破壊時に石材等の撤去も行われているために、それが石積みなのか、あるいは粘土や土などを用材として構築されていたのかは不明である。煙道の規模は、幅20cm、高さ15cmで、天地・両壁面を石敷きや石積みにより構築されている。また、焚き口部の規模は、幅40cmと狭小である。燃焼部内には、木炭の製品は残存していないが、天井部に何らかの形で用いられていたと推定される焼土化した粘質土が、約20～30cm厚で崩落・堆積している。5'・6'・8'～10'・11'・12'・13層は石積みの裏込め土に相当するが、版築状の堅緻な硬化層は認められないことから、石積みと地山掘り方の間は単純に土が埋填されただけと考えられる。

(写真：PL48・49)



第92図 2区近世以降の遺構配置



第93図 1号灰焼窯

IV 新田西沢・平林遺跡の出土遺物観察一覧

【縄文土器の胎土分類】

- A：多量の透明・半透明の石英と凝灰岩の礫・粗砂、少量の輝石・黒色雲母・赤色安山岩の礫・粗砂などを含む。
- B：多量の白色長石と透明・半透明の石英の礫・粗砂、少量の黒色珪質頁岩と黒色雲母の礫・粗砂などを含む。破断面は階段状を呈し、やや硬質な胎土。
- C：Bタイプに類似するが、夾雑物は全体的に細粒で、やや軟質な胎土。
- D：夾雑物はAタイプに類似するが、その含有量は僅少で胎土に繊維を含有する。

【土師器・須恵器の胎土分類】

- A：白色長石と凝灰岩の礫・粗砂を少量含む。
- B：白色長石の粗・細砂を少量含み、凝灰岩礫はほとんど認められない。器面に小黒斑が多見される。
- C：Bタイプに類似するが、夾雑物は全体的に細粒かつ少量であり、緻密な胎土。
- D：夾雑物はAタイプに類似するが、その含有量は僅少で器面に小黒斑が多見される。
- E：白色長石の細砂を微量に含む極めて緻密な胎土。
- F：白色長石・輝石・石英・雲母の細砂を含む。
- G：Fに類似するが、白色長石細砂の含有量が多く、輝石をほとんど含まない。

【縄文原体の分類】

1. 無節斜縄文

$$a=L \quad b=R$$

2. 単節斜縄文

$$a=L R \quad b=R L$$

3. 複節斜縄文

$$a=L R L \quad b=R L R$$

4. 0段多糸

$$a=R \left\{ \begin{array}{l} L \left\{ \begin{array}{l} r \\ r \\ r \end{array} \right. \\ L \left\{ \begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right. \end{array} \right. \quad a=L \left\{ \begin{array}{l} R \left\{ \begin{array}{l} l \\ l \\ l \end{array} \right. \\ R \left\{ \begin{array}{l} l \\ l \end{array} \right. \end{array} \right.$$

5. 直前段多糸 (1段多糸)

$$a=L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ R \end{array} \right. \quad b=R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \end{array} \right.$$

【縄文時代石器の器種分類】

1. 石 鏃

◎全体形状の分類

- ・1類-基部が平坦な平基無茎鏃。
- ・2類-基部に僅かな抉りをもつ凹基無茎鏃。
- ・3類-石鏃の未製品。
- ・4類-小破片で分類不能なもの。

2. 削器・使用痕のある剥片石器

◎全体形状の分類

- ・1類-円形または縦位楕円形状のもの。
- ・2類-半月形または横位楕円形状のもの。
- ・3類-台形および横位長方形形状のもの。
- ・4類-三角形形状のもの。
- ・5類-逆三角形形状のもの。
- ・6類-縦位長方形形状のもの。
- ・7類-分類不能のもの。

◎加工・使用部位の分類

- ・A類-下端に加工痕あるいは使用痕をもつもの。
- ・B類-片側縁に加工痕あるいは使用痕をもつもの。
- ・C類-両側縁に加工痕あるいは使用痕をもつもの。
- ・D類-下端と片側縁に加工痕あるいは使用痕をもつもの。
- ・E類-下端と両側縁に加工痕あるいは使用痕をもつもの。
- ・F類-全周に加工痕あるいは使用痕をもつもの。

3. 打製石斧

◎全体形状の分類

- ・1類-基部幅と刃部幅との比が1:1.5未満の短冊形。
- ・2類-基部幅と刃部幅との比が1:1.5以上の撥形。
- ・3類-一部中位の抉りが浅い分銅形。
- ・4類-一部中位の抉りが深いノッチ状となる分銅形。
- ・5類-小破片で分類不能なもの。

◎刃部形状の分類

- ・A類-円弧状のもの(円刃)。
- ・B類-平縁状のもの(直刃)。
- ・C類-左側または右側に傾斜するもの(偏刃)。
- ・D類-小破片で分類不能なもの。

◎素材の分類

- ・1類-表裏両面が剥離面で構成されるもの。
- ・2類-片面に原礫面を残すもの。
- ・3類-表裏両面に原礫面を残すもの。

◎残存状態の分類

- ・a類-完形。

- ・b類-基部を欠損するもの(上部1/3を欠損)。
- ・c類-基部~体部中位を欠損するもの(上部1/2を欠損)。
- ・d類-刃部のみが残存するもの(上部2/3を欠損)。
- ・e類-刃部を欠損するもの(下部1/3を欠損)。
- ・f類-刃部~体部中位を欠損するもの(下部1/2を欠損)。
- ・g類-基部のみが残存するもの(下部2/3を欠損)。
- ・h類-左・右側縁部の片側を欠損するもの。
- ・i類-小破片のため部位不明なもの。
- ・j類-基部と刃部を欠損するもの。

4. 凹石・磨石・敲石類

◎形態分類

- ・1類-楕円形状のもの。
- ・2類-円形状のもの。
- ・3類-不定形状のもの。

◎凹穴の分類

- ・A類-両面に1個の凹み穴をもつもの。
- ・B類-両面に2個以上の凹み穴をもつもの。
- ・C類-片面に1個の凹み穴をもつもの。

◎敲打痕の部位による分類

- ・A類-両面の小口に敲打痕をもつもの。
- ・B類-片面の小口に敲打痕をもつもの。
- ・C類-縁辺部に敲打痕をもつもの。
- ・D類-片面の小口と縁辺部に敲打痕をもつもの。

◎磨耗痕の部位による分類

- ・A類-両面に研磨痕をもつもの。
- ・B類-片面に研磨痕をもつもの。
- ・C類-周縁部に研磨痕をもつもの。
- ・D類-両面と周縁部に研磨痕をもつもの。
- ・E類-片面と周縁部に研磨痕をもつもの。
- ・F類-研磨痕をもたないもの。

5. 磨製石斧

◎全体形状の分類

- ・1類-乳棒状のもの。
- ・2類-一定角状のもの。

◎残存状態の分類(打製石斧の分類に同じ)。

《新田西沢遺跡の遺物観察一覽》

縄文時代の遺構・包含層出土遺物 (第27~30回 P.7~16)

土器

番号	出土位置	分類	形状		口縁	底	口径	底径	高さ
			胴形	口縁					
1層-1	AM1.6	花壇下層式	D	○	○				
2層-1	埋没土中	花壇下層式	D		○				
2層-2	埋没土中	花壇下層式	D		○				
2層-3	埋没土中	花壇下層式	D		○				
包-1	包含層	有形式	D		○				
包-2	包含層	有形式	D		○				
包-3	包含層	有形式	D		○				
包-4	AL11	有形式	D		○				
包-5	包含層	有形式	D		○				
包-6	包含層	有形式	D		○				
包-7	AK9	五領台	A		○				

石 匙

番号	出土位置	分類	欠損状態	欠損	石材	重量 (g)	大きさ (cm)	
							長さ	幅
2層-1	埋没土中	横	欠	17	2.6	2.2	2.2	0.8

打製石斧

番号	出土位置	分類	欠損状態	欠損	石材	重量 (g)	大きさ (cm)	
							長さ	幅
13	包含層	2	—	2	f	34.2	5	1.45
14	包含層	2	A	1	c	14	6.3	6.4
15	AM11	1	A	1	a	14	173.5	136.6
16	包含層	2	A	2	a	14	11.3	100.1

石 核

番号	出土位置	分類	欠損状態	欠損	石材	重量 (g)	大きさ (cm)	
							長さ	幅
17	包含層	—	完	14	179.8	5.95	6.4	4.5

凹石・磨石

番号	出土位置	分類	凹穴形状	凹穴	石材	重量 (g)	大きさ (cm)	
							長さ	幅
18	包含層	1	B	C	—	次	5	(199.6)
19	包含層	1	—	C	A	22	555.8	11.6
20	包含層	1	B	C	—	完	22	605.7
21	包含層	2	—	D	—	完	22	396.9

副器 (加工類)

番号	出土位置	加工類	形状	欠損状態	欠損	石材	重量 (g)	大きさ (cm)	
								長さ	幅
1	包含層	F	4	完	14	65.9	7	6.5	
2	包含層	B	3	完	14	21.9	4.2	4.8	
3	包含層	A	4	完	14	7.1	5.6	8.2	
4	包含層	C	6	次	14	(60.5)	(5.7)	4.5	
5	包含層	A	3	完	14	42.2	4.2	8.3	
6	包含層	C	6	次	29	(12.2)	(6.8)	9	

副器 (使用品)

番号	出土位置	加工類	形状	欠損状態	欠損	石材	重量 (g)	大きさ (cm)	
								長さ	幅
7	包含層	C	5	完	14	45.2	6.6	6	
8	包含層	A	4	完	14	39.4	4.7	7.7	
9	包含層	E	6	完	14	28.5	5.4	6	
10	包含層	B	5	完	14	15	2.9	5.7	
11	AL11	A	3	完	14	41.9	4.1	9.7	
12	AM13	A	3	完	29	236	7.9	11.2	

1号住居出土遺物 (第38~46図 P.L.23~27)
土 器

番号	大きさ (cm)	種別 出土状態	①胎土②焼成③色調④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	口(13.4) 高(3.3)	土師器 床面直上	①F②酸化③鈍い黄褐色④1/4	外面 口辺部横溝で、体部側で、底部筒削り。 内面 口辺部横溝で、体~底部横溝で後放射状凹磨き。	平底。
2	口 12.8 高 3.5	土師器 +27	①F②酸化③橙④完形	外面 口辺部横溝で、体~底部筒削り。 内面 口辺部横溝で、体~底部横溝で後放射状凹磨き。	平底。
3	口 13.0 杯底 6.2	須恵器 +4	①A②還元③灰オリーブ④3/4	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	高 3.0
4	口 12.7 杯底 8.0	須恵器 +35	①B②還元③灰④3/4	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。内部底面磨耗痕。	弁柄付着。
5	口 12.0 杯底 6.8	須恵器 +51	①B②還元③灰白④3/4	輪軸整形、外面体部側で調整、底部右回転糸切り。	高 3.0
6	口 12.1 杯底 7.4	須恵器 +33	①A②還元③鈍い黄褐色④完形	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	高 3.0
7	口 12.6 杯底 6.8	須恵器 +20	①A②還元③灰黄④1/8	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	高 2.8
8	口 12.2 杯底 5.5	須恵器 +1	①A②還元③灰白④1/4	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	高 3.4
9	口 11.8 杯底 6.8	須恵器 床面直上	①A②還元③鈍い黄褐色④完形	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	高 3.3
10	口 12.6 杯底 6.6	須恵器 埋没土中	①A②還元③鈍い黄褐色④1/4	輪軸整形、外面底部左回転糸切り。	高 3.7
11	口 12.0 杯底 7.0	須恵器 +1	①A②還元③灰黄④ほぼ完形	輪軸整形、外面体部側で調整、底部右回転糸切り。	高 3.5
12	口 12.3 杯底 6.2	須恵器 床面直上	①A②還元③灰④ほぼ完形	輪軸整形、外面底部左回転糸切り。	高 3.4
13	口 12.7 杯底 6.6	須恵器 床面直上	①C②還元③灰白④ほぼ完形	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	内面底部磨耗痕 煤付着。高3.3
14	口 11.9 杯底 5.8	須恵器 +29	①A②還元③淡黄④3/4	輪軸整形、外面体部側で調整、底部左回転糸切り。	高 3.5
15	口(12.0) 杯底 5.8	須恵器 +29	①A②還元③鈍い黄褐色④1/2	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	内面弁柄付着。 高 3.5
16	口 12.3 杯底 6.2	須恵器 埋没土中	①A②還元③鈍い黄褐色④3/4	輪軸整形、外面底部左回転糸切り。	高 3.7
17	口 12.2 杯底 6.6	須恵器 +21	①A②還元③橙④1/2	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	高 3.8
18	口 12.8 杯底 6.4	須恵器 +29	①A②酸化③淡黄褐色④5/6	輪軸整形、外面底部右回転糸切り。	高 3.6
19	口 12.5 杯底 6.3	須恵器 +64	①A②還元③淡黄④ほぼ完形	輪軸整形、外面体部側で調整、底部左回転糸切り。	内面底部に黒剤 高 4.0
20	口(16.0) 杯	須恵器 埋没土中	①A②還元③鈍い黄褐色④口縁~ 体部1/6	輪軸整形、内面体部側で調整。	
21	口(16.7) 埴底(7.8)	須恵器 +21	①A②酸化③橙④1/3	輪軸整形、外面底部静止糸切りか。付け高台。	高 6.2
22	埴底 7.0	須恵器 +1	①A②還元③鈍い黄褐色④底部	輪軸整形、底部右回転糸切り後付け高台。	内面底部磨耗痕 弁柄付着。
23	口(16.0)	黒色土器 埋没土中	①F②酸化③鈍い黄褐色④口縁~ 体部1/5	輪軸整形、外面体部側で調整、内面体部凹磨き。	内黒。
24	口(16.0)	黒色土器 埋没土中	①F②酸化③明黄褐色④口縁~ 体部	輪軸整形、外面体部側調整、内面体部凹磨き。	内黒。
25	口 15.0 皿底 6.1	須恵器 +17	①A②還元③灰オリーブ④ほぼ 完形	輪軸整形、外面体部側で調整、内面底部右回転糸切り。	高 2.7
26	口(15.0) 皿	須恵器 埋没土中	①C②還元③灰オリーブ④口縁 ~体部1/4	輪軸整形、口縁部輪花か。	内面煤付着。
27	口 13.5 高台付皿 底 7.0	須恵器 +27	①A②還元③鈍い黄褐色④完形	輪軸整形、底部右回転糸切り後付け高台。	高 3.3
28		須恵器 埋没土中	①C②還元③淡黄④破片	輪軸整形。	

番号 器形	大きさ	種別 出土状態	①胎土②焼成③色調④埋存	成・整形技法の特徴	備考
29 壺		須恵器 +29	①E②還元③灰④頸～胴部上半	輪縁整形。外面胴部9本の沈線。胴中位回転筋削り調整。 内面頸部に指頭痕あり。胴直線で調整。	
30 壺	底 10.6	須恵器 灰面直上	①A②還元③灰④底部	外面底部縁回転筋削り調整後付け高台。	内外面底部に自然釉。
31 壺	底 9.4	灰粘陶器 +17	①E②還元③灰④頸～底部2/3	輪縁整形。外面胴部下回転筋削り調整。底部回転筋削り 調整後付け高台。	内面底部に自然釉。
32 壺	底 10.4	須恵器 +56	①C②還元③灰④頸～底部1/2	輪縁整形。外面肩部回転筋削り調整。底部付近直線で調整。 内面肩部指頭痕。胴部下直線で調整。底部直線のみ。	内面に黒色の付着物あり。 漆か
33 壺		須恵器 +42	①A②酸化③灰④頸～胴部上 半1/2	輪縁整形。外面頸部に1本の沈線。胴部上半直線で調整。 中央部に4本の沈線。下半回転筋削り調整後部分的に施で、 内面肩部指頭痕。胴部粘土接合部分に塗押さえ痕。	
34 横瓶	口 14.4 高 28.2	須恵器 +35	①A②酸化③純い赤褐色④5	口辺部横線で。外面胴部平行印き後直線で調整。内面無文あ て具痕。製作技法は壺型体系は1/2各に作り。一方に円形 の穴をあけ次に口縁部を乗せる。最後に円形の穴をふさぐ。	住居内からの出土は珍 しい。
35 小型 台付壺	口(10.6)	土師器 灰面直上	①F②酸化③橙④口縁～台部上 半1/2	外面 口辺部横線で。胴部下直線削り。 内面 口辺部横線で。胴部下直線削り。	胴部上半は唐減
36 小型壺	口(11.4)	土師器 +13	①F②酸化③純い赤褐色④口縁～ 胴部上半	外面 口辺部横線で。胴部上半横線削り。 内面 口辺部横線で。胴部上半横線で。	
37 壺	口(14.8)	土師器 +37	①F②酸化③橙④口縁～胴部上 半1/5	外面 口辺部横線で。胴部上位横線削り。中位斜線削り。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	
38 壺	口 13.4 底 (6.2)	土師器 灰面直上	①F②酸化③純い赤褐色④1/2	外面 口辺部横線で。胴部上半斜線削り。下半縦線削り。 内面 口辺部横線で。胴部直線削り。	高 17.7
39 壺	口(15.0)	土師器 埋没土中	①F②酸化③橙④口縁～胴部上 半	外面 口辺部横線で。胴部上半斜線削り。中位縦線削り。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	
40 壺	口 20.6	土師器 +49	①F②酸化③橙④口辺部片	外面 口辺部横線で。肩部横線削り。 内面 口辺部横線で。肩部横線削り。	
41 壺	口 20.0 底 3.5 高 26.8	土師器 +35	①F②酸化③橙④2/3	外面 口辺部横線で。肩部横線削り。胴部縦線削り。底部 横線削り。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	コの字口縁
42 壺	口(20.4)	土師器 +38	①F②酸化③橙④口縁～胴部上 半	外面 口辺部横線で。胴部上半斜線削り。下半縦線削り。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	外面に炭化物付着
43 壺	口 21.6 底 3.8 高 26.3	土師器 +37	①F②酸化③橙④4/5	外面 口縁部に沈線。口辺部横線で。胴部上位横線削り。 中～下位縦線削り。底部斜線削り。 内面 口縁部横線で。胴部横線削り。	コの字口縁
44 壺	口 21.1 底 4.3 高 27.6	土師器 +21	①F②酸化③橙④2/3	外面 口辺部横線で。胴部上位横線削り。中～下位縦線削り。 底部斜線削り。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	コの字口縁
45 壺	口 22.4 底 3.6 高 27.6	土師器 +45	①F②酸化③橙④1/2	外面 口辺部横線で。胴部上位横～斜線削り。中～下位縦 線削り。底部横線削り。2次焼成による滲みが大い。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	コの字口縁
46 壺	底 3.7	土師器 +33	①F②酸化③橙④胴部下位～底 部1/3	外面 胴部縦線削り。底部斜線削り。 内面 胴部横線削り。	
47 壺	口(21.0)	土師器 +19	①F②酸化③橙④口縁～胴部上 半1/4	外面 口辺部横線で。胴部上位横線削り。中位縦線削り。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	コの字口縁
48 壺	口 19.8	土師器 +26	①F②酸化③橙④口縁～胴部 1/2	外面 口辺部横線で。胴部上位横線削り。中～下位縦線削り。 内面 口辺部横線で。胴部横線削り。	コの字口縁
49 壺	口(22.2)	土師器 +21	①F②酸化③橙④口縁～肩部 1/6	外面 口辺部横線で。肩部横線削り。 内面 口辺部横線で。肩部横線削り。	コの字口縁
50 小型壺	底 (8.6)	須恵器 埋没土中	①A②酸化③純い褐色④胴部下 ～底部	輪縁整形。外面胴部下直線で調整。底部回転筋削り切りか。	
51 壺		須恵器 +12	①D②還元③灰④胴部片	輪縁整形。外面上半に自然釉。	
52 壺	口(28.0)	須恵器 +27	①A②還元③灰④口縁～胴部上 位1/6	輪縁整形。外面胴部平行印き。内面胴部無文あて具痕。	
53 壺		須恵器 +21	①C②還元③灰④頸部～胴部上 半1/4・胴部中位1/4	輪縁整形。外面胴部平行印き自然釉。内面胴部無文あて具 痕直線で調整。	
54 壺	口(24.8)	須恵器 +31	①A②還元③灰④口縁～胴部上 位	輪縁整形。外面胴部平行印き直線で調整。内面胴部あて具 痕直線で調整。	
55 壺	口 26.8 底 19.1	須恵器 灰面直上	①A②還元③灰④完形	輪縁整形。口縁部沈線2本。外面胴部平行印き。内面胴部 青濁紋文。	高 42.0

番号 器形	大きさ	種別 出土状態	①胎土②焼成③色調④残存	成・整形技法の特徴	備考
56 甕	口(23.6)	須恵器 +23	①A②酸化③鈍い黄褐色④口縁～ 胴部上位	輪轉整形。外面胴部平行叩き、内面胴部無文あて具痕。	
57 甕	口(25.8)	須恵器 +19	①A②還元③黄灰④口縁～胴部	輪轉整形。外面胴部撫で調整、内面胴部無文あて具痕。	
58 甕	口33.6	須恵器 +20	①A②還元③灰黄④口辺部2/3	輪轉整形。内外面に自然釉。	
59 甕	口(34.2)	須恵器 +41	①A②還元③鈍い赤褐④口辺部 1/5	輪轉整形。口縁部に2本の沈線。	
60 甕		須恵器 +35	①A②還元③灰④胴部片	輪轉整形。外面平行叩き、内面無文のあて具痕。	
61 甕	口(25.8)	土師器 埋没土中	①F②酸化③鈍い黄褐色④口辺部 片	輪轉整形。	
62 鉢	口(28.0)	黒色土師 +29	①F②酸化③鈍い黄褐色④口辺部 片	輪轉整形。外面横撫で、内面寛磨き。	内黒。
63 甕	底(24.0)	須恵器 埋没土中	①A②還元③灰白④底部片	輪轉整形。外面裾部強い薦押さえによる凹線二段、内面 下端に面取り。	

石

番号	器種	①長さ ②厚さ ③幅 ④重量	出土状態	石材コード	形状・調整加工の特徴
64	砥石	①(9.0)②2.9③4.1④124.0	+2	38	4面とも良く研磨されている。1面にのみ覆付着。

鉄器

番号	器種	①長さ ②厚さ ③幅 ④重量	出土状態	辨	要
65	釘	①6.2②0.3～0.5③0.4～0.6④4.0	+15		突形。先端に狭み部を持つ。断面は四角形。
66	釘	①(5.9)②0.4～0.6③0.5～0.7④6.0	+14		下端部欠損。先端に狭み部を持つ。断面は四角形。

石材コード一覧表

石材コード	石材	石材コード	石材	石材コード	石材	石材コード	石材
1	灰色安山岩	11	黄質蛇紋岩	20	黄輝緑岩	31	二ツ岳軽石
2	玉髓	12	石英	22	粗粒輝石安山岩	32	珪化凝灰岩
3	赤碧玉	13	流紋岩	23	珪質変質岩	33	砂岩
4	頁岩	14	黒色頁岩	24	緑色片岩	34	安山岩質凝灰岩
5	珪質頁岩	15	黒曜石	25	花崗岩	35	軽石
6	硬質頁岩	16	チャート	26	硬質泥岩	36	デイサイト質凝灰岩
7	点紋頁岩	17	黒色安山岩	27	雲母石英片岩	37	デイサイト溶結凝灰岩
8	変玄武岩	18	細粒輝石安山岩	28	安山岩ガラス	38	変質デイサイト
9	変質玄武岩	19	はんれい岩	29	石英閃緑岩		
10	蛇紋岩	20	褐色碧玉	30	変質安山岩		

《新田平林遺跡の遺物観察一覽》

縄文時代の遺構・包含層出土遺物 (第57～73、76～84図 P.132～45)

土器

番号	出土位置	分類	縄文	層位	口縁	底位	口径	底径	高さ
1	B F 4 3 d	加群細形式土器	2b	A	O	O			
2	B F 4 4 a	加群細形式土器	2b	A	O	O			
3	1 K	加群細形式土器	2b	A	O	O			
4	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	C	O	O			(30.0)
5	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			
6	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	C	O	O			
7	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			
8	B 1 5 4	加群細形式土器	2a	A	O	O			
9	B G 4 2 a	加群細形式土器	2b	A	O	O			
10	B F 4 1 d	加群細形式土器	2b	B	O	O			
11	B F 4 3 b	加群細形式土器	2b	A	O	O			
12	B F 4 4 b	加群細形式土器	2b	B	O	O			
13	B F 4 4 b	加群細形式土器	2b	B	O	O			
14	1 K	加群細形式土器	2b	B	O	O			
15	B 1 5 4	加群細形式土器	4a	A	O	O			
16	B E 4 4 c	加群細形式土器	4a	A	O	O			(34.0)
17	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	C	O	O			
18	B 1 5 3	加群細形式土器	2a	A	O	O			
19	B 1 5 3	加群細形式土器	2b	B	O	O			
20	B 1 5 4	加群細形式土器	2a	A	O	O			
21	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	B	O	O			
22	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			
23	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			
24	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			
25	B 1 5 4	加群細形式土器	1a	A	O	O			
26	B 1 5 4	加群細形式土器	1a	B	O	O			
27	B 1 5 4	加群細形式土器	1a	A	O	O			
28	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			
29	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	C	O	O			
30	B 1 5 4	加群細形式土器	2a	C	O	O			
31	B 1 5 4	加群細形式土器	2a	C	O	O			
32	B 1 5 4	加群細形式土器	1a	A	O	O			
33	B 1 5 4	加群細形式土器	1a	C	O	O			
34	B 1 5 4	加群細形式土器	1a	A	O	O			
35	B 1 5 4	加群細形式土器	1b	A	O	O			(6.8)
36	1 K	加群細形式土器	A	O	O	O			(7)
37	B F 4 4 b	加群細形式土器	A	O	O	O			(9)
38	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	B	O	O			
39	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			
40	B 1 5 4	加群細形式土器	2b	A	O	O			

番号	出土位置	分類	縄文	層位	口縁	底位	口径	底径	高さ
41	B 1 5 4	加群細形式土器	2a	B	O	O			
42	B K 5 4	加群細形式土器	1a	B	O	O			
43	B L 5 2	加群細形式土器	2b	B	O	O			
44	B K 5 4	加群細形式土器	1a	A	O	O			
45	B K 5 4	加群細形式土器	2a	B	O	O			
46	B K 5 3	加群細形式土器	1a	B	O	O			
47	B F 4 3 d	加群細形式土器	A	O	O	O			
48	B F 4 4 a	加群細形式土器	1a	A	O	O			
49	B K 5 4	加群細形式土器	2b	B	O	O			
50	B K 5 4	加群細形式土器	2b	B	O	O			
51	B F 4 4 b	加群細形式土器	A	O	O	O			(30.0)
52	B K 5 5	加群細形式土器	1a	A	O	O			
53	B E 4 4 c	加群細形式土器	A	O	O	O			
54	B K 5 4	加群細形式土器	B	O	O	O			
55	B J 5 3	加群細形式土器	A	O	O	O			
56	B J 5 3	加群細形式土器	B	O	O	O			
57	B K 5 4	加群細形式土器	A	O	O	O			
58	B K 5 4	加群細形式土器	B	O	O	O			
59	B L 5 5	加群細形式土器	B	O	O	O			
60	B G 3 8 d	加群細形式土器	A	O	O	O			
61	1 K	加群細形式土器	2b	A	O	O			
62	B G 4 9 d	加群細形式土器	2a	A	O	O			
63	B K 5 4	加群細形式土器	A	O	O	O			(7.2)
64	B E 4 4 c	加群細形式土器	2a	A	O	O			
65	B F 4 4 c	加群細形式土器	2a	A	O	O			
66	B K 5 3	加群細形式土器	1a	B	O	O			
67	B L 5 5	加群細形式土器	2b	B	O	O			
68	B G 3 9 b	加群細形式土器	2a	A	O	O			
69	B K 5 1	加群細形式土器	2b	B	O	O			
70	B L 5 5	加群細形式土器	2b	B	O	O			
71	B K 5 5	加群細形式土器	2a	B	O	O			(44)
72	B F 4 4 b	加群細形式土器	B	O	O	O			
73	B K 5 3	加群細形式土器	2b	A	O	O			
74	B J 5 5	加群細形式土器	1a	A	O	O			
75	B K 5 2	加群細形式土器	1a	A	O	O			
76	B J 4 9	加群細形式土器	2a	A	O	O			
77	1 K	加群細形式土器	A	O	O	O			
78	B L 5 3	加群細形式土器	2a	B	O	O			
79	B F 4 4 b	加群細形式土器	A	O	O	O			(8)
80	B K 5 5	加群細形式土器	A	O	O	O			
81	B G 4 9 a	加群細形式土器	A	O	O	O			
82	B K 6 3	加群細形式土器	1b	A	O	O			
83	1 K	赤名寺1式土器	2a	B	O	O			
84	1 K	赤名寺1式土器	2a	A	O	O			
85	B F 4 2 b	赤名寺1式土器	2b	A	O	O			

番号	出仕位置	分類	職名	職士	型別	口勝	部位	大きさ (cm)	
								口勝	高さ
86	BF 4.1 C	称名寺 1 式 2 類	2a	A	O				
87	B J 5.6	称名寺 1 式 3 類	2b	A	O				
88	B J 5.5	称名寺 1 式 4 類		A	O				
89	B J 5.5	称名寺 1 式 4 類		A	O				
90	BF 4.3 b	称名寺 1 式 1 類	2b	A	O				(26)
91	BF 4.2 d	称名寺 1 式 2 類		A	O				
92	BF 4.3 a	称名寺 1 式 2 類		A	O				
93	BF 4.4 b	称名寺 1 式 2 類		A	O				
94	BF 4.2 b	称名寺 1 式 2 類		A	O				
95	BF 4.2 c	称名寺 1 式 2 類		A	O				
96	BF 4.2 c	称名寺 1 式 2 類		A	O				
97	1 K	称名寺 1 式 3 類		A	O				
98	BF 4.2 d	称名寺 1 式 3 類		A	O				
99	BF 4.3 a	称名寺 1 式 1 類	2a	B	O				
100	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類	2a	B	O				
101	BF 4.3 c	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
102	BF 4.2 c	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
103	B G 3.9 d	称名寺 1 式 1 類	2a	B	O				
104	BF 4.4 b	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
105	BF 4.3 a	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
106	BF 4.1 d	称名寺 1 式 1 類		A	O				
107	BF 4.4 c	称名寺 1 式 1 類		A	O				
108	BF 4.1 d	称名寺 1 式 1 類		A	O				
109	1 K	称名寺 1 式 1 類		A	O				
110	B G 3.9 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
111	BF 4.3 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
112	B H 8.0	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
113	B E 4.1 C	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
114	1 K	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
115	BF 4.1 b	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
116	1 K	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
117	1 K	称名寺 1 式 1 類	2a	B	O				
118	1 K	称名寺 1 式 1 類	2a	B	O				
119	B E 4.3 d	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
120	BF 4.1 d	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
121	B G 4.0 c	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
122	1 K	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
123	BF 4.2 c	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
124	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
125	1 K	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
126	BF 4.3 b	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
127	BF 4.3 b	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
128	B E 4.3 c	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
129	1 K	称名寺 1 式 1 類		A	O				
130	B I 5.4	称名寺 1 式 1 類	1a	A	O				
131	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				

番号	出仕位置	分類	職名	職士	型別	口勝	部位	大きさ (cm)	
								口勝	高さ
132	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類	2a	B	O				
133	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
134	B G 4.2 a	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
135	B E 4.3 c	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
136	1 K	称名寺 1 式 1 類		B	O				
137	B E 4.3 c	称名寺 1 式 1 類		A	O				
138	B G 4.0 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
139	B E 4.4 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
140	B G 4.1 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
141	BF 4.3 b	称名寺 1 式 1 類		B	O				
142	1 K	称名寺 1 式 1 類		B	O				(28.4)
143	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
144	B G 4.1 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
145	B G 4.2 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
146	BF 4.3 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
147	1 K	称名寺 1 式 1 類		A	O				
148	B E 4.4 c	称名寺 1 式 1 類		A	O				
149	1 K	称名寺 1 式 1 類		A	O				
150	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類		B	O				
151	B G 4.0 c	称名寺 1 式 1 類		A	O				
152	B G 3.9 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
153	BF 4.3 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
154	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類		B	O				
155	B G 4.0 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
156	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類		B	O				
157	1 K	称名寺 1 式 1 類		A	O				
158	B G 4.2 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
159	B G 3.9 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				
160	B E 4.2 c	称名寺 1 式 1 類		A	O				
161	1 明配石	称名寺 1 式 1 類		A	O				
162	B K 5.2	称名寺 1 式 1 類		A	O				
163	B J 5.5	称名寺 1 式 1 類		A	O				
164	BF 4.4 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
165	B I 5.5	称名寺 1 式 1 類		A	O				
166	B J 5.1	称名寺 1 式 1 類	2b	A	O				
167	1 K	称名寺 1 式 1 類		A	O				
168	B I 5.5	称名寺 1 式 1 類		A	O				
169	B J 5.2	称名寺 1 式 1 類		A	O				
170	BF 4.4 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
171	B I 5.3	称名寺 1 式 1 類		B	O				
172	1 K	称名寺 1 式 1 類	2a	A	O				
173	B J 3.9 c	称名寺 1 式 1 類		A	O				
174	B G 4.1 a	称名寺 1 式 1 類		A	O				
175	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類		B	O				
176	BF 4.1 d	称名寺 1 式 1 類		C	O				
177	B G 4.0 b	称名寺 1 式 1 類		A	O				

番号	出土位置	分類	縄文	遺跡	口縁	裾部	部位	口径	高さ
224	B F 4 4 a	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
225	B F 4 4 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
226	B F 4 1 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
227	B F 4 3 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
228	B J 5 a	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
229	B K 5 3	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
230	B G 4 0 d	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
231	B E 4 5 d	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
232	B E 4 3 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
233	B G 3 9 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
234	B F 4 3 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
235	1 K	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
236	B G 4 0 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
237	B G 4 0 a	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
238	B E 4 3 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
239	B G 4 0 d	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
240	1 K	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
241	B G 4 0 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
242	B G 4 0 d	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
243	B E 4 4 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
244	B G 4 1 a	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
245	B G 4 0 c	甕之内1式6番	B	○	○	○	口縁		
246	B F 4 4 a	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
247	B E 4 4 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
248	B G 4 0 a	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
249	1 K	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
250	B G 4 0 d	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
251	B G 3 9 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
252	B F 4 2 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
253	B G 4 1 a	甕之内1式6番	B	○	○	○	口縁		
254	1 K	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
255	B G 4 0 b	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
256	1 K	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
257	B G 4 1 a	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
258	B G 3 9 c	甕之内1式6番	B	○	○	○	口縁		
259	B G 4 0 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
260	1 K	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
261	B J 5 5	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
262	B E 4 4 c	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
263	1 K	甕之内1式6番	A	○	○	○	口縁		
264	B J 5 5	甕之内1式6番	B	○	○	○	口縁		
265	B F 4 1 d	甕之内1式7A番	2a	○	○	○	口縁		
266	B F 4 4 b	甕之内1式7A番	2a	○	○	○	口縁		
267	1 K	甕之内1式7B番	A	○	○	○	口縁		
268	B E 4 3 b	甕之内1式7B番	A	○	○	○	口縁		
269	B J 5 5	甕之内1式7B番	A	○	○	○	口縁		

番号	出土位置	分類	縄文	遺跡	口縁	裾部	部位	口径	高さ
178	B K 5 4	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
179	B F 4 4 a	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
180	B F 4 3 b	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
181	B G 4 0 b	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
182	1 K	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
183	B G 4 0 b	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
184	B F 4 3 a	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
185	B E 4 4 c	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
186	B F 4 3 b	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
187	B G 4 0 d	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
188	B G 4 0 b	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
189	1 K	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
190	B F 4 3 b	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
191	B J 5 0	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
192	B K 5 5	甕之内1式1F番	1a	○	○	○	口縁		
193	B K 5 4	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
194	B G 4 1 d	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
195	B J 5 5	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
196	B I 5 4	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
197	1 K	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
198	B I 5 0	甕之内1式1F番	1a	○	○	○	口縁		
199	1 K	甕之内1式1F番	A	○	○	○	口縁		
200	B G 4 3 a	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
201	B E 4 3 d	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
202	1 K	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
203	B G 4 1 a	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
204	1 K	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
205	B F 4 4 a	甕之内1式1F番	2a	○	○	○	口縁		
206	B G 4 5 b	甕之内1式2番	A	○	○	○	口縁		
207	B H 5 2	甕之内1式2番	A	○	○	○	口縁		
208	B G 4 0 b	甕之内1式2番	2a	○	○	○	口縁	0254D	
209	B F 4 3 b	甕之内1式2番	2a	○	○	○	口縁		
210	B F 4 2 c	甕之内1式2番	2a	○	○	○	口縁		
211	B E 4 5 d	甕之内1式2番	2a	○	○	○	口縁		
212	1 K	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁	0243D	
213	B G 4 0 c	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
214	B F 4 2 a	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
215	B F 4 2 d	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
216	B E 4 3 c	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
217	B F 4 1 d	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
218	1 K	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
219	1 K	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
220	B G 4 0 a	甕之内1式3番	A	○	○	○	口縁		
221	B F 4 3 d	甕之内1式4番	2a	○	○	○	口縁	0244D	
222	B G 4 1 b	甕之内1式5番	2a	○	○	○	口縁		
223	B F 4 1 d	甕之内1式5番	A	○	○	○	口縁		

番号	出仕位置	分類	職文	階級	口歴	部位	高さ
313	B155	職之内1式B類	2a	A	O		高さ
314	BK33	職之内1式B類	2a	A	O		
315	BE43c	職之内1式C類	2a	A	O		
316	1K	職之内1式B類	2a	A	O		
317	BG41a	職之内1式B類	1a	C	O		
318	BE43d	職之内1式B類	2a	A	O		
319	1K	職之内1式B類	2a	A	O		
320	BG40c	職之内1式B類	1a	A	O		
321	1K	職之内1式B類	2a	A	O		(7)
322	BF43b	職之内1式D類	A	O	O		
323	BF42d	職之内1式D類	A	O	O		(9)
324	BG42b	職之内1式D類	A	O	O		(10a)
325	BF43b	職之内1式D類	A	O	O		(7)
326	BG40c	職之内1式D類	A	O	O		(8)
327	1K	職之内1式D類	A	O	O		(5.8)
328	B154	職之内1式D類	A	O	O		
329	BK32	職之内1式D類	A	O	O		
330	B153	職之内1式10類	A	O	O		(30b)
331	B154	職之内1式1類	A	O	O		
332	B154	職之内1式1類	A	O	O		
333	BF44b	職之内1式1類	A	O	O		
334	BG40a	職之内1式1類	2a	A	O		
335	BE45d	職之内1式1類	A	O	O		
336	B153	職之内1式2類	1a	A	O		
337	BF43b	職之内1式2類	1a	A	O		
338	BG42b	職之内1式2類	1a	A	O		
339	BE41a	職之内1式2類	2a	A	O		
340	BG43b	職之内1式2類	2a	A	O		
341	BE43c	職之内1式2類	A	O	O		
342	BF41d	職之内1式2類	A	O	O		
343	BF43b	職之内1式2類	A	O	O		
344	BF42a	職之内1式2類	2a	A	O		
345	BE43c	職之内1式2類	A	O	O		
346	BG37c	職之内1式2類	A	O	O		
347	B150	加俸B1	A	O	O		(19.8)
348	B151	加俸B1	A	O	O		
349	B153	加俸B1	2a	A	O		
350	BF56	加俸B1	B	O	O		
351	B153	米式7	A	O	O		(10d)
352	BH50	土鍋	A	O	O		
353	BH50	土鍋	A	O	O		
354	BF43c	土鍋	A	O	O		

番号	出仕位置	分類	職文	階級	口歴	部位	高さ
270	1K	職之内1式C類	A	O	O		高さ
271	BE43d	職之内1式D類	A	O	O		
272	B154	職之内1式D類	A	O	O		
273	BE43c	職之内1式D類	A	O	O		
274	BF42d	職之内1式D類	A	O	O		
275	1K	職之内1式D類	A	O	O		
276	B153	職之内1式E類	A	O	O		
277	B151	職之内1式E類	A	O	O		
278	B152	職之内1式E類	B	O	O		
279	B153	職之内1式E類	A	O	O		
280	B148	職之内1式E類	A	O	O		
381	BE43c	職之内1式F類	A	O	O		
382	BF43b	職之内1式F類	A	O	O		
283	BE43c	職之内1式8類	A	O	O		
284	BF43a	職之内1式8類	A	O	O		
285	1K	職之内1式9類	2a	A	O		
286	1K	職之内1式9類	2a	A	O		
287	BG40d	職之内1式9類	2a	A	O		
288	BF41a	職之内1式9類	1a	A	O		
289	BF43a	職之内1式9類	2a	A	O		
290	BE44c	職之内1式9類	2a	A	O		
291	BF41d	職之内1式9類	2a	A	O		
292	BF42c	職之内1式9類	2a	A	O		
333	1K	職之内1式9類	2a	A	O		
334	BG41a	職之内1式9類	2a	A	O		
295	BE43d	職之内1式9類	2a	A	O		
296	BE45d	職之内1式9類	2a	A	O		
297	BG41b	職之内1式9類	2a	A	O		
298	BG41b	職之内1式9類	2a	A	O		
299	B154	職之内1式9類	1a	A	O		
300	B154	職之内1式9類	2a	A	O		
301	BF44b	職之内1式9類	B	O	O		
302	BF43a	職之内1式9類	A	O	O		
303	BF44a	職之内1式9類	A	O	O		
304	BE41c	職之内1式9類	A	O	O		
305	BF42b	職之内1式9類	A	O	O		
306	BG43b	職之内1式9類	A	O	O		
307	BF43b	職之内1式9類	A	O	O		
308	BF41d	職之内1式9類	B	O	O		
309	BF44b	職之内1式9類	A	O	O		
310	1K	職之内1式9類	A	O	O		
311	BG40a	職之内1式9類	A	O	O		
312	BE44d	職之内1式9類	A	O	O		

石盤

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ
1	B152	4	欠	17	(1.3)	(2.3)	(2.2)	0.35
2	B150	4	欠	16	0.8	2.4	1.9	0.35
3	B154	1	欠	17	1.2	2.4	1.7	0.4
4	1区	1	欠	14	12.5	3.86	3.23	1.15
5	1区	1	欠	15	(0.5)	(1.6)	1.1	0.45
6	BH53	3	欠	17	3.9	2.5	2.3	0.95

石盤

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ
7	B155	1	欠	5	4.9	4.5	2.5	0.6

附録(加工用)

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)	
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ	
8	B243b	B	4	欠	5	2.1	2.05	2.15	0.95
9	B244a	D	3	欠	14	54	7.4	5.4	1.45
10	B242b	B	5	欠	14	13.2	4.2	4	1.1
11	B164	C	4	欠	14	38.3	4.66	5.54	1.35
12	B164	B	5	欠	14	18.7	4.3	4.2	1.1
13	B153	B	1	欠	14	6.8	4.86	2.13	0.95
14	BH52	D	3	欠	14	43.7	5.1	4.86	1.65
15	B153	B	2	欠	20	2.3	1.85	2.29	0.61
16	BH50	C	6	欠	14	13.5	5.1	3.1	0.7
17	B149	B	1	欠	18	20.8	6.3	3.4	1
18	BK55	B	4	欠	14	26.5	4.12	4.72	0.74

附録(使用用)

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)	
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ	
19	B244b	A	4	欠	14	9.6	3.6	3.3	0.85
20	1区	A	3	欠	5	(1.8)	(2)	2.25	0.55
21	B241b	A	4	欠	5	8.9	6.3	2.6	0.5
22	B243c	B	5	欠	5	15.1	4.4	3.6	1.2
23	B240c	A	3	欠	5	11.7	2.5	4.4	1.1
24	B240a	B	4	欠	14	17.9	4.3	4.5	1.25
25	B244a	E	5	欠	14	23.8	7.2	3.8	3.8
26	B240a	D	2	欠	14	21.8	4.4	7.8	0.7
27	B242a	A	4	欠	14	24.8	4.7	7.6	1
28	B243a	A	6	欠	14	23.5	5.8	5.7	0.85
29	B240b	A	4	欠	17	8.6	2.6	2.7	1.15
30	B154	D	2	欠	14	109.1	7.3	8.34	2.39
31	B154	B	1	欠	14	140	9.15	6.2	2.21
32	B154	E	1	欠	5	4.6	2.91	2.47	0.55
33	B154	E	2	欠	14	47.3	5.98	9.68	1.15
34	BH52	D	1	欠	5	5.5	3	2.29	0.72
35	B242d	A	2	欠	17	31.7	4.4	6	1.5
36	1区	E	2	欠	14	28.8	4.7	5.2	1.2
37	B152	A	4	欠	14	28.1	4.02	7.02	1.28
38	B155	D	2	欠	14	29.5	4.03	5.9	1.65
39	1区	D	2	欠	14	138.3	7.2	8.2	2.95
40	1区	B	6	欠	5	(4.7)	(4.1)	1.9	0.7
41	B152	E	4	欠	14	78.6	8.59	6.29	1.8
42	1区	E	3	欠	23	45.6	4.9	5.9	1.8

打製石斧

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)				
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ				
43	B243b	2	C	1	d	欠	14	(43.5)	(4.7)	不明	5.18	2.05
44	B243b	2	B	2	c	欠	30'	(105.4)	(7.3)	不明	6.18	1.98
45	B243b	1	B	2	c	欠	14	222.3	(7.8)	不明	6.34	3.15
46	B155	1	A	1	a	欠	18	50.3	11.8	3.08	3.14	1.1
47	B155	1	D	1	j	欠	14	(33.1)	(5)	不明	3.58	1.5
48	B150	1	D	1	f	欠	14	(64.9)	(7.05)	2.81	不明	1.8
49	B153	1	B	1	b	欠	14	(118.2)	(8.5)	不明	5.56	2.3
50	1区	4	A	1	a	欠	14	178.7	10.3	7	6.70	2.4
51	1区	4	A	1	a	欠	14	398.2	(16.5)	8.63	不明	2.5

加工石斧

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ
52	B150	1	欠	14	85.6	6.5	5.7	2
53	B152	1	欠	14	93	6.8	4	2.85

石槌

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ
54	B241c	1	欠	15	3	1.23	3.15	1.06
55	B242c	1	欠	15	4.3	3.2	1.5	1
56	B242c	1	欠	3	14.9	2.4	2.7	0.25
57	B243c	1	欠	17	6.9	2.9	1.75	1.55
58	B243d	1	欠	14	199.2	7.4	6	3.55
59	B244b	1	欠	3	165.4	5.8	4.9	4.7
60	B154	1	欠	14	294	8.3	9.3	4.4
61	B154	1	欠	14	23	3	3	1.8
62	1区	1	欠	6	89.6	4.8	7	3

原石

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ
63	2区	1	欠	23	272.6	8.5	6.7	4.4

磨製石斧

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)		
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ		
64	B154	2	f	欠	19	(139.8)	(6.4)	3.21	不明	2.59
65	B154	2	a	欠	21	270.6	10.78	3.41	4.38	2.55
66	B151	2	g	欠	8	(103.3)	(5.3)	3.81	不明	3.26
67	BK52	2	d	欠	21	(183)	(6.2)	5.98	不明	3.1

ハンマーストーン

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)			
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ			
68	B239d	1	-	A	-	欠	22	256.6	8.7	4.9	4.4

磨石類

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)			
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ			
69	B244c	2	-	C	A	欠	22	227.3	6.3	6	4.3
70	B242c	1	-	C	-	欠	22	394.9	8.9	7	4.6
71	1区	3	C	-	-	欠	22	183.2	3.4	5.9	3.6
72	1区	1	-	B	-	欠	22	725.3	11.2	7.8	6
73	B242d	2	-	C	-	欠	22	257.7	5.8	6	5.2
74	1区	1	B	A	C	欠	33	662.5	14.1	6.25	4.8
75	B154	1	B	C	F	欠	22	625.4	11.9	9.23	6.41
76	B155	2	-	D	-	欠	22	215.0	13.2	11.7	9.45
77	1区	2	-	B	-	欠	22	788.6	9.28	8.25	6.99
78	B245b	2	-	D	-	欠	22	286	6.41	5.62	5.67

礫塊

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)	
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ	
79	B244a	1	-	欠	22	209.5	5.4	5.4	4.9

石槌

番号	出土位置	分類	欠状	溝口	石	材	重量	大きさ (cm)
				コード			(g)	長さ 幅 厚さ
80	1区	1	欠	22	(482.7)	(6.6)	7	6.8
81	B154	1	欠	24	(320.6)	(41.3)	8.1	6.1

1号祭紀出土遺物 (第87図 P L 47)

土器

番号	大きさ (cm)	種別 出土状態	①粘土②焼成③色調④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	口 12.9 底 5.7	須恵器 -4	①A②還元③灰白④完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	高 4.7
2	口 12.6 底 6.0	須恵器 +15	①C②還元③鈍い黄④完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	内面口縁部炭化物付着。高4.2
3	口 12.7 底 5.8	須恵器 +15	①A②還元③灰白④ほぼ完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	高 4.2
4	口 12.8 底 5.6	須恵器 +14	①A②還元③残黄④完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	高 4.3
5	口 13.4 底 (6.5)	須恵器 +19	①C②還元③残黄④4/5	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	外面煤, 茶色の付着物 高4.7
6	口 14.7 底 7.0	須恵器 +18	①A②還元③灰白④ほぼ完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。歪みが顕著。	外面煤, 炭化物付着。高 6.2
7	口 12.4 底 5.8	須恵器 +21	①A②還元③灰白④ほぼ完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	内外面煤付着。高 4.6
8	口 14.0 底 6.9	須恵器 +23	①A②還元③灰④完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り後付け高台。	内外面口辺部煤付着。
9	口 24.2 底 (19.5)	須恵器 +10	①C②還元③残黄④口縁部~ 体部1/3・高台部片	輪轆整形, 内面高台付け部指押さえ後微調整。	
10	口 21.4 底 8.0 高 25.8	土師器 +15	①G②酸化③黄褐色④1/3	外面 口辺部横撫で, 胴部上位ハケメ状工具による横撫で 中央部無調整, 下半斜め覆削り, 底部覆削り。 内面 口縁部横撫で, 胴部ハケメ状工具による横撫で, 胴部横撫で, 底部ハケメ状工具による撫で。	

2号祭紀出土遺物 (第88図 P L 47)

土器

番号	大きさ (cm)	種別 出土状態	①粘土②焼成③色調④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	口 12.9 底 6.2	須恵器 +17	①A②還元③残黄④ほぼ完形	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	高 4.7
2	口 (12.6) 底 (5.4)	須恵器 +10	①A②還元③灰白④1/2	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	外面煤付着。高 4.0
3	口 (12.2) 底 (5.6)	須恵器 +20	①A②還元③残黄④1/6	輪轆整形。	高 4.7
4	口 (12.4) 底 (5.4)	須恵器 +11	①A②還元③残黄④1/2	輪轆整形, 外面底部右回転糸切り。	内外面煤付着。高 4.3
5	口 (12.0) 底 (5.0)	須恵器 +13	①A②還元③残黄④1/2	輪轆整形, 右回転か。	
6	口 (13.8)	須恵器 +14	①A②還元③灰白④破片	輪轆整形。	
7	口 (14.2)	須恵器 +18	①A②還元③灰白④口縁~ 体部1/6	輪轆整形。	
8	口 (23.6) 底 (19.4)	須恵器 +17	①C②還元③残黄④口縁~ 体部1/4, 高台部片	輪轆整形, 内面底部指押さえ, 高台付け部指押さえ後微調整。	高(13.3)
9	口 15.9	土師器 +15	①G②酸化③黄褐色④口縁~ 胴部2/3	外面 口辺部横撫で, 胴部ハケメ状工具による横撫で。 内面 口辺部ハケメ状工具による横撫で, 胴部横撫で。	

平安時代の包含層出土遺物 (第91図 P L 48)

土器

番号 器形	大きさ (cm)	種別 出土状態	①胎土②焼成③色調④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	口(12.2) 底(5.8)	須恵器 1区	①C②酸化③鈍い黄橙④1/2	輪轆整形。外面底部右回転糸切り。	外面煤付着。 高 4.1
2	口(12.0) 底(6.1)	須恵器 BE43a	①C②還元③鈍い黄橙④1/3	輪轆整形。外面底部右回転糸切り。	内外面に煤付着。 高 4.9
3	口(15.1) 底(7.5)	須恵器 1区	①A②還元③灰白④1/4	輪轆整形。外面底部右回転糸切り。	高 6.2
4	口(14.2) 底(6.2)	須恵器 BE43a	①A②還元③灰白④口～体部 1/8	輪轆整形。	外面煤付着。
5	口(14.3) 底 6.2	須恵器 1区	①C②酸化③鈍い黄橙④1/5	輪轆整形。外面底部右回転糸切り。	高 5.5
6	口(14.4) 底 6.5	須恵器 BE43a	①C②還元③鈍い黄橙④1/5	輪轆整形。外面底部右回転糸切り。	外面煤付着。 高 6.7
7	口 14.3 底 7.8	須恵器 BE43a	①A②還元③灰白④1/5	輪轆整形。外面底部右回転糸切り。付け高台。	高 6.4
8	口(14.8)	須恵器 BE45d	①A②還元③灰白④破片	輪轆整形。	
9	口(13.6)	土師器 BE43a	①F②酸化③明赤褐④口辺部 破片・胴部下位～台部上半3/1	外面 口辺部横撫で、肩部横撫削り、胴部下位縦撫削り、 台部横撫で。 内面 口辺部横撫で、胴部下位横撫撫で、台部撫でか。	内外面口辺部煤 付着。内面底部 炭化材付着。
10	口(17.3)	須恵器 BF41d	①A②還元③黄灰④口縁～胴部 上位1/4	外面 口辺部横撫で、胴部上位縦撫削り。 内面 口縁～胴部上位横撫で、頸部に指頭痕あり。	

鉄器

番号	器種	①長さ	②厚さ	③幅	④重量	出土位置	備 考
11	鉄鏝?	①(4.4)	②0.3	③1.5	④3.0	BF44c	下縁が鏝身となるが、左右両端が欠損して詳細不明。鏝の付着顯著。

V 科学的分析

1. 新田西沢遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所 早田 勉

(1) はじめに

関東地方北西部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な石器が検出された高山村新田西沢遺跡においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、火山ガラス比分析や屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、遺物検出層準の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、第1地点および第2地点の2地点である。

(2) 土層層序

A. 第2地点

より下位の土層をよく観察することができた第2地点では、下位より灰色岩片混じり褐色土（層厚15cm以上、岩片の最大径3mm）、灰色岩片層（層厚16cm、岩片の最大径8mm）、青灰色岩片に富む褐色土（層厚12cm、岩片の最大径3mm）、褐色土（層厚9cm）、橙褐色軽石を多く含む褐色土（層厚16cm、軽石の最大径6mm）、褐色土（層厚13cm）、黄白色軽石混じり褐色土（層厚11cm、軽石の最大径13mm）、橙褐色軽石混じり褐色土（層厚42cm、軽石の最大径5mm）、灰色岩片混じり灰色がかった褐色土（層厚14cm、岩片の最大径2mm）、灰褐色土（層厚26cm）、黄褐色土（層厚14cm）、褐色土（層厚8cm）が認められる（図2）。

これらのうち、灰色岩片層とその上位の褐色土中に認められる黄白軽石については、岩相から各々中之条ラビリ（JL、新井、1962）と約4.1万年前*1に榛名山から噴出した榛名八崎軽石（Hr-HP、新井、1962、大島、1986）と考えられる。

B. 第1地点

第1地点では、下位より暗褐色土（層厚55cm以上）、灰褐色土（層厚19cm）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚32cm）、黄褐色土（層厚11cm）、黄色軽石混じり褐色土（層厚5cm、軽石の最大径7mm、若干色調が暗い褐色土（層厚6cm）、成層したテフラ層（層厚44cm）、灰褐色砂質土（層厚7cm）、褐色土（層厚5cm）、灰色軽石を多く含む灰褐色土（層厚8cm、軽石の最大径7mm）、黄色軽石に富む褐色土（層厚4cm、軽石の最大径18mm、石質岩片の最大径5mm）、黄色軽石混じり褐色土（層厚23cm、軽石の最大径8mm）、暗灰褐色土（層厚7cm）、成層したテフラ層（層厚4cm）、暗灰褐色土（層厚7cm）が認められる（図1）。

2層の成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は、下位より橙色軽石層（層厚21cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径3mm）、灰色石質岩片層（層厚2cm、軽石の最大径6mm、岩片の最大径4mm）、橙色軽石層（層厚21cm、軽石の最大径18mm、石質岩片の最大径3mm）からなる。このテフラ層は、その層相から約1.9～2.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group、新井、1962、早田、

1996, 未公表資料)の中・上部に同定される。一方上位の成層したテフラ層は、下部の灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)と、上部の黄色細粒軽石層(層厚2cm, 軽石の最大径2mm)からなる。このテフラ層は、約1.3~1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)で、そのうち軽石層については浅間草津黄色軽石(As-K, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)と呼ばれるにテフラ層に同定される。またAs-BP Groupの中・上部とAs-YPの間に層位がある灰色軽石とその上位に濃集する黄色軽石については、岩相から各々約1.9万年前*1に浅間火山から噴出した浅間萩生軽石(As-Hg, 早田, 1995)と、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石(As-Sr, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

発掘調査では、下位より3層目の灰褐色土を中心に石器が多く検出されている。

(3) 火山ガラス比分析

A. 分析試料と分析方法

第1地点において、基本的に層厚5cmごとに設定採取された試料のうち、火山ガラスの検出がとくに期待された8試料を対象に火山ガラス比分析を行い、火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準を求めた。分析の手順は次の通りである。

- a) 試料15gを秤量。
- b) 超音波洗浄により泥分を除去。
- c) 80°Cで恒温乾燥。
- d) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- e) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。

B. 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図3に、その内訳を表1に示す。火山ガラスは、試料23を除くいずれの試料からも検出された。そのうちとくに試料18に多くの無色透明のバブル型ガラスが認められる(21.2%)。

このことから、試料18付近に無色透明のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

(4) 屈折率測定

A. 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、土層観察および火山ガラス比分析の結果、テフラの混入が認められた第1地点の試料18、試料16、試料6の3点について、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

B. 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。第1地点の試料18に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.499-1.501(modal range: 1.500)である。重鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石、角閃石がごく少量含まれている。試料16に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.499-1.501である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.700-1.705である。試料5に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.503である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.704-1.709である。

(5) 考 察

産状から試料 18 付近に降灰層準があると考えられるテフラは、火山ガラスの形態や色調などから、約 2.4 ~ 2.5 万年前 *1 に南九州の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995) に同定される。このことから、発掘調査に伴って多くの石器が検出されている層準については、AT より下位にあると考えられる。

試料 16 に含まれる火山ガラスについても、AT に由来すると考えられる。一方この試料に含まれる斜方輝石については、屈折率などから As-BP Group の下・中部に由来すると考えられる。同層準に認められる軽石についても、これらのテフラに由来する可能性が高い。試料 6 に含まれるテフラについては、火山ガラスの屈折率、重鉱物の組合せ、斜方輝石の屈折率などから、約 1.7 万年前 *1 に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第 1 軽石 (As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996) に由来する可能性が考えられる。

(6) まとめ

新田西沢遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より中之条ラピリ (JL)、榛名八崎軽石 (約 4.1 万年前 *1)、始良 Tn 火山灰 (AT, 約 2.4 ~ 2.5 万年前 *1)、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約 1.9 ~ 2.4 万年前 *1)、浅間萩生軽石 (As-Hg, 約 1.9 万年前 *1)、浅間白糸軽石 (As-Sr, 約 1.8 万年前)、浅間大窪沢第 1 軽石 (As-Ok1, 約 1.7 万年前 *1)、浅間草津黄色軽石 (As-K, 約 1.3 ~ 1.4 万年前 *1) などの指標テフラや、それに由来するテフラ粒子を多く検出することができた。本遺跡の旧石器の多くについては、AT より下位を中心に検出されていると考えられる。

註

*1 放射性炭素 (14C) 年代

文 献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-73.
新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
池田晃子・奥野 実・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加齢器 14C 年代, 第四紀研究, 34, p.377-379.
Machida H (1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: recent progress. *Quat. Res.*, 38, p.194-201.
町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—, 科学, 46, p.339-347.
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良 Tn 火山灰 (AT) の 14C 年代, 第四紀研究, 26, p.79-83.
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ビストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討—タンデムロン加齢器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14C 年代, 地質学, 99, p.787-798.
中沢英徳・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 風塵—前曇期のテフラ層序, 日本第四紀学会論叢集, no.14, p.69-70.
大島 治 (1986) 榛名火山, 日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」, 共立出版, p.222-224.
早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史, 御代田町誌自然編, p.22-46.
早田 勉 (1996) 関東地方—東北地方南部の指標テフラの総特徴—とくに御代田第 1 テフラより上位のテフラについて—, 名古屋大学加齢器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

表1 第1地点の火山ガラス比分析結果

試料	bw (cl)	bw (pd)	bw (dr)	md	pm (sp)	pn (fd)	その他	合計
15	4	0	0	2	0	0	244	250
16	7	0	0	0	2	0	241	250
18	53	0	0	1	0	3	193	250
19	19	0	0	1	0	0	230	250
21	0	0	0	0	1	0	249	250
23	0	0	0	0	0	0	250	250
25	0	0	0	0	1	0	249	250
27	0	0	0	0	1	0	249	250

数字は粒子数. bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状.

表2 第1地点における屈折率測定結果

試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)
5	1.501-1.503	opt/cpx	1.704-1.709
16	1.499-1.501	opt/cpx	1.700-1.705
18	1.499-1.501 (1.500)	(opt, c p x, hb)	-

屈折率の測定法は、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993).
(): modal range, opt: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, 重鉱物の () は、量が少ないことを示す.

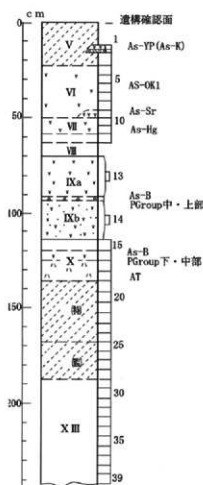


図2 第1地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

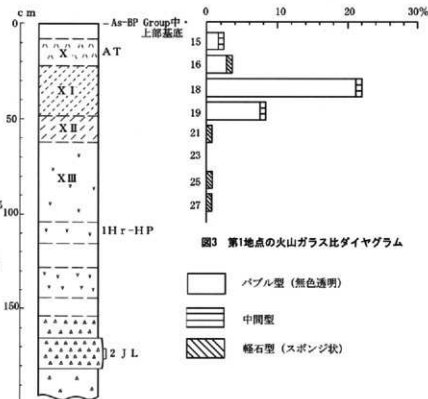


図3 第1地点の火山ガラス比ダイヤグラム

図1 深掘トレンチの上層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



2. 新田西沢遺跡 1号住居跡出土炭化材の樹種同定

株式会社バレオ・ラボ 植田弥生

(1) はじめに

ここでは、9世紀前半の1号住居跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。1号住居は、竪穴住居で、炭化材の保存は極めて良好であった。長さが100cm前後の大きな炭化材も多く、材の加工状況が確認された試料も多く、屋根材・壁材・床面の敷物も認められるなど、1号住居の建築用材を詳しく知る好試料であり、検討した試料数は168点である。材の加工状況と大きさは、群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘時に記録したものである。ただし一部試料の加工状況と年輪数の記録は、同定作業中の観察で植田が付加した。また試料153の壁カヤ材については、植物珪酸体の検出からも母植物の検討を試み、別報で報告している(別報参照)。

また、隣接する新田平林遺跡の1区1号祭祀跡から出土した2試料の炭化材樹種も報告する。

(2) 方法

まず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に片歯の剃刀で弾くように接線断面と放射断面を割り、3方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大し材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

(3) 結果

同定結果の一覧を、表1-1～表1-4に示した。表2では、樹種と加工状況を比較した。

A. 新田西沢遺跡 1号住居跡出土炭化材樹種

1号住居跡から出土した炭化材168試料の同定結果は、カヤ(7試料)・モミ属(22)の針葉樹2分類群、フジキ(92)・クリ(13)・カエデ属(2)・ヤマグワ(5)・サクラ属(4)・イヌシデ節(3)・クマシデ節(1)・コナラ節(2)・ヌルデ(3)・ミズキ属(2)・トネリコ属(1)・キハダ? (1)の落葉広葉樹12分類群、ヒサカキ(2)の常緑広葉樹1分類群、ススキ属(5)・タケ亜科(2)・草本性イネ科(1)の単子葉類3分類群であった。

住居建築材には、上記のような複数種類の高木樹種が使用されていたことが判った。特に落葉広葉樹のフジキが、半数以上の92試料から検出された事は特徴的であった。フジキの次に多く検出された樹種はモミ属で調査試料数の約1割強の22試料であり、3番目に多いクリは13試料であった。また、4本の柱材(試料159・160・161・162)は、すべてカヤであった。フジキとカヤには樹齢が多い材が目立ち、フジキでは一部破片の年輪数が50～90年輪もある材13点(試料31・32・33・46・47・54・84・101・111・112・117・125・128)があり、カヤにも70～109年輪数が数えられる材(試料7・159・161)3点があった。

樹種による加工状況の違いも見られた。検出数の多い上位3位のフジキ・モミ属・クリは、板材・角材・丸材として利用されており、特に板材や角材で出土したものが多かった。そのほかの樹種は、芯持ち丸木の状態で利用されていたものがほとんどであった。また、フジキの材の木取りは柁目取りのものが非常に多く、クリとモミ属は板目取りがほとんどであった。壁板材からは、フジキ(試料30・136・142)・クリ(試料143・147)・モミ属(試料149)が検出された。壁板材おさえの杭(試料150)は、ヤマグワであった。

壁カヤ材は、ススキ属(試料145・146)とイネ科(試料153)であった。試料153は、脆く草本性であると思わ

れたが組織学的な検討は充分にできず、イネ科であることまでしか判らなかったが、別報の植物珪酸体からの検討ではススキ属である可能性が高いと報告されている。

床面のカヤは、ススキ属(試料 157)と、稗(茎)の直径が約 1cm のタケ亜科(試料 155・158)でありおそらく竹の一種と思われる。

屋根材カヤは、ススキ属(試料試料 156)であった。

B. 新田平林遺跡の 1 区 1 号祭祀跡出土炭化材樹種

試料 54・55 の炭化材破片はすべて樹筋道が無く同タイプの針葉樹材であり、抽出して材組織を観察した複数の破片はすべてカヤであった。

C. 同定された樹種の材組織

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版 1 1a-1c(試料 28)

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、仮道管に明瞭ならせん肥厚がある。分野壁孔は小さなヒノキ型が主に 2 個ある。

カヤは本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、材は水湿に強く加工しやすい。

モミ属 *Abies* マツ科 図版 1 2a-2c(試料 50)

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない針葉樹材。仮道管にらせん肥厚は無い。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射断面において接線壁に数珠状肥厚があり、放射仮道管は無い。分野壁孔は小型のスピ型とヒノキ型があり、1 分野に 1~3 個、炭化材では孔口の大きさが不揃いに見える。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの 5 種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

クマシデ属 *イヌシデ節* *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版 1 3a-3c(試料 82)

2~数個の小型の管孔が放射方向に複合し分布し、年輪界付近では管孔の径が減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはらせん肥厚がある。放射組織は平伏細胞と方形細胞からなり、1~3 細胞幅、道管との壁孔はやや大きくて交互状に配列する。

クマシデ属は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木である。イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。クマシデ節には山地の谷沿いに多いサワシバとクマシデがある。いずれの材も丈夫で有用である。

クマシデ属 *クマシデ節* *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科 図版 2 4a-4c(試料 78)

前述のイヌシデ節とはほぼ同様の材組織であるが、穿孔は主に横棒数が 10 本前後での階段穿孔である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版 2 6a-6c(試料 65)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達する。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく開き交互状に配列する。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

コナラ属 *コナラ亜属* *コナラ節* *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 2 6a-6c(試料 65)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材では薄壁で孔口が角形の小型の管孔が火炎状に配列する

環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものど複合状がある。コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は割裂性がよい。
ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 図版3 7a-7c(試料92)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部では小型や非常に小型の大きさの不揃いな管孔が集合し斜状・波状に配列する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞や直立細胞がある。結晶細胞が見られるが、ケヤキのように大型では無い。

ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。材は重硬・強韧で心材は特に保存性が高い。

サクラ属 *Prunus*バラ科 図版3 8a-8c(試料56)

小型の管孔が単独または放射状・接線状・斜状に複合して分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、約3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な属であり、ヤマザクラ・マメザクラ・ウワミズザクラなど多くの種が含まれる。材は粘り気があり強く、保存性も高い。

フジキ *Cladrastis platycarpa* (Maxim.) Makino マメ科 図版3 9a-9c(試料49) 図版4 10a-10b(試料45) 11(試料135)

年輪の始めに大型の管孔が数層配列し、晩材部では小型や非常に小型の管孔が塊状・波状・斜状に集合して分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は同性に近い異性、1～8細胞幅の紡錘形、縁辺部に不完全な鞘細胞が見られる。

ニレ科のケヤキ・ニレ属・エノキ属に似るが、ケヤキやニレ属のように大型の結晶細胞は見られず、エノキ属のように明瞭な鞘細胞は認められない。また、クワ科のヤマグワとも類似するが、ヤマグワの放射組織は平伏細胞や方形細胞が混在し上下端には直立細胞もあるが、フジキと同定した試料には明瞭な直立細胞は見られなかった。

フジキは福島県以西の本州・四国の温帯の山中に分布する落葉高木で、特に中部地方に多い。材は比較的重硬・強韧である。

ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 図版4 12a-12c(試料90)

年輪の始めに大型の管孔が配列し晩材に向かい徐々に径を減じて行き、年輪界では非常に小型の管孔が塊状・接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管には明瞭ならせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅、輪郭はやや不齊である。

ヌルデは北海道以南の温帯から熱帯にまで広く分布し山野に普通の落葉小高木である。

ミズキ属 *Cornus* ミズキ科 図版4 13a-13c(試料75)

小型の管孔が単独または2～3個が複合して均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数が多い階段穿孔、道管先端部の壁孔は階段状となる。放射組織は異性、1～5細胞幅、多列部は平伏細胞からなりその上下端は方形細胞や直立細胞からなる単列部となり、道管との壁孔は交互状である。

ミズキ属は暖帯から温帯の山地に普通の落葉広葉樹で、ミズキ・クマノミズキ・ヤマボウシなどがある。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 図版5 14a-14c(試料42)

非常に小型で多角形の管孔が密材する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、主に2細胞幅、道管との壁孔は階段状である。

ヒサカキは暖帯の林下に普通の常緑小高木である。材は緻密で丈夫である。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版5 15a-15c(試料6)

大型の管孔が1層配列し、その後は単独または2個が複合して小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周円状・翼状の柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種がある。材は硬で弾力性があり折れ難い。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版5 16a-16c(試料25)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合し均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いせん肥厚がある。放射組織は同性、1~4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。軸方向に連なる結晶細胞がある。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育する落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく保存性は中程度である。

キハダ? *Phellodendron amurense* Ruprecht ミカン科 図版6 17a-17c(試料126)

年輪の始めに中型の管孔が分布し徐々に径を減じ、年輪界では非常に小型の管孔が多数集合して斜状・接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にせん肥厚がある。放射組織は同性、主に3~4細胞幅の整った紡錘形を呈する。

キハダは北海道以南の山地に生育する落葉高木である。材はやや軟軟であるが耐水性に優れる。

ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版6 18a-18b(試料44)

直径5~8mmの草本性の稈である。保存がよい稈では、中心部はタケ・ササ類のように中空ではなくスポンジ状の基本組織で埋まりその中に維管束が散在しているのが確認された。稈の外周部付近は厚い厚壁細胞層に接して小さな維管束が1または2層並んでいる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層(維管束鞘)は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で、一般にはカヤ(茅)の総称と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の開地に普通に見られ、刈って屋根を覆く材料とされてきたススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北部から近畿北部の山中の開地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。現時点では稈の組織から種を識別することはできない。

タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 図版6 20(試料155)

直径約1cmでやや硬質の稈やそれと同類の破片と思われるものである。稈の中心部は中空で、維管束は不整中心柱で多数が散在し、維管束は厚壁の維管束鞘に囲まれている。稈の外周に位置する維管束鞘は特に厚く発達し、厚壁の繊維細胞だけの塊も島状に密在し、稈を堅く支持している様子がわかる。このような形質からイネ科タケ亜科(タケ・ササ類)であり、維管束鞘が非常に発達しておりいわゆる竹と思われるが、稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

タケ・ササ類は約12属と多数の種類があり、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多い。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。

草本性イネ科 herbaceous Gramineae 図版6 21(試料153)

軸部と周囲の葉鞘がばらばらにほぐれた状態のようであった。対応する分類群は不明である。葉鞘と思われる破片は非常に薄く脆いため、組織は観察できなかった。従って軸部と思われる横断面の走査電子顕微鏡写真を掲載し、組織の記載をする。断面の輪郭は円形に近いが一部は直線的になっており、基本組織の柔細胞で満ちている。外周部に維管束鞘に囲まれた小さな維管束が配列し、すぐ内側にやや大きな維管束が点在している。そして直線部には維管束の分布は見られなかった。

(4) まとめ

保存が非常に良好な竪穴住居跡1号の炭化材168試料の樹種を調査した結果、針葉樹のカヤ・モミ属、落葉広葉樹のフジキ・クリ・カエデ属・ヤマグワ・サクラ属・イヌシデ節・クマシデ節・コナラ節・ヌルデ・ミズキ属・トネリコ属・キハダ?、常緑広葉樹のヒサカキ、単子葉類のススキ属・タケ亜科・草本性イネ科、合計18分類群が検出された。その結果、建築材には多種類の樹種が利用されていたことが明らかになった。特にフジキが最も多く約半数近く検出されたことは特徴的であり、次にモミ属とクリが多く検出された。上位3種類のフジキ・モミ属・クリは、主に板材・角材に加工して利用され、少数ではあるが丸材の状態でも検出された。しかし、この3種以外の樹種は、主に丸材の状態でも利用されていた。4本の柱材はすべてカヤであった。カヤの材は、保存性・耐水性が高いので柱材に選択使用されたと考えられる。またフジキとカヤには、取り上げられていた炭化材の横断面における年輪数が50～109年輪ほども数えられた試料が複数あり、樹齢の多い大径木を利用していたことが伺えた。このような樹齢の多い大木は自然林中に多く生育している。当住居跡の炭化材は、種類数が多かった。このような結果から当竪穴住居跡では、種類数が豊富で大木も多く生育していた落葉広葉樹が主体の自然林を利用し、建築材の各部位に適した用材を選択して調達したと推測される。また、フジキとカヤは樹齢の多い大木を利用していたことから、建築用材の調達に際しては組織的な努力が必要であったと思われる。

フジキは大木を伐採し製材してから利用したために、フジキの検出数が最も多かった可能性があるが、フジキの検出数が最優占するような消失住居跡は知られていない。フジキは、群生はしないが中部地方には比較的多い樹種である。そして長野市の石川条理遺跡や榎田遺跡では、流路や水田面などから出土した弥生時代中期・後期や古墳時代の木製品からフジキが少なからず検出され、石川条理遺跡では平安時代から1点ではあるがフジキが検出されている。この2遺跡では建築材・板材・角材として、フジキは利用樹種の比較的上位に上げられている。今回の調査においては、1件の竪穴住居跡の建築材に、多くのフジキの材が利用されていた事が明らかになった。従ってフジキは、中部地方一帯に多く生育していた事、大木も入手が容易であった事、材質も建築材に適材である事がすでに知られ利用されていた事が判った。

今回の調査では住居構築材の木材樹種だけでなく、壁や屋根そして敷物と思われる素材についても比較的保存がよく検討することができた。壁カヤ材からは、ススキ属とイネ科(試料153)が検出され、床面から出土した敷物と思われるものからは、ススキ属(試料157)と太さ約1cmの竹の一種と思われるものが使用されていた。屋根材カヤは、ススキ属(試料試料156)であった。

引用文献

- 熊城修一・鈴木三男、1997、石川条理遺跡出土木製品の樹種、68-138、「中央自動車道長野県理窟文化財発掘調査報告書15-長野市その3-石川条理遺跡 第3分冊」、(財)長野県理窟文化財センター。
- 鈴木三男・熊城修一、1999、長野県長野市榎田遺跡出土木製品の樹種、348-391、「榎田遺跡」、(財)長野県理窟文化財センター。

表 1 新田西沢遺跡（平安時代）1号住居出土の炭化材樹種同定一覧

試料	樹種	加工状況			直径年輪	備考
		板材	角材	丸材		
1	フジキ				40年輪(9)	水取りのたじ
2	モミ属				62	板目
3	フジキ				6	板目
4	モミ属				15	板目
5	モミ属				38	板目
6	モミ属				14	板目
7	トネリコ属				23	板目
8	モミ属				17	板目
9	フジキ				76	板目
10	モミ属				20	板目
11	フジキ				62	板目
12	フジキ				31	板目
13	フジキ				25	板目
14	フジキ				98	板目
15	フジキ				20	板目
16	フジキ				60	板目
17	フジキ				54	板目
18	フジキ				25	板目
19	フジキ				18	板目
20	モミ属				36	板目
21	フジキ				46	板目
22	フジキ				97	板目
23	フジキ				109	板目
24	フジキ				25	板目
25	カエデ属				26	板目
26	フジキ				38	板目
27	フジキ				20	板目
28	カヤ				23	板目
29	フジキ				31	板目
30	フジキ				28	板目
31	フジキ				24	板目
32	フジキ				32	板目
33	フジキ				37	板目
34	フジキ				28	板目
35	フジキ				9	板目
36	フジキ				22	板目
37	フジキ				70	板目
38	フジキ				13	板目
39	カエデ属				21	板目
40	フジキ				18	板目

試料	樹種	加工状況			直径年輪	備考
		板材	角材	丸材		
41	フジキ				14	板目
42	ヒコガキ				8	板目
43	ヒコガキ				9	板目
44	スズキ属				-	板目
45	フジキ				79	板目
46	フジキ				64	板目
47	フジキ				89	板目
48	フジキ				20	板目
49	フジキ				30	板目
50	モミ属				56	板目
51	モミ属				22	板目
52	モミ属				25	板目
53	フジキ				28	板目
54	フジキ				36	板目
55	フジキ				52	板目
56	モミ属				105	板目
57	イヌシロ属				56	板目
58	フジキ				219	板目
59	フジキ				100	板目
60	フジキ				39	板目
61	フジキ				84	板目
62	イヌシロ属				67	板目
63	ササノ属				189	板目
64	フジキ				100	板目
65	コナラ属				50	板目
66	フジキ				9	板目
67	モミ属				13	板目
68	フジキ				40	板目
69	フジキ				16	板目
70	フジキ				28	板目
71	クリ				13	板目
72	モミ属				23	板目
73	モミ属				24	板目
74	スズキ属				35	板目
75	スズキ属				42	板目
76	フジキ				35	板目
77	フジキ				123	板目
78	スズキ属				7	板目
79	カエデ属				20	板目
80	フジキ				12	板目

試料	種樹	加工状況			直径年輪	備考
		板付	角付	丸付		
121	フジキ	○			直径年輪 (計数年輪)	水辺のたざ
122	フジキ		○		長さ 7 10 3	板目
123	フジキ		○		長さ 17 7 4	板目
124	フジキ		○		長さ 6 5 3.5	板目
125	フジキ		○		長さ 24 8 2.5	82年輪(14) 板目
126	フジキ		○		長さ 159 17 5.5	6年輪(43) 板目
127	フジキ		○	○	長さ 40 9 9	芯持ち
128	フジキ		○		長さ 91 1 4	90年輪(11) 板目 丸材の可塑性あり
129	フジキ		○		長さ 33 15 6.5	板目
130	フジキ		○		長さ 15 8 4	板目
131	フジキ		○		長さ 68 10 5	板目
132	モミ属		○		長さ 12 7.5 3	丸材の一部
133	ヤブギリ		○		長さ 142 7.5 3	板目
134	フジキ		○		長さ 82 11 5	丸材の可塑性あり
135	フジキ		○		長さ 97 11 3	板目
136	フジキ		○		長さ 20 13 5	板目 板縁の一部
137	フジキ		○		長さ 29 6 3.5	板目
138	モミ属		○		長さ 24 3 1	板材の一部
139	フジキ			○	長さ 5 9 2.5	
140	フジキ		○		長さ 7 2 3	丸材の一部
141	フジキ		○		長さ 13 12 5.5	板目
142	フジキ		○		長さ 47 12.5 3	板目 板縁材?
143	フジキ		○		長さ 96 20 4	板目? 板縁材?
144	クリ		○		長さ 103 13 3	板目
145	スズキ属				長さ 10 10	—
146	スズキ属				長さ 34	— 2
147	クリ		○		長さ 37 22 3	丸材? 板縁材
148	クリ		○		長さ 100 21 1	板目
149	モミ属		○		長さ 44 24 2	板目 板縁材
150	ヤブギリ		○		長さ 45 10 10	板目 板縁材? 丸材
151	クリ		○		長さ 71 9 4	板目
152	クリ		○		長さ 106 14 4	板目
153	草本系イネ科		○		長さ 25	— 3
154	フジキ		○		長さ 16 11 2.5	丸材? 板縁材
155	タケ亜科				長さ 1	— 1
156	スズキ属				長さ 1	— 2
157	スズキ属				長さ 1	— 1
158	タケ亜科				長さ 1	— 1

試料	種樹	加工状況			直径年輪	備考
		板付	角付	丸付		
81	イヌシデ	○			直径年輪 (計数年輪)	水辺のたざ
82	フジキ		○		長さ 11 5 1	芯持ち
83	フジキ		○		長さ 6 6 1.5	75年輪(11.5) 板目
84	フジキ		○		長さ 37 12 2.5	11年輪 板目
85	スズキ属		○		長さ 52 4.5 1.5	芯持ち
86	モミ属		○		長さ 19 3 2	板材の一部
87	モミ属		○		長さ 8 3.5 1	板材の一部
88	クリ		○		長さ 70 31 5	板目
89	クリ		○		長さ 32 6 2.5	板目
90	スズキ属		○		長さ 7 3 2	17年輪(2.5) 水かき入り
91	ヤブギリ		○		長さ 9 8 8	12年輪(3) 芯持ち
92	ヤブギリ		○		長さ 13 4.5 1.5	21年輪(2.5) 芯持ち
93	クリ		○		長さ 7 9 3	板目
94	スズキ属		○		長さ 26 9 9	10年輪(2.5) 板目
95	ヤブギリ		○		長さ 21 5 5	芯持ち
96	モミ属		○		長さ 9 3.5 1.5	5年輪 丸材の一部
97	ヤブギリ		○		長さ 15 3 3	板目
98	フジキ		○		長さ 12 6 3	板目
99	クリ		○		長さ 30 5.5 5.5	丸材の一部
100	モミ属		○		長さ 7 6 1	90年輪(3)
101	フジキ		○		長さ 9 11 3	板目
102	フジキ		○		長さ 11 9 4	6年輪(2.5)
103	クリ		○		長さ 60 9 9	40年輪(7) 芯持ち
104	フジキ		○		長さ 10 7 2	板目
105	カヤ		○		長さ 7 7 7	丸材の一部
106	モミ属		○		長さ 28 9 9	板目
107	フジキ		○		長さ 12 8 3	板目
108	フジキ		○		長さ 11 3.5 3	板目
109	フジキ		○		長さ 5 11 4	板目
110	クリ		○		長さ 7 11 2.5	79年輪(12) 板目
111	フジキ		(○)		長さ 5 4 3	50年輪(3)
112	フジキ		○		長さ 19 14 3.5	板目
113	フジキ		○		長さ 11 7.5 3.5	19年輪(5)
114	フジキ		○		長さ 4 3 2.5	丸材の一部
115	フジキ		○		長さ 13 8.5 3	板目
116	フジキ		○		長さ 23 6 4	52年輪(3.3)
117	フジキ		○		長さ 8 19 3	板目
118	フジキ		○		長さ 12 7 15	36年輪(9)
119	フジキ		○			板目
120	フジキ		○			板目

表3 新田西沢遺跡(平安時代) 1号住居出土炭化材の樹種と加工状況の比較

試料	樹種	加工状況		大きさ(cm)		計数年輪 (計数年輪幅)	備考
		板材	丸材	不明	厚さ		
159	カヤ		○		8.5	17	1号柱材
160	カヤ		○		6	18	4号柱材
161	カヤ		○		-	16	2号柱材
162	カヤ		○		-	18	3号柱材
329	フジキ						
330	フジキ						
331	フジキ						
332	モミ属						
333	モミ属						

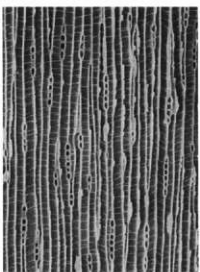
試料	樹種	加工状況		大きさ(cm)		計数年輪 (計数年輪幅)	備考
		板材	丸材	不明	長さ		
54	カヤ						樹片複製一部生焼けの 炭化材もあり。
55	カヤ						樹片複製

樹種	加工状況など				試料数			
	板材	丸材	不明	不明	板面	断面	底面	無板材
フジキ	23	57	2	7	3	3		92
モミ属	15	3	1	2	1			22
クリ	6	3	2		2			13
カエデ属	1	1						2
カヤ		2	5					7
ヤマブドウ		2	3					5
サクラ属		1	3					4
イヌシジギ		3	3					3
クマシジギ		1	1					1
コナラ属		2	2					2
ヌルギ		2	1					3
ミズナ属		2	2					2
ヒコガキ		2	2					2
トネリコ属		1	1					1
キハダ?		1						1
スズキ属				1	2	1	1	5
クダシジギ						2		2
イヌ桂					1			1
試料数合計	45	69	30	1	10	9	3	168

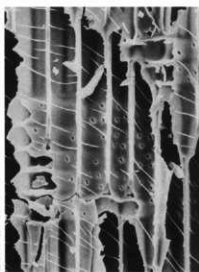
図版 1 新田西沢遺跡 1号住居跡出土炭化材樹種



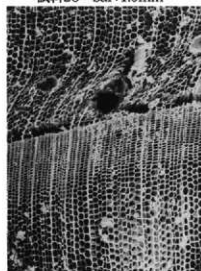
1a カヤ(横断面)
試料28 bar:1.0mm



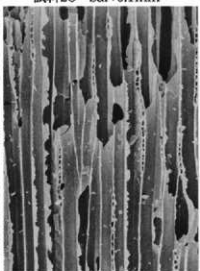
1b カヤ(接線断面)
試料28 bar:0.1mm



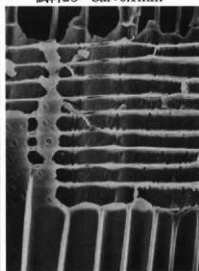
1c カヤ(放射断面)
試料28 bar:0.1mm



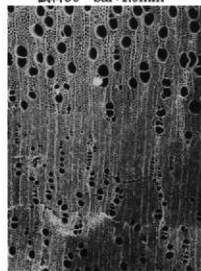
2a モミ属(横断面)
試料50 bar:1.0mm



2b モミ属(接線断面)
試料50 bar:0.1mm



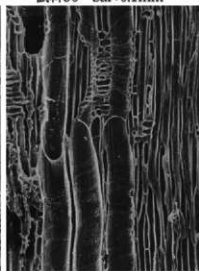
2c モミ属(放射断面)
試料50 bar:0.1mm



3a イヌシデ節(横断面)
試料82 bar:0.5mm

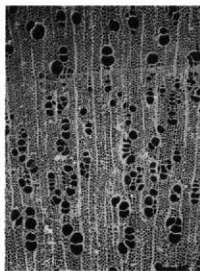


3b イヌシデ節(接線断面)
試料82 bar:0.1mm

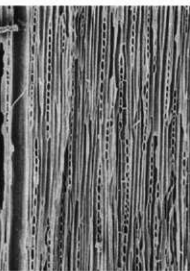


3c イヌシデ節(放射断面)
試料82 bar:0.1mm

図版 2 新田西沢遺跡 1 号住居跡出土炭化材樹種



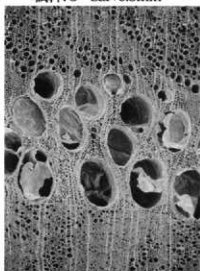
4a クマシデ節(横断面)
試料78 bar:0.5mm



4b クマシデ節(接線断面)
試料78 bar:0.1mm



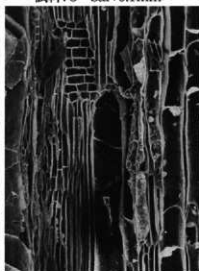
4c クマシデ節(放射断面)
試料78 bar:0.1mm



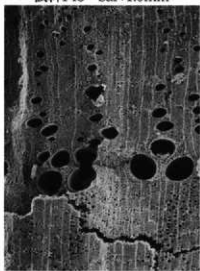
5a クリ(横断面)
試料143 bar:1.0mm



5b クリ(接線断面)
試料143 bar:0.5mm



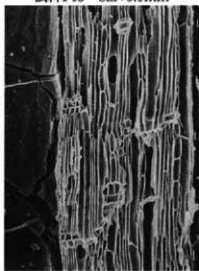
5c クリ(放射断面)
試料143 bar:0.1mm



6a コナラ節(横断面)
試料65 bar:1.0mm

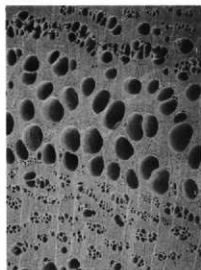


6b コナラ節(接線断面)
試料65 bar:0.5mm

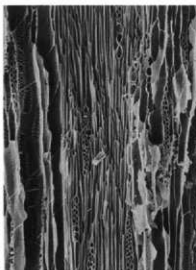


6c コナラ節(放射断面)
試料65 bar:0.1mm

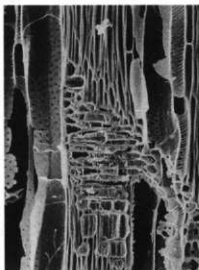
図版3 新田西沢遺跡1号住居跡出土炭化材樹種



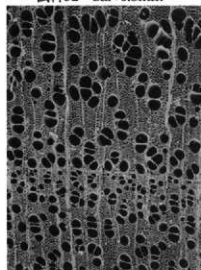
7a ヤマガウ(横断面)
試料92 bar:0.5mm



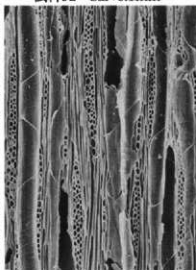
7b ヤマガウ(接線断面)
試料92 bar:0.1mm



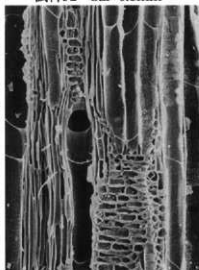
7c ヤマガウ(放射断面)
試料92 bar:0.1mm



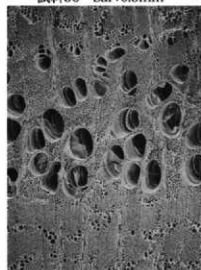
8a サクラ属(横断面)
試料56 bar:0.5mm



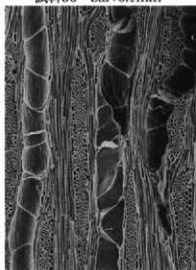
8b サクラ属(接線断面)
試料56 bar:0.1mm



8c サクラ属(放射断面)
試料56 bar:0.1mm



9a フジキ(横断面)
試料49 bar:1.0mm

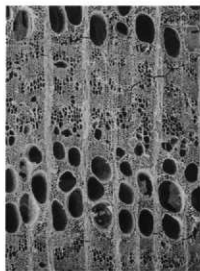


9b フジキ(接線断面)
試料49 bar:0.5mm



9c フジキ(放射断面)
試料49 bar:0.5mm

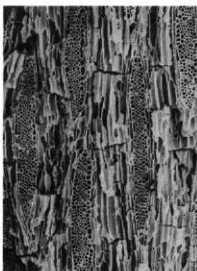
図版4 新田西沢遺跡1号住居跡出土炭化材樹種



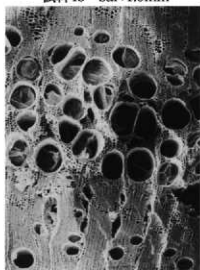
10a フジキ(横断面)
試料45 bar:1.0mm



10b フジキ(接線断面)
試料45 bar:0.1mm



11 フジキ(接線断面)
試料135 bar:0.5mm



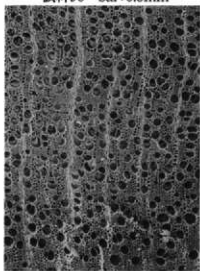
12a ヌルデ(横断面)
試料90 bar:0.5mm



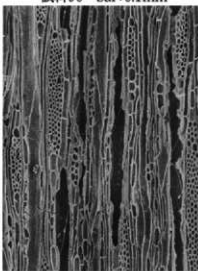
12b ヌルデ(接線断面)
試料90 bar:0.1mm



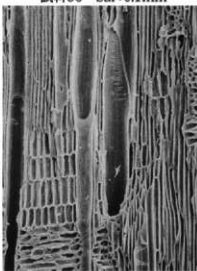
12c ヌルデ(放射断面)
試料56 bar:0.1mm



13a ミズキ属(横断面)
試料75 bar:0.5mm

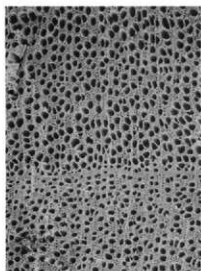


13b ミズキ属(接線断面)
試料75 bar:0.1mm

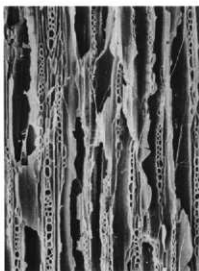


13c ミズキ属(放射断面)
試料75 bar:0.1mm

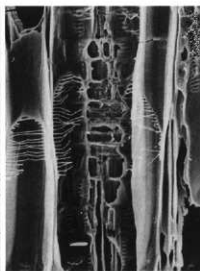
図版 5 新田西沢遺跡 1号住居跡出土炭化材樹種



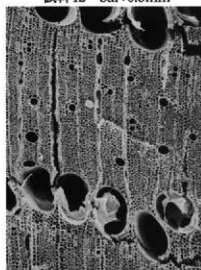
14a ヒサカキ(横断面)
試料42 bar:0.5mm



14b ヒサカキ(接線断面)
試料42 bar:0.1mm



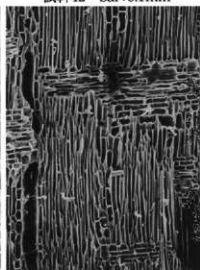
14c ヒサカキ(放射断面)
試料42 bar:0.1mm



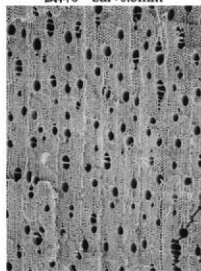
15a トネリコ属(横断面)
試料6 bar:0.5mm



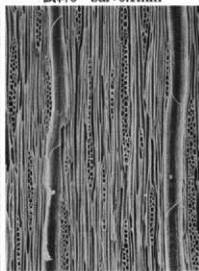
15b トネリコ属(接線断面)
試料6 bar:0.1mm



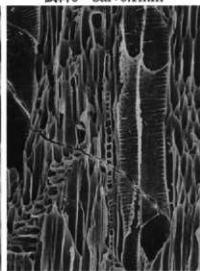
15c トネリコ属(放射断面)
試料6 bar:0.1mm



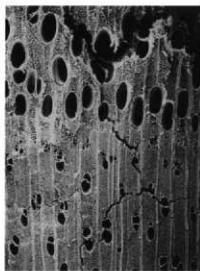
16a カエデ属(横断面)
試料25 bar:0.5mm



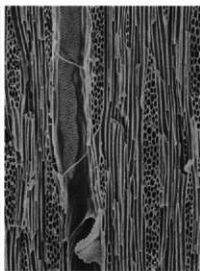
16b カエデ属(接線断面)
試料25 bar:0.1mm



16c カエデ属(放射断面)
試料25 bar:0.1mm



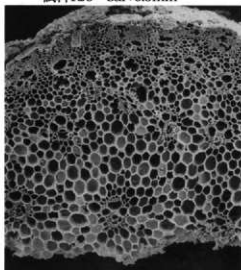
17a キハダ? (横断面)
試料126 bar:0.5mm



17b キハダ? (接線断面)
試料126 bar:0.1mm



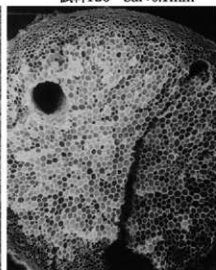
17c キハダ? (放射断面)
試料126 bar:0.1mm



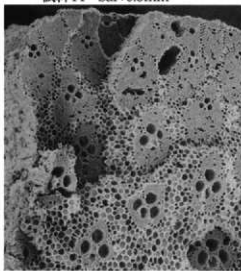
18a ススキ属 (横断面)
試料44 bar:0.5mm



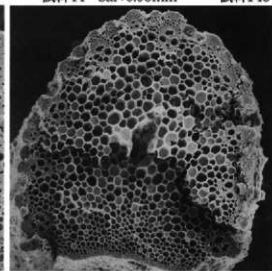
18b ススキ属 (縦断面)
試料44 bar:0.05mm



19 ススキ属 (横断面)
試料145 bar:1.0mm



20 タケ亜科 (横断面)
試料155 bar:0.5mm



21 イネ科 (横断面)
試料153 bar:0.5mm

3. 新田西沢遺跡1号住居出土植物遺体の植物珪酸体

株式会社パレオ・ラボ 鈴木 茂

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より吸収した珪酸分を葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして沈積・形成された植物珪酸体(単細胞珪酸体や機動細胞珪酸体)のうち、機動細胞珪酸体についてはイネを中心に形態分類の研究が進められている(藤原 1978など)。こうしたことから、得られた植物遺体について植物珪酸体の検出を図り、機動細胞珪酸体の形態を観察することによりその母植物について検討できると考える。以下には新田西沢遺跡1号住居より検出された炭化した草本遺体について行った植物珪酸体分析について記す。

(1) 試料と分析方法

試料は9世紀後半の1号竪穴住居より出土した壁カヤ材と考えられている炭化草本遺体である。この炭化草本遺体を検討するにあたり、現生植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体の有無を調べた。すなわち乾燥した植物遺体を管瓶にとり、電気炉を用いて炭化するのだが、炭化する行程は藤原(1976)にほぼしたがって行った。その行程は、はじめ毎分5°Cの割合で温度を上げ、100°Cにおいて15分ほどその温度を保ち、その後毎分2°Cの割合で550°Cまで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の炭化を行う。炭化した試料について一部を取り出し、グリセリンを浸液としたプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した(600倍)。

(2) 結果および考察

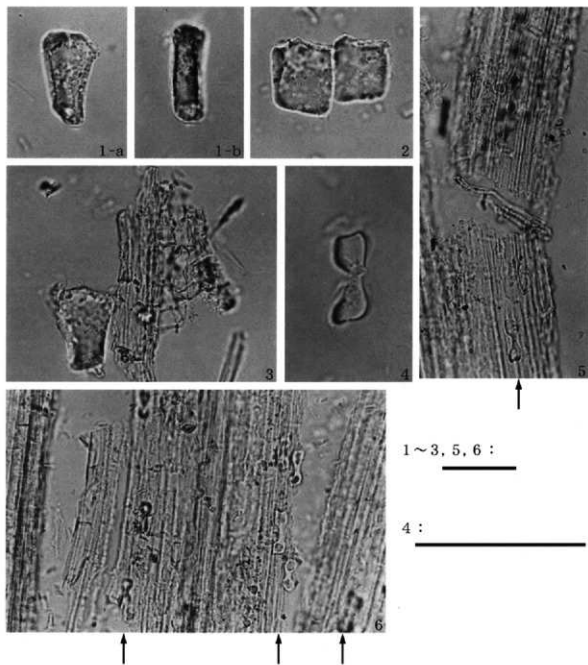
観察の結果、多くは珪酸体が見られない繊維状の遺体で、一部細胞内に単細胞珪酸体が認められる(写真5,6)。その形態(写真4)は、中央部分(胴部)が細くくぼみ、その上下が丸みを帯びた長方形様に膨らんだ形状を示すなどいわゆる落花生の形状を示している。また、先端部分には若干のくぼみが認められ、これら珪酸体が葉脈方向にたてに並んでいるのが観察される。大きさは約15×7μmである。

また作成したプレパラートの一部にやや密に機動細胞珪酸体(写真1~3)が認められ、2個体が連なった状態のものも認められる。さらに繊維状遺体(細胞)にくっついた状態のものや、崩れた繊維状遺体の塊のなかに埋もれているものも観察される。この機動細胞珪酸体の形態について、断面形態は楔形をしており、裏面側においてこぶ状の凸部と溝状の凹部が認められる。縦長は約20-41μm(10個体平均32.895μm)、横長は約10-31μm(平均20.655μm)である。側面形態は長方形を呈しており、裏面側にくぶ状のものがみられる個体もある。側長は約20-28μm(平均24.99μm)である。また、表面形態は細長い長方形を呈し、裏面形態は長方形をなしている。

こうした形状の機動細胞珪酸体はススキ属、チガヤ属などのウシクサ族と判断される。また単細胞珪酸体における上下部の膨らみの部分に帽子の縁のようなものが存在しているように見える。形態分類において縁が存在するウシクサ族の単細胞珪酸体についてはススキ属と判断されており、本試料はウシクサ族のススキ属である可能性が高いと判断されよう。なおススキ属にはオギ、ススキ、トキワススキなどがあり、ススキはいたるところの原野に普通な多年草である(北村・村田・小山1964)。

引用文献

- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -。考古学と自然科学 9 p.15-29。
藤原宏志(1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) - イネ(Cryza) 属植物における機動細胞珪酸体の形状 -。考古学と自然科学 11 p.9-20。
北村四郎・村田 源・小山謙夫(1964) 原色日本植物区図 草本編(Ⅲ) 保育社 p.465



図版 出土植物遺体の植物珪酸体 (scale bar:30 μ m)

1~3:ウツリサ族機動細胞珪酸体 (1-a, 3:断面、1-b, 2:側面)

4:ススキ属型単細胞珪酸体

5、6:灰像 (↑:単細胞珪酸体列)

4. 新田西沢遺跡・新田平林遺跡出土遺物胎土化学分析

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

(1) 実験条件

① 試料 分析に供した試料は表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

② X線回折試験 土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定は日本電子製 JDX-8020 X線回折装置を用いた実験条件で実験した。

Targetcu:Filter:NiVoltage:40KV,Current:30mA,ステップ角度:0.02°, 計数時間:0.5秒

③ 化学分析 元素分析は日本電子製 5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は、加速電圧:15KV、分析法:スプリント法、分析倍率:200倍、分析有効時間:100秒、分析指定元素10元素とした。

(2) X線回折試験結果の取り扱い

表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物、造岩鉱物が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物、造岩鉱物の各々に記載される数字は、チャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

A. 組成分類

Mont-Mica-Hb三角ダイヤグラム 第1図に示すように、三角ダイヤグラムを1~13に分割し位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont,Mica,Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。モンモリロナイトは、 $\text{Mont} / \text{Mont} + \text{Mica} + \text{Hb} \times 100$ でパーセント (%) で表示する。同様に Mica, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラムの1から4は Mont, Mica, Hb の三成分を含み、各辺は二成分、各頂点は一成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第1図の通りである。

Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイヤグラム 第2図に示すように菱形ダイヤグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥岩 (Ch)、のうち、a:三成分以上含まれない、b: Mont, Ch の二成分が含まれない、c: Mica, Ch の二成分が含まれないの3例がある。菱形ダイヤグラムは、Mont-Ch, Mica-Hb の組み合わせを、表示するものである。Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々組み合わせごとにパーセントで表すもので、例えば $\text{Mont} / \text{Mont} + \text{Ch} \times 100$ と計算し、Mica, Hb, Ch も各々同様に計算し記載する。菱形ダイヤグラム内にある1~7は Mont, Mica, Hb, Ch のうち三成分、各頂点は二成分を含んでいることを示す。位置分類について基本原則は第2図の通りである。

(3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素で100%)になる)で計算し、化学分析法を作成した化学分析法に基づいてSiO₂-Al₂O₃図、Fe₂O₃-MgO図、K₂O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

A. タイプ分類

第1表胎土性状表には新田西沢遺跡より出土した須恵器と比較対象遺物として、沼田奈良古墳群・月夜野ヤブタ・月夜野ヤブタ(V)の須恵器が記載してある。第3表タイプ分類一覧表に示すように土器は、AからDタイプに分類された。

Aタイプ: Hbの一成分を含み、Mont、Mica、Chの三成分に欠ける。

Bタイプ: Mica、Hbの二成分を含み、Mont、Chの二成分に欠ける。

Cタイプ: Mica一成分を含み、Mont、Hb、Chの三成分に欠ける。

Dタイプ: Mont、Mica、Hb、Chの四成分に欠ける。高温で焼成されたため鉱物は分解してガラスに変質。

B. 石英(Qt) - 斜長石(Pl)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して、素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々固有の石英と斜長石比を有している。第5図Qt-Pl図に示すようにQtの強度が小の領域から大の領域にかけてI~IIIのタイプとその他のタイプに分類された。(I~IIIのタイプはSiO₂-Al₂O₃図において分類されたものである)

Iタイプ: Qtが1200~2000、Plが200~600の領域に分布する。

IIタイプ: Qtが700~1000、Plが220から600の領域に分布する。新田平林遺跡のが集中する。

IIIタイプ: Qt小・Qtが800~1300、Plが0~200の領域に分布する。月夜野ヤブタ遺跡の坏が集中

IIIタイプ: Qt中・Qtが1500~2200、Plが0~200の領域に分布する。新田西沢遺跡の坏、月夜野ヤブタ(V)の壺、沼田奈良古墳群の壺類が混在する。

IIIタイプ: Qt大・Qtが2800~3300、Plが0~180の領域に分布する。新田西沢遺跡坏が集中する。

その他: 新田西沢遺跡の坏8、14、16はいずれのグループにも入らず異質である。

(4) 化学分析結果

第2表化学分析に示すように、新田西沢遺跡から出土した須恵器と比較対象遺物として沼田奈良古墳群、月夜野ヤブタ・月夜野ヤブタ(V)の須恵器が記載してある。分析結果に基づいて第6図SiO₂-Al₂O₃図、第7図Fe₂O₃-MgO図、第8図K₂O-CaO図を作成した。第6図SiO₂-Al₂O₃図を基準として土器はIからIIIのタイプとその他に分類した

A. SiO₂-Al₂O₃との相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図に示すように土器はI~IIIタイプとその他に分類した。

Iタイプ: SiO₂が42~55%、Al₂O₃が19~30%の領域に分布する。新田西沢遺跡の坏が集中。

IIタイプ: SiO₂が55~60%、Al₂O₃が32~35%の領域に分布する。新田平林遺跡の坏が集中。

IIIタイプ: SiO₂が63~75%、Al₂O₃が14~25%の領域に分布する。新田西沢遺跡、月夜野ヤ

ブタ・月夜野ヤブタ (V)、沼田奈良古墳群の各土器が共存する。

その他：新田西沢遺跡の坏8、14、16はどのグループにも属さず異質である。

B. Fe 203-Mg 0との関連について

Iタイプ：Fe 203が12~20%、Mg 0が1~3%の領域に分布する。新田西沢遺跡の坏が集中する。

II・IIIタイプ：Fe 203が3~7%、Mg 0が0~0.5%の領域に分布する。新田西沢遺跡、月夜野ヤブタ・月夜野ヤブタ (V)、沼田奈良古墳群が共存する。

その他：新田西沢遺跡の7と8、月夜野ヤブタ (V)の3点は、Fe 203の領域が9~12の感度で共存する。新田西沢遺跡の10はOが幾分高い。

C. K 20-Ca 0の関連について

Iタイプ：K 20が3.0%~4.8%、Ca 0が0.5~1.2%領域に分布する。K 20が大の領域で、新田西沢遺跡の坏が集中する。

IIタイプ：K 20が1.8%~3.2%、Ca 0が0.2~0.8%の領域に分布する。K 20が小の領域で、新田平林遺跡と沼田奈良古墳群が共存する。

IIIタイプ：K 20が1.8~3.2%、Mg 0が0.2~0.8%の領域に分布する。K 20が中の領域で新田西沢遺跡、月夜野ヤブタ・月夜野ヤブタ (V)、沼田奈良古墳群が共存

その他：新田西沢遺跡の坏16はどのグループにも属さず異質である。月夜野ヤブタの32はCa 0が幾分高いがK 20中に近い。

(5) まとめ

X線回折試験と蛍光X線分析結果に基づいて土器胎土タイプを第3表タイプ分類表と第4表組成分類表に示すように分類した。

a. Iタイプは新田西沢遺跡のI、9、12、13の4固体で、粘土の化学組成と砂の混合比が一致しており明らかに統一性があり、他と異なる組成。

b. IIタイプは新田平林遺跡の17、18の坏で、粘土の化学組成と砂の混合比が一致しており、明らかに統一性があり、他と異なる組成。

c. IIIタイプは砂の混合比において相違があり、4タイプに細分される。

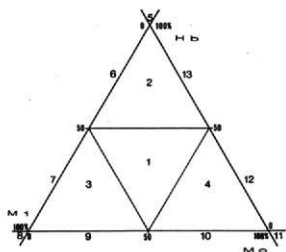
・「IIIタイプ・Qt小」：月夜野ヤブタ32と33が該当。

・「IIIタイプ・Qt中」：新田西沢遺跡の2、4、5、7、10、11、の坏と沼田奈良古墳群の土器27~36の5個の土器、月夜野ヤブタ (V)の、沼田奈良古墳群34~36のこの土器が共存し化学組成と、砂の混合比の両者の類似性が高く、関連性が高い。

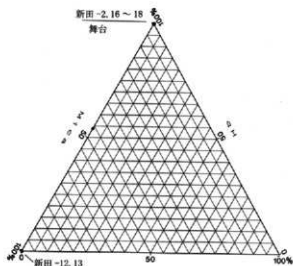
・「IIIタイプ・Qt大」：新田西沢遺跡のIII、6、15の3個が該当する。

・「その他」：新田西沢遺跡の8と16は各々異なる組成を示し、どのタイプの土器とも異なる組成を示し異質である。8と16は各々異質である。

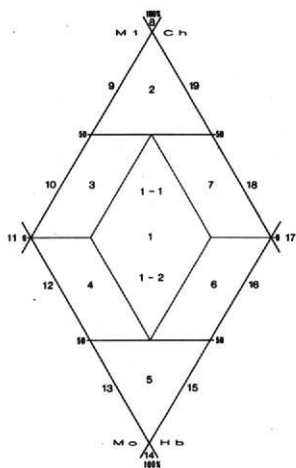
以上の結果から判断して、土器の胎土は6タイプとその他に分類される。各タイプの土器は異なる技術・集団で作られている。IIIタイプは4つに細分されるが、この細分は砂の混合比が異なることから生じた現象で、同じ化学組成の粘土を基礎として、砂の混合比を買えているもので、近い関係にありながら製作集団が異なることを意味している。



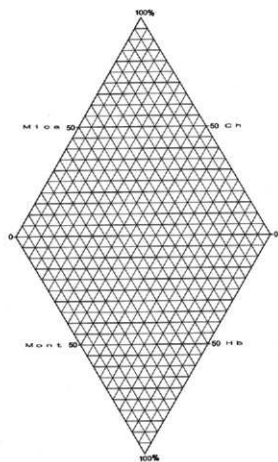
三角ダイヤグラム位置分類図



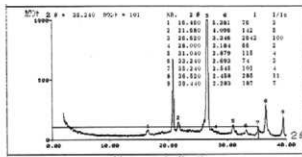
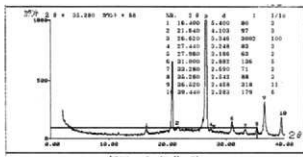
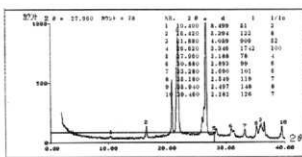
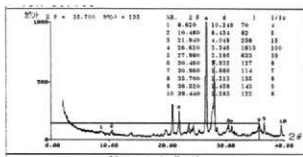
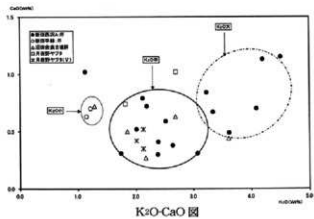
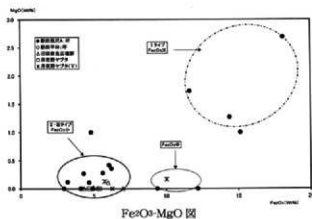
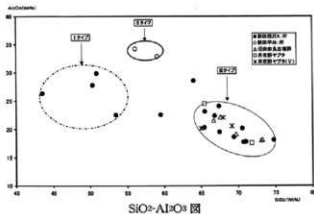
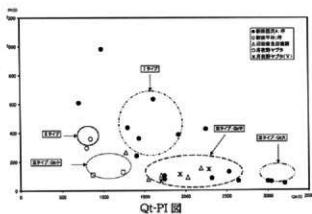
Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

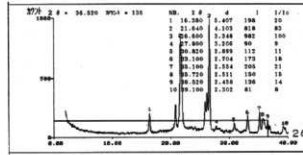
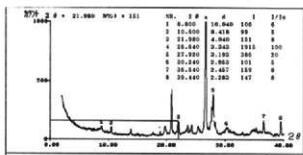
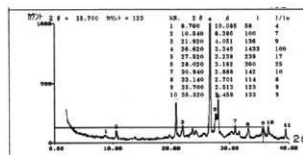
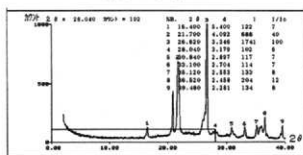
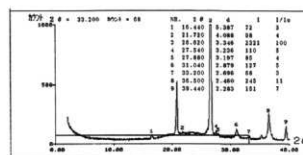
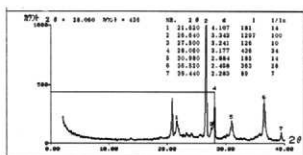
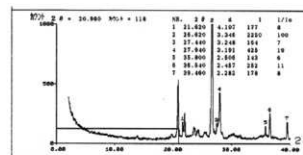
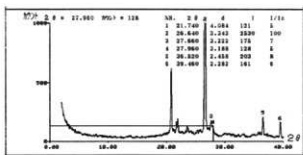
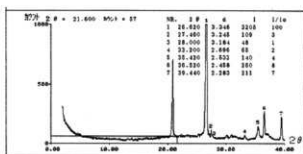
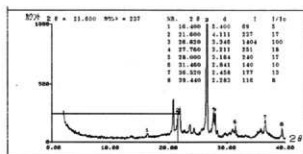


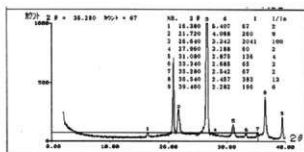
菱形ダイヤグラム位置分類図



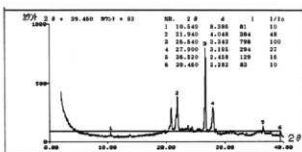
Mo-Ch,Mi-Hb 菱形ダイヤグラム



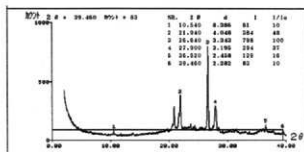




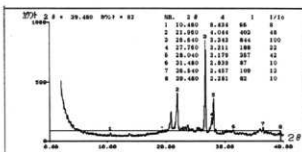
新田-15 (1住-53)



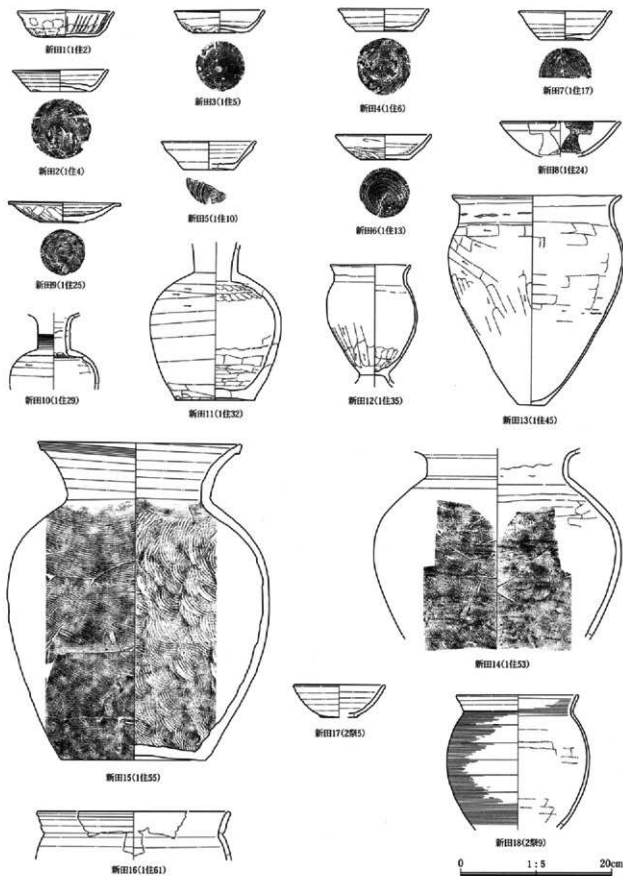
新田-16 (1住-61)



新田-17 (2障-5)



新田-18 (2祭-9)



胎土分析を実施した須恵器と土師器

5. 黒曜石の原産地分析

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

(1) 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置(日本電気製J SX-3200)で行った。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法(FP法)による自動定量計算システムが採用されており、6C~92Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源(最大30kV、4mA)の採用で微量試料~最大290mmφ×80mmHまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では、16資料自動交換機能により連続して分析できる。分析はバルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。分析にあたっては、露頭より採取した黒曜石を打ちかき、比較的平滑な面を分析面とする未整形試料をX線照射範囲が約1.5mmφの試料台上に直接のせ分析した。実験条件はバルクFP法(スタンダードレス方式)、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=Rh、加速電圧=30kV、管電流=自動制御、分析時間=200秒(有効分析時間)である。また、分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。

(2) 分析結果の取り扱い

この分析装置で分析した標準試料の分析値と標準試料の公開された分析値との間は、ほぼ等しい分析値が認められた。

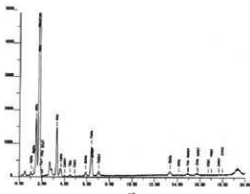
分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3~4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

岩石の化学組成を構成する主要元素と微量元素の中から、岩石の骨格となるSiとAl、有色鉱物の主要元素であるFe, Ca、無色鉱物の主要元素であるNaとKの関連からK、副成分鉱物のイルメナイトからFeとTi、微量元素ではRbとSrの各元素組み合わせにより黒曜石を分類する図を製作した(周藤他, 2002)。基本的には主要元素の各元素が重複しない組み合わせとしたが、Fe, Mn, Tiは鉄質関連として相関性の高い元素であり、TiはFeとMnの2元素との対比となっている。主要元素と微量元素の酸化物濃度(重量%)でSiO₂-Al₂O₃-Fe₂O₃-TiO₂-K₂O-CaO, TiO₂-MnO, Rb₂O-SrOの5組の組み合わせで図を作成した。

(3) 分析結果

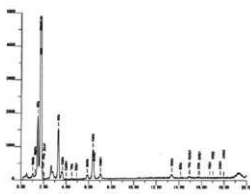
新田西沢遺跡より出土した黒曜石遺物は表の化学分析の原産地欄に示すように4個の分析のうち新田平林-3, 6(第81図55)は和田峠系-2、新田平林-1(第76図5), 2, 4, 5(第81図54)の3個は和田峠系-1である。



ファイル名: C:\kva2009\kva\新田-1.spc 測定日時: 2008年12月16日 09時17分27秒
 測定名: 黒曜石・石鏡
 測定方法: 電子線分析装置 電子線方式
 測定条件: 電圧: 30.0kV 電流: 0.600mA SIF 9k: 200.00sec /CA: Vac
 測定場所: 理学部 理学系
 測定機名: 日立
 分析元素: Na, Mg, Al, Si, P, S, Cl, Ti, Mn, Fe, Ni, Sr, Y, Zr

Num	元素 / 化学式	wt (%)	at/(wt%) ^{1/2}	測定強度	検出強度	標準強度
1	11 Na2O	4.144	4.3448	0.541263	1013	0.3275
2	12 MgO	nd	nd	nd	nd	nd
3	13 Al2O3	12.777	7.920	0.252819	1809	0.0714
4	14 SiO2	76.921	81.178	0.756671	80493	0.3630
5	15 P2O5	nd	nd	nd	nd	nd
6	16 S2O	5.007	3.497	0.201422	1978	0.0300
7	20 CaO	0.578	0.656	0.02046	268	0.0290
8	21 TiO2	1.150	0.805	0.034164	711	0.0211
9	22 FeO	3.189	0.997	0.029939	1850	0.0384
10	24 NiO	0.261	0.358	0.010158	1452	0.0084
11	37 SrO	0.040	0.049	0.014927	293	0.0041
12	38 Y2O3	0.043	0.027	0.010151	58	0.0042
13	39 ZrO2	0.074	0.021	0.002530	483	0.0064
14	40 ZrO2	0.048	0.017	0.002084	89	0.0061

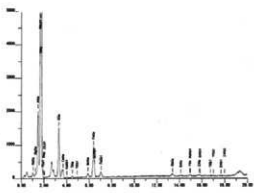
新田-1 [黒曜石・石鏡]



ファイル名: C:\kva2009\kva\新田-2.spc 測定日時: 2008年12月16日 09時22分29秒
 測定名: 黒曜石・石鏡
 測定方法: 電子線分析装置 電子線方式
 測定条件: 電圧: 30.0kV 電流: 0.300mA SIF 9k: 200.00sec /CA: Vac
 測定場所: 理学部 理学系
 測定機名: 日立
 分析元素: Na, Mg, Al, Si, P, S, Cl, Ti, Mn, Fe, Ni, Sr, Y, Zr

Num	元素 / 化学式	wt (%)	at/(wt%) ^{1/2}	測定強度	検出強度	標準強度
1	11 Na2O	3.975	4.080	0.564727	1016	0.0838
2	12 MgO	nd	nd	nd	nd	nd
3	13 Al2O3	12.738	7.935	0.540198	1894	0.0638
4	14 SiO2	77.803	81.294	0.368973	10100	0.0738
5	15 P2O5	nd	nd	nd	nd	nd
6	16 S2O	3.201	0.006025	1924	0.0205	
7	20 CaO	0.130	0.184	0.004418	254	0.0217
8	21 TiO2	0.172	0.084	0.002233	157	0.0188
9	22 FeO	0.041	0.082	0.001384	187	0.0088
10	24 NiO	0.011	0.095	0.000441	1497	0.0005
11	37 SrO	0.021	0.015	0.000364	239	0.0042
12	38 Y2O3	0.021	0.009	0.000261	17	0.0046
13	39 ZrO2	0.099	0.001	0.000137	643	0.0043
14	40 ZrO2	0.087	0.001	0.000092	848	0.0042

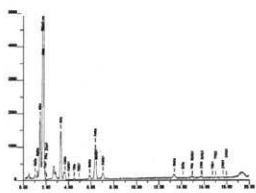
新田-2 [黒曜石・剥片]



ファイル名: C:\kva2009\kva\新田-3.spc 測定日時: 2008年12月16日 09時29分09秒
 測定名: 黒曜石・石鏡
 測定方法: 電子線分析装置 電子線方式
 測定条件: 電圧: 30.0kV 電流: 0.600mA SIF 9k: 200.00sec /CA: Vac
 測定場所: 理学部 理学系
 測定機名: 日立
 分析元素: Na, Mg, Al, Si, P, S, Cl, Ti, Mn, Fe, Ni, Sr, Y, Zr

Num	元素 / 化学式	wt (%)	at/(wt%) ^{1/2}	測定強度	検出強度	標準強度
1	11 Na2O	3.837	3.892	0.527269	973	0.3133
2	12 MgO	nd	nd	nd	nd	nd
3	13 Al2O3	12.497	7.972	0.250402	1778	0.0879
4	14 SiO2	71.438	82.724	0.223074	18421	0.0764
5	15 P2O5	0.208	0.019	0.010562	217	0.0647
6	16 S2O	3.138	3.364	0.284714	1946	0.029
7	20 CaO	0.534	0.606	0.020971	258	0.0217
8	21 TiO2	0.180	0.089	0.004772	77	0.0274
9	22 FeO	0.070	0.197	0.007124	163	0.0091
10	24 NiO	0.000	0.000	0.000071	832	0.0040
11	37 SrO	0.018	0.000	0.000288	107	0.0043
12	38 Y2O3	0.012	0.001	0.000417	42	0.0048
13	39 ZrO2	0.006	0.004	0.001384	37	0.0048
14	40 ZrO2	0.048	0.007	0.000407	74	0.0064

新田-3 [黒曜石・剥片]



ファイル名: C:\kva2009\kva\新田-4.spc 測定日時: 2008年12月16日 09時32分19秒
 測定名: 黒曜石・石鏡
 測定方法: 電子線分析装置 電子線方式
 測定条件: 電圧: 30.0kV 電流: 0.420mA SIF 9k: 200.00sec /CA: Vac
 測定場所: 理学部 理学系
 測定機名: 日立
 分析元素: Na, Mg, Al, Si, P, S, Cl, Ti, Mn, Fe, Ni, Sr, Y, Zr

Num	元素 / 化学式	wt (%)	at/(wt%) ^{1/2}	測定強度	検出強度	標準強度
1	11 Na2O	3.770	3.924	0.504338	973	0.3133
2	12 MgO	nd	nd	nd	nd	nd
3	13 Al2O3	12.787	8.166	0.230291	1848	0.0891
4	14 SiO2	76.404	81.149	0.200571	14863	0.0604
5	15 P2O5	0.062	0.000	0.000181	190	0.0205
6	16 S2O	0.346	0.632	0.304691	1463	0.0217
7	19 K2O	0.070	0.070	0.000592	89	0.0210
8	20 CaO	0.166	0.087	0.001228	152	0.0291
9	22 FeO	0.039	0.408	0.000897	193	0.0081
10	24 NiO	0.018	0.020	0.000117	2570	0.0040
11	37 SrO	nd	nd	nd	nd	nd
12	38 Y2O3	0.001	0.001	0.000081	53	0.0067
13	39 ZrO2	0.014	0.005	0.000724	88	0.0064
14	40 ZrO2	0.014	0.005	0.000724	88	0.0064

新田-4 [黒曜石・剥片]

VI. 成果と問題点

1. 新田西沢遺跡と新田平林遺跡の遺構・遺物について

新田西沢遺跡 旧石器時代・縄文時代・平安時代にまたがる遺構・遺物が検出され、特に旧石器時代と平安時代については貴重な資料が得られている。ここでは、平安時代の1号住居出土の炭化建築部材と住居構造について簡単に触れておきたい。注目されるのは、角・板材の比率が80%を占めることと、それが樹齢50～100年のフジキを利用している点である。竪穴住居の部材に高樹齢の大木を加工した角・板材を多用する状況は極めて特異であり、当住居が一般的な住居とは区別される存在であったことを示唆している。また、こうした部材が炭化・残存する状況から土屋根構造を想定することができ、当該期の住居構造を復元する上でも重要なデータを提供するものと言えよう。尚、当住居は多数の須恵器を出土したが、これについてはX線回折と化学分析を行い、そのデータを基にして月夜野窯跡群の生産品との関連性を綿貫邦男氏が後段にて考察しているのので、そちらを参照されたい。

新田平林遺跡 1区では長径2m×短径1m前後の楕円形状の配石遺構が3基検出され、周辺部の出土土器から堀之内1式期に比定される可能性が高い。内容的には、外周を緑石で圍繞した内部に平石を敷設するもので、一見では石棺墓に類似するが、緑石自体の構築が1段のみで高さも低いことなどから、機能・性格的に異なるものと想定される。また、その下部には土坑状の掘り込みを伴わないことも考慮すれば、埋葬施設とも関係しない配石遺構と言えよう。このような配石遺構は、安中市天神原遺跡（大工原・林・他1994）や藤岡市中栗須滝川園遺跡（藤岡市教委1998）でも検出されており、基本的には祭祀的な性格を有すると考えられる。堀之内1式期の配石遺構の動態については、十分に解明されておらず、今後こうした小規模配石遺構を含めた分析が必要であろう。

また、配石遺構群が存在する地点の包含層内より、黒曜石を素材とする石鏃1点（第76図5）、石核2点（第81図54・55）、剥片3点（未掲載）が出土し、X線回折分析による産地同定を行っている。その詳細については前章を参照いただきたいが、東・西群屋や小深沢などの和田峠系が4点と主体を占め、他は星ヶ塔系が2点という結果が示されている。これらの遺物は、配石遺構との関連から時期的には堀之内1式期に比定される可能性が高い。縄文時代における群馬県域の黒曜石のあり方については、大工原 豊氏の一連の研究があり（大工原2001・2002）、特に前期段階の状況が明確にされている。それによれば、諸磯b式新段階～中期初頭では、星ヶ塔系が大多数を占めて和田峠系は激減し、当該期以前との間に大きな画期が存在するとされている。また、中期中葉では黒曜石の流通そのものが激減し、石鏃の中に散見される程度となってしまふ。こうした背景には、黒曜石を巡る流通ネットワークの中心が群馬県西部域から山梨県域へと転換したことや、黒曜石に込められた神話性の崩壊などが存在するとされている。後・晩期の様態は、良好な資料に乏しく判然としない状況であるが、後期後半から晩期にかけて再び黒曜石の流通量が漸増する傾向もある。当遺跡の事例が堀之内1式期に比定されるのであれば、当該期では和田峠系を主体に星ヶ塔系が組成する可能性もあり、今後資料の集積を図る中でその実態解明が必要とされる。

参考文献

大工原・林・他 1994 「天神原遺跡」『中野谷遺跡群』安中市教育委員会

藤岡市教育委員会 1998 「C13 中栗須滝川園遺跡」『年報』13

大工原 豊 2001 「縄文時代前期における黒曜石流通の転換—群馬から山梨へ—」『山梨県考古学協会誌』第12号

大工原 豊 2002 「黒曜石の流通をめぐる社会—前期の関東・中部地域—」『縄文社会論（上）』同社

2. 新田西沢遺跡1号住居出土の須恵器について

— 理化学的分析による産地同定と肉眼観察の特徴認知の関連について —

遺跡の所在する利根郡は群馬県の北毛地域として古代地域区分としてもよく使用される呼称である。古代須恵器生産でも一地域として認識されており、その中心的窯跡として月夜野窯跡群が知られている。新田西沢遺跡に検出された平安時代の1号住居跡からは投棄状況ではあるが、坏・甕・瓶類など350点を超す多量な須恵器が出土している。須恵器が何処からもたらされたかは暗に推測される。遺跡北北東方、比高差約300mの金比羅峠越えで5km圏内に位置する月夜野窯跡群からの供給であることは自然予想されるからである。

県内の産地(地域窯跡群)の同定は、胎土に対する一部研究者の鑑識眼的経験則によって喧伝されるが個人的感性に関わる部分が大きく容易に規範化されにくいのが現状である。ここでは肉眼観察による胎土の分類と化学的分析結果の関連を探る試みとし、肉眼観察による産地の同定(推定)が何処まで可能であるのか、また可ならば胎土について研究者が多少とも共有できる観察視点・表現を模索し今後の検討課題としたい。胎土の肉眼観察を行った試料は比較のため提供を受けた沼田市所在奈良古墳群出土の須恵器で第94図掲載の17点と当団所有の月夜野窯田沢入採取(窯)の試料である。

須恵器は肉眼観察で胎土の質感・混入物の状態より大凡A～Gに分類できた。

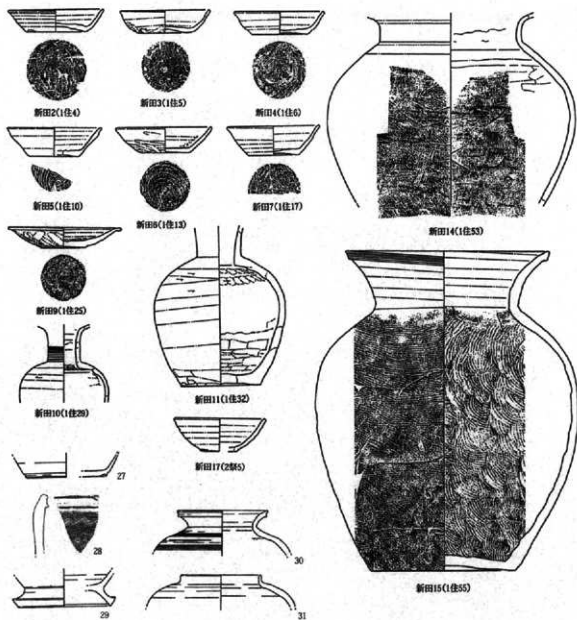
- A. (2・3・4・7・15・27・30・31) 生地はやや粗めで微気泡でザクツとした質感があり、微細白色粒をまべんなく含む。発泡性黒色粒が器面に現れるものもある。砂粒を含むものも有るが希である。
- B. (14・29) 緻密で粘性に富み、混入物は砂粒などは無く少量な微細白色粒を含む。断面色調は鈍橙が多く、堅緻な焼成が多い。
- C. (5・6) 微細砂粒を含むが器表面は滑らか。微細黒色粒を含むものと含まないものがあり、低火度焼成のためか発泡はしない。
- D. (9・11) 半透明の大・小(長石)粒と褐色発泡粒多く含む。器面断面とも粗雑で粘性は無い。織りが浅いためか細かな器面割れが生じる。
- E. (10) 砂粒など混入物ほとんど含まず均一な精土。器面・断面とも青灰色を呈しやや軟質の感触がある。
- F. (28) 粘性のある胎土に大粒長石を隙間無く含む焼成は堅緻。質量感がある。
- G. (17) 微細粒(長石・石英)を多量に含む器面のザラつきが顕著。粘性は無い。

蔵田沢入の須恵器胎土観察では上記のAとBに分類されるものが多く共通項としては量の多少は著しいが微細白色粒の混入であり、大きな差は胎土の粗密または粘性質感にある。ここでは月夜野窯跡群の製品は少なくとも両方特徴をもつものとして認識しておく。

利根郡における須恵器生産は月夜野窯跡群を中心とした一群一窯的な限定域への供給が考えられており、X線回折・化学分析による新田西沢遺跡1号住居及び奈良古墳群の須恵器はその多くが同一の胎土に起因するとされる結果に違和感はないがA～Fの分類資料については肉眼観察の意義に懐疑的な資料となるものがある。Dに分類した(9)・(11)は異なる組成であること。また、E(10)は見た目には全く異質な胎土として映り、分析結果ではそれを期待したが組成の異質性は得られず当該窯跡群製品の網羅的観察は必要は言うにおよばない。また、当項では考古学的観察の重要項目である成・調整・色調など紙幅の都合で記していないが、総じて轆轤による器面条痕は無いこと。轆轤回転に左方向が少数存在すること等が上げられる。いずれにしても、ある窯跡・窯跡群には胎土一つとっても複数の特徴要件が存在しており、分類を複雑にしている。

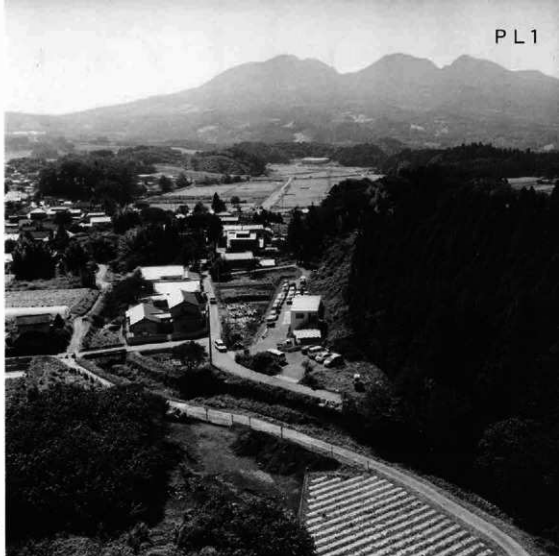
今回、新田西沢・奈良古墳群という消費遺跡と産地月夜野窯跡の須恵器を考古資料としての特徴からいかに的確に捉えるかが大きな課題であった。観察は回折・分析に迫ったものではないが結果的には後進的なのはぬぐえない。幾度かは同様な手法によって肉眼観察眼を高める訓練は必要に思われるが、考古学の基本的な方法論として確立されるべきであろう。新田西沢遺跡資料を考古学視点からの観察方法や方向性を模索・検討するための一端に据え、県内各地域の窯跡や消費遺跡須恵器の観察・分類との比較を通して肉眼観察を有効・実効性のあるものにできれば、より多くの資料の効率的産地同定の方向性が見えてくよう。

最後に、奈良古墳群須恵器を分析試料として提供いただいた沼田市教育委員会小池雅典氏に感謝するとともに、今後の研究資料としてともに活用いただければ幸いです。

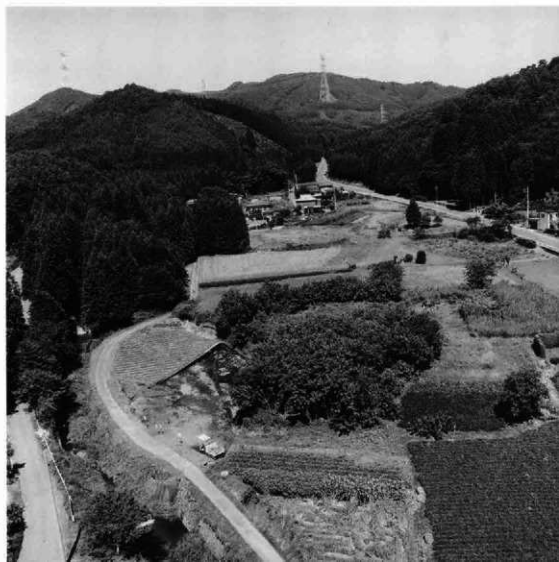


分析試料須恵器 (27~31) は沼田市奈良古墳群出土須恵器

写 真 图 版



a. 新田西沢遺跡の全景
(北方より)



b. 新田平林遺跡の全景
(南方より)



a. 旧石器時代石器群の検出状況
(南方より)



b. 同上(北方より)



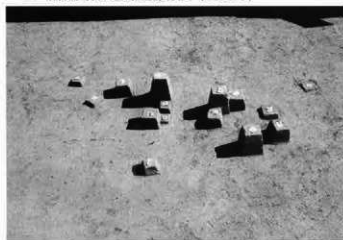
a. 旧石器時代石器群の検出状況 (北方より)



b. 同 左 (北方より)



c. 同 左 (南方より)



d. 2ブロックの検出状況 (西方より)



e. 3・4ブロックの検出状況 (西方より)



f. 5ブロックの検出状況 (東方より)



g. 5・6ブロックの検出状況 (南方より)

PL4 (新田西沢遺跡)



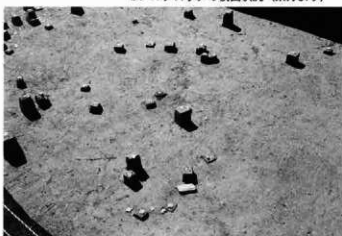
a. 5・6ブロックの検出状況 (北方より)



b. 4ブロックの検出状況 (東方より)



c. 8ブロックの検出状況 (西方より)



d. 7・8ブロックの検出状況 (北方より)



e. 台石 (No36) の検出状況



f. 台石 (No35) の検出状況



g. 9ブロックの検出状況 (西方より)



h. 敷き石 (No33) の検出状況



a. 石核 (No23) の検出状況



b. ナイフ形石器 (No1) の検出状況



c. 石核 (No18) の検出状況



d. 5~9ブロックの検出状況 (南方より)

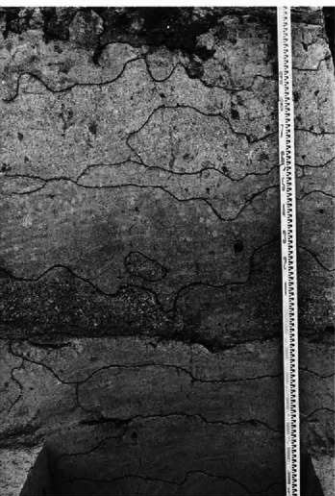


e. 遺跡内の堆積土層 (柱状土層No2)

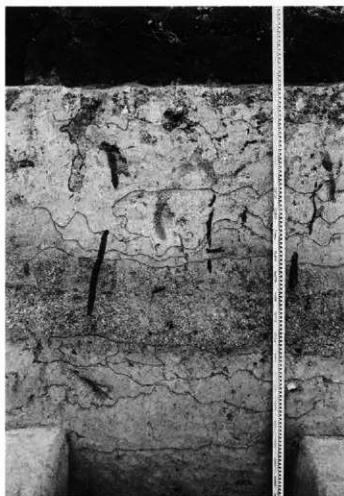


f. 同 左 (柱状土層No3)

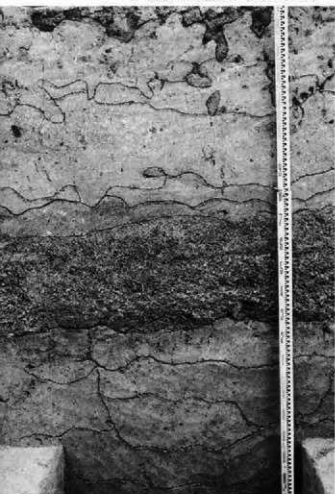
PL6 (新田西沢遺跡)



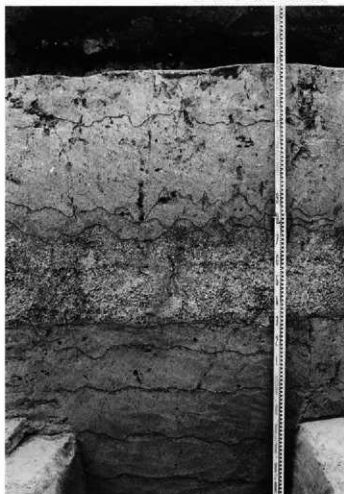
a. 遺跡内の堆積土層 (柱状土層No4)



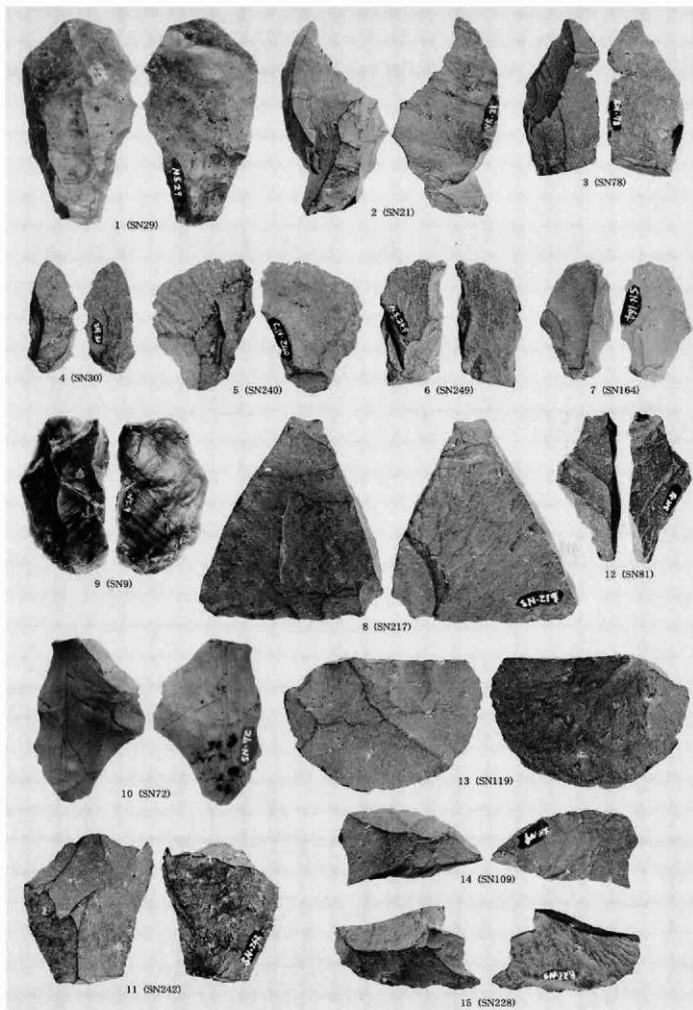
b. 同左 (柱状土層No5)



c. 同上 (柱状土層No6)



d. 同上 (柱状土層No7)



旧石器時代の石器群 (1)



16 (SN99)

17 (SN170)



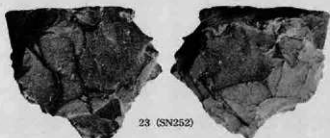
18 (SN6)



19 (SN97)



20 (SN17)



23 (SN252)



21 (SN52)



24 (SN155)



22 (SN257)



25 (SN258)



26 (SN43)



27 (SN218)



28 (SN203)



29 (SN301)



30 (SN161)



32 (SN94)



31 (SN232)



33 (SN248)



36 (SN259)



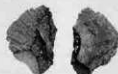
34 (SN300)



35 (SN173)



接1



接1-1 (SN240)



接1-2 (SN203)



接2
(SN178-192-196-176)



接2 (SN195)
接2 (SN192)



接2 (SN178)



接2 (SN196)



接3
(SN151-153)



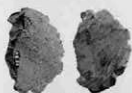
接3
(SN153)



接3
(SN151)



接4



接4-1 (SN50)



接4-2 (SN53)



接4-2 (SN55)



接4-3 (SN44)



接4-3 (SN47)



接4-3 (SN116)



接4-3 (SN118)



接5



接5-2 (SN142)



接5-3 (SN149)



接5-3 (SN140)



接5-1 (SN144)



接5-4 (SN258)



接6



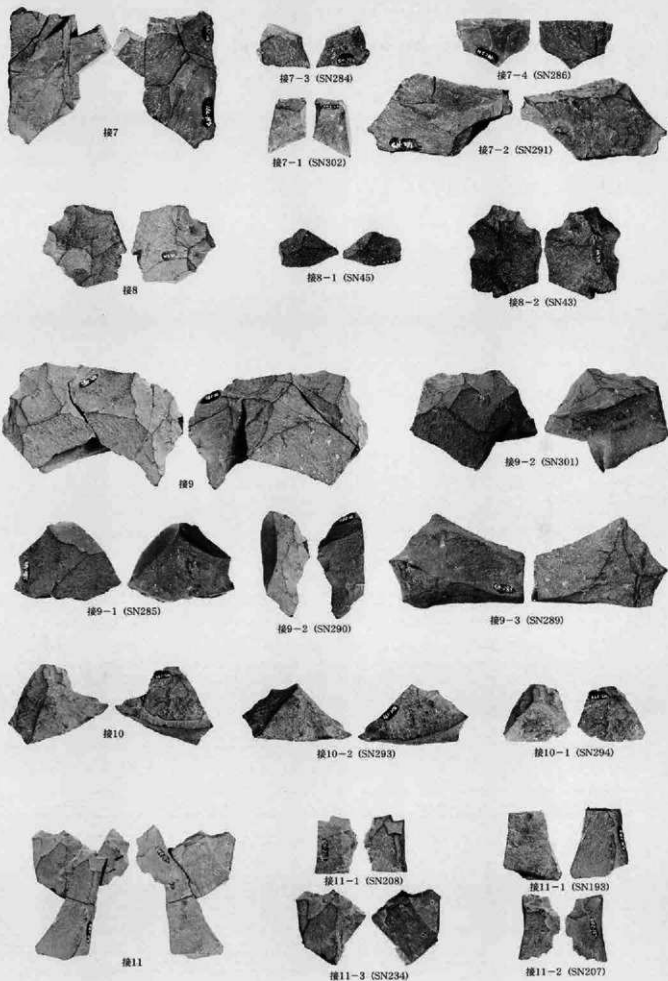
接6-1 (SN243)

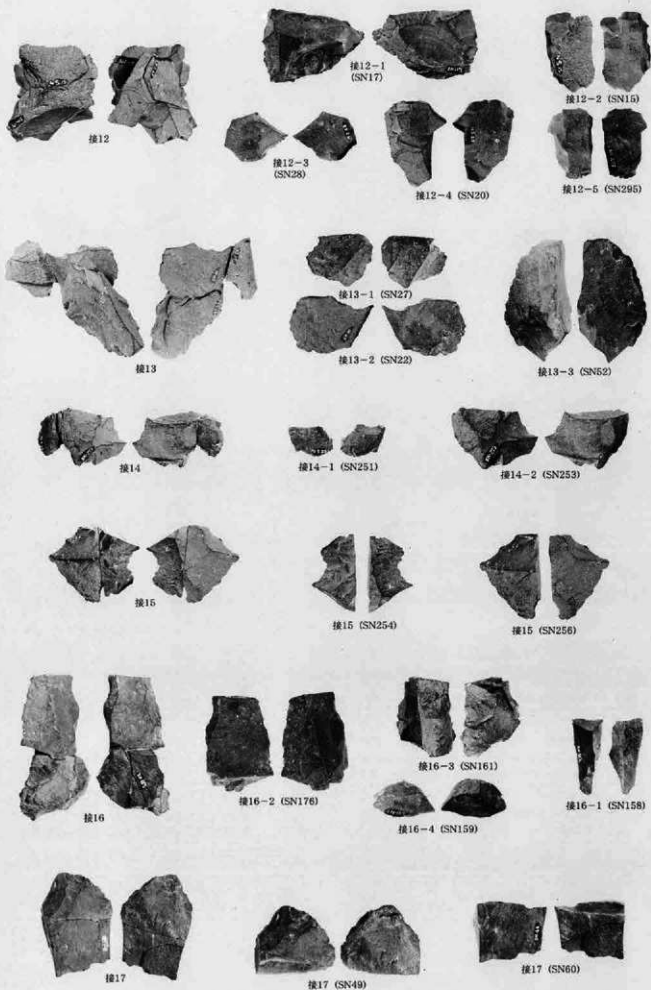


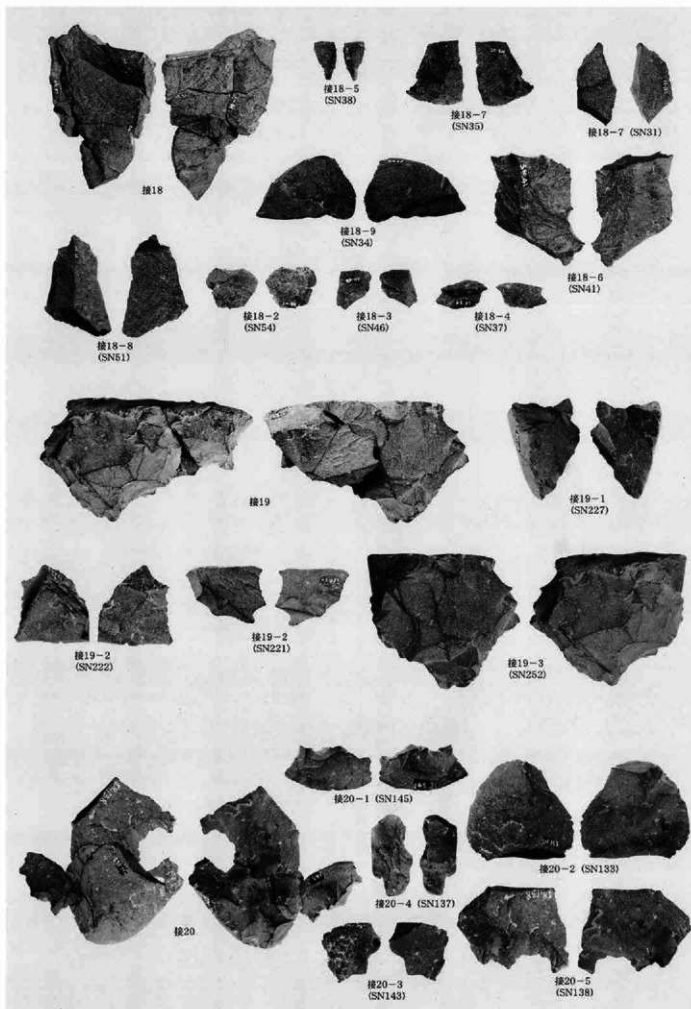
接6-2 (SN86)



接6-3 (SN177)









接21



接21-1 (SN128)



接21-2 (SN131)



接21-3 (SN122)



接21-3
(SN127)



接21-4 (SN155)



接22



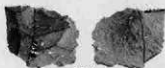
接22-2
(SN298)



接22-1
(SN297)



接23



接24



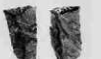
接25



接26



接23 (SN156)



接24 (SN152)



接25 (SN114)



接26 (SN113)



接23 (SN165)



接24 (SN135)



接25 (SN92)



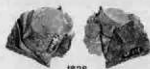
接26 (SN179)



接25 (SN69)



接27



接28



接28-1 (SN244)



接29



接27 (SN272)

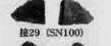


接28-2
(SN181)

接28-3
(SN211)



接28-4 (SN182)



接29 (SN100)



接27 (SN273)



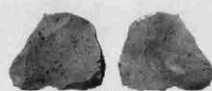
接29 (SN79)



接31



接31-2
(SN72)



接31-1
(SN99)



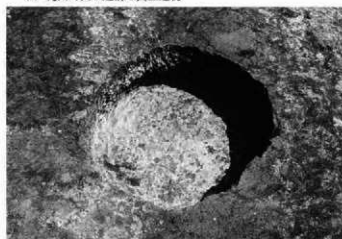
a. 縄文時代の遺構の出土遺物



b. 1号土坑全景 (南方より)



c. 同上・埋没土層



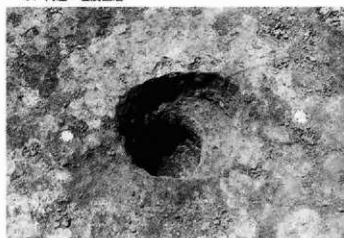
d. 2号土坑 (南方より)



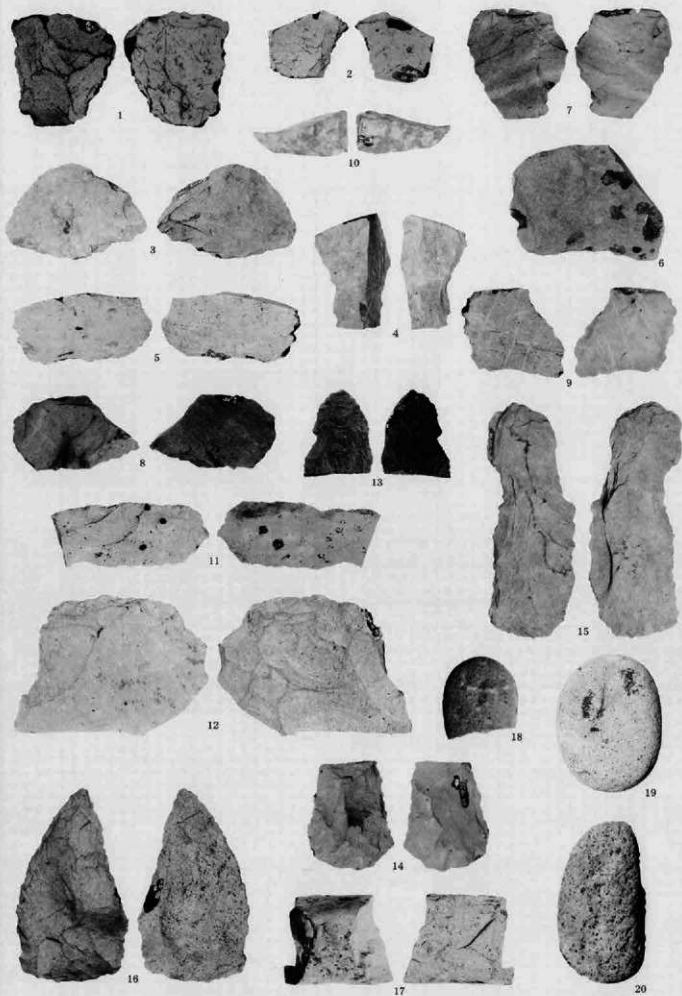
e. 同左・埋没土層



f. 1号埋没土器全景 (南方より)



g. 同左・掘方





a. 1号住居全景 (南方より)



b. 同上・埋没土層 (A-)



c. 同上・埋没土層 (-A')



d. 同上・埋没土層 (B-)



e. 同上・埋没土層 (-B')



a. 1号住居の遺物出土状況 (南方より)



b. 同上 (北方より)



c. 同上・中央部の炭化材の出土状況



d. 同上・東半部の炭化材の出土状況



a. 1号住居の炭化材出土状況



b. 同左・北東隅の状況



c. 同上・南西隅の状況



d. 同左



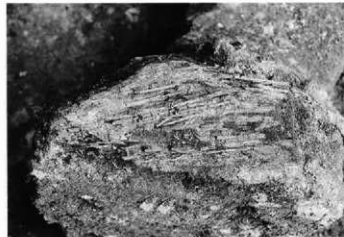
e. 同上・南東隅の状況



f. 同上・床面の敷物(カヤ材)



g. 同上・炭化した屋根材(カヤ材)



h. 同左



a. 1号住居西側壁面を被覆する炭化板材（北方より）



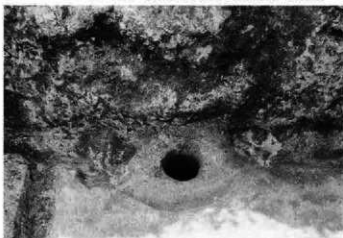
b. 同左



c. 同上・板材と壁面との間に挟む編み物



d. 同上・壁面側に打設された板材を固定する杭



e. 同左・杭材の根本を埋設する小穴



f. 床面上に敷かれた編み物



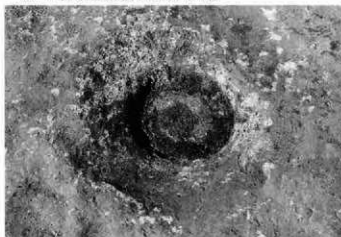
g. 同左



a. 1号住居の燃え残った主柱 (P1号)



b. 同左・炭化主柱を抜去した後の空隙



c. 同上・燃え落ちた主柱の痕跡 (P4号)



d. 柱穴 (P3号) に接する根太材を埋填した溝状の痕跡



e. 遺物の出土状況 (西方より)



f. 同左・西壁際の土器出土状況



g. 竈の前部と近縁部の遺物出土状況 (北方より)



h. 竈と近縁部の遺物出土状況 (西方より)



a. 1号住居の南東隅の遺物出土状況 (No11・30・35・55)



b. 遺物出土状況 (No9・12・13)



c. 遺物出土状況



d. 遺物出土状況 (No2)



e. 竈の状況 (西方より)



f. 同 左 (南方より)



g. 同上・煙道部の蓋石 (東方より)



h. 竈の埋没土層 (K-K')



a. 1号住居の竈の埋没土層



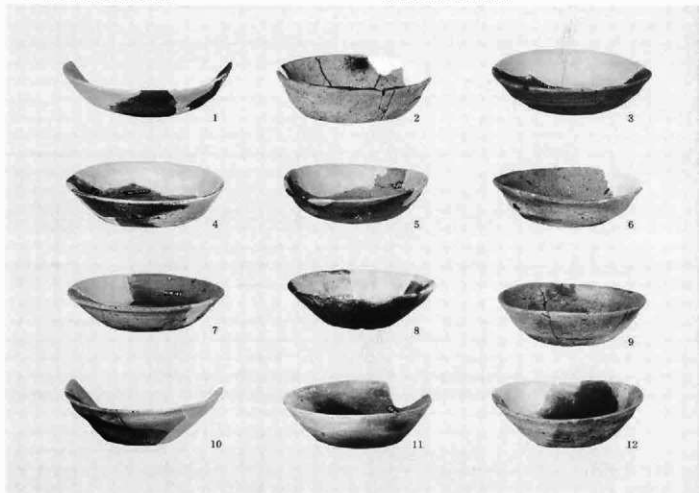
b. 同左 (J-J')



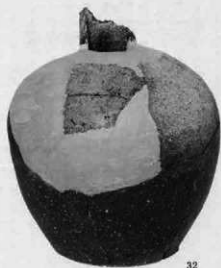
c. 竈の断ち割り調査の状況



d. 竈の掘方 (西方より)



e. 1号住居の出土遺物 (1)





33



34



35



37



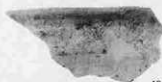
38



36



39



40



41

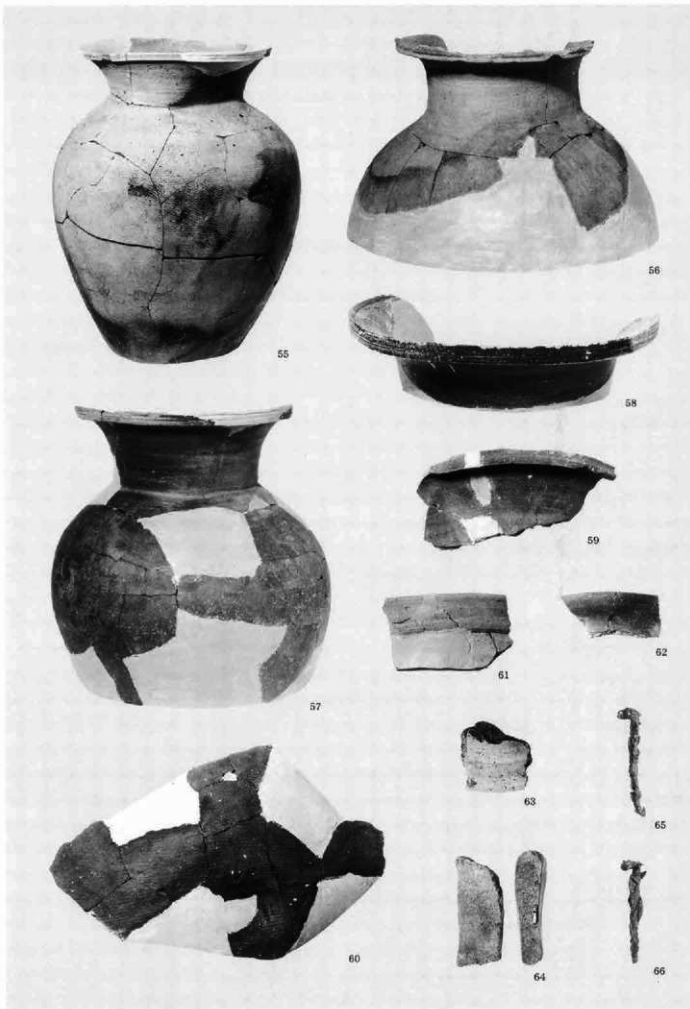


42



43





1号住居の出土遺物 (5)



a. 近世以降の溝状遺構 (北方より)



b. 同上・1号溝の埋没土層 (A-A')



c. 同上・2号溝の埋没土層



d. 同上・3号溝 (西方より)



a. 1 区縄文時代後期の配石遺構群 (西方より)



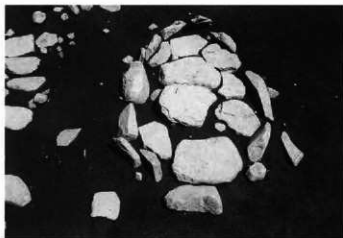
b. 同上・1号配石遺構(手前)と2号配石遺構(中央)



c. 同上・3号配石遺構(手前)と2・1号配石遺構(後方)



a. 1号配石遺構(手前)と2号配石遺構(後方)



b. 1号配石遺構(南方より)



c. 1号配石遺構の用上位の堆積土層(A-)



d. 同左(-A')



e. 2号配石遺構(南方より)



f. 3号配石遺構(南方より)



g. 3号配石遺構(北方より)



h. 同左・部分拡大



a. 1号配石遺構の断ち割り調査状況



b. 同左・部分拡大



c. 2号配石遺構の断ち割り調査状況



d. 3号配石遺構の断ち割り調査状況



e. 3号配石遺構の断ち割り調査状況・部分拡大



f. 1区北半部の調査状況

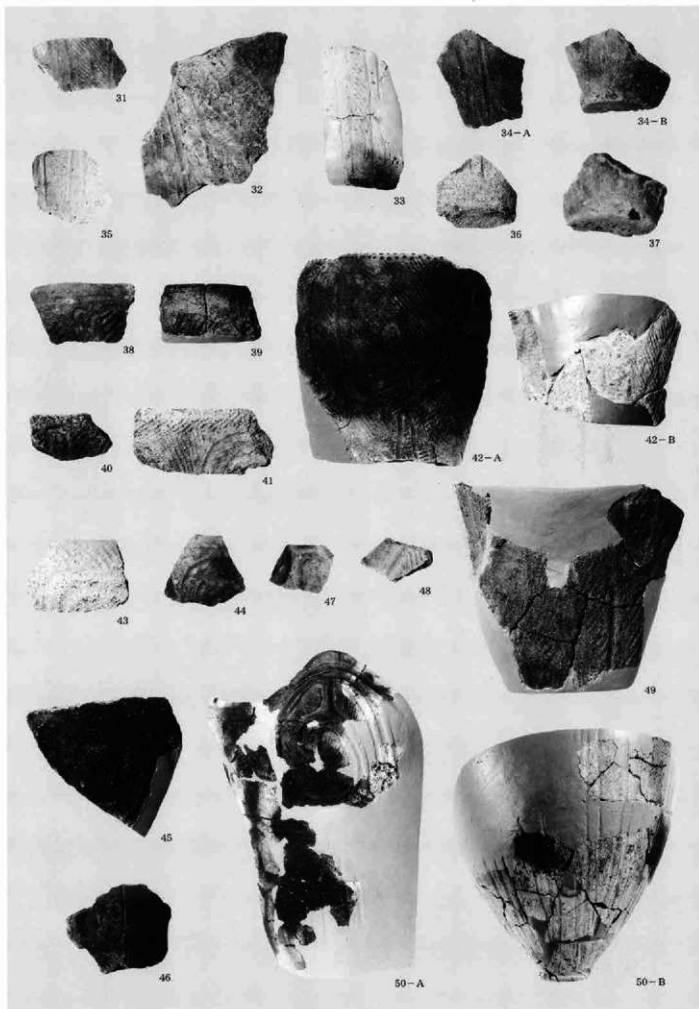


g. 1区北半部の遺物出土状況

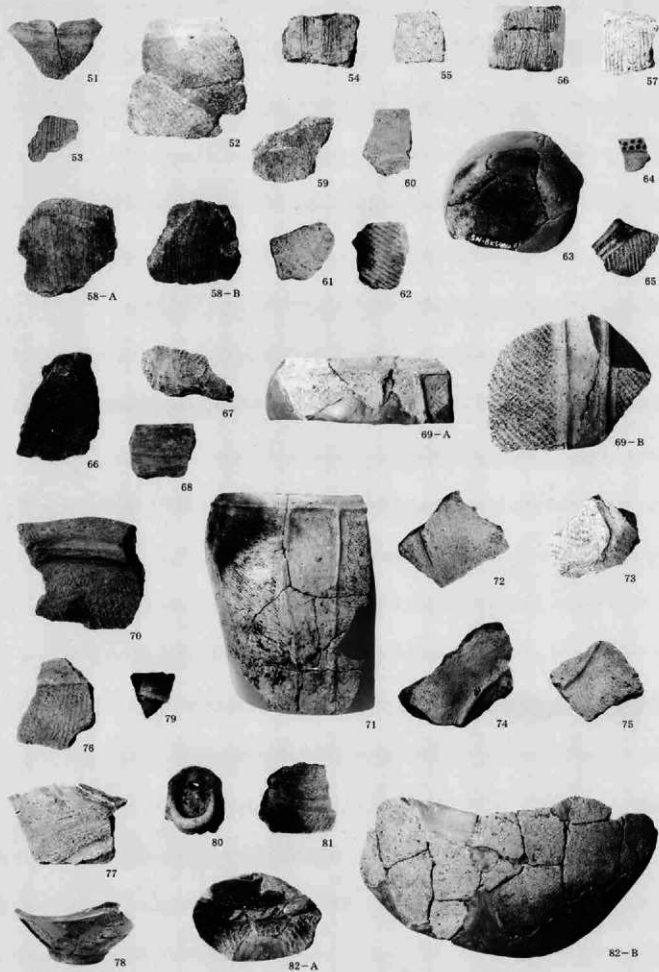


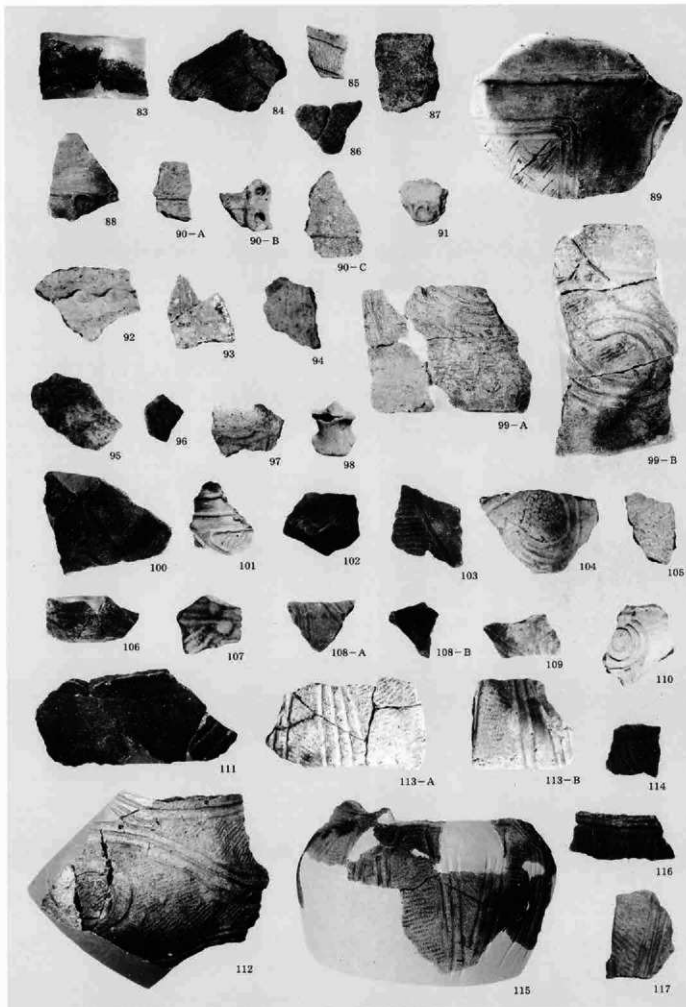
h. 同左・石棒 (No81) の出土状況



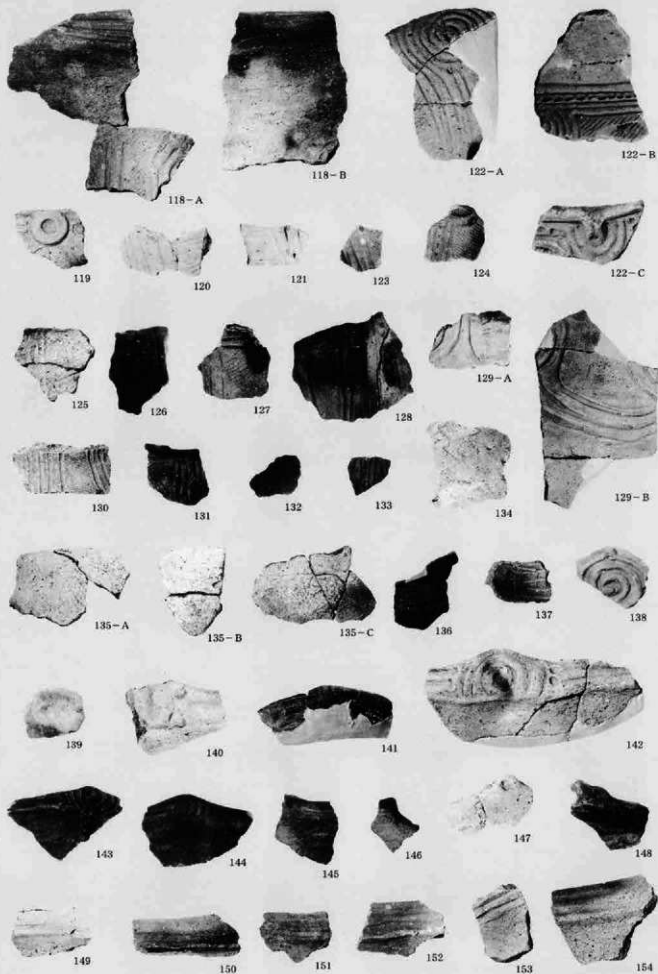


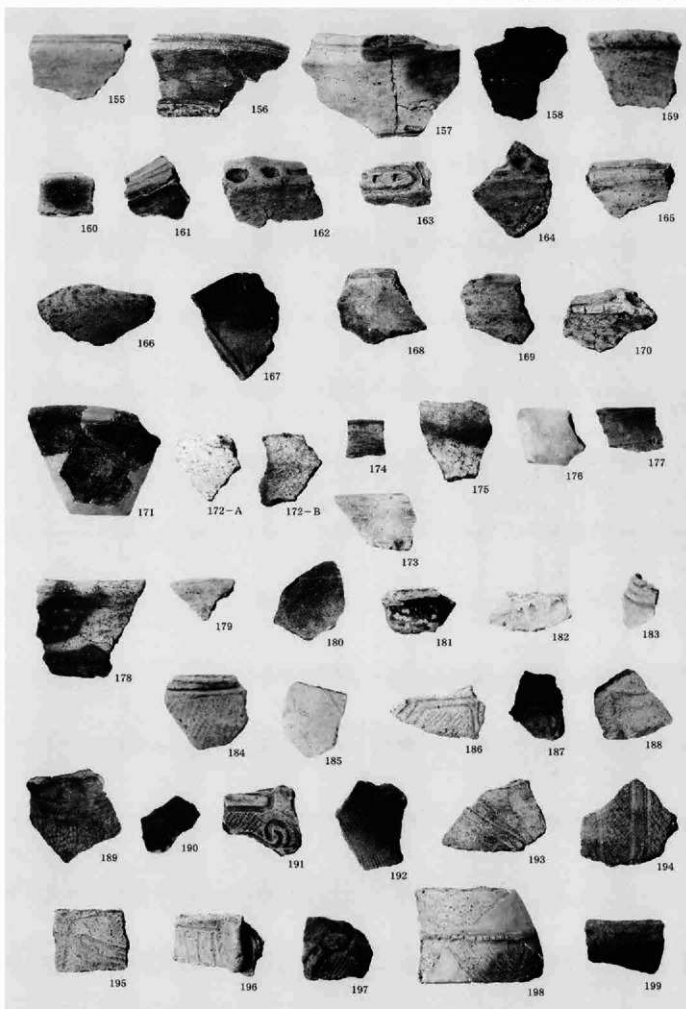
配石遺構および包含層出土の縄文土器 (2)



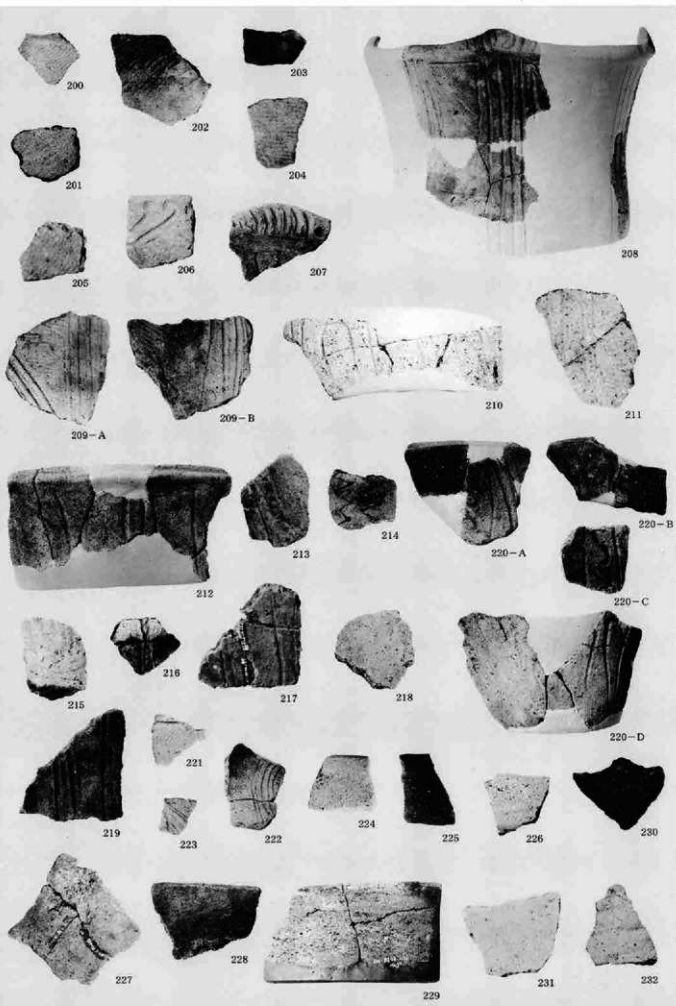


配石遺構および包含層出土の縄文土器 (4)

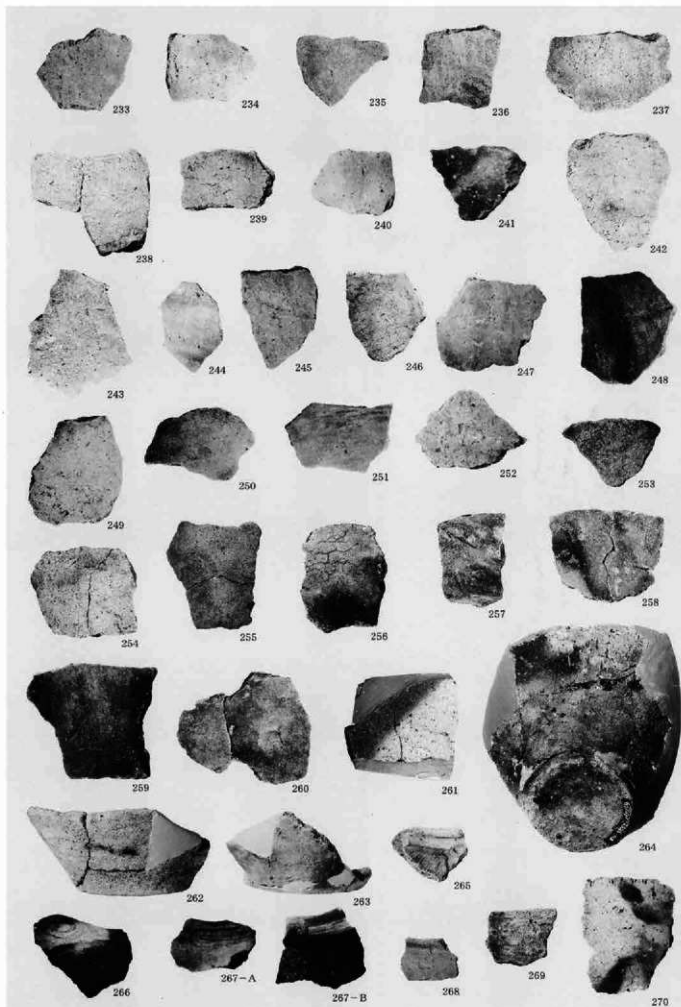




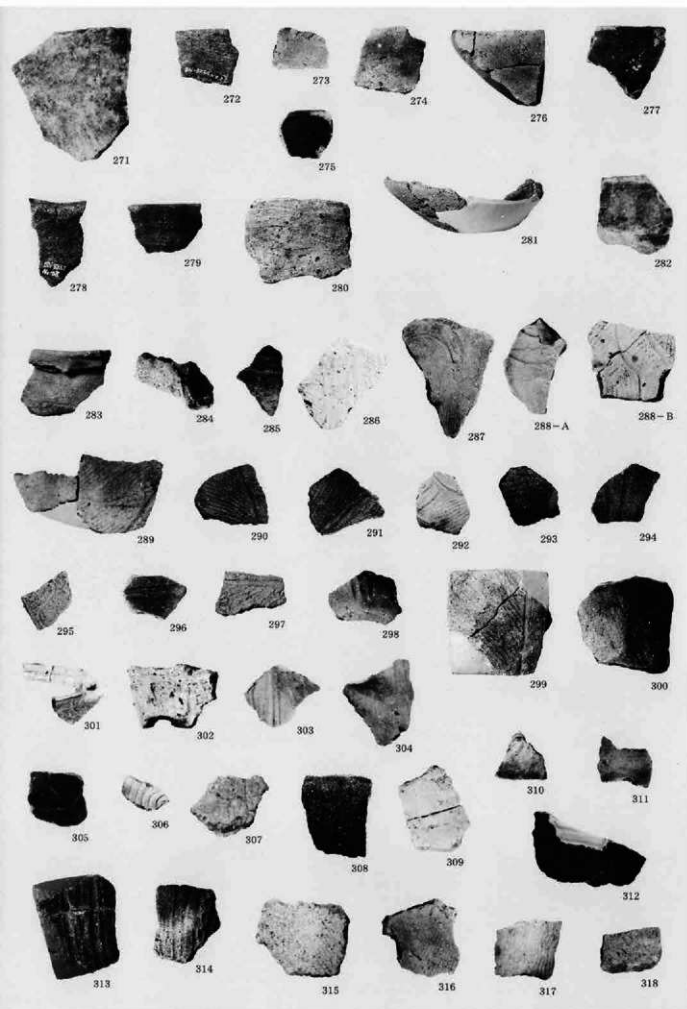
配石遺構および包含層出土の縄文土器 (6)

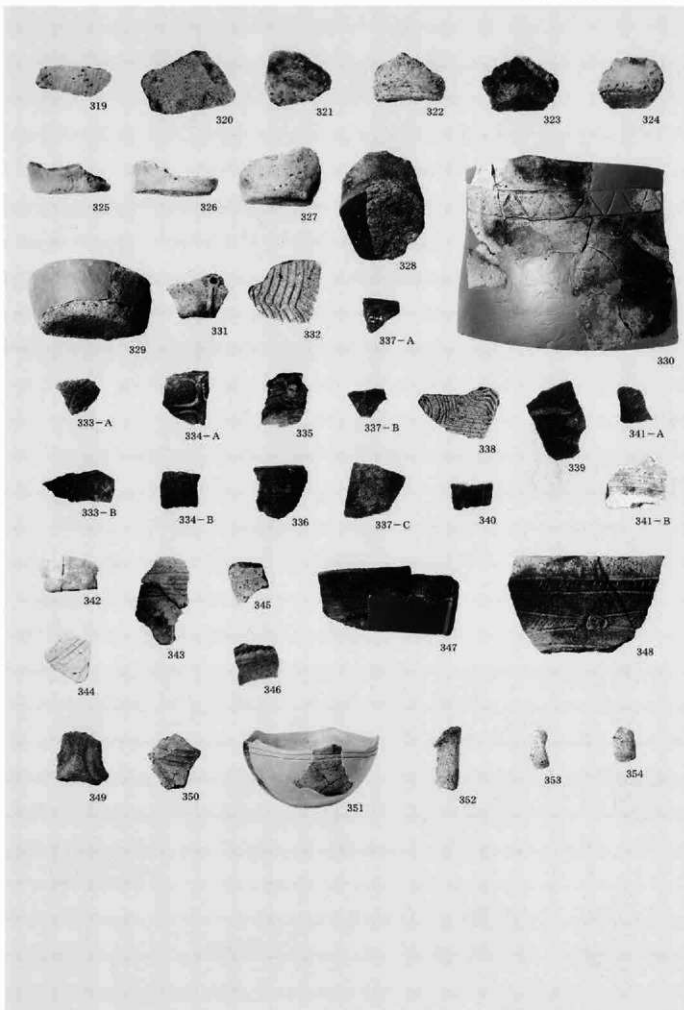


配石透模および包含層出土の縄文土器 (7)

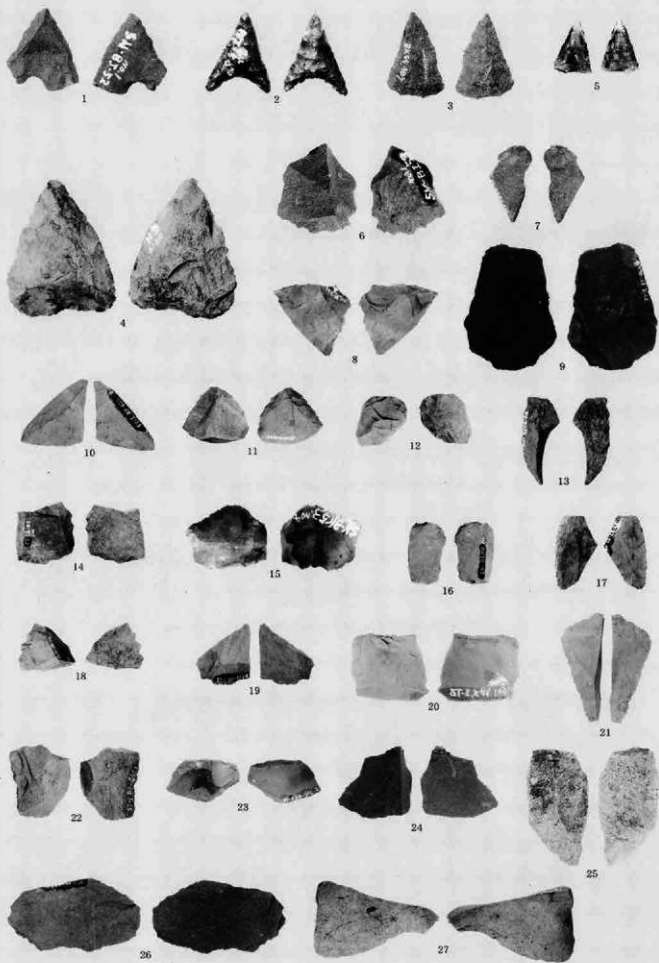


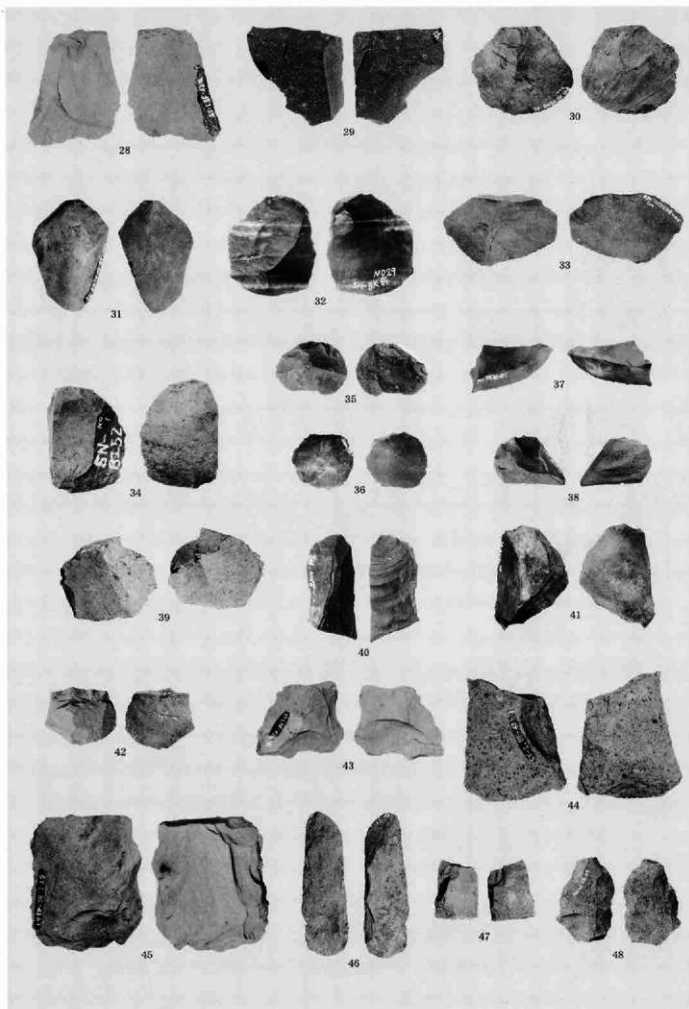
配石遺構および包含層出土の縄文土器 (8)



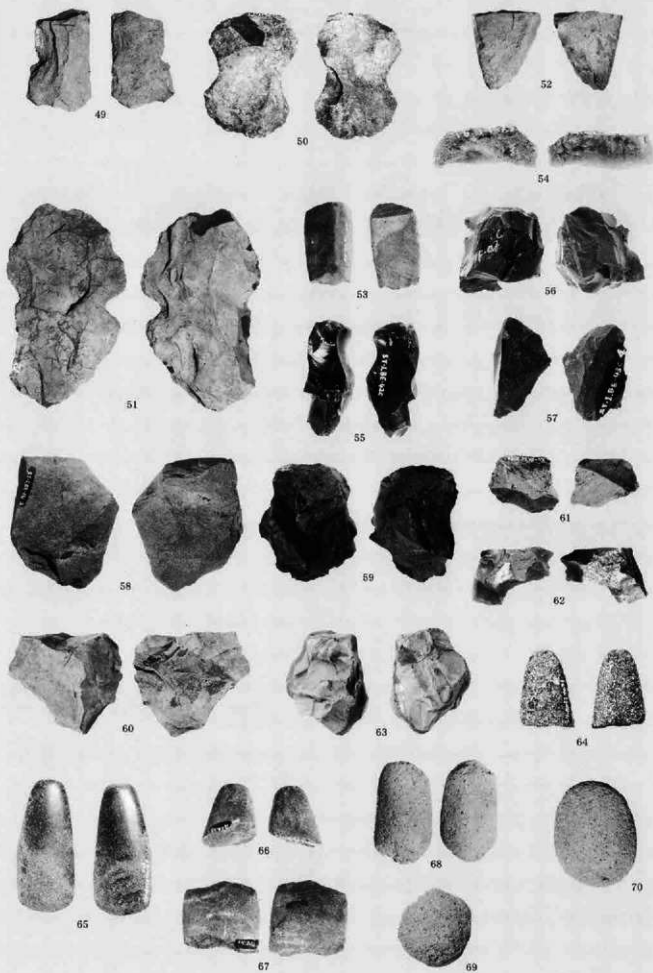


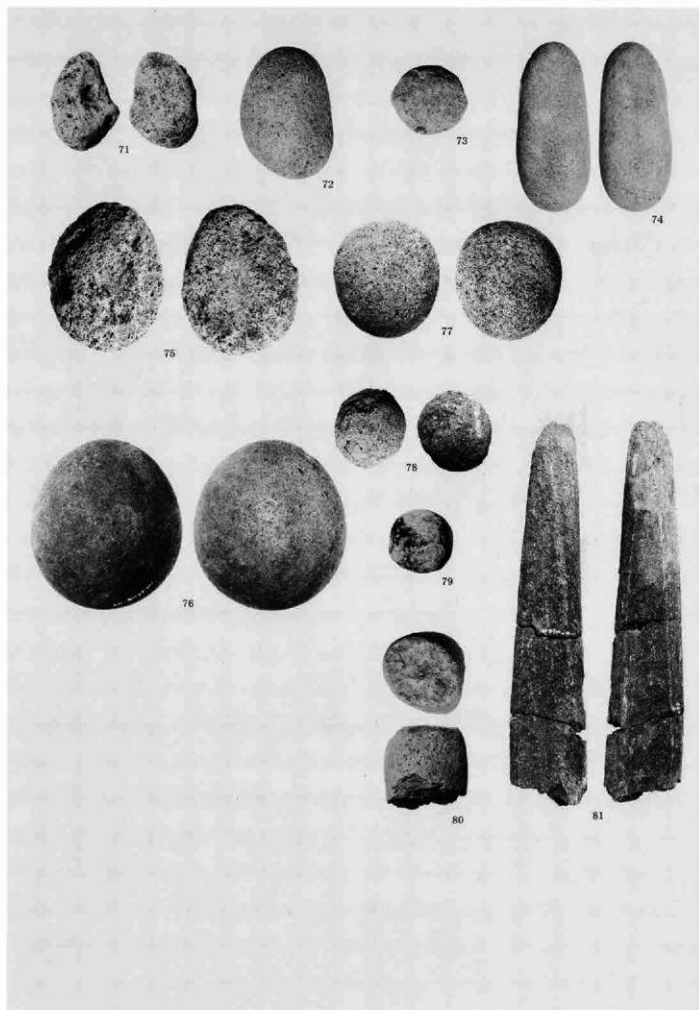
配石遺構および包含層出土の縄文土器 (10)





配石遺構および包含層出土の縄文石器 (2)





配石遺構および包舎層出土の縄文石器 (4)



a. 平安時代の1号祭祀遺構・堀方



b. 同左・埋没土層 (B-B')



c. 同上・遺物出土状況 (No1)



d. 同上・遺物出土状況 (No3・5~8)



e. 同上・埋没土層 (C-C')



f. 同上・埋没土層 (A-A')



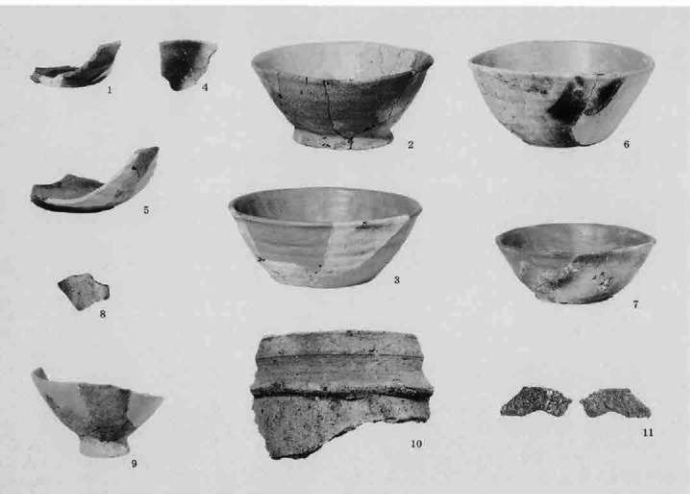
g. 2号祭祀遺構・堀方



h. 同左・埋没土層 (A-A')



1・2号祭祀遺構の出土遺物



a. 1区. 包含層出土の平安時代の土器



a. 2区1号炭焼き窯全景 (東方より)



a. 1号炭焼き窯全景 (北方より)



b. 同 左 (西方より)



c. 同 上 (南方より)



d. 同上・堀方 (北方より)



e. 同上・埋没土層 (A-A')



f. 同上・埋没土層 (b-b')



g. 同上・煙道部の構築状況 (東方より)



h. 同 左 (北方より)

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書 第334巻



新田西沢遺跡
新田平林遺跡

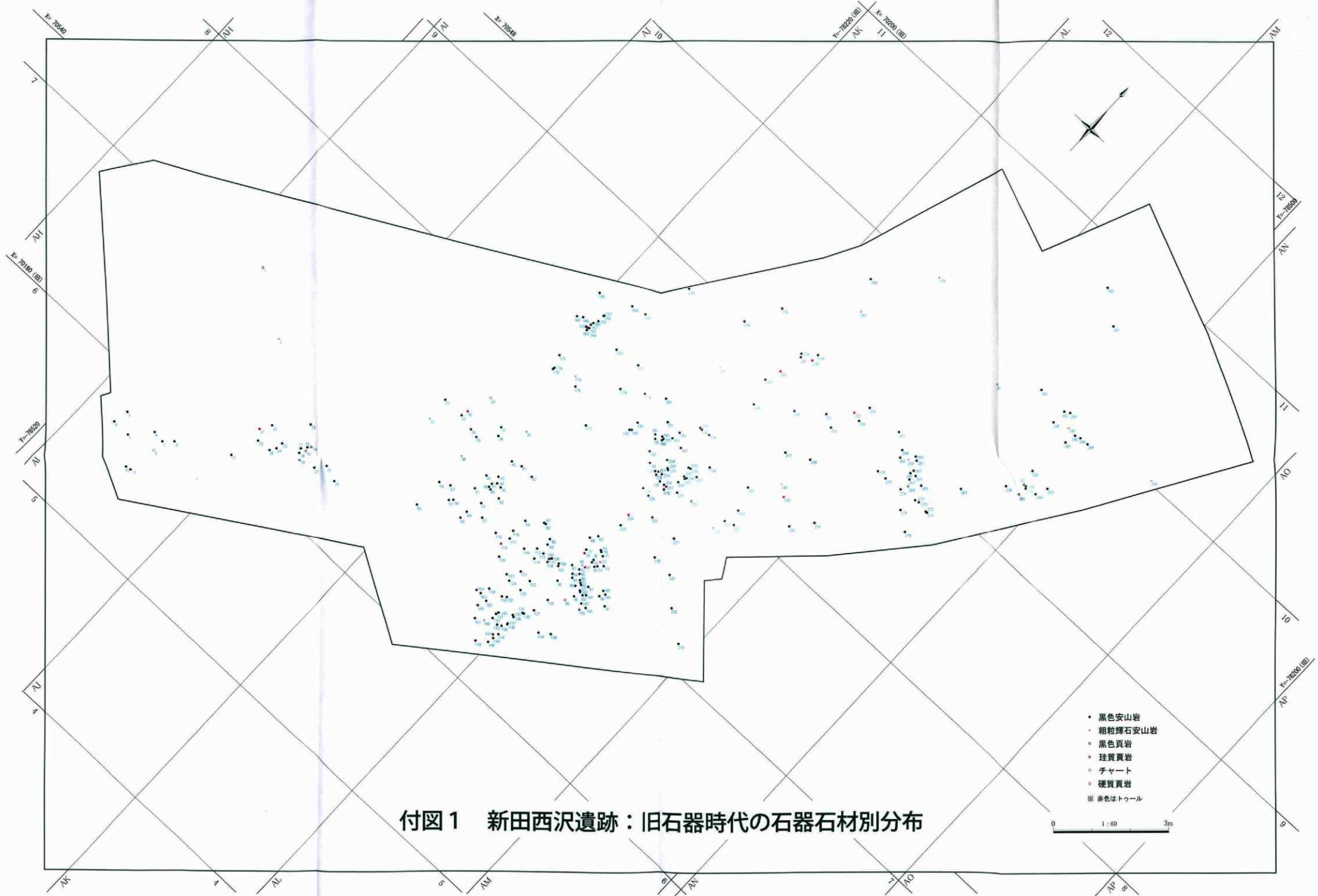
主要地方道西川野線南地方特定道路整備
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月10日印刷

平成16年3月15日発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北極村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511

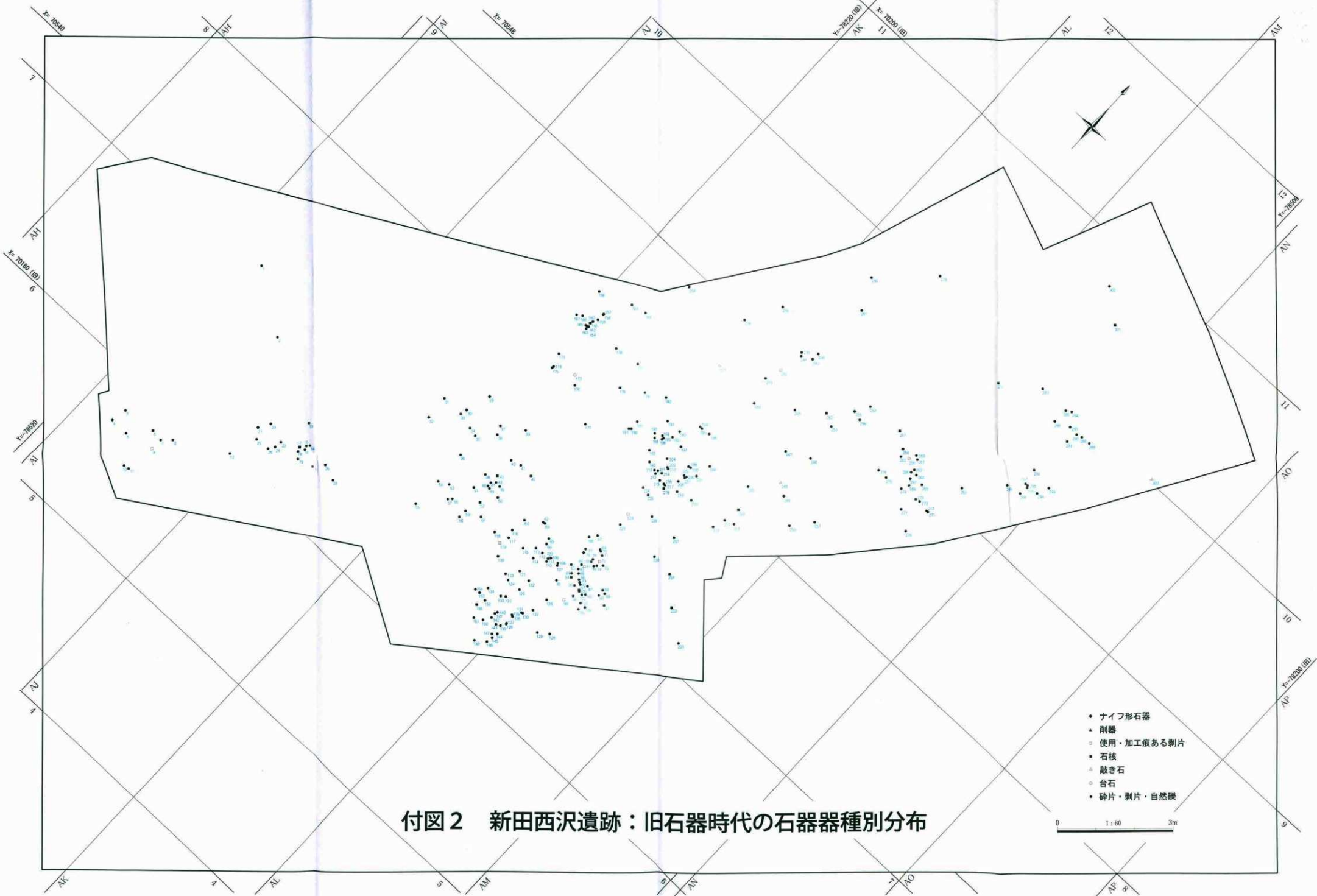
印刷／川島美術印刷株式会社



付図1 新田西沢遺跡：旧石器時代の石器石材別分布

- 黒色安山岩
- 粗粒輝石安山岩
- 黒色頁岩
- 珪質頁岩
- チャート
- 硬質頁岩
- ※ 赤色はツール

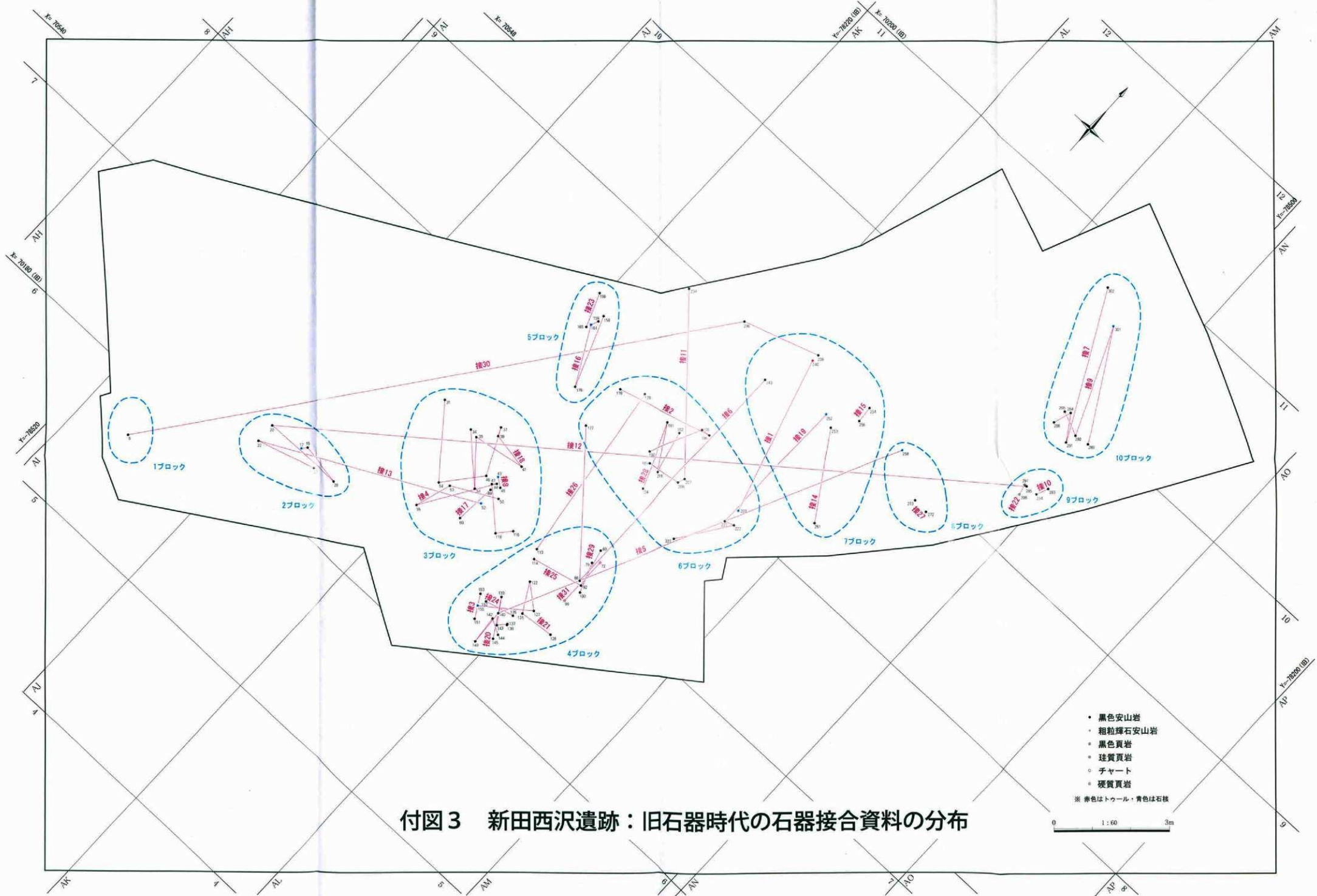
0 1:60 3m



付図2 新田西沢遺跡：旧石器時代の石器器種別分布

- ◆ ナイフ形石器
- 剥器
- 使用・加工痕ある剥片
- 石核
- 敲き石
- 台石
- 破片・剥片・自然礫

0 1:60 3m



付図3 新田西沢遺跡：旧石器時代の石器接合資料の分布

- 黒色安山岩
- 粗粒輝石安山岩
- 黒色頁岩
- 珪質頁岩
- チャート
- 硬質頁岩

※ 赤色はツール・青色は石核

0 1:60 3m



付図4 新田平林遺跡1区：縄文時代の配石遺構の分布